

国立国語研究所学術情報リポジトリ

方言談話資料（1）：山形・群馬・長野

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-10-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所, The National Language Research Institute メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002270

方言談話資料(1)

— 山形・群馬・長野 —

国立国語研究所資料集 10

国立国語研究所

1978

方言談話資料(1)

——山形・群馬・長野——

国立国語研究所

刊 行 の こ と ば

国立国語研究所では、昭和49年度から同51年度にかけて、「『各地方言資料の収集および文字化』のための研究」という題目の下に、全国各地で方言による談話を録音し、その文字化（標準語訳・注つき）を行った。この研究は、急速に失われつつある方言を現時点で録音・文字化し、国語研究の基本的資料とすることを目的としており、当研究所地方研究員の協力を得て実施された。

その成果は、機を得て、順次刊行する予定であるが、その第一集として、今回本書を刊行することにした。

本書に収めた録音・文字化資料は、専ら、矢作春樹（山形県）、上野勇・杉村孝夫（群馬県）、馬瀬良雄（長野県）の四氏の尽力によるものである。また、話者として、佐直きえ、高梨八太郎、佐直まさゑ（以上山形県）、小林弥太郎、小林よ志ゑ、星野富司、小林喜市（以上群馬県）、清水悟郎、片桐としゑ、小池千勢（以上長野県）の各氏の協力を得たほか、現地教育委員会や有志の助力があった。記して深く感謝の意を表する。

昭和53年 3 月

国立国語研究所長 林 大

方言談話資料作成のための担当者

国立国語研究所言語変化研究部長

飯 豊 毅 一

国立国語研究所言語変化研究部第一研究室

徳 川 宗 賢（現在、大阪大学教授） 佐 藤 亮 一（室長） 真 田 信 治（研究員）

沢 木 幹 栄（研究員） 白 沢 宏 枝（研究補助員）

国立国語研究所地方研究員（五十音順）

秋 山 正 次	愛宕 八郎康隆	五十嵐 三 郎	井 上 章	井 上 史 雄
今 石 元 久	岩 井 隆 盛	上 野 勇	遠 藤 潤 一	大 島 一 郎
大 橋 勝 男	岡 野 信 子	奥 村 三 雄	寛 大 城	加治工 真 市
加 藤 信 昭	加 藤 正 信	金 沢 直 人	川 本 栄一郎	神 部 宏 泰
剣 持 隼一郎	後 藤 和 彦	小松代 融 一	斎 藤 義七郎	迫 野 虔 徳
佐 藤 茂	佐 藤 虎 男	清 水 茂 夫	杉 山 正 世	田 尻 英 三
種 友 明	玉 井 節 子	近 石 泰 秋	土 居 重 俊	日 高 貢一郎
日 野 資 純	広 戸 惇	廣 濱 文 雄	北 条 忠 雄	本 堂 寛
馬 瀬 良 雄	松 本 宙	三 浦 芳 夫	虫 明 吉治郎	村 内 英 一
室 山 敏 昭	谷 開 石 雄	矢 作 春 樹	山 口 幸 洋	山 本 俊 治
和 田 實				

「方言談話資料」（１）編集担当者

飯 豊 毅 一 佐 藤 亮 一 真 田 信 治 沢 木 幹 栄 白 沢 宏 枝

収録・文字化担当者（協力者）

山形…矢 作 春 樹 群馬…上 野 勇（杉 村 孝 夫） 長野…馬 瀬 良 雄

目 次

刊行のことば	3
ま え が き	7
凡 例	10
I 山形県西村山郡河北町谷地	11
解説	13
1. 冬の薬仕事	19
2. 冬の水汲み	33
3. 山仕事	37
4. 叔母さんの卒倒	48
5. 萱野刈り	53
6. 肥やし金と給金	59
7. 蚕の収入	65
8. 草履作りと小遣い	70
9. 子守り	79
10. 手足による農作業	83
11. 旅行	102
12. 植樹と日照権	107
13. 都市計画と移転	112
14. 田螺と蝗	118
15. 小正月の行事	126
16. 田楽焼き	132
II 群馬県利根郡利根村大字追貝	137
解説	139
1. 雨乞と天気祭	152
2. 壮健芝居	170
3. 干草刈り	189
4. 薬	197
5. 昔の商店	210
6. 昔の菓子・飴売りのおばあさん	217
7. 病気見舞の品物	229

8. 出稼	236
9. 荷の運搬と牛の扱い	242
10. 狼	250
11. 配給と兵役	256
III 長野県上伊那郡中川村大字葛島	279
解説	281
1. 稿手本の話	294
2. 幼いころの遊び	309
3. 昔の嫁入り	332

まえがき

研究の経過

この研究は、昭和49年度から同51年度にかけて行った。

昭和49年度は準備期間とし、全国47都道府県で各種の実験的録音・文字化を行い、その結果に基づいて、次年度以降の計画を立案した。

50年度は、全国的視野のもとに重点地域を定め、23の府県から各1地点を選定して、老年層の男性と同女性との対話、もしくは、男女を含む老年層話者3人の会話を録音し、文字化することとした。

51年度は収録地点を4地点減らし、19の府県について、原則として50年度と同一の地点で、(a) 目上・目下の関係にある老年層の男性2人による対話、(b) 老年層の男性と若年層の男性との対話、もしくは、両者を含む3人の話者の会話、(c) 場面設定の会話、の3項目についての録音・文字化を行い、収録可能な地域では、付録として、民話の収録・文字化も実施することとした。(c)については、「品物を借りる」「(旅行などに)誘う」「新築の祝いを述べる」「隣家の主人の所在をたずねる」「けんかをする」「道で知人に会う」「道で目上の知人に会う」「うわさ話をする」の八場面を、全地点共通の場面として設定した。

以上の録音・文字化資料は、すべて国立国語研究所で整理し、保管しているが、当研究所では、このうち、50・51両年度分について逐次刊行していく予定である。今回は、50年度に収録・文字化を行った老年層話者による談話資料のうち、「山形県西村山郡河北町谷地」「群馬県利根郡利根村大字追貝」「長野県上伊那郡中川村大字葛島」の3地点分について、オフセットにより複製印行する。

話者の条件

話者には次の条件の人を選ぶこととした。

1. 老年層話者による談話(50年度)

その土地で生まれ育ち、よその土地に住んだことのない、あるいは、その期間が比較的短い人で、日常生活ではもっぱら方言を用い、また、録音機を前にしても方言色豊かなおしゃべりが可能な人。したがって、よその土地から嫁入り、婿入りした人は採らない。ただし、女性については、他に適当な人が得られないときには、近隣地から嫁入りした人でも、収録地点との間に大きな方言の違いが認められない場合は可とする。話者の年齢は、原則として収録時において60歳以上とし、やむをえないときは、55歳以上も可とする。発音その他の障害がなければ、高齢者でも差し支えないが、話者相互の年齢が離れすぎるのは好ましくない。また、話者相互の地位・身分関係も、ほぼ対等であることを原則とする。

2. 目上・目下の関係にある老年層の男性2人による対話(51年度)

話者の年齢は上記1に準ずる。この項は、改まった表現や種々の敬語形式などを得ることをね

らって設定したものであり、対話の具体的な人物像として、たとえば、旧地主階層の人物対旧小作階層の人物、僧侶対その壇家にあたる人物、その土地出身の教員（校長など）対その土地の一般的職業（農業・漁業など）に従事している人物などを候補として示したが、地域の事情もあると思われるので、この点は各地の担当者（地方研究員）に一任した。なお、目上にあたる人物として、在外期間の比較的長い人物を登場させなくてはならない場合もあると考えられるので、在外歴に厳しい条件はつけないことにした。

3. 老年層男性と若年層男性との談話（51年度）

老年層については原則として60歳以上、若年層については原則として20～30歳台とする。話者相互の地位・身分関係は、ほぼ対等であることが望ましい。職業は老若ともにその土地における一般的なものであること。在外歴については1に準ずる。

4. 場面設定の会話（51年度）

上記1に準ずる条件を備えた老年層の男女に、場面に応じて、種々の演技的対話をしてもらった。

5. 民話

特に条件はつけず、その土地で生まれ育った民話の語り手であれば可とした。

司会者

主たる話者のほかに、話の引き出し役としての司会者が同席することとした。司会者はこの研究の主旨を理解し、かつ、司会役としての能力を有する地元方言の話し手が望ましい。司会者の年齢・居住歴等に、特に条件はつかなかった。

録音量・文字化量

50年度・51年度ともに各約60分程度の録音量（51年度については、各項目平均20分、合計60分程度）について文字化を行うこととした。また、内容の豊かな文字化資料を得るために、文字化すべき録音量の数倍を録音し、その中から適切な部分（話がとぎれず、しかも発言が特定の話者にかたよっていないこと。話の流れ、話題の展開が自然であること、など）を選択して文字化することとした。

文字化原稿の作成・表記

1. 将来のオフセットによる複製印行に備えて、一定の様式の文字化用紙を作成し、担当地方研究員に配布した。
2. 文字化は原則として表音的カタカナ表記によることとした。これは、利用者の便宜、文字化作業の能率などを考慮してのことである。ただし、対象とする方言の性格によって、カナ表記では特殊な字母を多数必要とし、かえって煩雑になると判断される場合は、国際音声字母による表記も可とした。なお、それぞれのカナで表わす具体的音声の範囲・内容については、各担当者が「解説」の中で説明することとした。
3. アクセント、文末イントネーションの記述の有無は、その表記法を含めて担当者の判断にま

かせた。

4. 聴き取りが困難な箇所や、言いよどみ、言い重なり、言い直し、笑い声などについては、これらを一定の符号で表わすことにした（凡例参照）。

文字化には、標準語訳、および、場面、文脈、特徴的音声、方言形の意味・用法などについての注をつけることとした。なお、標準語訳はあくまでも内容理解のための手がかりの一つと考え、訳が問題となるような箇所については、できるだけ詳しい注をつけることを担当者に求めた。

収録方言・表記・収録内容についての解説

文字化原稿とは別に、収録方言・表記・収録内容についての解説を担当者に求めた。解説には、原則として次の事項を記すこととした。

A. 収録地点とその方言について

1. 地点名
2. 収録地点の概観（位置・交通・地勢・行政区画の変動・戸数・人口・主な産業など）
3. 収録した方言の特色
 - ①方言区画上の位置・隣接諸方言との関係
 - ②音声・音韻上の特色
 - ③文法上の特色

B. 表記について

それぞれの符号（カナ・音声符号）で表わす具体音声の範囲、特殊な表記についての説明など

C. 収録内容の概説

1. タイトル
2. 録音年月日
3. 録音場所
4. 話し手の氏名・性・生年・職歴・役職歴・居住歴・言語的特徴など
5. 録音環境（同席者・話の進行状況・場の雰囲気など）

凡 例

1. 場面、文脈、特徴的音声、方言形の意味・用法などについての注は各章の末尾にまとめて記し、該当箇所を本文のそれぞれの位置に番号（かっこつき）で示した。

2. 発言や録音が不明瞭なため聴き取りが困難な箇所には~~~~~線をつけた。

例 エッダクテ エッダクテ。(28ページ12段)

3. 最終的に聴き取り不能の箇所には~~~~~線のみを記した。

4. 言いよどみは、その末尾に-----線をつけた。

5. 複数の発言が重複した場合には、重複部分に_____線をつけた。

例 O ムカシワ ムギコムギ ウント (K ソーイエバネー) ツクッタカラサー。

(153ページ 7 段)

6. 言いかけて、それを言いなおした場合には、言いかけた部分にxxxxxxをつけた。

例 ジベン ジベ ジベタオ フカーク ホッテ (316ページ 6 段)

7. 笑い声、咳ばらいなどは、(笑)、(咳)のように示した。

8. 同席者の短い発言や突然の訪問者のことばなどは文字化していない場合がある。その際や、録音テープを編集して談話内容の一部を削除した際には、該当箇所に*の符号をつけた。

I. 山形県^{にしむらやま}西村山郡^{かほくまちやち}河北町谷地

収録・文字化担当者 矢 作 春 樹

A 収録地点とその方言について

1 地点名 山形県西村山郡河北町谷地

2 収録地点の概観

位置——山形県のほぼ中央部、山形盆地の北西に位置し、山形駅から北へ約20 km。

交通——山形駅から奥羽本線で下り約30分、神町駅下車、バスで西へ8 km約20分。山形駅から左沢線で下り約30分、寒河江駅に下車、バスで北へ8 km約20分。国鉄の駅はないが、バスは、谷地を始点終点として四方に通じており、山形行きのバスなら約1時間で、山形市に達する。

地勢——山形盆地の北西、西は出羽山地、東は最上川に接し、寒河江川の北に位置した寒河江川扇状地で、大体菱形に近い土地を占めている。この東半分（全地域の約7割）が肥沃な平野部で、ここに集落が形成されている。四方を山に囲まれているため、典型的な内陸性気候で、全国最高気温を記録しており積雪量も多い。

行政区画——この地は平安時代の初期に開発され、江戸時代には米・紅花・生糸等の集散の中心地、舟場として発展していた。明治22年に市町村制が実施され、合併前の形をととのえた。続いて昭和29年10月1日、谷地町・西里村・溝延村・北谷地村が合併して、河北町が誕生、翌年、元泉地区の編入などがあり、現在に及んでいる。

戸数・人口——昭和51年1月現在 世帯数 約4,900戸
人口 約22,400人。人口は減少の傾向がある。

主な産業——米づくりが盛んで、昭和43年には米作県一位賞を受賞し、反当収量も全国最高といわれる。また農家の副業としての草履表は全国一の生産高を誇っていた。さくらんぼ・りんご・桃・ぶどうなどの果実の生産・出荷も盛んである。

3 収録した方言の特色

①方言区画上の位置・隣接諸方言との関係

山形県の方言は、北奥方言区に属する庄内方言と、南奥方言区に属する内陸方言とが大きく対立している。内陸方言では、最上地方・村山地方・置賜地方との間に、わずかの対立が見られる。たとえば、「かわいそうだ」の分布の場合、庄内方言はメジョケネ、最上はムゾサエ、村山はムンツコ(サ)エ、置賜はモゴサエ といった分布になっている。

調査地点は、村山地方の方言区に属している。この地域は、江戸時代の政権交替や群雄割拠の影響もあってか、比較的複雑な方言分布を示している。

②音韻上の特色

- (1) 「イ」と「エ」の混同がはなはだしい。「息」も「馭」も「エギ」、「鯉」も「声」も「コエ」であり、「椅子」も「石」も「エス」、「絵馬」も「居間」も「エマ」である。
- (2) 「ス・シ」は「ス」(S ü)に、「ツ・チ」は「ツ」(tS ü)になり、「ズ・ジ・ヅ・ヂ」の区別がなく、すべて「ヅ」(dzü)である。したがって、「煤」も「獅子」も「寿司」も「スス」であり、「梨」も「茄子」も「ナス」、「筒」も「乳」も「ツツ」である。また、「辻」も「地図」も「知事」も「ツ(ツ)ツ」となる。総じて、「イ」段の母音があいまいで、「ウ」段の母音もややあいまいなため、歯ぎれの悪い発音になっている。
- (3) 「シュ・ジュ・チュ」は「ス・ヅ・ツ」になり易い。そのため、「十二」は「ツーニ」、「主人」は「スツン」に、「手術」は「ス(ツ)ヅヅ」になり易いが、それほどひどくはない。
- (4) 「冬」を「フヨ」、「雪」を「ヨギ」、「露」を「ツヨ」のようにいう ユ ヨ の現象が、古い年代に残っている。
- (5) 連母音の「アイ」や「アエ」は、庄内・最上では「エー」であるが、村山・置賜では融合を起こさず「アエ」と発音する。したがって、「塀」と「蠅」を「ヘー」と「ハエ」とに言いわ

けている。

- (6) 語中、語尾の力行子音・タ行子音の有声化が盛んである。
「柿」は「カギ」、「的」は「マド」、「味方」は「ミガダ」と発音される。これは若い世代でも盛んである。
- (7) 語中、語尾のガ行音・ダ行音・ザ行音・バ行音は、鼻濁音となり、「鍵」は「カギ」[ka ŋi]、「窓」は「マンド」、「数」は「カンヅ」、「壁」は「カンベ」のように発音される。しかし、若い世代では、聞かれなくなっている。
- (8) 「セ」「ゼ」を「シェ」「ジェ」と発音し、最上では「シェ」よりも「ヘ」に近い。この地点では、「背中」は「シェナガ」、「先生」は「シェンシェ」、「風」は「カジェ」であるが、使役の「……せる」は、「泣ガシエル」とも「泣ガヘル」ともいうようである。
- (9) ハ行音を「ファ」「フィ」「フェ」「フォ」と発音する現象の中では、「桑・鯉」の「クファ」、「塞ぐ」の「クフェル」が顕著に表われている。
- (10) 「家」や「良い」は「イエ」[je]と発音されるが、[je]音は、山形市を中心に根強く残っている。
- (11) ヤ行子音が摩擦化する傾向があり、「山形」が「シャマカダ」に聞こえる。また、[je]も多少摩擦化する傾向が見られる。
- (12) 「行く」[ŋgu]、「動く」[ŋgogu]のように[ŋ]が語頭にあらわれることがある。
- (13) ニ重子音 [ʃʃ]が語頭にあらわれることがある。
「白い」「シショエ」、「冷える」「シシエル」、「知らない」「シシャネ」、「仕余しする」「シシャマスル」など。
- (14) 濁音が清音化する傾向がある。
「短かい」「ミンツカエ」、「案じ事」「アンツコド」
「座布団」「ザフトン」、「書初め」「カキソメ」など。
- (15) 長音や撥音・促音を十分に発音しない傾向はこの地域にもあり、「在郷」「ザエゴ」、「五合」「ゴンゴ」、「走った」を

「ハシタ」、「食って」を「クテ」という。

(16) アクセント

山形市を中心とする村山地方（北村山郡の大部分を除く）と米沢市を中心とする置賜地方（小国町を除く）とには、一型アクセントが分布している。「箸」も「橋」も、「雨」と「飴」も全く区別しない方言である。すなわち、アクセントという概念を持ち合わせていないので、一般には、無アクセント地帯と呼ばれる。収録地点も、一型アクセント地帯に属している。

③文法上の特色

- (1) 推量・意志の助動詞は「ベ」であり、終止形に接続する。したがって「読モー」という形がないので「五段活用」はない。
- (2) 四段活用以外の動詞、ラ行四段活用の動詞の連体形に「時」「事」が接続するときは、「着ッドギ」「来ッゴド」のように「ル」が促音化して「ッ」になる。
- (3) 尊敬命令法「～なさい」の意味で「～シャエ」を使う。
- (4) 「～しなければならない」は「書ガンナネ」「生ギランナネ」のように、「ンナネ」「ランナネ」を使う。
- (5) 「タ」を過去のほか完了として特に現在のことを使う用法が著しい。大過去や過去回想のときには「タケ・ダケ」を使う。
- (6) 自然にそうなったことを表わすには「ラテ・ラタ」を使う。
「朝5時に起きラタ」（自然に起きる結果になった）
- (7) 上二段・下二段活用の動詞に続ける使役の助動詞は、「植エラシエル」「着ラシエル」のように、「ラシエル」を使う。
- (8) 可能の助動詞は、「レル・ラレル」も用いるが、「来るエ」（来られる）「見るエ」（見られる）「笑うエ」（笑える）のように、終止形に「エ」をつける用法が特に盛んである。
- (9) 主格を示す「が」「は」、対象を示す「が」「を」などは、使わない。対象を強調して、「俺バ叩ぐな」とも言う。
- (10) 連体修飾語を作る「の」は「ナ」や「ヌ」に変化し易い。
「俺ナ手」「お前ナ本」「松ヌ木」「桑ヌ木」など。

- (11) 場所・方向を示す「サ」の使用は盛んで、「山形サ泊まる」「学校サ行く」のように使うが、目的の用法は使わない。
- (12) 理由表現は「サゲ」「ハゲ」と「カラ」を併用しているが、「サゲ・ハゲ」が古いと思われる。
- (13) 仮定表現は「読めバ」はほとんど使われず、「読ムゴントラ」「見ッゴントラ」「見ッコントラ」「読ムゲバ」などが盛ん。
- (14) 一般に、形容詞の活用が退化して不活発になっている。
- (15) 丁寧い表現の「甘ごいッス」「行くッス」のような「ッス」が多く使われる。
- (16) 強意の助詞には、「ハー」「ザー」「シタ」などがあり、複雑なニュアンスをもっている。
- (17) 「ホニ」「ヤッパリ」「ホレ」など、間投助詞に転成しかかっているものが多い。

4 地点選定の理由

- ① 昨年の予備調査の際に、方言保有量が大で、記憶も確かであり、発音がはっきりしている いい話者を得られたこと。
- ② 地方研究員（文字化担当者）が生まれ育った土地なので、文字化や標準語訳しやすく、確かめやすいこと。

B 話者・録音環境など

1 昭和50年12月1日 録音

2 山形県西村山郡河北町谷地庚21(下小路) 佐直まさゑ宅

3 話し手

A 佐直 きえ (女) 明治36年生まれ 農業

谷地生まれの谷地育ち。現住所は録音場所(佐直まさゑ宅)の隣で名子。若い頃から大人にまじって農作業に従事していたため、方言保有度がきわめて高く、話題も広く記憶力が抜群で話し好きである。声に張りがあり発音もはっきりしている。マイクにも慣れており、語尾で自問自答するのは、古い方言調の語り口で、得がたい方言の話し手である。語り調子は早口ぎみである。

B 高梨ハ太郎 (男) 大正3年生まれ 農業 建設会社社員

谷地生まれの谷地育ち。16歳の年から10年間、佐直まさゑ宅に住み込みで下男奉公、結婚後は筋向いの生家に居住。その後も同家の農作業を手伝っていた。その間、佐直きえ、佐直まさゑと一緒に農作業をしており、話し好きで話題が合う。年令に比べ方言の保有度は高いが、やや早口で口の開きが小さいせい、わずかにとちりの口調がみられる。

C 佐直まさゑ (女) 明治34年生まれ 農業

村山市湯野沢生まれ、結婚以来現在地に居住。隣接市のため方言上の差異は目立たないが、話の引き出し役になってもらった。長寿の家系にあるため方言保有は高いが、ややインテリ的である。担当者の伯母にあたる。

4 録音環境

- ・同席者は、話し手と文字化担当者の4人。
- ・同席者は、全員が気のおけない者同志なので、話はスムーズに進行した。しかし、仲間うちすぎるために、あいづちが多く、疑問や聞きかえしなどの語形が出にくかった。指示語の出かたが多かったのも、そのせいであろう。
- ・部屋が道路に近いので、車の音がしばしばはいつていた。

1. 冬の藁仕事

話し手

A 佐直 きえ 女 明治36年生まれ

B 高梨八太郎 男 大正3年生まれ

C 佐直まさゑ 女 明治34年生まれ

A フヨナノ ナエデカンドー⁽¹⁾ ホレハ⁽²⁾ ユギ フッド アレダッス⁽³⁾
冬 など 何はともあれ ほれ 雪⁽⁴⁾ 降ると あれだし

シャ キショ ーシューダ フラスゴドツダナ オドゴデモ
百姓 衆 達⁽⁵⁾ 藁仕事だよな 男 でも

オナゴデモ。

女 でも

B ンダー ハゲゴ⁽⁴⁾ アンダリ ホレー ミヌ アンダリ (A ンダ)
そう 藁かご 編んだり ほれ 藁 編んだり (そう。)

タラ アンダリ ダケッダナナー。

俵 編んだり だったよな。

A ンダダレッス⁽⁵⁾。ホダーナ オラダモ ンダケチャー。アノ
そうですよね。 そんな 俺達も そうだったな あの

オドツァ⁽⁶⁾ チャ アエデナテ ホノ アサゲ ハヤーグ オギデ
父親 に 相手⁽⁷⁾ になって その 朝 早く 起きて

ワラ ブダンナネケヅー。 (C ンダモ ナエヤー。) ホリヤー
藁⁽⁸⁾ 打たなければならなかったな。 (そうだよな。) ほら

ドゴ⁽⁷⁾ダテ ホノ ドンカ⁽⁸⁾ェンコジャ フッ タベ シェンニー。
どこ(の家)でだって その 藁 打ち は 打ったろう 昔 (は)。

(⁽⁹⁾ C ンダ。笑) ハエツ コンド テーサ シビ キッデナレ
そう。 それ(が) こんど 手 に ひび されてな

コンド (笑) フラブツスッドヨ ホレ。 (⁽¹⁰⁾ C ヒビギデナエ)
こんど 藁 打ちするとよ ほれ。 (響きで ね)

ホリヤ ドゴソゴデ⁽¹¹⁾ イェノマエデナー フラ ブッテダハナテ
ほら どこそこで 家の前(の家)でなど 藁 (を) 打っているよなんて

ヤッデ⁽¹²⁾ ホシテ。 ナエーダテ ミナ アノ ツヅボード⁽¹³⁾ アオデ⁽¹³⁾
言われて そして。 なんだって みな あの 槌棒と 掛矢で

ブダネゲバ フラ ツカワンナエナダモナヤ。フラブツキカエナテ
打たなければ 藁 (は) 使われないんだものな。 藁 打ち機械なんて

(⁽¹⁴⁾ B ンダ) ナエッス ホレ。
そう) ないし ほれ

B アエツ⁽¹⁴⁾ オ ヤッパリ シタリ オドゴ エダ イエーデナノ
あれ お やっぱり 二人(の) 男 (が) いる 家でなんか

ナエデカンデ⁽¹⁵⁾ ドンカ⁽¹⁶⁾ェンコヨナエハ。
何はともあれ 藁 打ち よね

A ンダー オラ オナゴダテ テツダ⁽¹⁷⁾エ サヘラッダツー。 アサゲ
そう 俺は 女なのに 手伝い させられたな。 朝 (方)に

イエー エダドギヨー ハヤーグ オゴサッデ⁽¹⁸⁾ ホシテ オラエノ
(笑)家に いたときよ 早く 起こされて そして 俺(の)家の

カガサ⁽¹⁵⁾ ママツメデ⁽¹⁶⁾ オレ ホレ フラブツ サンナネケツァナエ。
母親(が) 炊事 で 俺(が) ほれ 藁 打ち しなければならなかったわけよ。

(⁽¹⁹⁾ C 笑)

B アオ タガテガー。

掛矢(佐) 持ってか。

A ンダー。 テヅ ンダエスロナテ ヤッデ" ホシテ。ホシテ コンド
そう。 手伝いしろなんて 言われて そして。そして こんど

ニナ ナウナナテ ユード ホリャ アノ。 *ホレガラ アノリャ
荷縄(佐) なのの なんて 言うと ほら あの。 それから あのあれ

ミヌ ツグンナ ミゴ。(C ンダー ミゴナヤー。) アエヅナノ
藁(佐) 作る 藁(佐) べ。(そう 藁(佐) べな一。) あれなんか

ホダナ ナンカエモ ブダンナネデ。 サンカエモ ブダンナネデ。
そんな 何回も 打たなければならないだろう。 三回も 打たなければならないだろう。

エヅ ンドゲ⁽¹⁷⁾ ホダエ ヤッコグ ホダエ ブダンナエモ。

一度で そんなに 柔かく そんなに 打てないもの。

B ブダン ブダンナエ ケモナエ。

打てなかったものね。

A ンダー エヅ ンドエ……

そう 一度に

B エギデ⁽¹⁸⁾ キテ ワガンナエ ケモ。*

生きて きて だめだったもの。

A ン ンダー。 ホレガラ ホレ ゴデナ⁽¹⁹⁾ ナウナ ミゴデ"
ん そうだ。 それから ほれ 細縄(佐) なのの 藁(佐) べで

サンナネケドレ。 タラ アム ゴデナ……。

しなくてはならなかったろう。 俵(佐) 編む 細縄

C ミナ ミゴダケモナエ ホンテ……。

全部 藁(佐) べだったものね ほんとに

A ハゲゴ アムナ ナヤ。 ミナ ホレ ミゴナワジャ ナッタ
藁(佐) かご(佐) 編むの なあ。 みんな ほれ 藁(佐) べ縄は なった

モノヅダナ ンダゲ。⁽²⁰⁾ ンー。 ホレガラ オゴサマノ リヤ コー
もんだよな だから。ん。 それから 蚕の ほら こう

ナワアミ リヤー (C ン) アエツモー アレダケデ ワラ ンデ
縄 網 ほら (ん) あれも あれだったろう 藁で

コー コンデナ ナッテ ホシテ マロコーク コー コヘダ⁽²¹⁾
こう 細縄 (8) なって そうして 丸く こう 作った

モンダダレ イェ ンデ。(C ンダ ンダナ。) ンー。 シトーフユ
もんだものな 家で。(そう そうだな) ン ー 冬(中)

ワラスゴドヨ。オドゴシューダテ ホダナ ワラ ンヅノ ホダナハ
藁仕事だよ。男衆でも そんな わらじの そんな

シトナヅ サンニンモ ヨッタリモシテ ハッコロ ミナ ツクテ
ー 夏 三人も 四人も で 履くぐらい みんな 作って

オガンナネナダハゲナヤ。(C タンートナー。)
置かねばならないんだかなな。(たくさんなあ。)

B ンダ。ツマゴワラ ンヅガラ⁽²²⁾ ナニガラダケハゲナヤ。
そう。爪掛わらじ はじめ 何もかも だった からね。

A ンダ。タガジョナテ⁽²³⁾ ナエッス エッソー⁽²⁴⁾ ワラ ンヅダドレ。
そう。地下足袋など ないし すべて わらじだものね。

(C ンダ。) ハゲゴガラ ミヌ ガラ ニナ ガラ ミナ ナッテ
(そう。) 藁かごから 蓑 から 荷縄から みんな なって

オガンナネドレハ。⁽²⁵⁾ ニナナエ ナテ ユード ドゴンデモ ホダナ
おかねばならないものな。荷縄ない なんて 言うと どの家でも そんな

ワラブヅナヤ。(C ンー。) (笑)
藁打ち(だよ)な (ん)

B ンダ ホシテ ニナナエテ ユード リヤ キューショーガヅノ
そう そうして 荷縄ないって いうと ほら 1日(の) 正月 の

ジューエツニツターダモナエ。

十一日 だものね。

A ンダ シシテ ンデ (B ン) ナワンナネナダケモナエ。
 そう 一日 で (ん) なわねばならなかったんだものね。

B ホシテ ン トーガノ ヒー ミナ ブッテデ ホリヤ (A ンダ)
 そして ン 十日 の 日に 全部 (藁) 打って おいて なあ (そう)
 ツカラモツ⁽²⁶⁾ クテナレ (笑) (A ホンダ) キナゴモツ クテリヤ
 カ餅 (を) 食って な (そう) 黄粉餅 (を) 食って な
 (A ンダー C 笑) ホシテ ハダツナダモナエ。(A ンダー ホシテ)
 (そう) (そして とりかかるんだものね (そう そして

ホノヒデ ニナダーゲ ホノヒ ミナ ナウケナヨ ドゴデモ。
 その日 で 荷縄 だけ (は) その日 (で) 全部 なうんだったよ どの(家)でも。

A ンダ マエガラ ワラ ブッテ オガンナネケツ ヤッコグナヤハ。
 そう 前 から 藁 (を) 打って おかねばならなかったよ 柔かくなあ。

(B ンー) ホシテ ホレ ジューエツニツ シシテ ンデ ホレ
(ん) (そして ほら 十一日 一日 で ほら

エツネン ツカウナ シトナツ ツカウ ニナ ペロット ミナ
一年で 使う分を 一夏 使う 荷縄 (を) すっかり 全部

ナワンナネナダド。デ ミンツカエナガラ ナンガエナガラナヤ。
なわねばならないんだもの。 短い の から 長い の から な。

(C ンー) ダエーブ ナワンナネケチャ オレ ホダナ。⁽²⁷⁾
(ん) かなり なわねばならなかったな 俺 そんな。

C ンダッダナー。
 そうだ よ なあ。

A ニナダテ ジュー スゴホンモ ナエゲバ タンナエケベ。^{*}
 荷縄 だって 十四・五 本 も なければ 足りなかったろう。

C バガハゲゴナ⁽²⁸⁾ ナンボー コシェツケ オマエ。(A ンダー)
大藁かごなど いくつ 作ったもんだ おまえ(は)。(そう)

B バガハゲゴナ アリヤ クファ⁽²⁹⁾ ヘレンナ バガハゲゴナエ。
大藁かごなど あれ 桑(を) 入れるの 大藁かご ね。

(A ン オッキナ) シト⁽³⁰⁾ シト ハエルエクラエナ。(笑)
ん 大きな $\frac{\times}{\times}$ 人(が) 入(は)いれるくらいの。

A シト ハエテ ネデルエクラエナナヤ オツケナ バガハゲゴ
人(が) はいって 寝てられるくらいの な 大きな 大藁かご(を)
ナンーボモ。
いくつも。

B ジューゴガンメガラ ニヅッカンメグラエ (A ンダ^C) ハエンナナエ。
十五貫目 から 二十貫目 ぐらい (そう) はいるのをね。

A ニヅッカンメグラエ ハエツケモナヤ アノ バガハゲゴ
二十貫目 ぐらい はいったものね あの 大藁かご

オツケナ。(C ンダー) ハエーツ アンデ オガンナネッスホレ
大きい。(そう) それを 編んで おかねばならないしな

コンド コダナ ツツチャエナ ホリヤ ホノ アレ ママ モテ
また こんな 小さな ほら その あれ ご飯(を) 持って

アラグナガラ (B ベントハゲゴナー⁽³¹⁾) イェ アンバエナ コンド
行くのから $\frac{\text{弁当 藁かご な}}{\text{手頃 な}}$ こんど

ホレ チュークラエナガラ ホレ スコス オツケナガラ
ほれ 中くらいの から ほれ 少し 大きいから

C スコス オツケ ハゲゴガラナ。
少し 大きい 藁かごからな

A ンダー ハゲゴダテ ヨードリモ エツドリモ ホレ
そう 藁かごだけで 四通りも 五通りも ほれ

アマンナネドレナヤ。

編まねばならないものね。

- B マメ マグ⁽³²⁾ ハゲゴナ ツチャ コーグ (笑) コシエ デ
豆 (後) まく 藁 かごなどは 小さく 作って

オガンナネケッスナ。

おかねばならなかったしな。

- A ンダ マメ マグナナ チェッ チャエナ (B ン) マダ
そう 豆 (後) まくのなど (は) 小さいの (か) (ん) また

エッツダッス ホレ。ホンーテ ショッ デンナ ミナ
必要 だし な。ほんとに 昔 は (なんでも) みな

ワラザエグデバリ シテ ホレ マンニヤワシェッダナツア ホレ
藁 細エ でばかり 作って ほれ 間に合わせていたんだよな

ヒヤクショノ ドーグワナヤ。 ミヌダテ スケナクテ
百姓の 道具は な。 藁 だつて 少なくとも

シトリチャ ホレ シタツツツツワ ツグランナネケッス ホレ。
一人に ほれ ニつ ずつ は 作らねばならなかったし。

- B ンダ ヌッダ ドギ コーダエ サンナネヅ (A ンダ) スンナ。
そう 濡れた ときに 交代 しなければならぬから (そう) (交代) するの。

- A カ カワンナ ナエクテジャナヤ。ヌッダ ドギ キンナ
代わるの (か) なくって はね 濡れた とき 着るの (か)

ナエクテ。 ホーダハゲ ホダナ エッケンノ イエーデ
なくって たから そんな 一軒の 家で

サンニンモ ヨッ タリモ トモデサ デハテ エンナダモノ
三人も 四人も 野良に 出て いるんだもの

ホダナ ハエツバリモ タエヘンダド ホレ。 ミヌツグンナバリモ。
そんな それはばかりでも 大変だよ な。 藁 作るの だけでも。

ホ^ンダーハゲ ヨスゴ^ドジャ サンナネケツダナ ショッデーン。

だから 夜仕事は しなければならなかったんだ 昔は

B ンダ ヨスゴ^ド サンナネケツダナナエ。

そう 夜仕事(を) しなければならなかったものだよな。

A ン ジューツ コロマンデ^ナ マエバン サンナネケドレ。

ん 十時 頃までは 毎晩 しなければならなかったものだよ。

ンナエゲバ ハル トモデサ デハルマンデ ワラスゴ^ド デネケモ。

そうでないと 春(に) 野良に 出るまで 藁仕事は 終わらなかったもの。

タラダテ ナンジューダラド ホレ アンデ オガンナネツダッス

俵^だって 何十俵と ほれ 編んで おかねばならなかったし

ホレ。^{*}

ほれ。

B タラ アンデ ハゲゴ アンデ (A ンー) ミヌ アムド
俵(を) 編んで 藁かご(を) 編んで (ん) 藁(を) 編むと

ヤッパリ ミヌ デネ ドキ アッケツハ。
(33)

やっぱり 藁(が) 完成しないとき(が) あったもな。

A ンダベハー (B ンー) ヤッパリ ミヌジャ アエツ テマ
そうだろうな (ん) やっぱり 藁^{って} あれは 手間(が)

カガンモナヤー。

かかるもね

B テマ カガルナヤ (A ンー) ナンボ エッショケンメニ ナタテ
手間(が) かかるな (ん) いくら 一生けんめいに なくても

ヨッカグラエ カガツケモナ。 (A ンダベー) アマゴエサ⁽³⁴⁾
四日ぐらい(は) かかるんだったものな (そうだろう) 首の部分に

ヒシテハンカ (A ンダベー) フツガ カガツケモ。 スコース
一日半か (そうだろう) 二日は かかるんだったもの。 少し

キレニナ スッド マル フヅガ カガツケモナエヤ。

きれいになんかすると まる 二日 かかるんだったものね。

(A ンダベナー) アノリヤ ウッショノ ホーノ コー カヅリ
(そうだろうな) あのほら 後ろの 方の こう 飾り

ツケンバー (A ンダー) アエツダド フヅガ カガツケジェ。
つけるだろう (そう) あれだと 二日(は) かかるんだったもの。

A ンダベー ヤッパリ。
そうだろう やっぱり。

C ホシテ コンド ハエツ ユギサ コー ツケデナエー⁽³⁵⁾。(B ン)
そして こんど(は) それを 雪に こう 浸けて な (ん)

B スグ ヌゲデナエ⁽³⁶⁾。(A ンダー) ホノママ キッド アリヤー
洗(を) 抜いてな (そうだ) そのままで 着ると あれ
アガグ⁽³⁸⁾ ナテ (A ンダデレナヤ) ミンツァ⁽³⁹⁾ ツケネド アノ
赤く なって (そうだもな) 水に 浸けないと あの
ミゴノ スグデヨ (A ン) アガグ ナンナヨネハ。
藁(わ)の 洗(を)でよ (ん) 赤く なるのよなあ。

A ンダー。 ミゴ アエツ ヤッコグ ブダネド ホレ
そう 藁(わ) あれは 柔らかく 打たないと ほら

ワガエモナヤ ミヌモ ヨワクテ。(C ン) ンダゲ ヤッコグ
だめだものね 藁(わ)も 弱くって。(ん) だから 柔らかく
ブダンナネケドレ ミヌ ツグンナー。

打たねばならなかったんだ 藁(わ)を 作るのは

B アノー ハルサギ キテ アラグド ダンダエ オダレツケモネ⁽⁴⁰⁾
あの 春(はる)先(に) 着て あるくと だんだん 折れるんだったものね
カダエドネハ。
堅いと ね。

A ンダ。 カッダエド ミナ モゲデナハ。

そう。 堅いと みんな もげ"てしま"てなあ。

B ホンデモ ヤンダクテ ホダナ ミゴ"ブツ ヤンダクテ カッダ"グ
それでも いやで そんな 薬"い"打ち(が) いやで 堅く

ブダラネナヨナヤ。⁽⁴¹⁾*

打たらないのよな。

A アノ ドンカェンコ オラ イェエ エダ ドギ テツダ"エ
あの 薬"打ち"は 俺 家に 居た とき 手伝いを

オドツァチャ サンナネクテ。(笑) シビー コゴラ⁽⁴²⁾ ミナ
父親 に しなければなら"な"く"て。 ひび(が) この辺(に) みんな

キッデナヤ。(B 笑)

切れてなあ。

C ヒビギデナヤ。(A ヒビギデ) ンー (A ンー)^{*}
響きで なあ。(響きで)

A ンー ホシテ ヨルー コンド ユサナノ⁽⁴³⁾ ハエッド スモテ
ん そして 夜(は) こんど 風呂に"など" はいると 滲"み"て

コンド。 ハネアガッコロ エッダクテナヤ。(笑) ホーシテ
こんど。 跳"び"上"が"る"ほ"ど" 痛"く"っ"て な そうして

コンド テーデバ ミナ オマエ ワッデ リャ。(C ンダー)
こんど 手"と"い"っ"たら みな おま"え" 割"れ"て リャ。(そう)

アレー ヨル ネッ"ドギ" アガギリノ コーヤグ コンド(笑)
あれ 夜 寝るとき(に) あかぎ"れ"の 膏"薬"(を) こんど

ツケデ ネランナネケドホレ ホダナ エッダクテ エッダクテ。
つけて 寝なければなら"な"か"っ"た"も"ん"だ そんな 痛"く"っ"て 痛"く"っ"て 。

B アグド アダ"リア (A ンダ アガギリー) オドゴシト ホダンデ"
かか"と(の) 辺は (そう あかぎ"れ") 男"の"人(は) それほ"ど"でも

ナエゲント オナゴシトダケヅナエ ドツツガテ ユード
ないけれど 女の人だったよな どっちかと いうと

アガギリ キラスナナヤ。⁽⁴⁴⁾

あかぎれ(を) 切らすのはなあ。

A ンーダ アエツ アレダベ ナベ⁽⁴⁵⁾ アロエ スツサゲ ホレ。
そう あれは あれだろう 鍋 洗い(を) するから ほう。

アグー アエツ……

灰は あれ(は)……

B ア ススー (A ン) ミダエナデ⁽⁴⁶⁾ ノ アエツデガ……
あ 煤 (ん) みたいので の あれで か……

A アグ アグ ツケツケデ アリヤ (B ンー) キアグ ツケデ ナベ
× × 灰(を) つけるんだった ありゃ (ん) 木灰(を) つけて 鍋(を)

ミガツケデ ハカマ⁽⁴⁷⁾ (B ンー) アエーツ アノ アグ スモウ
磨いたもんだろう 釜 (ん) あれは あの 灰(は) 滲みる

モンダモナ (B ンー) アノ ワッダ ドゴサ⁽⁴⁸⁾
もんだものな (ん) あの 割れた ところに

注

- (1) 「何でも彼でも」が原形。何はともあれ・何はさておき・とにかくといった意味であるが、しょっちゅうの意味もある。
- (2) 間投助詞 語勢を添える。相手の関心を呼びおこすニュアンス
- (3) 屋外の農作業はできないし というつもりだったとのこと。
- (4) 農作業をする時に使う籠。腰に下げる小さなものから背負ったり車で連んだりする大きなものまで、さまざまの大きさがある。水田地帯では藁を原料にし、山村ではマタタビやあけびづるなどで作る。また竹製のものもあり、庄内では魚籠(びく)をハケゴという。
- (5) 語尾の「ッス」は、敬語(丁寧)の意をふくむ終助詞。内陸一円に分布し、使用頻度が高いが、仲間うちの方言には出てきにくい。
- (6) オドツァは、「お父さん」の意の位相語で、おとうちゃん・とうちゃん・おっちゃん・おどつぁ(おっつぁ)・おど・ちゃん、などの順に家格が下がるとされていた。チャは、格助詞「に」にあたり「サ」と同じ。村山地方・最上地方一円に分布。
- (7) 藁を二人で打つ時の音から、藁打ち のことをさす。
- (8) 「先(せん)に」が原形であるが、「皆は」という意に使われる。
- (9) 間投詞的用法 語勢を添え、語調をつける。
- (10) 両隣のうち、玄関側の隣家を イエノマエ、裏側の家を ウラ(ウラノイエ)という。
- (11) ブッテダは 過去や完了でなく、現在「打っている」という意味である。マダ ハシッタ は「まだ走っている」ことで、オレモ ミッダ は「私も見ている」ことである。「た・だ」の変則的な用法であり、誤解をまねきやすい。
- (12) 藁を打つ木槌、直径20～30 cm ぐらい 座って使う。
- (13) 柄が長いので立って、あいづちを入れる。
- (14) 「た」の現在的用法。
- (15) 「お母さん」の意の位相語。「サ」が「さん」にあたる敬語。
- (16) 「ママジマイ」ともいう。
- (17) 一時にが原意。
- (18) しめり気をふくんできて繊維が硬くなって

- (19) 藁しべでなった細縄。太さ3mmぐらいで左ないにした。小手縄?
- (20) 自分でうなずいている。古風な語り口で、この人の特徴である。
- (21) 拵えた
- (22) 爪先に藁でつまをかけたわらじ。冬や萱蒔りなどのときにはいた。
- (23) 刺子の足袋で、昔、鷹匠がはいたことから名称が出たと思われる。
- (24) 一層が原意。
- (25) 背負い縄をなう年中行事。荷縄は、縄の中程を直径3cmほどに太くし、左ないのない方で、三本ないにした。
- (26) 荷縄ないの前に食べる餅。力が出るように、そして、いい荷縄がなわれるように縁起をかついで命名したもの。
- (27) 望ましくない気持ちを相手に印象づけるために添えるような用法。
- (28) ばかでかい という感じで、特大の藁かごのこと。
- (29) kFa クは無声音。Fa は古音の残存と思われる。
- (30) ハエルエの「エ」は可能の助動詞。「ネルエ」は「寝ることができる」「ハスルエ」は「走ることができる」であり、終止形の動詞に接続する。
- (31) 「良い按配」・適切な などの意。
- (32) 豆まきのときに、種豆を入れて腰にさげる。
- (33) 「時」であるが「場合・こと」の意で使うことが多い。
- (34) 藁の首のあたりの飾りをつけた部分。ひょうたんや草花の模様など作り手それぞれが、独特な編み方で、腕を競ったものである。
- (35) 雪の上にさらして、渋を抜いたり、白くしたりする。
- (36) 「ヌゲデナエ」は「ヌイデナエ」のねじれ。
- (37) 渋を抜かないで の意。
- (38) 下着や衣服が赤らむこと。
- (39) 「ミヅサ」の縮音。
- (40) 藁しべが折れてもげてしまうことをさしている。
- (41) 堅くきり打てなかった というべきところが ねじれたもの。
- (42) 手の甲を指しながら
- (43) 「ユ」は、湯も風呂もさす。

- (44) 「キレルノワナヤ」のねじれ。
- (45) 鍋洗い・釜洗いは、毎日の女性の仕事であった。木灰で磨いて光らせておくのが、女性のたしなみであった。
- (46) 鍋・釜の尻にこびりついた煤。方言では「ヘソビ」という。
- (47) 「歯釜」が語源。釜のこと。
- (48) あかぎれ のこと。

2 冬の水汲み

話し手

- A 佐直 さえ 女 明治36年生まれ
 B 高梨八太郎 男 大正3年生まれ
 C 佐直まさゑ 女 明治34年生まれ

B エマミデ⁽¹⁾ ユギー スクナエド イエーゲント ムガス (A^{ンダー}。
 今^(は)みたい(に) 雪^(が) 少ないと 良いけれど 昔^(は) (そう
 C^ンー。) ウガエモンダハゲ ホダナ サンダンモ⁽²⁾ ヨンダンモ (笑)
 ん) 多い もんだから そんな 三段も 四段も

(A^{ンダ}) オッデッテ⁽³⁾ ナエ コンドナヤ。
 (そう) 降りて行ってな こんどね。

A ンダ (C^ンー) カワバダ⁽⁴⁾サ カエダン ツケデナヤ。 (C^{ンダ})
 そう (ん) 川端に 階段^(を) つくってな。 (そう)

エマ コダエー ホンテ ユギ スクナクテ ラグエ ナタゲント
 今^(は) こんなに ほんとに 雪^(が) 少なくて 楽に なったけれど

コラエ ホンテ……。

これは ほんとに……。

C ンデモ マエニ ホレ ジドーシャナテ アラガネーケハゲテ⁽⁵⁾……。
 でも^(は)前に^(は) ほら 自動車 なんて 通らなかったから……。

(A^{ホンダ})
 (そう)

B ンダ バシャーダケハゲナエ (A ンダー) バゾーリ。 ンダハゲ……。そう 馬車 だったからね (そう) 馬轡(とか)。 だから……。

A フロダテ ナエダテ ミナ カワガラ クンデ ワガサンナネケドレ
風呂でも 何でも みんな 川から 汲んで 沸かばならなかったもの
ムガスナヤ。

昔(は)なあ。

C テオゲデナー。
手桶 でなあ。

A ンー テオゲ シテ アダーナ オモダエナ。(C 笑) バケヅナテ
ん 手桶 そして あんなに 重たいの () バケツ なんて
ナエケッスアレ テオゲデ。(C 笑)
なかったしね 手桶で。()

B キンナ ミダエダド⁽⁶⁾ アエンダケヅナヤ (A ンー) アノリヤ
昨日 みたいだと あれだったよな (ん) あのほら

バケヅン ナガハ ミナ コーリデ (A ンダー) ホンテ シシャグ
バケツの 中などは みな 氷で (そう) ほんとに ひしゃく(が)

ハエルクラエトカ (A 笑) ナエ^x ナエクテナエ。(C ンダ) (笑)
はいるぐらいきり () (開いて) なくてね。(そう)

A アッ⁽⁷⁾ヅグ⁽⁸⁾ スガ^o ハッテナヤ。
厚く 氷(が) 張ってね。

B ン スガ^o ハッテ。 シテ ドゴンデモ アリヤ ソラ イエード
ん 氷(が) 張って。 そして どの家でも あれ 天気(が) 良いと

ソドサ ダシテナエハ (A ンダー) トガスケデハー。
外に 出してね (そう) 解かすんだったものな。

A ソドサ ダシテ トガスケダレ。テンピサ アデデナヤ。
外に 出して 解かすんだったな。天日に あててなあ。

B ホッダナ……。
そんな……。

A ホダナゴド エマ ナエモナヤ。
そんなこと 今はないものね。

B ンン トガスナテ⁽⁹⁾ オンスエキナテ ナエッス (A ホ[×] ホダー)
んん 解かすなんて 温水器⁽¹⁰⁾なんて ないし (そ そう)
ヤガンサ シトヅグ⁽¹⁰⁾ラエ。ヤガンダテ シトヅトカエ ナエケデ
やかんに 一つぐらい。やかんだって 一つきり なかったもの
ショッデンナナヤ。(A ン^ーダー ン^ー) シタツツモ ミツツモナテ。
昔などには なあ。(そう ン) ニつも 三つもなんて。

ポットナテ ナエッス。(A ン^ーダー)
ポットなんて ないし。(そう)

C テヅノ (A ナ^エ デカンデモ……) チャカ⁽¹¹⁾スナー。
鉄の (いっつもきまって) 湯沸し(で)なあ

A ン^ー シ^ー タエデ⁽¹²⁾ ワガシテナヤ エロリサ。ホ^ンーテナヤ^ー。
ん 火を たいて 沸かしてなあ いろりに。ほんとになあ。

C カグマデ ゴハン タエデナエ。(A ン^ー)
小柴で ご飯を 炊いてなあ (ん)

注

- (1) 近年雪が少なくなっているので、近年のように という意味。
- (2) 雪の階段の段数。平地の積雪が1m50ぐらいあった。
- (3) 「落ちて」と「降りて」の語形が同じである。
- (4) 水汲みや炊事用具洗いなどは、すべて、表通りに沿った小川でやっておった。そこをカワバタと言っていた。
- (5) 通りで働いていても危険ではなかった と続けるつもりだった。
- (6) 昨日は冷えこんでマイナス11度であった。「すごく冷えこんだときには」という意味
- (7) すごく厚く という意味。強意の表現なので促音を強く言う。
- (8) 氷一般をさすが、水面にはったものをいう。村山地方、置賜地方に分布している。庄内・最上・北村山北部では ^{つらつ}氷柱をスカという。
- (9) 「解かすにしても」の意。「トガスナテ ユテモ」のねじれ。
- (10) 言いかけ であって、「……湯を滞して解かす」という意味のことを言うつもりだったという。
- (11) 鉄びんのこと。元来は「茶沸し」→チャワガス→チャーガス→チャガス と変化したと思われる。
- (12) 「……大変だった」の言いかけ。
- (13) 杉の下草や小柴や笹などを刈り集めたもの。杉の葉や松の葉も混じっており 干してかまどの焚き物として好適であった。

3. 山仕事

話し手

A 佐直 きえ 女 明治 36 年生まれ

B 高梨八太郎 男 大正 3 年生まれ

C 佐直まさゑ 女 明治 34 年生まれ

B タギモノ ショエダラ エガンナネケッダナ ナヅナエ
焚き物 背負いには 行かねばならなかったもんだな 夏(になると)ね。

⁽¹⁾
ンダゲナエ。
だからねえ。

A ンダー ヤマサ。ヤッパリ オラエデナホレ オラエノ
そう 山にね やっぱり 俺家でなんかね 俺家の
ジツカデナー ヤマ ナエケハゲテ ホレ タナギー⁽²⁾ジャ
実家でなんか 山(が) なかったから ほら まき(薪)は
カウケツダナナヤ。(B ンダ タナギ) ホレ ヒト フヨー⁽³⁾……。
買ったもんだよな。(そう まき) それ ー 冬

C ヤマデナー。
山でね

A ⁽⁴⁾
ンー ヤマデ⁽⁴⁾ カッテ。(C ンー) ヤマデ⁽⁴⁾ カウド
ん 山で 買って。(ん) 山で 買うと
ヤッスエナテヨ。(C ンー) ホシテ ホレ オラ ンダ
安いなんてよ。(ん) そして ほら 俺達(は)

エガンナネケツー ホノ アエマニ ホリヤ。ターノ スゴド
行かなければならなかつたな。その 合い間に ほら。 田の 仕事(を)

シタ アエマニ。(C ンー) エガンナネナ キー ショエ。
した 合い間に。(ん) 行かなければならないの 木(を) 背負いに。

(C ンダンタ) ンダード オメ ホダナ ショエダスナデ⁽⁵⁾ コゴラ
(そうそう) そうすると お前 そんな 背負い出すので このへん

シェナガ ムゲツケツ オラ ホン……。
背中(か) 剥けるんだったよ 俺 ほん……

C ンダナエ キー……。 (B ンダ。 A 笑)
そうね 木(を)……。 (そう。)

B タノ クサ トリアゲッド ヤマダケモナエ。(A ンダ) ナヅテ
田の 草(を) 取りあげると 山(仕事)だったものね。(そう) 夏って

ユード (A ナエデカンド) ドッゴデモヨーハ
いうと (何はともあれ) どこの家でもよ

A シマサエ アッド ヤマサナヤ (B ン) ショッデン。 スバー
暇さえ あれば 山になあ (ん) 昔は 柴(を)

ショッタリダベ ホレ。テスバナノ ミナ ヤマデ⁽⁶⁾ カッテナレ。
背負ったりだろう ほら 手柴 など(は) みな 山で 買ってね。

(C ンダナエー) ン。ホシテ ショエーダサンナネケツ。 オラ
(そうだなあ) ン⁽⁷⁾ そして 背負い出さねばならなかつたな。 俺(は)

アノ ユワギノ ナベヤリサダラ エッタナ キーショエ。
あの 岩木の 鍋 遣⁽⁸⁾ には 行ったなあ 木背負いに。

(C ンーナー) イエー エダドギ。 アソゴ ショエーダスナ
(ん ン) 家⁽⁹⁾に 居たとき。 あそこ 背負い出すの(に)

トガクテナレー ホダナ。(C ン) シルママデ⁽¹⁰⁾ ニンドグラエツケ
遠くってねえ そんな。(ん) 昼まで(に) ニ度ぐらいきり

(10)
 アラガンナエケンナエガヅ オラ (C ンー) シランカラ
 歩けなかった じゃないかな 俺 (ん) 午後 から
 エッペンクラエ ショエダシテ アド クルマサ ツケデ
 ーペンぐらい 背負い出して あとは 荷車に つけて
 クランナネドレハ ヤッパリー。 アノ ナバーヤリサダラ
 来なければならぬだろう やっぱり あの 鍋遣 になら
 エッタナー (B ン) ンー。
 行ったな (ん) ン。

B オランダ ユワギヤマノ ホーサ ホダエ エガネハゲ
 俺達は 岩木山の 方には そんなに 行かないから
 ワガンナエモナエ。(C ン ンダナエ)
 わからないものな。(ん そうだね)

A ンー ホレガラ テスバ ホリヤ キューリノ テスバダ
 ン それから 手柴 ほら きゅうりの 手柴だ(の)
 ササギノ テスバダノテ アダナ ミナ ヤマデ カッテ ホレ。
 ささげの 手柴だのって あんなのは みな 山で 買って ほら
 スバ マロテ コンド ショッテナヤ。 ショエダシテ ホレ。
 柴を 束ねて こんど 背負ってな 背負い出して ほら

C カヤシイ エッタツァナヤ タギバサワサ。⁽¹¹⁾
 萱背負い(に)行ったもんたな 滝葉沢に

B ンダ ヤッパリー カ カヤーブギダケハゲ ナエデカンデモ
 そう やっぱり 萱葺きだったから どんなことがあっても
 カヤデ (A 笑) フガンナネハゲ カゲ……。
 葺で (ん) 葺かねばならないから

C オラエノ ヤマンナ カヤ ナンーガクテーナヤ アソゴナヤー
 俺家の 山の 萱(は) 長くてな あそこなあ

ナガサガ⁽¹²⁾ (A ンー) ノボンナ コワエッタラ コワエッタラ (笑)。
長坂 (を) (ん) 登るの (は) 疲れること 疲れること

A ヤマジャ コノー ノボリクダリ アッサゲー ホナーテ
山 は この 登り下り (か) あるから ほんとに
クタビレンモナヤー。 (C ンダー) ンー。
くたびれるものね (そう) ン

B ンダ アノ ドンドゴ⁽¹³⁾ノ サガヨナエ。 (C ンダー。 A ハアー)
そう あの ドンドコロの 坂よね。 (そう はあ)
ミログツヤマサ⁽¹⁴⁾ エッタゴド ナエケガー。
弥勒寺山 に 行ったこと (は) なかったかい。

A ミログツヤマナテ ホダエ エガネナ。 オランダ タエーデ
弥勒寺山 なんて そんなに 行かないな。 俺達 (は) 太低 (は)
イエー エダドギワ ユワギ (B ユワギ ヤマダケモナエ) ン
(実) 家に 居たときは 岩木 (岩木山 だったものね) ン
ユワギヤマダケモ カウナ。 (C ンンー) ンー。
岩木山 だったもの 買うのは。 (んんー) ン。

B ドンドゴ⁽¹⁵⁾ロノ サガヨ ノボルエナエ。
ドンドコロの 坂 (か) よ 登るのにね。

C ナガクテナヤー。 (A ハ ンダツダー)
長くってなあ。 (は なるほど)

B ノボーリデ ホッダナ。 クルトジュー ヤッパリ エンジェン⁽¹⁶⁾
登りで そんな。 来る途中 (で) やっぱ^ろ 荷休息棒 (を)

カゲデ エッカエ ヤスマネド (C ンダ) ナエッタテ
使って 一回 休まない (と) (そう) どうしても

ノボランナエ ナダケ ホゴマデナエ。 (C ナエ。 A ンダガー)
登られないんだった そこ (峠) まではね。 (ねえ。 そうだったか)

コワクテ。(A ヤッパリナー) ンダガドテッド コンド クダリデ
くたびれて。(やっぱりなあ) そうかと思うと 今度は 下りでは

アス プルプルプルプルテ (笑) (A ホダヅダ) クダリダド
足(が) ぶるぶる ぶるぶるして (なるほど) 下りだ"と

ショ エモノ ショッテ アス プルプル ナテナエ。

荷物 (を) 背負って(るで) 足(が) ぶるぶる なってね。

A ンダ クダリジャ ンダモナエ。(B ンー) アエヅ シンドエ
そう 下りは そうだもんね。(ん) あれは ひと"い

モンダモナヤ ヤッパリ。

もんだものね やっぱり。

B ノボリエガテモ ラグンナエ ナナエ。(A ンダー) タント
登りよりも 楽でないのね。(そう) たくさん

ショッテ ンダラヨ。

背負ってなら よ。

A オカナクテヨ ⁽¹⁷⁾ ヤッパリナヤ。ターン⁽¹⁸⁾ト ショッテ クランナネハゲ
おっかなくてよ やっぱりな。 たくさん 背負って 采なければならぬから

ホレ。ンー。

ほら。ん

B アドガラ シタノ ホーガラ ミヅ ツエダケゲントナヤ。(A ンー)
後年 下の 方から 道(が) できた"けけど"な。(ん)

ハヤグナノ……。 (C アソゴサ……) エ エマ コーチャ⁽¹⁹⁾エンノ
以前など……。 (あそこに……) x 今 興ちゃん家の

ホソギナー⁽²⁰⁾ アエツ⁽²¹⁾ スッドギ アンドギ マダ ミヅ
細丸太など(を) あれ するとき あのとき(は) まだ 道の

シェンバエドゴ⁽²²⁾ ホゴ サガ ノボタンダモナエ。

狭いところ(を) そこ 坂(を) 登ったんだものね

C ンダナー アノ ナンガエナ ホレ ^(A) ンー ⁽²³⁾ ショツ タンダゲナ
そうだよな あの 長いの (を) ほら ん 背負ったんだからな
ミナ ^(A) ンダツダー ⁽²⁴⁾ ンー アレマデ ^(A) ホンテナエー ⁽²⁵⁾ アノー。
全部(を) そういわけた ん あれまで ほんとにね あの

B ツヘ ナンガエ モンダハゲ コノ スコス クボミサ ハエッド
長い もんだから この わずかの 窪みに はいると

ツカエテ。(笑) ^(A) 笑 ンダハゲテ コンド ホゴシテヨー ^(A) ンー
つかえて。 だから こんどは ほぐしてよ ん

オツランナネケツ ^(A) ジャー シタマデ サケデ ^(A) ンダツダー
下りなければならなかったんだよ まあ 下まで 下げて なるほど

ン。ナリツツチャエ モンダベツス ^(A) ンー ナガエモンダモノ
ん 背丈が低い もんだし んー 長いもんだもの

トプント ハエンナヨ。

とぷんと はいるのよ。

A ンダツダー ヤッパリ ナエヤー。

なるほど やっぱり なあー。

C ホナーテ オラエノ コースケダナンダラ アダナ エッポンダテ
ほんとに 俺家の 興輔たちなら あんなものは 一本だって

モテクランナエ。 ^(A) ンー ミロ ムガエノ ジーチャンダ ミナ
持って来れない。 んー 「見ろ 向い(の家)の 爺さんたち (か) 全部

ショツ タンダテ ⁽²⁶⁾ ホンダゲ ⁽²⁷⁾ ホゴ ミナー アノ ⁽²⁸⁾ ソカギ
背負ったんだ」って。 だから そこ みんな あの 雪囲い

スンナ ミナー ショットンダダレー。 (^A ンダツダー) ダエブ
するのを 全部 背負ったんだものねえ。 (そういうわけだ) かなりの

ネン ナルネハー アノ (^A ンー) ホソギ モテキテガラ。
年数に なるねえー あの (んー) 細丸太を持ってきてから。

B ンダー アエツ シツシャスエナー。 ナンネングラエナツカ。
そう あれ(は) 久しいなあー 何年ぐらいたったかな。

C ヨンジューネンテ キカネガ⁽²⁹⁾ー。
四十年で きかないか

B ヨンジューネンナ ナルナハ。
四十年など なるな。

C ナルナー。
なるなー。

A ヤマワ ホンテ ナンギ サンナネ ヤッパリナヤッス。⁽³⁰⁾
山は ほんとに 難儀 しなければならない やっぱりな

C ンー ユノサワアダリ ダド (⁽³¹⁾ ^A ンー) ホレ ツツカエハゲテ
んー 湯野沢あたりなら (んー) ほら (山が) 近いから
ホダンデ ナエケツ。
そんなでも なかったな。

B ンダ ミツ イエーケッスナー。 (^A ンー)
そう 道(か) 良かったしなあー。 (んー)

C ンダゲヨ コツツサ キテ マツガダサ エッテ カエテ ナンギ⁽³²⁾
だからよ こっちに 来て 町の方に 行って かえって 難儀
サンナネドー オモテッケ オラー。 (^A ンー) ヤマ ンダーゲ。
しなければならないって 思っていたもんだ 俺は。 (んー) 山 だけ(は)。

A オラダナ ホレ ホダナ タナギ カッタドギドカ スバ
俺達など(は) ほら そんな 薪 (を) 買ったときとか 柴(を)

カットドギツカエ ヤマサナ エグゴダ ナエハゲナ。 (C ンー)
買ったとききり 山などには 行くことは なかったからな。 (んー)

ヤマナ ナエハゲ オラエノ イエーデ ホレ。
山など なかったから 俺の 家で(は) ほら。

C ンダゲテ ア アノ (A ン) タナギ ショウドギ カマス チェット
だから あ あの (ん) 薪(を) 背負うとき(は) 吠(を) ちょっと
(33)
コー タデデ^テ ホシテ (A ンー) ショウド イエーナダッスー。
こう 立てて、そして (んー) 背負うと 良いんですよー。

(A ハー ンダガ) ンダド アダラネ (A ンー) カマスバ
(はー そうか) そうすると(骨) 当たらない (んー) 吠(を)

シタツツエ オッテナレ。 (A ンダツダ)
二つ (に) 折ってな。 (なるほど)

A ハエツ ⁽³⁴⁾ホレ スンゲ ショウハゲテ ホレ シェナガ オマエ
それ(を) ほら じかに 背負うから ほれ 背中(か) お前
ムゲツケツ^ツ ホダナ。 (C ムゲルー) エッダクテ コンド ヨル
剥けるんだったよ そんな (剥けるー) 痛くて こんど 夜

ユサ ハエッドギ ピリピリテヨー。(笑) ホーシテ コンド
風呂に (はいるとき(に) ひりひりしてよー。 そして こんど

(35)
ハスメデ^テ ホリヤ ヤマサナ エッタドギナ コンド ツギノ シ
最初の日(に) ほら 山などに 行ったときなど こんど 次の 日

(36)
アガリバン オツランナエナヨ。コンド コムラカエリシテ。(笑)
上り框(を) 降りられないのよ。 こんど 膝返りして

B コムラカエリシテ ンナエガ。 (A ンダ 笑) アエーツ
膝返りして じゃないの? (そう) あれは

ヒドエモナエ コムラカエリワ。
ひどいものね 膝返りは。

A ンダー ンデモ マエニヅ エグドヨー $\left(\begin{smallmatrix} B & \text{ミッ} \\ & \times \times \end{smallmatrix} \dots\dots \right)$ ナレデハー
 そう でも 毎日 (山) 行くとよー 慣れてしまって
 $\left(\begin{smallmatrix} C & \text{ナレルー} \\ & \text{慣れるー} \end{smallmatrix} \right)$

B ミッカグラエガラダド ホダンデ ナエナヨー。
 三日(目)ぐらいからだ"と そんなでも ないのさー。

A ミッカヨッカ ホントデ" ナエモナヤ。コムラカエリシテ。
 三、四日は 本調子で ないものな 豚返りして。

C ホンテナヤー。 $\left(\begin{smallmatrix} A & \text{ンー} \\ & \text{んー} \end{smallmatrix} \right)$ ヤマ トツガエド タエハンダ"。
 ほんとになあー。 山(が) 遠いと 大変だ"。

注

- (1) 山から切り出した小柴でご飯を炊くという話をうけてこう言った。
- (2) 棚木。雑木の山に木棚を作り、伐り倒した一定の長さに切った木を積み重ねた焚き木。桧が多かった。
- (3) 「フヨ」と言う人はほとんど生きていない。古い発音？語形である。
- (4) 「山で買う」には二通りある。①山の立木で買い、秋に伐採し適当な長さに切って乾燥させておき、後日、家に運ぶ場合。②棚木になっているものを、山で買いとって 後日、家に運ぶ場合。つまり、①山ごと買う のと ②山に於て買う のと 二通りである。
①が最も安く、ついで②が安く、家に運んでもらうのがいちばん高く、この買い方をするのは裕福な家と言われた。
- (5) 背中をさして
- (6) えんどう豆・きゅうり・ささげ・朝顔などに使う支柱用の柴。
- (7)(8) 地名。録音地の北方2~4kmの山村。
- (9) 実家に。
- (10) 厘べなかつた という意。
- (11) 地名。録音地の西北4kmの山地。
- (12) 地名。
- (13) 地名。ドンドゴロが正しい名称。
- (14) 地名。
- (15) 地名。
- (16) 息棒。荷棒。背負い運搬や荷ない運搬のとき、背負ったまま小憩するために荷を支える杖。この地域では普通桐の股枝で作る。
「ニンジェンカゲル」は、上のようにして小憩する意。
- (17) 背負ってころんだら怪我をするし、ひとりでは起き上がれないほどの荷物を背負うのが常であったから、ころぶのはこわかった。
- (18) 「タント」を強めた言い方。すごくたくさん。
- (19) 話し手に佐直まさゑの子息が興ちゃん。録音地点宅であり、話し手Bの若い時の奉公先。佐直興輔宅のこと。
- (20) 杉の梢っきの細丸太。もとは直径15cmぐらいのもの。雪囲いや

仮設小屋等に使う。

- (21) 運搬すること。
- (22) 狭いところ を強めた言い方。
- (23) ほんとうは、かついだのだという。
- (24) 麓のところ、広い道路のあるところまで。
- (25) 荷をくずしてほごしたという意。
- (26) ……」って語って聞かせているのだという意。
- (27) 植えこみの樹木。
- (28) 雪折れを防ぐための雪囲い。ソガキの語源としては、粗朶囲い・柴垣・粗垣・粗囲い・外囲い などが考えられる。
- (29) ……以上になるか という意。
- (30) 敬意を表わす「ス」は助詞なので、共通語に訳せない。
- (31) 地名。村山市湯野沢。話し手Cの生まれたところ。山添いの村落。
- (32) 谷地。婚家である現住地。
- (33) 手まねをして。
- (34) すぐに → スグエ → スゲエ → スンゲ
- (35) 清音化している
- (36) 土間から座敷にあかるところに、一尺五寸中ぐらゐの縁をつけておくのが農家の一般的な上がり板であった。

4 叔母さんの卒倒

話し手

- A 佐直 きえ 女 明治36年生まれ
 B 高梨八太郎 男 大正 3年生まれ
 C 佐直まさる 女 明治34年生まれ

C オバサダ⁽¹⁾ アエツ アノ タギバサワ⁽²⁾ サギ オラエノ ヤマノ
 叔母さん達^(か) あれ あの 滝葉沢の 先 俺家の 山の

サギノ ホーデダベ タオッダナ アリヤ。 (A ンー)
 先の 方でだろう 倒れたのは あれ (んー)

B ンダ アエツ オランダ⁽³⁾ カヤノン ドゴデ。
 そう あれは 俺達^(か) 萱野の 所で。

C カヤノン ドゴデ。 (A ンー) ンー。
 萱野の 所で。 (んー) ンー。

B オレド ホレー スンサクサド⁽⁴⁾ エッタ ドギダゲナ。 (A ンー)
 俺と ほらー 新作さんと^(か) 行った ときだからな。 (んー)

C ンー ⁽⁵⁾ シューエツツァエノ ⁽⁶⁾ カガサド ホレ (A ンー) オバサド
 ンー) 周ーさんの家の 母親と ほら (んー) 叔母さんとか

エッタ ドギ。 (A ンー ンー)
 行った とき。 (んー ンー)

C アオモノトリ⁽⁷⁾ ホレ オカゲデ エッタンダケベ^{チャエ}。 (A ンー)
 山菜採り^(に) ほら ついて 行ったんだっただろうね。 (んー)

- B オランダ スギオゴス⁽⁸⁾ エッテ (A ンー) オバサド ホレ
俺達⁽⁴⁾ 杉起こしに 行って (んー) 叔母さんと ほら
シュエツァ エノ カガサ アオモノトリ シッタンダケー。
周一さんの家の 母親⁽⁴⁾ 山菜採り⁽⁵⁾ していたんだった。
- A ンーダツダース⁽⁹⁾ ンー。
なーるほど ー
- C ホシテ ンダテ チョンドシテ。アラテ モカエタナ ンナエ ベー。
そして だって じっとして。歩いて(て)倒れたのではないんだろう。
- B モッカエタナ ンナエ ナヨー。 オランダ ホレ シタリシテ
倒れたので(は) ないんだよ。 俺達は ほら 二人で
スギオゴシッタベ (A ンー) シタエ バ オバサ アンベ⁽¹⁰⁾ハー
杉起こししてたろう (んー) そしたら 叔母さん⁽⁴⁾ 帰ろう
アンベハーテ エダナヨ。 (笑 A ンー) ホゴ オランダ ニモツ
帰ろう って (言)いたのさ。 (んー) そこ⁽⁶⁾の 俺達⁽⁴⁾ 荷物⁽⁵⁾
オエッタ ドゲ エデヨー。 (A ンー) アンベハー アンベハーテ
置いとった 所に 居てよー。 (んー) 「帰ろう 帰ろうって
ナエダ キタバンデ」 アンベハザ アンマエ チャエナテ オランダ
どうしたんだ 来たばかりで 帰ろうなんて あるまいに」なんて 俺達
シタリ エダナヨ。 (A ンー) アンベツァー アンベツハーテナレ
二人⁽⁴⁾ いたのよ。 (んー) 帰ろうよ 帰ろうよってね
(A ンー) ナエーダガ ア アンベ アンベテ ナエダベナ ドテ
(んー) なんか ^x 帰ろう 帰ろうって なんだろうな と思って
ホシテ キタレバ ホレ (A ンー) シコス クヅ マワラネミダエ
そうして 来てみたら ほら (んー) 少し 口⁽⁴⁾ もつれるみたいに
ナッタナーケ。 (A アー ンダーガー) ンダゲ オレ コダゴド
なっていたんだ。 (アー そうカー) だから 俺⁽⁴⁾ こんな具合に

ナッ タハゲハ シエデ アンベハーテダケデー。(A ンー ホーガー)
なってしまったから 連れて 帰って っただったな。(ンー そうか)
ンダラ ワガンナエッダナーテ ホレ オンプロテ キタナッダナ。
これじゃ だめだなあって ほら おんぶして 来たんだよな。

A ンダーツダ。
な一るほど。

C ホンテナー アダナ オッケナバ。
ほんとにな あんな 大柄な(人)を。

B ホシテー スンサクサバ ホレ イエーマンデ エー リヤカトリ
そして 新作さんを ほら 家まで え リヤカーを取って
キテケロツタナツァナエ。(A ンー) オランダ アエデッタ
来てくれと言ったんだったよ。(ンー) 俺達 (注) 歩いて行った

モンダモ ホレ。(A ンー) ショッデン ツテンシャ ナエッス
ものだから ほら。(ンー) 昔は 自転車(注) ないし

イエガラ ミナ アエデ エガンナネケデー。(A ンダ ンダー)
家から みんな 歩いて 行かねばならなかったもの。(そう そう)

デー ト=カグ エギャウマンデ オンプロテ ングハゲー。(A ンー)
でー とにかく 行き合うまで おんぶして 行くから。(ンー)

リヤカ モテキテ ケロハーテ (A ンー) リヤカトリ
リヤカー(注) もってきて くれって (ンー) リヤカー をとりに

ヨゴシタケナヨー。(A ンー) ンデ モッカエタナデワ
よこしたんだった。(ンー) んで 倒れたのでは

ナエガタナヨー ン。(A ハー ンダツダ) タダ コエンスッテ
なかったのよ ン。(はー なるほど) ただ こんなにして (注)

ホノママ ホレー (A ンー) スコス アエツ ナタンダベ アレナ。
そのまま ほら (ン) 少し あれ なったんだろう あれな。

A キモヅ ワレグ ナタンダベチャーナーッス。
気分(か) 悪く なったんでしょ うねえ。

B キモヅ ワレグ ナタナヨー。
気分(か) 悪く なったのよ。

C タダンナググモ ナタケナ ンナエ ベガー。
立たれなくでも なったのでは ないだろうか。

B ン タダンナエ ケナヨハ。 (A ンー) ンダ ドエット コダア
ん 立てなかったのよ。 (んー) そ ばたりと こんなに

モカエタ アエヅ ンナクテ ホレ ズブンガハ (A ンー)
倒れた あれじゃ なくて ほら 自分が (んー)

ガンツエダンダベ アレ。 (A ン ンダベ) ンゴガンナグ ナタナ。
気付いたんだろう あれ (ん そうだろ) 動けなく なったのを。

ンダハゲ アンベハー アンベハーテ ユタンダベ アレー。
だから 帰ろう 帰ろうって 言ったんだろう あれ 。

(A ンー)
(んー)

C ナ ンテ キタミロハナテ オランダ エダベシター。 (A ンー)
な なんだって もう帰ってきたなんて 俺達は 考えていたわけよ。 (んー)

注

- (1) オバサワと言うべきところがねじれている。
オバサには次のような意味がある。①妹・次女以下の娘 ②弟嫁
③伯(叔)母 ④出もどり女 ⑤婚期を逸した女 ⑥おろかな娘
オバともいう。
- (2) 地名。録音地点の北西3~4 kmの浅山
- (3) 地名。 同上
- (4) 人名。話し手C 佐直まさゑ宅の分家の主人。
- (5) 人名。 同上
- (6) カガサ ①母親 ②(子どもが呼ぶ) おかあさん
- (7) アオモノ 山菜の総称。庄内の海岸をのぞく県内全域で使用。
- (8) 雪で倒れた杉の若木を起こす作業。
- (9) 敬語の「ス」
- (10) ア>ベは「行こう」という意味だが、ここでは「帰ろう」の意。
- (11) かがむしぐさをして。

5 萱野刈り

話し手

- A 佐直 きえ 女 明治36年生まれ
 B 高梨八太郎 男 大正 3年生まれ
 C 佐直まさゑ 女 明治34年生まれ

A シェンニ ホリヤ ミナ クサヤネダケハゲテ オランダモ
 昔は ほら みんな 草屋根だったから 俺たちも
 アギー スゴド⁽¹⁾ スマウド リヤー ノーカリジャ エッタゾー。
 秋(に) 仕事(を) 終わると あれ 萱野刈りには 行ったなあ。

(^C ノーカリガー) シー ヨース アリヤー。 (^C シー)
 (萱野刈りか) んー 算を ほら んー

B カヅギザワシュー⁽²⁾ ンダケッダナナー アッツノ⁽⁴⁾ ホーナー。
 勝木沢の人たち(は) そうだったよな あっちの 方はなー。

A ンダ アソゴラシューダ⁽³⁾ ミナ ホレ (^C シー) アノ⁽⁵⁾ ノーテ
 そう あの辺の人たちは みんな ほら (んー) あの 野で
 カウナダケ⁽³⁾ ンダナレ。 (^C シー シー) カーッテ ホシテ
 買うのであったんだな。 (んー んー) 刈って そして

ホリヤー……。

ほら……。

C ナン⁽⁶⁾ーガクテナヤー。
 長くってなあ。

A ンダー ヨス ナン^カクテ (^C ナン^カクテ) ナヤ。
 そう 葦^(カ) 長くて 長くて なあ。

C イエーケデー⁽⁷⁾。
 よかったものね。

A ホーシテ コンド⁽⁸⁾ ワラ ホレ ウッショノ ホーサ コー
 そうして こんど^(ハ) 藁^(セ) ほら (体^(ノ)) 後ろの 方に こう
 アレシテ。 (⁽⁹⁾ ン^ー) ホシテ イエ アンバエ イエ アンバエ⁽¹⁰⁾
 あれして (ん^ー) そして 適宜 適宜に
 タバネ タバネナヤ (^C タバネデナヤ) ホシテ コー タデデ⁽¹¹⁾
 束ね 束ねてな (束ねてな) そして こう 立てて
 クンナダケデハ (ン^ー) アノー カッタ ドゴサヨハ タバネデ。
 来るんだったものな (ん^ー) あの 刈った 所によ 束ねて。
 ホシテ ハル ホリヤー コンド ヤネフギ⁽¹²⁾ クルナテ ユード
 そして 春に ほら こんど 屋根葺き^(カ) 来るなんて 言うと
 ツケラッ ナネツア⁽¹³⁾ コンド ハエツナヤ。
 運ばなければならなかったもんだ こんど それをなあ。

C ンダナー ナン^カエナナー
 そうねー 長いのをなー

A ン^ー ヨス コンド クルマン ドゴマデ⁽¹⁴⁾ ショエダシテ。
 ん^ー 葦^(セ) こんど 車の 所まで 背負い出して。
 オラダモ⁽¹⁵⁾ ナリ ツッチャエハゲ コノ ナン^カエナ (笑)
 俺も 背丈^(カ) 低いから この 長いの

ホッツ ヨスノ ホーノ ホー ホレ ズルズル シバラテ⁽¹⁶⁾
 そっち 葦の 穂の 方^(セ) ほら ずるずる(と)引きずって
 コンド (笑) シニ タツアナヤ ハエツ (笑)。ホーシテ コンド
 こんど 背負ったもんだよ それを 。そうして こんど

ホレ ヤネ フェデ⁽¹⁷⁾ モラワンナネナーデ⁽¹⁷⁾ コンド ハエン デナヤ。
ほら 屋根(を) 葺いて もらわねばならないんだから こんど それを使ってな。

C ンデモ アエツ ヨッポド シトキリイエガ⁽¹⁸⁾ シタキリグラエ
でも あれ(は) よっぽど⁽¹⁸⁾ 一切以上 ニ切り ぐらい
ヨゲー ヤマンナユリ⁽¹⁹⁾ アレダ⁽¹⁹⁾ ンナエガー。
多く 山のものより あれじゃ ないか。

A ナンガエハゲナー。
長いからな

B ンダ⁽¹⁹⁾ ナンガエゲント ジョーブンナワ ホレ ヤマンナノ ホー
そう 長いけれど 丈夫なのは ほら 山のものの 方(か)
ジョーブンダテ ユーケツダナエ
丈夫だって 言うんだったよな

A ンダツダナエ⁽²⁰⁾ カヤー-----
そうだねえ 萱

B カダエハゲー
堅いから

A カヤガ カッダエナツダナー。ホ⁽²⁰⁾ンデモ オラエンドゴ シューナ
萱が 堅いんだよなあー。それでも 俺家の近所(の) 人達など(は)
ミナ ヨスー アノ ノー⁽²⁰⁾ンデ カッテナレ キョー⁽²⁰⁾ンドーシテ
みんな 葺(を) あの 一野 で 買ってさ 協同で
ミナ カッテヨ。(B⁽²⁰⁾ンン) ホシテ ホレ ノーカリ エグナダケ。
みんな 買ってよ (んん) そして ほら 萱野刈り(に) 行くんだった。

(B⁽²⁰⁾ン) デハ ウッショサ コー ワラー サシテナレハ
(ん) で (体の) 後ろに こう 藁を さしてさ

(C⁽²⁰⁾ンダ⁽²⁰⁾ ンダ⁽²⁰⁾) ホシテ チェツチェド ニサンボンツツ コー
(そう そう) そして ちよくちよく ニ、三本ずつ こう

ヌエデ⁽²¹⁾ ホシテ カリナガラ (B タンバネデナ) コレ ングラエ
抜いて そして 刈りながら (束ねてな) これぐらい (に)

タンバネデナヤ。 (C ンー) ホシテハー コンド グルーット
束ねてねえ (んー) そしてさ こんど ぐるっと

ナワー マシテハー⁽²²⁾ ホシテ アノ フユ ホレ ホサ タデデ
縄(を) 廻してさ そして あの 冬(は) ほら そこに 立てて
クンナヅンダナハ。

来るんだったよ。

C ン ハルサ ナテガラ ホシテ ショウナ。
ん 春に なってから そして 背負うのな。

A ンー ハルサ ナテガラ コンド ショッテナヤ。 (C ンー)
んー 春に なってから こんど 背負ってな。 (んー)

ホーシテ ツルツルド オランダナー ホダナ (笑) ナリ
そうして ずるずると 俺なんか(は) そんな 背丈(か)

ツッチャエハゲ ホノ ミーナ シッパラッヅンダデ⁽²³⁾ コンド
低いから その みんな 引きずってしまうんだよね こんど

ホレ ホッツ ウラノ⁽²³⁾ ホー。
ほら そっち 末の 方(か)

C ヤンダナテ ヤネンデ⁽²⁴⁾ ホレ ナヤー-----。*
いやだなんて いわないで ほら なあ

注

- (1) 野良仕事。
- (2) 河北町内の小字名、話し手Aの生まれた所。
- (3) 萱野刈りには行ったもんだ ということ。
- (4) 勝木沢の方面。
- (5) 生えたままの葦を野ざと(買う)。
- (6) ナンガクテはナンガクテ(長くて)の強調した言い方。
- (7) 良い材質だったという意。
- (8) 葦を束ねるための藁。
- (9) 手まねをしながら……腰にさげて という意。
- (10) 「イエ アンバエ イエ アンバエ」がイデオム。
いい塩梅・いいかげん・適当・適切・手ごろに などの意。
- (11) 立てるしぐさをしながら。
- (12) 屋根葺き職人。
- (13) 車につけて運ぶこと。
- (14) 葦は湿地に生えているため、荷車が近くまではいくこめないのだ。
- (15) 複数の「だ」(違)を用いているが、この場合は「俺なども」の意。
- (16) 自然に引きずるような状態になって という意。
- (17) 葦を用いて
- (18) 屋根を葺くときの葦葦の長さ。50 cm ぐらい。
- (19) 萱・茅・オガルカヤのこと
- (20) 同上
- (21) 直径5〜7 cm ぐらいの束を手で示して。
- (22) 葦の束を直径2〜3 m ぐらいの円錐形状にまとめて立てて、縄をまわしてしばっておくのであった。
- (23) 末・梢のこと。ウラポ、ウラポエともいう。
- (24) どんな労働もやったもんだ というつもりだった由。

6 肥やし金と給金

話し手

- A 佐直 さえ 女 明治36年生まれ
 B 高梨八太郎 男 大正 3年生まれ
 C 佐直まさゑ 女 明治34年生まれ

- A オラエノ アネサ ガッコ⁽¹⁾ ソヅキョースッド アッチャ リチャー
 俺家の 姉さん(は) 学校(を) 卒業すると あっちに あれ
 アノ エドトリコーバサ⁽²⁾ (C アーン) エッタハゲハ (C ホーガ)
 あの 糸取り工場に (あー) 行ったから (そうか)
 ホシテ ムガスザヨ ヤッパリ アレンジケデ アノー オー
 そして 昔はね やっぱり あれだったもの あのー
 ホダナ ワレワレミダエ ミンヅノミヒヤキショーテ ユタラ
 そんな われわれみたいな 水呑み百姓って 言ったら
 イエーガ ホーユー シトナナレー (C ンー) ヤッパリ ターサ
 いいか そういう 人などはなー (んー) やっぱり 田に
 コヤス⁽³⁾ ヘレンナ ホノ コヤスカネテ ユナ ツグランナネケナヨ。
 肥料(を) 入れるのに その 肥し金って いうのを 作らねばならなかったのよ。
 (C ン) ダレガ カレガ。 (C ンー) ンダゲテ ホリヤ
 (ん) 誰か 彼かか。 (ん) だから ほら
 ゲジョ ドガ (C ン) コンモリドガテ ミナ ツッチャエ ドギガラ
 下女とか (ん) 子守りとかに みんな 小さい 時から

(^①ン) ヤラッダドホレ ミナ。
(^①ん) やられたもんだ みな。

C ンダツンダ。
なるほど。

A ハエツ コンド ダンナガラ ホレハ マエキン カッデハ
それが こんど 旦那から ほら 前金を 借りて

(^①ン) ホシテ ホレ (^①ン) コヤスガネジャ ホレ (^①ンー)
(^①ん) そして ほら (^①ん) 肥やし金は ほれ (^①んー)

コヤスジャ カッタ モノヅナ ムガス。(^①ンー) ハエツ
肥やしというのは 買った もんだよ 昔(は)。(^①んー) それが

ホレ オラエノ イエーデナノ ホレ オラエノ オドツァニ
ほら 俺家の 家でなんか(は) ほら 俺家の 父親の

シャデ ホレ アツツエ エダケハゲ エゲグロエ。⁽⁴⁾ (^①ンー)
弟(が) ほら あっちに 居たっけから 池黒に。(^①んー)

ホレ エマノ ナンヨーシリャ。(^①ンン) アソゴワ ンート
ほら 今の 南陽市 だね。(^①んん) あそこは 非常に

ホレ エドトリノ アレンダケデ サガンナ ドゴンダケドレ。
ほら 系取りの あれだったろう 盛んな ところだったもの。

C ンダツンダ。
なるほど。

A オッケ コーババリ アッテ ホレ タシエーナテ ユーナナヤ。⁽⁵⁾
大きな 工場ばかり あって ほら 多勢 なんて いうのなどな。

(^①ンーン) ホゴサ ホレ オラエノ オンツァエノ イエーサ
(^①んーん) そこに ほら 俺家の 叔父さんの 家に

トマテ (^①ンー) オラエノ アネサワー ガッコ ソヅギョースッド
泊まって (^①んー) 俺家の 姉さんは 学校を 卒業すると

ホレハー (Cン) エドトリ エッタ モンダハゲナヤ (Cン)
ほら (ん) 系取り(に) 行った もんだからなあ (ん)

ホンダゲ オラエノ イエデジャ ホノ コヤスガネージャ
だから 俺の 家では その 肥やし金は

フジスネケツ。(Cハー) オラエノ アネサ ホレ ボン
不自由しなかったのよ。(はー) 俺家の 姉さんは ほら 盆と

ショーガツ ジェネ ナエデカンデ モテクツケハゲナレ。
正月には お金(を) きまって 持って来たもんだからな。

(Cンー) ホシテ ホレー アノー エドトリ ジョーヅデー
(んー) そして ほら あの 系取り(か) 上手で

ナナヒャグニングラエ エダケベアレ オラエノ アネサ
七百人ぐらい(も) 居たんだろう(か) 俺家の 姉さん(か)

ハエッタ コーバデ (Cンー) エヅンター⁽⁶⁾テ ユートーシェーデヨ
勤めている 工場(で) (んー) いつでも 優等生(で)よ

(Cン) ヤッパリ ニバンドガ エヅバンドガ ホレ
(ん) やっぱり ニ番とか 一番とか ほら

サンバントガテナレ (Cンー) ヤッパリ ジョーヅナダケナ。
三番とかになってな (んー) やっぱり 上手だったんだな。

アダナ ワガツニスル シトンダハゲダガ ナエダガ エドカ° ホレー
あんな 若死にする 人だったからか どうか 系が ほら

フットエ ホッソエ ナクテ タエーラナダケド。(Cンー)
太い 細い(か) なくて 均質(な)なんだったそう(だ)。(んー)

ハエツデ ジョーヅンダテ ユナンデ ホレ ホービ マエネン
それで 上手だって いうので ほら 褒美(を) 毎年

モラウケツ。(Cンー) ショッデン ホリャ ニジューゴエンナテ
もううんだ(た)。(んー) 昔は ほら 二十五円(な)んて

ユード タエーシタ⁽⁷⁾ ホダナ (C⁽⁷⁾ ンダバー) オナゴシューノ
 いったら たいした そんな (そうだろう) 女性の

アレナテ ユド ホービヅァナヤ (C⁽⁸⁾ ン) アダリマエ ホレ
 あれなんて いったら 褒美だよなあ (ん) あたりまえに ほら

テマ⁽⁸⁾ モラタ ホガエ

手間賃⁽⁸⁾ もらった ほかに

B ニジューゴエンナンダラ ンダッダナヤ⁽⁹⁾
 二十五円なら そうだよな。

A モラウナダーゲナヤ。
 もらうのだからな。

C ユエノー モラウ コロ⁽¹⁰⁾ ンダモナハ。
 結納(として) もらう 金額だものな。

A ホンダドレ オマエ ニジューゴエンナテ オラ⁽¹¹⁾ ンダ
 そうさ おまえ 二十五円なんて 俺など(は)

サンジューエンデ キタンダドホレナヤ。(笑)
 (結納) 三十円で 来たんだものね。

B サンジューエンデテ。オレー コーチャエンノ⁽¹¹⁾ イエーサ⁽¹²⁾ キタナ
 三十円だなんて 俺など 興ちゃんの 家に 来たのは
 エヅンバン ハヤグノ トス サンジューゴエンダケテ。(A ナァッ
 一番 初めの 年は 三十五円だったものな (なあ

C ナーエダ⁽¹³⁾ イエー⁽¹⁴⁾ イエガラ イエーガラ シコムドキ⁽¹⁴⁾
 なんと x x x x x x x x 家から 身を引くとき

ハヅジューエン。(笑) ホノ アド ブッカ グングン アガテ
 八十円(だった)。 その あと 物価(が) ぐんぐん 上がって

キタベ。(A ンダー) カガチャ ユエノー ヤル ゴジュー
 来たらう。(そう) 妻に 結納 を やる(のに) x x x

ゴジューエン。(C ンー A.C 笑) コノ ゴジューエンタテ
五十円(だろう)。(ンー) この 五十円といっても

エツネンハンモ カガンナダデナエ。

一年半も かかるんだものな。

A ホンダツンダー。ゴジューエンダラ イエー ホーヅァナヤ。
そういうわけだ。 五十円なら いい ほうだよなあ。

B エマノ シトナー ラーグ⁽¹⁵⁾ナツアッ ユエノーナテ ユタテ。
今の 人なんか 楽なんだよな 結納なんて いっても。

A サンジューエンナテ オマエ タダ-----
三十円なんて おまえ ただ-----

B ヒャグマンナテ ユタテ ラグッダナネ。オランダ エツネンハンモ
百万(円)なんて いっても 楽だよな。 俺など 一年半も

カガテ (A 笑) ユエノー ヤランナネナ (A 笑) ホダナ エマノ
かかって () 結納(を) やらねばならないのに () そんな 今の

シト エツネンモ (A 笑) カガラネデハ。(C ンダナー)
人(は) 一年も () かからないもの。(そうだね)

A ホダナ⁽¹⁶⁾ンダドレナヤ。ハエツ オラエノ アネサ ンダ オマエ
そんなもんだものね。それが 俺家の 姉さんは おまえ

アダリマエ ゲツキュー モラタ ホガエ ヤッパリ エツネンデ
あたりまえに 月給(を) もらった ほかに やっぱり 一年で

ショーヨテ ユーナナレ (C ンー) ニジューゴエン^ゴラエ
賞与って いうのをね (ンー) 二十五円ぐらい

マエネン モラウナダケ。(C ンー) ホノ ホガエ ホレ
毎年 もらうんだった。(ンー) その ほかに ほら

キョーダエドガ ナニドガテ スナモノデ モラタ モノヅァナヤ。
鏡台とか 何とかって 品物で もらった もんだよな。

(C ンー) ンダゲテ オラエノ ツッカ ンデジャー アネサ
(んー) だから 俺家の 実家では 姉さんが

ジェネ モテクッサゲ ホレ オランダ イエー エル ウツワ
お金(を) もってくるから ほら 俺(が) 家に 居た ちは
コヤスカネテ ユナ シャッキン スッゴダ ナエガッタズ。ニー。
肥やし金(と) いうのは 借金 することは なかったもんだよ。んー。

C ンダハゲ⁽¹⁷⁾ カシェ ガンナネケッ ダナナー。
だから 縁がねばならなかったわけだよな。

A ンダー。ンダゲテ ムガスナテ ホリヤー ミナー アノー
そう。だから 昔などは ほら みな あの
トッタタゲノ⁽¹⁸⁾ ハンブンモ ネング⁽¹⁹⁾ ハガラナネハゲデー
取った分の 半分も 年貢(を) 納めなきゃならないから

(C ンー) イエサ ノゴッ ドコジャ ナエナーデ コメナヤ。
(んー) 家に 残る ところは ないんだよな 米はなあ。

(C ンダ ンダー) ンダゲ クンツ -----
(そう そう) だから 屑 -----

C クンツバリ クテランナネケナヤー。
屑(米)ばかり 食っていなきゃならなかったな。

A ンー。ホンダゲテ ホダナ ナツゴメ⁽²⁰⁾ アソゴノ イエーデ
んー。だから そんな 夏米(を) あすこの 家で
ニジューダ⁽²¹⁾ラ シイデ⁽²²⁾ ウッタドナテ ユーナンダラ⁽²³⁾ ホーンテ
ニ十俵(を) ひいて 売ったそうだなんて いうのなら ほんとうに
ダンナシェ⁽²⁴⁾ーダケ。(C ン ンダナー) ムランデモ⁽²⁴⁾ エッケンカ⁽²⁵⁾
金持ちだった (ん そうだ)な 地区でも 一軒か
ニゲングラエダケ。(C 笑) ナツゴメナ ホレグラエ ウル シトナノ*
ニ軒ぐらいだったな。 夏米を それぐらい 売る 人など。

注

- (1) 小学校六年生
- (2) 製糸工場。まゆから糸をとる工場。
- (3) 金肥。
- (4) 地名。南陽市池黒に製糸工場があった。
- (5) 工場主の姓。
- (6) 「いつだって」が原形。エツダテ（いつでも）を強めた形。
- (7) たいした を強めた形。
- (8) 給金。
- (9) 大変な金額だよな。
- (10) コロ は くらい の意。ここでは「-----くらいの金額」の意。
- (11) 佐直興輔。話し手Cの長男。話し手Bの奉公先。
- (12) 来たとき、住みこみで奉公したとき の意。
- (13) 奉公先から
- (14) 「引っ込む時」が原形。シコムには、①引っ込む ②引退する ③身を引く ④卒業する などの意味がある。
- (15) ラクナ（楽な）の強調形。
- (16) 「そんなにも給金が少なくて、現金収入が少なかった」ということ。
- (17) だから、姉さんの恩に報いるためにも、姉さんのかわりに
- (18) 米の総収穫高
- (19) 年貢を納めることを 年貢ハカルといった。旦那の家の番頭が、升で米をはかり、あるいは重さをはかって、検査を受けて納めた。
- (20) 粃で保存しておいて、夏の端境期に、脱穀精米する米。
- (21) 俵（たわら）を タラという。
- (22) 脱穀して。
- (23) ホンテ（ほんとうに）の強調形。
- (24) 旦那衆が原形。お金持ち、素封家、金満家。
- (25) 部落 町内会にあたる範囲の地区、区域。

7 蚕の収入

話し手

A 佐直 きえ 女 明治36年生まれ

B 高梨八太郎 男 大正 3年生まれ

C 佐直まさゑ 女 明治34年生まれ

A オゴサマジャ サンド ヨガエリグラエ オッケハゲナ⁽¹⁾ (Cン一)
 蚕というものは 三度も 四度も 飼ったからな (ん一)
 ンダタテ ホレー ヤッパリ オゴサマノ カネナノ コンツガエ
 だって ほら やっぱ⁰り 蚕の 金など⁽²⁾ (は) 小遣い⁽³⁾ (に)
 ナテスマタリ ナニモカニモ⁽³⁾ カワナネンダツス オランダ
 なってしまったり いろんなものを 買わなければならぬんだし おれたちは
 ホレ ハツニンモ キョーダエ エダンダゲ ガギンビラチャ⁽⁴⁾
 ほら 八人も 兄弟が いたんだから 子どもたちに
 カッテケランナネバツス ホダナ オゴサーノ ジェネナ⁽⁵⁾
 買ってやらなければならぬだろうし そんな 蚕の 金など
 ノゴラネツ^ンダツ^ン ホレ。
 残らないわけだよな

C ハツニナー エダンダガ。 (Aンダー) ンダガー。
 八人もねえ いたのか (そう) そうか

A ホダナ ホレ タマリ⁽⁶⁾ンダ ナエンダテ (Cン一) ネンージュ一
 そんな ほら 醤油だの 何だのって (ん一) 年中

カヨエ⁽⁷⁾ンデ クテッドレ。(C ホンダ ホンダ) ハエヅ コンド
 通い帳で 食っているだろう。(そう そう) それが コンビ
 (C ネヤー) オゴサマ⁽⁸⁾ ウッタドギ ミナ (C ン) ナサンナネドレ。
 (ねえー) 蕨 (を) 売ったとき(に) 全部 (ん) 返済しなければならぬだろう。
 (C ン ンダー) サゲンダテ ナエンダテ ミナ カヨエンダケド
 (ん そう) 酒 でも 何でも 全部 通い帳でだったもの
 ムガス。(C ンー)
 昔(は) (んー)

B ンダモナエ アノー (A ンーダ) ボント ショーガツンダケモナエ
 そうだね あの (そうだ) 金と 正月だったものな

カンジョナテ ユナ。

勘定(する)なんて いうのは。

A ン ボン ショーガツカンジョーデナレ。

ん 金と 正月の勘定でなあ。

B エサンバヤンデモ⁽⁹⁾ ドゴンデモヨ。(A ンダデー) ホレマンデ
 海産物商でも どこでもさ。(そうねー) それまで

ジェニ ハエラネ モンダモナエ。

金(か) はいらない もんだものね。

A ンダー ジェニ (B ンー) ハエラネゲ ジェニ ハエタ ドギ
 そう 金(か) (んー) はいらないから 金(か) はいった とき(に)

ナスナツンダナナヤー。(B ン) サゲンダテ ホリヤ ホダナ
 返済するんだったよなあ。(ん) 酒 だって ほら そんな

エツネンジューデ ダエンブ ノムドレナヤ。(C ンー)
 一年間で だいぶん 飲むものねえ。(んー)

タマリンダテ-----。

醤油 だって -----

C ナンボ ヤッスエタテナー。
いくら 安くったてなあ。

A シー。 クーッス ホレ ホダナ ミナ ボン
んー。 食うし ほら それも 全部 金(と)

ショーガヅ カンジョーデ ホレ。ンダゲ^{~~~~~} ナヅカエゴナノ
正月(の) 甚だ定で…… ほら。だから 夏蚕など"を

ウッタテヨハ ボンノ スハラエ⁽¹⁰⁾ンデハ……。 ホレ サガナ^ダデ
売ったってよ 金の 支払いでさ……。 ほら 魚だって

ンダデー ミナ カヨエダケドレ。(B.C. ンダー) シー。ツネニナヤ。
そうだもの みな 通帳(て)だったもの。(そう) ンー。つねにね。

(C シー) ホシテ カヨエ^ンダド ドーシテモ アレー ホンドギ
(んー) そして 通帳(て)だ"と どうしても あれ そのとき

ジェネ ダサネゲ クンダレナー。⁽¹¹⁾
金(を) 払わないから 食うんだよなあ。

C ン クーモナー。 (A シー) ン。
ん 食うものな。 (んー) ン。

A ホレー ミナー コンド オゴサマナー ウッタ⁽¹²⁾タテ スハラエ
ほら みな こんど" 蕨(わ)なんか 売ったって 支払い

サンナネデ" コンドナヤ。 ホレ バンシューサンナノ オエダ^テ
しなければならぬだろう こんど"は。 ほら 晩秋蚕(ふゆぐ)など" 飼(か)ったって

コンド スコースツカエ オガネッス。 ホダナ ホレハ
こんど" 少ししか 飼(か)わないし。 そんな それ

シェンダグスルー⁽¹³⁾ナダハーナテ ン オドゴシュー⁽¹⁴⁾ダ" アデ
選択(せんたく)するのだ" なんて ン 男の人たち(を) あてには

サンナエナダナテ ホダナ ゴド ユテ ホレ オナゴシューノ
できないんだ"なんて そんな ことを 言って ほら 女の人たちの

ホンマツンダ オゴサマナテ ホダゴド ユテ オグナダケドレナヤ。
へそくりだ 繭(の金は)なんて そんなこと(を)言って 飼うのだったよな。

バンシューナテ ユードヨ。 シテ サンドモ ヨガエリモ
晩秋(蚕)なんて いうとさ。こうして 三度も 四度も

オゴサマ オエダテ ジェニナー エツモンダテ (笑) カツカツテ (15)
蚕 (を) 飼っても 金などは 一文だって(なくて) かつかつで

ホダナ (C 笑) ノゴラネナツアネー。
そんな () 残らないのだものね。

B ハエツバン⁽¹⁶⁾ダモノ ンダツー。*
それは"かりだもの" そうだ"よ。

注

- (1) 「四返り」(四サイクル)が原形。
- (2) 蚕を飼うことを オゴサマオグという。
- (3) 「何も彼にも」が原形。
- (4) 「餓鬼びら」が原形。子どもは、いつも腹をすかしてがっがっして
いることからの卑称らしい。「びら」は人間の複数を表わす「達」
- (5) 銭だけでなく、お金の総称。現金というふくみもある。
- (6) 元来タマリは、自家製の醤油のしぼる前に自然にたまる上質の醤油
の称であったが、自家製が減って商品が出まわるにしたがって醤油
の総称となった。
- (7) 掛け買いで。代金あとばらいの約束で商物を買って。
- (8) 繭を売ることをオゴサマウルという。
- (9) 鰯屋(いさばや)。魚屋。海産物を籠に背負ったり、リヤカーにつ
けたりして一軒一軒売り歩く行商であった。
- (10) …… は、「すっかりなくなってしまう」という気持ち。
- (11) たくさん 食うんだよなあ。という意。
- (12) 売ったとしても。
- (13) 削減する。精選する。少しだけ飼う。
- (14) 男衆達
- (15) いつもぎりぎりで。古語「かつがつ」の変化か。どうにかこうにか
やっとまにあう意。
- (16) 現金収入はそれきりない、養蚕の収入だけだということ。

8 草履作りと小遣い

話し手

- A 佐直 きえ 女 明治36年生まれ
B 高梨八太郎 男 大正 3年生まれ
C 佐直まさゑ 女 明治34年生まれ

- A ジョーリナ ツクタテ ヘッゲナ エッパ⁽¹⁾ ジューサンシェン
草履など 作ったって そんなものは 一把で 十三銭'
オドゴジョーリ⁽²⁾ ツクテ ジューサンシェンナ ジューニシェンナテ
男(物の)草履を 作って 十三銭とか 十二銭(だ)なんて
(C ンー) ホダナダ' モノナヤー (C ンー) ホダーナ⁽³⁾ ナンボ'
(ンー) そんなもんだ' ものね (ンー) だから いくら
エッシュケンメ ツクタタテヨ ホダナ ヨエ タヅ'コロ⁽⁴⁾ ホダエ
一生懸命(に) 作ったって そんな 用に 立くほど' そんなに
(笑) ヤッパリー。
やっ は'リー。
- B オラエノ バンサ エダ ドギ'ンダ'ド' ナンボ' エッパ
俺家の 婆さんが 生きてた ときだ'と いくら(かな) 一把
ニジューヨンシェンダケガヤー。
二十四銭だ' たかな
- A ンー ンダド ホレグラエ スッドギモ アッタンダ' ンデモナ。
んー そうすると それぐらい するときも あったんだ' それでも。

(C ンー) ダンダエ アガテナヤ。
(んー) だんだん(に) 上がってな。

B ンダテ エッ⁽⁵⁾ ホンドギ ナエデモ ヤッスエテ ユーモノノ
だって そのとき 何でも 安いって いうものの

(A ンダー) エッパ ツクルニ エツニツダデナヤ。
(そうー) 一把 作るのに 一日だものな。

A ンダー ホダナ ミナカガリシテ⁽⁶⁾ フス⁽⁷⁾ ヌエダリ (C ンダー)
そう そんな 全員総出で 節⁽⁸⁾ 抜いたり、そうー
フス⁽⁸⁾ キツタリナヤ。(C ンダナヤー) ンー。^{*}
節⁽⁸⁾ 切ったりな (そうだったな) んー。

C ンデモ ムガス セーカツホジョ ナテ アンナダケガツー。
でも 昔は 生活補助なんて あったんだろうか。

A ナエケ。(B ナエナヨ) ホダナ ゴドナ ナエケ。ホ ンダーハゲ
なかった。(ないのさ) そんな ことなど なかった。だから

ホレ ホダナ……。

ほう そんな……。

B タエヘンナダケッ⁽⁹⁾ ダナナエ。
大変だったんだよな。

A ガギビラ ンー サンニンモ オガッデ⁽¹⁰⁾ テーシュナー
子どもたち⁽⁸⁾ ンー 三人も 置かれて 亭主などに

スナッダリ ビョーギナ サッダリ スルンダラ ホンーテ
死なれたり (亭主が) 病気に なったり すれば ほんとに

ホダナ カガ ナンヅエガ⁽¹¹⁾ ナッコロ ホレナヤ (C ンー)
そんな 妻は どうか なるほど ほう、んー

ヤッパリ ナンギシテ ガギビラ オガシタナテ⁽¹²⁾ ユナ
やっぱり 難儀して 子どもたち⁽⁸⁾ 育てたなんて いうことも

アンナヅアン。ンダゲ ムガスナ ホリャ ジョーリ ツクテ
あるんだよな。だから 昔などは ほら 草履(を) 作って

アノ コメ カッテ カヘダ シトナ ナンボモ エンナヅンダナ。
あの 米(を) 買って 食べさせた 人など 何人も いるんだよな。

(C ンダベー) ンー。
(そうだろう) んー。

C ユギノサナ ⁽¹³⁾ ンダッテ ユーケデ。ナワ ナッテ (B ンダ A ンー)
ゆきのさんなどは そうだって 言ってたっけ。縄(を) なって (そう んー)

アレンドド ホレ ナワ ナッテ ホシテ ジョリー ツクテ ア
あれだ"そうだ" ほら 縄(を) なって そして 草履(を) 作って

オヤヅチャ ⁽¹⁴⁾ サゲ ノマハダーテ。 (A ンー)
夫に 酒(を) 飲ませたって。 (んー)

B ン オヤヅ ホレ ホダエ カランダ ジョーブンデ ナエケッス
ん 夫(は) ほら そんなに 体(が) 丈夫で なかったし

ヤスンデバリ エッケハゲナヤ。 (C ン A ンーダナヤー)
休んでばかり 居ったからなあ。 (ん そうだねえ)

C ドガダ スルエ
土方(を) するのに

A ⁽¹⁵⁾ アノ シト ンダラ カシェーダナヅダナナヤー。 (A ンダーナー)
あの 人だったら 縁いだんだよなあ。 (そうだね)

ホ ンデォ ⁽¹⁶⁾ ジョーリ ツクテ ママ カヘデ オクナテ ユーナナ
それでも 草履(を) 作って 飯(を) 食わせて おくなんて いうのは

アノ メヅラスグ ナエケ。ンデモ ムガス。 (C ンダナ) ンー。
あの 珍しくは なかった。それでも 昔(は) (そうだね) んー。

(C ンー) ⁽¹⁷⁾ エーマ ホダナ ナンボ シタテ ジョーリナ ツクテ
(んー) 今(は) そんな どんなに したって 草履なんか 作って

コメ カッテ ホダナ カシェ ラン ナエ ベー。エマ ジョリ
米(を) 買って そんな 食べられないだろう。今(は) 草履(は)

ヤッスエッス シテ ホダナホレ。 (Cンダ) ホダナ シェーカツ
安いし そして そんな 。 () そんな 生活を

シテル シト エネドレ エマ。 (Cン) ンー。
している 人(は) いないだろう 今(は)。 (ん) ンー。

B シテー エマーノ シト ンダテ ジェニトリ⁽¹⁸⁾ シトリバーリ
そして 今の 人だって 現金収入 一人ばっかり(の)

ジェニトリナテ ユード コレモ タエヘンナンダモナエ。
現金収入なんて いえは これも 大変なんだものな。

(A.Cンダー) ン。アド ホレ ナエショグドガ ナニガ ミナ
(そうだ) ン。あと(は) ほら 内職とか 何か(を) どこでも

シテッサゲ エгентナエ。 (Cン Aンダー)
しているから いいけどね。 (ん そうだ)

A ホナーテ ハエツ ヤッパリ ンダゲ ムガヌナノ ジェニ
ほんとに それは やっぱり だから 昔などは 金は

ツカワンナエ ナダケツァナヤ ナクテ。 (Cン ンダナ) ンー。
使えなかったんだよなあ 貧乏で。 (んー そうだね ンー。

C シェンバ アガッシャエ。⁽¹⁹⁾
せんべい(を) おあがりなさい。

A ホナーテ ホダナ ンダケー。アッヤ ハルカエゴナノー ホレ
ほんとに そんな そうだった あれ 春蚕など ぼら

ホンデモ マエナノ ウッド ヒャグエンサツナ ミルエ⁽²⁰⁾ ゴド
それでも 繭など(を) 売ると 百円札などを 見られる ことが

アッタゲノ ヒャグエンサツナ ミランナエナケモナヤ (Cン)
あったけど 百円札などは (普通) 見られないんだったものね (ん)

アノ シェツ (B ンダナ) ホダナ エヅネンジュー (咳ばらい)
あの 時節(は) (そうだね) そんな 一年中

カシェーダテ ヒャグエンサツナ ミランナエナダケ。 オゴサマ
嫁いだって 百円札なんか(は) 見られない なんだ。 爾(を)

ウッテリヤ マエナノ ワダスド ホリヤー ヒャグエンサツナ
売ってさ 爾など(を) 売渡すと ほら 百円札などを

モラテ キタナテ ホシテ オイエ バッサマサ アゲロ⁽²¹⁾ マヅナテ⁽²²⁾
もらって 来たなんて そして お恵比須さまに 供えろ まずなんて

ホシテ コンド (笑) ミンナチャ ヒャグエンサツ タカガヘデ
そして こんど みんなに 百円札(を) 持たせて

メシェデダデ ヒャグエンサツナテ コダエー ネウツ アンナダ
見せてだらう 百円札なんて こんなにも ねうち(か) あるんだ

コリヤナテ (笑) ホシテ オラエノ オドツァナノ。(笑) (C 笑)
これはなんて そして 俺家の 父親なんかは。

アリガダクテ ホノ ヒャグエンサツ ホレ (C ン) ンー。
ありがたくて その 百円札を ほら (ん) ンー。

B ヒャグエンサツナノ⁽²³⁾ フレフレ ミランナエケモナ ホンデモ
百円札などは われわれ(は) 見られなかったものな そんなでも

オランダナノ……。
俺達など……。

A ミランナエ ホダナ (B ンー) エヅネンジュー カシェーダテ
見られない そんな (んー) 一年中 嫁いだって

ミランナエ。
見られない。

B ヨッポド⁽²⁴⁾ ナ シト ンナエド。 (A ンー ンー) ナダ
よっぽどの 人で ないと。 (んー んー)

ゴツガエナテ ユタタテ ゴシエンカ ツッシェンダデナエ。
小遣いなんて いても 五銭か 十銭だものね。

(A ンーダ) オマツナテ ユタテ。
(そうだ) お祭なんて いても。

A ンダー。ハツガツノ オマツナテ⁽²⁵⁾ ユタテ ホレ ゴシエンナノ
そう。(旧暦)八月の お祭なんて いても ほら 五銭など

オランダナノ モラウド ヨローゴンデナヤ ホダナ。
俺達など(か) もううと 喜こんで なあ そんな。

ゴシエンナテ ツネニ モラタ ゴド ナエナードレ。
五銭なんて 常には もらった こと(か) ないんだもの。

エッシェンカ ゴリントガテ (笑) ホダナバンデ。
一銭か 五厘とかって そんな(金額)ばかりで。

B オランダドモ マダ ジューネングラエモ ツカウハゲナ。(A ホンダ)
俺達とも また 十年ぐらいも (年代が)違うからな。(そうだ)

* オレー エツネンデ リヤ コーチャエンーノ イエー エダ
俺(は) 一年で あれ 興ちゃんの 家に 居た
アダリダド ジューエン アッド エツネン タクサンダケハゲナエ。
頃だと 十円 あれば 一年 充分だったからな。

ツボン カッター (A ハー ホンダガナー) コンツガエシタリ。(A ヤッパリ)
ズボン(を) 買った (はー そうかな) 小遣いにしたり。(やっぱり)

タバコモ ノマネハゲナレ。(A ンー) ナエデカンド ボンニ
タバコも 飲まないからな。(んー) 毎年きまって 盆に

ゴエントヨー (A ン) ホレガラ ホレ ショーガツ ゴエン
五円とよ (ん) それから ほら 正月に 五円を

カリツケナヨー (A ンダツダー) ハエツ ホントワダド
借りるんだったよ。(なるほど) それが 本当は

エラネゲント ホレ ショーガツテ ユード ナエンデカンデモ
 いないけど ほら 正月って いうと 毎年きまって
 アリャ アニキ ドゴサ ンケハゲ ホレ。(A ンー) カマフツツア。⁽²⁶⁾
 ほら 兄貴(の) 所に 行くけから ほら。(んー) 釜淵に。
 (A ンダ ンダ ンー) ンダハゲ ジューエン エッケナヨー。
 (そう そう んー) だから 十円(が) 必要だったのよ。

A ンー。ヤッパリ ンダモナヤー ムガス ナエンデモ ホレ
 んー。やっぱり そうだね 昔(は) なんでも ほら
 ヤッスエクテ ホレ。 ヤッスエゲント カワンナエナダケ
 安くって ほら。 安いけれど 買えないんだった
ンデモ。
 でも。

B カワンナエケナ (A ジェニ) ジェニ トランナエケモ。
 買えなかったな (金) 金(が) とれなかったもの。

A ンダ トランナエツス ナエナダケモ ヤッパリ ジェニ。
 そう とれなかったし ないんだったもの やっぱり 金(が)
 エマミデ ジェネマワリ ワレツスナヤ。⁽²⁷⁾ (B ンダ) ンー。
 今みたい(には) 金回りが 悪いしなあ。(そう) んー。

B オナゴ シトノ ジニトリナテ ユーナ ナエケモノナエ。
 女の 人の 金とりなんて いうのは なかったものね。

(A ナエケー) ジョーリツクリノ ホガニワヨー。(A ンダー)
 (なかった) 草履作りの ほかにはさ (そうだ)

A ンダゲ ドゴーデモ ホダナ ジョーリジャ ツクタナヅアン
 だから どこでも そんな 草履は 作ったんだよな
 ムガスー。^{*}
 昔(は)

往

- (1) 十足で一把。
- (2) 巾三寸で作にくいが、女物（巾二寸八分）より、ねだんが高い。
- (3) ホダナ（だから）の強めた形。
- (4) 生活費のたしになるほど。
- (5) どんな品物でも。どんな商品でも。
- (6) 全員の協力によって草履ができた。草履ができるまでの手順は、
①わらしごき ②節ぬき ③みごし（米のとぎ汁）つけ ④水洗い
⑤節干し ⑥節切り をして「節」を作る。そのあと ⑦草履編み
⑧槌でたたく ⑨金棒でのす ⑩十足ずつ束ねる。
一方併行して縄ないをする。①わら打ち ②縄ない ③燃りかけ
④こすりかけ ⑤丸める
以上の仕事のために、家族全員が手わけして、手伝った。
- (7) 藁の節
- (8) ストローを切る。節と節との間のストローの部分切る。
- (9) 生活が苦しい、経済的に苦しい ということ。
- (10) 残されて
- (11) ナンズエガ ナッコロ で「ひどく」という意味
- (12) オガス は ①育てる ②ふくらます ③茂らす ④繁茂させる
- (13) 近所の主婦の名。
- (14) オヤズ は ①父親 ②男の成人 ③夫
- (15) ゆきのさん
- (16) ママ カヘデ オグ で「生活を支えている」「生計を立てる」
- (17) 「もう」というニュアンス。
- (18) ①現金収入（者） ②生計主体者 ③稼ぎ手 ④お金とり
- (19) 話題の流れとは関係なしに、茶菓をすすめている。
- (20) ミルエ の エ は、可能をあらわす。
- (21) 神仙に供えること
- (22) マヅ 間投助詞的はたらき。
- (23) 俺達 という意味だが ひらきなおったりしていうときに使う。

- (24) よっぽど裕福な
- (25) 旧暦八月十五日を中心に行なわれた谷地八幡神社の例祭。近在でももっとも賑かな祭りで、昔は一週間もの間続いたので、谷地のバカ祭りとも、ドンガ祭りとも呼ばれ、無形文化財の谷地舞楽と凱旋奴（ふり奴）が有名である。現在は、九月十四日から三日間行なう。
- (26) 地名。最上郡真室川町の釜淵。
- (27) 「良くないしな」のねじれ。
- (28) ジニトリ ①お金とり、②現金収入 ③収入を得るための仕事。

9 子 守 り

話し手

- A 佐直 きえ 女 明治36年生まれ
 B 高梨八太郎 男 大正 3年生まれ
 C 佐直まさゑ 女 明治34年生まれ

A ヤッパリ ジュンジュント ホレ コンドモ ホレー アレ
 やっぱり 順々と ほら 子ども(を) ほれ あれ

オンバンナネクテ ホレ (C ンダー) ンー。
 おんぶしなければならなくて ほら (そうだ) ンー。

B ゴログ⁽¹⁾ニンナ アダリマエナダケ (笑)。
 五六人などは あたりまえなんだった

A ホンダー ゴログニン スツハツニンナ (B ン) アダリマエ
 そうだ 五六人 セ八人などは (ん) あたりまえ
 ミダエ ダケハゲナヤ。 (C ン) ンダハゲテ ホダナ⁽²⁾ コンドモーバ⁽³⁾
 みたいだったからなあ。 (ん) だから そんな 子どもを
 コンドモ オカシテ ケランナネミダエナ モンダケドレ ムガス。
 子どもが 育てて やらなければならぬみたい な もんだったよな 昔は。

B ンダゲ エツンバン オッキナナ コ^x コンモリツアン
 だから 一番 上の子などは 子守 だったよな
 ツーット⁽⁴⁾ナエハ。
 ずうっとね。

A ンダ ズーット コンモリヨハ ヤッパリ。

そう ずうっと 子守だったな やっぱり。

B デハテング⁽⁵⁾ド コンド ホノ シタンナ コンモリ シテ (Aンダ)
出ていくと こんど その 下の子(が) 子守(を) して (そう)

バツツノ ホーバ オバンナネケッス。

末っ子の 方を おんぶしなければならなかったし。

A ジュンーグ⁽⁶⁾リナヤ (B 笑) ダンーダエ。 オレーワ ンデモ
順繰り(に) ねえ () だんだんに。 俺は それでも

コンモリワ スネーナ。 アノー ツッチャエガラ トモデサ
子守は しないな。 あの 小さい(時)から 野良に

デハテアラテ。 オレンデ トショリーシタリ エダケハゲ。(B ンー)
出て 歩いて。 俺の家で 年寄り(が) 二人 居ったから。(んー)

ンデ トショリバンチャド ホレ ホノ アレード ホレ
んで 年寄り婆さんと ほら ほの あれと ほら

ヤッパリ ワガエ バンチャド シタリ エダケハゲナ。 ホノ
やっぱり 若い 婆さん と 二人 居ったからな。 その

シト ンダ コンモリ シテ ケッケハゲ ホレ。 ンダゲ
人達(が) 子守り(を) して くれたから ほら。 だから

トモデサバリ デハテ アラタツダナー。

野良にはっかり 出て あるいたんだよな。

B オラエノ フンジコ⁽⁸⁾ナノ ンナエナー。 ヤッパリ エツンバン
俺家の 富士子などは そうでないな。 やっぱり 一番

オッキハゲヨ (A ンダベー) ガッコガラクッド ナエ ンデカンデモ
上の子だから (そうだろう) 学校から 帰ると いつもきまって

オンボコオンビヨハ。 (A ンダー ナヤー) ホシテ バン
子ども おんぶさ。 (そうだよ なあ) そして [×] [×]

バンカダ⁽⁹⁾ ホレ ママヅマエシテ オゲナハーナテ ヤッデナレ。
夕方に ほら ご飯の仕度して おけよな なんて いわれてさ。

A ンダー ホシテ ショッデンノ シトナ オバンナネ カンージョ
そう そして 昔の 人など おんふし⁽¹⁾なければならない つもり
シテナヤー。
してねえ。

B ンダ スル カンージョ シテナエハ。 (A ンー ンダー)
そう する つもり してなあ。 (そう そうだ)
ドゴンデモ オッキナハ コンモリ シテ (A ンダー) ママヅマエ
どこの家でも 大きい子が 子守 (を) して (そうだ) ご飯の仕度(を)
サンナネケツナ。 (A ンダー) ガッコガラ クッド (A ンダネヤ)
しなけらなかつたよな。 (そうだ) 学校から 帰ると (そうだ) ねえ
アデ シテル モンダモネハ。 (A ンダナ) *
あてに してる もんだ⁽²⁾ものね。 (そうだね)

注

- (1) 子どもの数、きょうだいの数、について言っている。
- (2) もう子どもなんかは というややなげやりなニュアンス。
- (3) ……をば の残存か。
- (4) 何年もの間、長らく。
- (5) デハル（出張る） ①家を出る ②勤めや奉公に出る ③野良仕事に出る。
- (6) 第一子が、第二子第三子をおんぶし、第二子が第四子の子守をし、第三子が第五子の子守をするというぐあいに 順送りにすること。
- (7) ①小さい時から ②小さいという理由で の二つの用法があるが、①の方は古老の使用法である。
- (8) 話し手B 高梨八太郎の長女（第一子）。
- (9) ご飯仕舞い とも。

10 手足による農作業

話し手

A 佐直 きえ 女 明治36年生まれ

B 高梨八太郎 男 大正 3年生まれ

C 佐直まさゑ 女 明治34年生まれ

A エッソー テアスンデ スネゲンバジャ ホレ キカエ
すべて 手足で (作業)しなければ ほら 機械は
ナエッスナヤ。 (C ンー) *
ないしなあ。 (んー)

B ンダゲ オランダガラ カンガエッド ヒャキショー ヤンダナテ
だから 俺などから 考えると 百姓(が) いやだなんて
ユナ ナシテ ヤンダテ ヤンナネミダエナ モンダモナエ。
言うの なぜ いやだって 言わねばならないみたいなものね。

A エマ ナヤ。ラグデナヤー。
今 なあ。 楽でなあ。

B ナンニモ ゴミモ カガッゴダ ナエ (C ンダデー) キカエデ
なにも ごみも かかること(が) ない (そうなものね) 機械で

(A.C ンダデー) ホダナ ヒシテ フツガデ オワル
(そうなものね) そんな 一日か 二日で 終わる

スゴドンダデナエ タエデナエ。 (C ンダ A ンダーナヤース)
仕事だろうにね たいていはね。 (そう そうですもんね。)

オラーダナノ アエツナ⁽²⁾ ドギ ホダナ トーガモ ハツガモ
俺達など あれの ときは そんな 十日も 二十日も

ホレ (Cンダナエー) ターチョス⁽³⁾ シテランナネ。 オッカゲ
ほら (そうだね) 田の仕事(を) していなければならない。 次から

オッカゲナエハ (Cンダー)
次に ねえ (そうだ)

A ターウナエナノ ホダナー ヤッパリ エッシューカンカ
田起こしなど(を) そんな やっぱり 一週間か

トーガクラエナ スルンダラ ミナ ユービ スカグエ
十日ぐらいも したら みんな 指(か) 四角に

ナッケジャエ。(Bンダー) ンー。
なったもんだ。(そうだ) ンー。

B ンダゲ オランダナ (A ンー) コゴ コー タゴエッテハ。(A ンダ)
だから 俺なんか(は) (ンー) ここ(か) こう 胼胝になってさ。(そう)

カッダクテ (A マ~~~~) マメナテ デネケデハ。
堅くって (~~~~) まめなど 出なかったさ。

A ンー ンダベハ ヤッパリ ホダナ エマナノ エマノ シトナ
ンー そうだろうよ やっぱり そんな 今など 今の 人など

グンテ カゲデナバリ ミナ スッサゲ ンダゲノ ショッデン
軍手(を) かけてばかり 何でも するからだけど 昔は

ホダナ ナエッスホレ アレダデレ。ホダナハ トーガクラエナ
そんなものは ないしね あれだろう。そんな 十日ぐらいも

タウナエ スルンダラ ミナ スカグエ ナテハ ユービ ホーダナ。
田起こし(を) したら みんな 四角に なって 指(か) そんな。

タウナエジャ アエツ ツッカラ⁽⁵⁾ エル スゴド ンダモナヤ。
田起こしは あれは 力の 要る 仕事なものな。

- B ツッカラ エンナヨーナヤ。 (A ンダー)
 カ (か) 要るのよねえ (そうだ)
- C ンダゲ オナゴシューナ ラグデナエッ ダナナヤ。
 だから 女の人など(は) 楽でないんだよねあ
- A ラグデナエ オナゴシューナノ ンー。
 楽でないよ 女の人など(は) ンー。

- B タウナウド コンド ホレ アメ フラレッド ニバンカエステ
 田を起こすと こんど ほら 雨(に) 降られると ニ番返しといって
 (笑) (A ンダ) コー マダ カエサンナネナヨ (A ンダー)
 (そう) こう また 起こさなければならぬのよ (そうだ)

カワガネハゲー。

乾かないからー。

- A ツヅ シネド⁽⁶⁾ット コンド ツンブンナエ ハゲナ⁽⁷⁾ ヤッパリ。
 土(か) 乾かないと こんどは (土が) 碎けないからな やっぱり。
- B ホシテ コンド マサガリデリヤー (A ンダ) タツンブスナエ⁽⁸⁾。
 そうして こんど まさかりでさ (そう) 塊打ちね。

(C ンダ A ンー) ホノ タノ スゴドデ タツンブス エツバン
 (そう ンー) その 田の 仕事で 塊打ち(か) 一番

テマ カガッケナエ。

手間 どのもんだったな。

- A ンダ アエーズワ⁽⁹⁾ テマカガッケ。
 そう あれは 手間どるもんだった。

- B ツンブサンナエナヨナエ。 (A ンー) エツニツ
 碎かれないのよね (ンー) 一日に

ゴシエ ブグラエトケ (A ンダ) ヒャグゴツツ ツボグラエトケ
 五畝歩ぐらい きり (そう) 百五十坪ぐらい きり

ツ ンブサン ナエ ケモナエ。

砕かれなかったものね。

- A アエツワ ンダー。ンダゲ ミナ (B ン) ⁽¹⁰⁾ ヨエシテ ムガス
あれは そうだ。だから みな (ん) 共同して 昔(は)
ツ ンブシタ モンダダレー。(B ンダ) ターツ ンブス
砕いた ものだよな - (そう) 塊打ち(は)

テマカガッ サゲ。

手間どる から。

- C シトリバリナンダドナエ (A ン -) ⁽¹¹⁾ コツ ツァ ラ コワクテハ。
一人ばかりなどだとね (ん -) ことさらに 疲れて な。

- A ン - ムサクテナ。 ⁽¹²⁾ (C ン -)
ん - はかどらなくてな。 (ん -)

- B ホノ アドガ アリャ コンド ンマ ンデ アノー。
その 後か あれ こんどは 馬で あの -。

- A ン - クレギ⁽¹³⁾リ
ん - 塊切り

- B ン クレギ^リ シ _x スンナ アックス タツ ンブステ ユナー
ん 塊切り(を) するの(が) あった 田潰し って いう

キカエ ハヤタ (笑) キカエテ ムガスノ キカエツアナ (A ンダー)
機械(が) 流行した 機械って 昔の 機械だよな (そう)

ゴロゴロゴロゴロド コロバシテ アラグナリャ。(A ンダー)
ごろごろ ごろごろと 転がして あるくのな。(そう)

アエツ デデガラ ラグエ ナタケゲントナエ。

あれが 出てから 楽に なったっけけどね。

- A ンダ ンダー。 マサカリデ ミナ ツ ンブサンナネケモナヤ。
そう そう -。 まさかりで みんな 砕かなければならなかったんだものな。

(C ンダ) ンー。
(そう) ンー。

C タツ ンブスマサガリテ チャントハ (A ンダー) ソロエデ
塊打ち用 まさかりって ちゃんとさ (そう) そろえて

オグケハゲ。(A ンダデレハー)
おくんだったから。(そうだったものね)

A カロクテモ アエヅ ツンブンナエッス ダモナヤ。
軽くってても あれは 砕けないし だからね。

B ツンブンナエデナエー。
砕けないものなあ。

A オモダクテモ マダ (B ン) エヅニヅ ヌシャ⁽¹⁴⁾ゲデ
重たくってても また (ん) 一日(中) 振り上げて
エランナネナダゲ(笑) コレモ (B 笑) ラグデナエ ホナーテ(笑)
居なきゃあならないから これも () 楽でない ほんとに。

アエヅヨ チェット シトナ ミッド ラグミダエダゲント
あれはね ちょっと 他人の(を) 見ていると 楽みたいだけれど
ホナーテ。^{*}
ほんとに。

C ウワツツラバリ ツンブシテ エランナエッスナ
表面ばかり(を) 砕いて(は) いられないしな

A ホンダー ナガマンデ コー ブットルクラエ
そうだ 中まで こう つき通るくらい

ツンブサンナネデナヤー。(C ンダー)
砕かねばならないものね。(そうだ)

B コンド ツンブンナエード ゴマガ⁽¹⁵⁾サレッド コンド タウェン
こんど 砕けないと ごまかされると こんどは 田植の

ドギ シッショ カゲネクテリャ。

とき(に) 代掻きが(うまく)できなくてね。

A ゴロゴロテナ

ごろごろしてな

B ナエ ゴロゴロテ (A.C ンー) タウエ スンヅラクテ
ね ごろごろして (ん) 田植(か) しにくくて

ワガンナエ ナナエー。

だめなんだよな

A ンダー ンダーゲ タツンブスジャ ホレ コー コマク

そう だから 塊打ちは ほら こう 細かく

ツンブスド イエナツナ ホレナヤ。 (C ンー) ンー。 オランダノ
碇くと 良いんだ よ な (ん) ん 俺達の

アダリナノ ホダナ ンマナノ ⁽¹⁶⁾エダ⁽¹⁶⁾ イエデナノ…… ホンテー
あたりなどで そんな 馬など 居る 家でなんか…… ほんとに

ホダナ ムラデモ エッケンカ ニゲンツカエ ナエハゲテ

そんな 地区でも 一軒か 二軒 しか ないから

オラエデナノ ホレ テーデバリ サンナネケツ。 クレキリモ
俺家でなど ほら 手でばかり しなければならなかったな 塊切りも

テーダケツ (B ンダー) ミナ。

手だったな (そうだ) ⁽¹⁷⁾みな

B タエデー アエンダケモナエ。 (A ンダー)

たいていは あれだったものね。 (そう)

A クリキリデバ マダ ホレ クフ^xァ^x サンボ⁽¹⁸⁾ングワ ホッ チャド
塊切りといえば また ほら 鋏^x 三本鋏(を) そっちにと

コツチャ ホレ チェツチェ チェツチェド (B ンダナ) コンド

こっちに ほら ちよくちよく ちよくちよくと (そうだね) こんど

(19)
スカエラン-----。
持ちかえ-----。

B アエツ ⁽²⁰⁾ コー コー ニンドシテ マダ スング コー トカエデ
あれは こう こう 二度やって また すぐ こう 持ちかえて

(A ホーダ) コー サンナネナダモナエ。 (A ホダー C 笑)
(そうだ) こう しなければならないんだものね。 (そうだ。)

A アエツ ⁽²¹⁾ コンド アゴノ ツリヨー ⁽²²⁾ ハラダ'ンダド (笑) (B 笑)
あれは こんど 歩(中)の 運び方が でたらめだと

コンド (笑) アス キッテナヤ。
こんど 足(を) 切ってな。

B アッチャ ⁽²³⁾ コッチャ ナテガー。 (笑)
あべ こべ に なってか。

A ホーダ ⁽²⁴⁾ ホッチャ コッチャエ ナッド スンヅラエダレ
そうだ あべ こべに なんと しにくいものね

アエツナヤ。ンダーモ (C 笑) アダナ マネシテ ムガス
あれなあ。 そうだね () あんな ことをして 昔は

シタナヅ'ダヅ'ナヤー。ホナーテ (C ナヤー) サンボン'グワデ'
したもんだよなあ。ほんとに (なあ) 三本鉋で

ナエデカンデオ クレギリ マダ。 (C ン) アッゲナ クレギリナ
何でもかんでも 塊切りも また。 () あんな 塊切りなんか

ホレ タエシタ ホダエ テマ カガラネゲド。
ほら たいした そんなに手間 どのないけど。

B ンダ アエツ ダド バエー スルエケハゲナ。
そうだ あれだ'と (塊打ちの) 倍は できたからな

A スルエケハゲナヤ。 *
できたからな。

B ナエ^ンデ^カンデ^モ エネナノ イエサ ショッ^テンダ^ケハゲ^ナエヤ。
何はともあれ 稲など(は) 家に 背負って(来て)だったからな。

(A ンダ^ー ミナ ショッ^テ C ンダ^ン) ジェン^ーブ^ナエ。
(そう 全部 背負って そう) 全部 ね

A ムガスナヤ。

昔は な

C ナン^ーギ^ンシ^テ (A ン^ー) ウエマ^ンデ^ン アケ^デナア。
難儀して (ん^ー) 上まで 積みあげてな。

A ホシ^テ マロガネ^ンデ^ナバリ オラ イエ^ー エダ^ン ドギ^ン
そして 束ねないでばかり 俺(が) 実家に いた とき(は)

マロガネ^ンデ^ナバリ ショッ^タハゲ^テヨー。ヤッ^パリ ヨーク^ン
束ねないでばかり 背負ったからよ。 やっ^ぱり よく

ホンデ^モ ワリアエ^ニナヤ ザグザグ^テ ヤネケ^ヅ アレ^ン
それでも 割合いにね ざくざく しなかった よ

ホンデ^モナヤ。 ホダナ マロテル テマ^ンデ^ン ショッ^タ ホ
それでもねえ。 そんな 束ねている 手間で 背負った 方(が)

イエ^ーナテハ オラエノ オドッ^アダ^ン (B ン) ホシ^テー……。
良い なんてさ 俺の家の 父親たちは (ン) そして ……。

B ツッカエ ドゴン^ダド ンダ^ケモナエ。^{*}

近い(田の) ところだと そうだったものね。

オ[×] オレー ショッ^タ ゴド ナエケ^デレ コーチャ^ンサ キタ⁽²⁹⁾
俺(は) 背負った ことが なかったものな 興ちゃんの家に 来た

ドギ(笑) (A 笑 ンダ^ゴデヤー) ヤシェ^ンマサ ホノ⁽³⁰⁾
とき (そうだろうよ) 背負い梯子に その⁽³¹⁾

ナラビガ^ダモ⁽³²⁾ ワガン^ナエナ^ッダ^ナエ。
並べ方も わからなかったんだよな。

C ハエツ ジョーヅエ ナテ。 (Bン) マロガネンデ
それが 上手に なって。 (ん) 束ねないで

ヨンジューグラエ ショウケハゲナー。*

四十(束) ぐらい 背負うんだったからな。

タン⁽³³⁾ートンダモノナエ タント ショウモノ。

たくさんだ"ものね たくさん背負うもの。

A ワングリーント ウエサ コー ヨーハンヅ ナラネド アエツ⁽³⁴⁾
湾曲して 上に こう 両端(か) ならないと あれは

ンマグ" ナエハゲナエ。

うまく ないからねえ。

B ンマグ" ナエモナエ。

うまく ないものね。

A ハエーツ オランダモ イエー エダ" ドギ" マロガネデ"
それよ 俺たちも 実家(に) いた とき 束ねないで

ショッタヅー。 ホダーナ ニーツグリ ハダンダド ダメダ。
背負ったなー。 そんな 荷作り(か) 下手だ"と だめだ"。

ヅルヅル シッパ⁽³⁵⁾ラテ コンド アンゴ ツランナグナテ(笑)
ずるずる 引っぱる状態になって こんど 足(を) 運ばなくなって

(C 笑)

B ヨッポンド アノ カケン アルモナエ。

よっぽど" あの 加減(か) あるものね。

A ンダ" ヨッポンド アエツ ニノ ツグリヨー アンナヨー。

そう よっぽど" あれは 荷の 作りよう(か) あるのよ。

B ヤシェンマ ヤシェンマ ンデダド ヨッポンド イエーゲント

背負い様子 でだと よっぽど" 良いけれど"

ニナ ンデ ス ングエ スンナダド (A ンダ) アエーヅ カゲン
荷縄で 直接に するんだと (そう) あれは 加減が

アンナヨナエ。 (A ンダー)
あるのよね (そう)

C ア ンブラヅンツァ⁽³⁶⁾ ジョ ンダケヅナヤ。
油屋の爺さんは 上手だったよな。

B ンダー ツンツァダラ ンダー。 (A ンー)
そう 爺さんなら そうだ。 (んー)

C スコースツツダゲント。
少し ずつ だけど

A スメデ⁽³⁷⁾ナヤ (C ン) スメデ コー ワングリーント コー
締めてな (ん) 締めて こう 湾曲させて こう

ナルヨーニ サンナネハゲ。(C 笑) エヅエヅ シェナガ ンデバリ
なるように しなければならぬから。() いちいち 背中で ばかり

ショッテ サンナネケドレ ムガス ヨーグ ホンテ。 ムガスノ
背負って しなければならなかつたものね 昔は よく ほんとに。 昔の

シトナテ カラ ンダ ツツエダヅナヤ ホンデモ。
人は 体(か) 続いたよなあ それでも

B ンダ ホレタゲ ジョーブン…… ホーユー⁽³⁸⁾ ウンドーバリ
そう それだけ 丈夫 そういう 運動ばかり

シテッサゲ ジョーブンナダベナエー。
してるから 丈夫 なんだろうな。

A ンダナ ンー。^{*} ンー ンダ。 コヤデ ホレ コンド エネ
そうね んー。 んー そう。 納屋で ほら こんど 稲(を)

コエデナヤ。ホシテ コンド アメー フラーネド ホレ ソドデ
扱いてな。そして こんど 雨(か) 降らないと ほら 屋外で

コッケント ン アメ フッド コヤノ ナガンデ (C ンダー) 扱くけれど ン 雨が 降ると 納屋の 中で (そうだ)

コガンナネハゲ (C ンー) ハエツ アメ フッドギ スマツスンナー 扱かねばならないから (ンー) それは 雨(か) 降るとき 処理するのを

ハエツ ホレ カグゴシテ エネ ヘッデ オグナツア ン コヤン それを ほら 覚悟して 稲(を) 入れて 置くんたよな 納屋の ナガサハ。

中にさ。

C ハエツ コヤ ナエ シト ンダ イエーサ アノ ミナシテ (39) それを 納屋(か) ない 人たち(は) 家の中に あの 又なして (A ンダ) タケツ ズナエ。(A ヘレツケダレナヤ) ボーボード (40) (そう) だったよね。(入れたもんだよね) ほうほうと

ヤシェデ。

させて。

A ンダド アメ フッドギ ホレ スゴド ナエワゲダ ホノ エネ だと 雨(か) 降るとき(は) ほら 仕事(か) ないわけだ その 稲(を) ヘッデ オガネド。(C ンダ) ンダゲ* アメフリンドギ ハエツ 入れて 置かないと。(そう) だから 雨降りのときに) それ(を) コンド ナガンナ ハエツタナ コンド コガンナネツアナヤ。 こんど 屋内の 入れてあるのを こんど 扱かねばならないのよ。

(C ン) ホーシテ コンド エネ コギアゲッド コンド (ン) そうして こんど(は) 稲(を) 扱き 終わると こんどは

モミヨス ンダドレ ムガスナヤ。(C ンダー) モミー ヨシテ 粃打ち だものね 昔はな。(そう) 粃(を) 打って

ホーシテ シェンニ アダナ ノゲス⁽⁴¹⁾ネナバリ ウェツケモナヤ そうして 昔は あんな 芒 稲 などばかり 植えるんだったものな

ホシデー。

そして

B ンダーナ コメ デッケハゲダ ンナエ ガヤー。

そうだな 米(か) 多くとれたからで ないかなあ。

A ンダバ アレー ノゲスネ ハンブングラエ オラエノ イエーデナ
そうだろう あれ 芒(か) 稲(を) (作付の) 半分ぐらい 俺の 実家などでは

ウェッ ケハゲダー。(C ンー) ンダド ホレ ハエツ⁽⁴²⁾ ヨスエ
植えるんだったからさ。(ンー) そうすると ほら それを 打つのが

タエヘンデ ノゲ ミナ モゲルクラエ ヨサンナネドレ コンド。
たいへんで 芒(か) 全部 もげるほど 打たねばならないものな こんど。

C モ モゲッ ケツナエ ホンデモ。

× もげるもんだったね それでも。

A ンダ モゲッ ケ ホンデモ ンー。 ホンデモ アダナ
そう もげるもんだった それでも ンー。 それでも あんな

⁽⁴³⁾
アエコグナテ ユナダド ノゲー……。

愛国なんて いうのだと 芒(か)

C ンダ アエツー アエツー ンダケナー。

そう あれは あれは そうだったな。

A ミン ツカエケハゲ ホダンデ ナエゲノ アリヤー シギシマドガ⁽⁴⁴⁾
短かったから そんなで ないけど あれは 敷島とか

⁽⁴⁵⁾
トーゴーナテ ユー エネダド ノゲ フットクテ
東郷なんて いう 稲だと 芒(か) 太くって

ナンガクテナヤー (C ン) ナガナガ モゲネクテ。
長くってなあ (ン) なかなか もげなくて。

C エラー⁽⁴⁶⁾ ポエ オモエバリ シタツアナヤー。 (A ンー)
ちくちくする 思いばかり したもんだなあ。 (ンー)

- B オレ アエコグテ ユナダ⁽⁴⁷⁾ド オボエッダ⁽⁴⁷⁾ナー。(C⁽⁴⁷⁾ンー) シマダ
俺は 愛国⁽⁴⁷⁾って いうのだったら 覚えているなあ (C⁽⁴⁷⁾ンー) 旨く
ナエ コメダケナヤ アエツ。(C⁽⁴⁷⁾ンマダ ナエナ)
ない 米だったなあ あれは。(旨く ないの)
- A シンダ⁽⁴⁸⁾ アエツ シンマダ ナエゲド (B⁽⁴⁸⁾ン) コグドリアルテ シン⁽⁴⁸⁾ト
そう あれは 旨くは ないけど (B⁽⁴⁸⁾ン) 収穫量があるって たくさん
ウェンナダケデ。(C⁽⁴⁸⁾ンダー)
植えるんだったな。(C⁽⁴⁸⁾ンダー)
- B モカエネ⁽⁴⁹⁾ケモ。
倒れなかったもの。
- A シンダー モカエネクテ カラ カッダクテ ホシテ ホレ ノゲ
そう 倒れなくて 籾殻(か)堅くって そして ほら 芒(か)
ミンツカエケモ アエツダド。
短かったもの あれだど。
- B シンダ スコス アガエミ⁽⁵⁰⁾ダエナ。
そう 少し 赤い みたいな
- A アガクテナヤ。シンダー。ン⁽⁵⁰⁾。
赤くってなあ。 そう。ン⁽⁵⁰⁾。
- C アエコグ⁽⁵¹⁾ダラ シンマ⁽⁵¹⁾グ ナエケモナヤ。(B⁽⁵¹⁾ンマッ⁽⁵¹⁾グ ナエナヨ)
愛国⁽⁵¹⁾ は 旨く なかったものな。(旨く ないのよ)
- A シンマダ ナエ。ホンデモ タント デルッテ ミンナ
旨くなかった。 それでも たくさん できるって みんな
ウェンナダケダレ アエツ。
植えるのだったよなあ あれを
- B シンデモ ムガスナノ ホレ ネング⁽⁵²⁾ナテ シンマエノ シンマダ
でも 昔など ほら 年貢なんか 旨いとか 旨く

ナエノテ (A ホンダ⁽⁵²⁾ ホンダ) カマネケハゲ イエーナダケツダナ
ないとかは (そう そう) かまわなかったから 良いんだったよな

(C ンダー) ナエ。 エマミダ⁽⁵³⁾エヨー……。
(そうた) ねえ 今 みたいによ……。

A ンダ コメツ⁽⁵²⁾ラサエ イエゲバナヤ (B ンー) ホンデ ゴーカグ
そう 米の外見さえ 良ければな (ん) それで 合格に
ナタンダゲ ホレ (B ンー) ハエツ ホレー アノー アエコグノ
なったんだから ほら (ん) それか ほら あの 愛国の

マエヨ⁽⁵³⁾ シギシマドガ トーゴーナテ ユナダド ノゲ
前よ 敷島とか 東郷なんて いうのだと 芒か

フットクテ オマエ ムギミダエダケツ (C ンー) ハエツンダラ
太くって お前 麦みたいだったな (ん) それだったら

ノゲ フットクテ ナンカクテ。 (B ンー) ホダナ ヨレネクテ⁽⁵⁴⁾
芒か 太くって 長くって。 (んー) なんとも もげなくて

ヨレネクテナレー。 ナンギ サンナネケ アエツンダド。

もげなくってなあ。 難儀⁽⁵⁵⁾ しなければならなかった あれだ⁽⁵⁶⁾と。

C アリヤ トヨクニ⁽⁵⁵⁾ダノ カメノオ⁽⁵⁵⁾ンダノ (A ンダ) テユナ アエツ
あれ 豊国だの 亀の尾だの (そう) っていうの あれは

ンマエケツナエ。(A ンダー)
旨かったよねえ。(そう)

B ン フス フスワ⁽⁵⁶⁾ラーガレ。
ん 節蕨⁽⁵⁶⁾かね。

C ン フスワラナンナ。
ん 節蕨になるの。

A ンー アエツンダド ボーヅ⁽⁵⁷⁾ンダハゲナー (C ンー) ホダエ
んー あいつだと 坊主だからなあ (んー) そんなに

アレ^ンダ^テ ホレ。ホンデ^モ ムガス シェンバンデナバリ
あれだって ほら。それでも 昔は 千歯扱きなどではばかり
コエ⁽⁵⁸⁾ダ^ゲ カゲ⁽⁵⁹⁾マ^ダバリ アッテ ホレ エ ホダナヨ……。
扱いたから 穂つき粃 ばかり あって ほら え そんなでよ……。

B ⁽⁶⁰⁾
スグロヨス タエヘンダ^ケッダナナエ。

選り残り打ち^(が)たいへんだったよな

A ン ヨサネデ⁽⁶¹⁾ トサンナ^エケダレ。 (C ンダ) ナエドカンデモ
ん 打たないでは 篩にかけられなかったもんだ。 (そう) ともかくも

ヨシテガラ トスナダ^ケダレ。 *

打ってから 篩にかけるんだった。

B ホシテ ⁽⁶²⁾ボンゴ^ナステ⁽⁶³⁾ コレ サンナネナヨナエ。(A ホダ) ホシテ
そして 唐^ノ竿^デで これを しなければならぬのよね (そう) そして

コンド ホノ カスバ⁽⁶⁴⁾ コンド マダ トンバシテナエ。(A ンダ)
こんど その かすを こんど また 飛ばしてさ (そう)

カジエ アッド⁽⁶⁵⁾ ホレ コー (笑) トンバシテヨ。

風^(か) あると ほら こう 飛ばしてな。

A ンダ ハエツバ マダ ヨサンナネドレナヤ。 ボーゴ^ナステ
そう それを また 打たねばならないものね。 ボーゴ^ナス といって

ドゴ⁽⁶⁶⁾ダ^テ コー ワングリント シタナ (B ンダ) コー ホレ
とこの家にも こう 湾 曲 したのが (そう) こう ほら

アッ^ケツ^ダナ。(B ンー) ンー。 ハエツ^デ コー サンニンモ
あったものよ。(ん) ン それで こう 三人も

ヨッ^タリ^モシ^テ コシ^テ タダガンナネツ^ンダ^ナ (B ンダ) ホレ
四人もして こうして 叩かねばならないんだよ (そう) ほら

ナヤ ンー。

な ンー。

C ヨッタリグラエシテダド⁽⁶⁷⁾ ハガ エンケント シトリシテナンダラ
四人 ぐらいで なら はか(が)行くけれど 一人で など

ナガーナガ。

なかなか

A シトリシテナンダラ ヨレルモンデナエ。

一人 で なら もげるもんでない

B ヨレネクテナヤ。 (C ンー)
もげなくってな (んー)

A ホダゲ ムガスジャ ホレ カナエジュー ミナ ホレ アデ
だから 昔は ほら 家内中 みんな ほら あてに

サッデ デハタ モノッダナ トモデサナヤ。(C ンダナー) ンー。
されて 出た もんだよな 野良になあ (そうだな) んー

ミンナシテ サンナネナダドレー ンー。 *

みんなで しなければならぬんだもの ン。

注

- (1) 言いたくなる という ニュアンス
- (2) 農繁期や野良稼ぎの時をさしている。
- (3) チョスは「いじる」意であるが、ここでは仕事のこと。
- (4) 手の平を指して
- (5) ツカラ(力)の強めた表現。
- (6) シネ(干ない、乾かない)
- (7) ツブス(砕く)
- (8) 荒起こしした田の土塊を、塊割りなどでたたいて細かに砕くこと。
- (9) アエツワ(あれは)の強調した表現。
- (10) ユイ。各家相互間の互助的な労働力の交換による共同労働。
- (11) コワイは「疲れた状態にある」意味の形容詞。
- (12) ムサイは、①減らない ②減りにくい ③消滅しにくい 意味の形容詞。反対語は オケナイ。
- (13) 塊打ちで碎けなかったところを、さらに細かく鋤などで切り割る。
- (14) ノシャゲテ(伸ばし上げて)が原形。
- (15) 塊打ちをいいかげんにして、ごまかされると。
- (16) エダの夕は、継続や存続をあらわす。
- (17) アエンはアレと同じだが、やや強調して示すニュアンス。
ここでは「手による労働」を指している。
- (18) 田畑の荒起こしに使う鋤で、身が三本にわかれている。
- (19) スカエル ①とりかえる ②すりかえる ③持ちかえる。
- (20) 鋤でさくる手まねをして。
- (21) アエゴとも。歩中のこと。ここでは「足の運び方」アゴツリ。
- (22) ハラダクサイとも。ハラダは①嘘 ②でたらめ ③まずい の意。
- (23) 足の運びと三本鋤の持ちかえが、正しい方向にならないこと。
- (24) (23)に同じ。
- (25) ジェンブ(全部)の強めた表現。
- (26) 雪国のために、稲はコヤと呼ばれる納屋兼作業場に収納するのであった。土間床が普通で、かなり大きな建物を作っていた。

- その農舎の上の方まで稲を積み上げることを行っている。
- (27) 稲の七株ぐらいを刈り取って稲束にし、それを六つ（六把）ぐらい一まとめにした大きな稲束にするのが常で、それを一束といった。そこでは、「大きな束にしないで」
- (28) 束ねないにもかかわらず、背負っても稲はくずれなかったこと。
- (29) 下男奉公先の家に来た年は。
- (30) やせ馬。やせた馬が背負うほどの沢山の荷物を背負えるという意。
- (31) 稲の。
- (32) ナラベガダモのねじれ。
- (33) タント（たくさん）を強めた表現。
- (34) 荷作りを指す。
- (35) 自然に「引っぱるような状態になって」という意。
- (36) 話し手Cの分家の老人。油売り行商であった。
- (37) 荷縄で荷物をきりっと締めて。
- (38) 農作業に適する
- (39) 稲を運び入れて積み重ねて
- (40) ボンボントとも。①ごみやちりの舞い上がる形容。②炎が盛んな形容。③草などが勢いよく繁茂する形容。
- (41) 芒（のぎ。稲・麦などの果実の外殻皮の先にある堅い毛）の長い稲。
- (42) 芒の長い稲
- (43) 稲の品種名。
- (44) 〃
- (45) 〃
- (46) 粃殻や芒や藁屑などが下着にささって、ちくちくと肌を刺す感じ。イラッポイが原形。イラは、いらいらする・いら草・いらだたしい・いら立つ・いららぐなどの「いら（苛）」と同じ語源であろう。
- (47) 継続を表わす。
- (48) 石取り であろうか 穀取り であろうか
- (49) 稲が倒伏しない性質であった。
- (50)(51) シマクナイ（旨くない）の強めた表現。シマッグがより強い。

- (52) コメヅラ（米面）。米の外観、見ばえ
- (53) 愛国という品種が作られようになる以前。
- (54) ヨレネ（選れない）。唐竿でたたいても籾粒が藁しべからばらばらに取れない。籾だけをとり出すための作業だったから「選る」といったものか。
- (55) 稲の品種。
- (56) 藁丈が高くて、草履の材料（フス）をとるに適した稲の品種。米は旨いが、収穫量が少なかった。
- (57) ボーツ（坊主）。芒がない品種の総称
- (58) コエダゲ（扱いたから）コイタとハケの融音。
- (59) カゲマダ 藁しべから籾粒がばらばらに散らないで、籾がくっついたまま穂ごとむしりとられたもの。篩（籾通し）にかけても、篩の中に残り、さればとって、捨てるわけにもいかず、再び叩かなければならなかった。欠け又 であろうか。
- (60) スグロ 藁の外皮などとカゲマダとが混じり合ったもの。スグル（えりすぎる）→スグリ→スグロ か。
- (61) トサンナエ 篩（籾通し）にかけられない。
- (62) ボンゴナス。唐竿、連枷、麦打ち棒のこと。こなし棒が原形か。「こなす」は、穀物の穂から果粒（穀粒）を切りはなす。脱穀すること。
- (63) 唐竿で打つまねをして
- (64) 風でゴミやわらを飛ばして、カゲマダを選別する。
- (65) 飛ばすときのしぐさをして
- (66) どこ（の家）にだって
- (67) ハガエグ ①仕事が順調に進む ②結果がどんどん進行する。

11 旅行

話し手

A 佐直 きえ 女 明治36年生まれ

B 高梨八太郎 男 大正 3年生まれ

B ツエンバン ホツツコツツサ コンド サンガツアダリンド
ずいぶん そっちこっちに こんど 三月あたりになると
アラグエ⁽¹⁾ ナンナダ⁽¹⁾ インデモナエ。(A ンダ) ニガツ サンガツダド
行くように なるんだ それでもねえ。(そう) 二月 三月だと
エツンバン イエーテ⁽²⁾ ユナダモナエ。(A ンダツダー) ジキドシテ。
一番 良いって いうんだよね。(なるほど) 時期としては。
(A ンー) ヒロツサダ⁽³⁾ テンド⁽⁴⁾ テンドナテ ホツカエドーサ
(んー) 弘さん(は) ××× 天童じゃない 北海道に
エングテ エダ⁽³⁾ インナエガヤ。(A ホンダベチャ アレナー 笑)
行くなって(語)ている じゃないかな。(そうだろうよ あれな)
(笑) ナナカツダナテ。(A ンー)
七月だって。(んー)

A ホツカエドーワ アタガエ ドギ インナエド ワガンナエベナ
北海道は 暖い 時で ないと だめだろうな
ヤッパリ。(B ンー) ホツカエドーワ インダド インデモー
やっぱり。(んー) 北海道は すると でも
メーサエニ ミルダ⁽⁵⁾ラ トーガ カガルテ ユーナダンデォナ
明細に 見るならば 十日 かかるって いうんだ でもな

(B ン一) ホッカエドモ。
(ン一) 北海道も。

B コツツサ⁽⁶⁾ エカネ ゴンタラー エンカーナナデ⁽⁷⁾ エダ⁽⁷⁾ンダケゲント。
こっちに 行かない ならば 行こうかななんて いたんだったけど。

A (笑) ンダ ヤッパリ アノ ワガエウツ エッテ キタ ホ
そう やっぱり あの 若いうち(に) 行って 来た 方(か)
イエーナダ。トスエングド ホダナ クタービッデ⁽⁸⁾ ツカッデ
いいんだ。 年(か) 行くと そんな くたびれて 疲れて
アラガンナエモ ホダナハ。(笑) オダクサンアダリア チョード
歩けないもの そんな 。 お宅さんあたりが ちょうど
イエアンバエナ トスゴロダ。アラギアンバエダッス。
いい具合な 年頃だ。 行くには絶好です。

B マンダ ハヤエベ^{~~~~~}ナー。(笑)
まだ 早いだろうや。

A ハヤ⁽⁹⁾グナ ナエベツハ ホダナ エマミナ ワガエ シトバリ
早くなんか ないだろうや。そんな 今(いま)はみな 若い 人ばかり
タント アラグデ トショリ イエガ。(笑)
多勢 行くじゃないか 年寄り よりも。

B ツエブン アラグエ ナタンダ ホンデモナエー。
ずいぶん 行くように なったんだ それでもねえ。

A アラグー。
行くねえ。

B ワッガエ⁽¹⁰⁾クテデ。
若くても。

A ンダーッス。
そうです。

- B コツツ ヤヅシューナノー トスエッタナバリ ミデンダゲントモ
こっち 谷地の人など 年いった人ばかり みたいだけど
- サンバダ⁽¹²⁾シューナ イェアンバエ ワガエナバリミダエダナー。
沢畑の人など かなり 若い人ばかりみたいだな。
- A ンダベース エマ ワッガエ シトバンダ アラグナ ミナー
そうでしょう 今は 若い 人ばかりだ 行くのは みな
ンー。ヤッパリ ゴジューダエ ログジューダエダド アレダゲンノ
んー。やっぱり 五十代 六十代 だと あれだけど
- オランダ ミダエ スヅジュノ ウェー ナッドハ ホダナハ (笑)
俺なんか みたいに 七十の 上に になると そんな
- オモヤミデ⁽¹³⁾ トッガエ ドサナ アラガンナエモナヤ。
心配で 遠い 所になど 行けないもの ね。
- B ンダゲ ホユナ ナナジューダエダラ ナナジューダエクラエナバーリ
だから そういう 七十代なら 七十代 ぐらいの人ばかりの
- コー トスンナバ コー (笑) ズカン カゲデ シェデ アラグド
こう 年の人を こう 時間(を) かけて 連れて 行くと
- イエーナダベナエー ホントワ。(A 笑) ハエツ ワッガエナド
いいのだろう ね 本当は。 () それが 若いのと
- トショリッタナ⁽¹⁴⁾ マンザッサゲ ホレ (A 笑) タエヘンナヅアナエ
年寄った人(とが) 混じるから ほれ () たいへんなんだよな
- トスー アエツナ⁽¹⁵⁾ シトナエ。 ホノ トス トスニ アエツ
年が あれな 人はね。 その 年令別に あれ(を)
- スッド ホダンデ ナエナ ンナエガヤ アエツァ。
すると そんなで ないの でないかね あれは
- A ンデモ オランダミデナ ナテガラハー イェノ シトモ
でも 俺達みたいに なってからは 家の 人も

ヤッパリハ ホダエハ トッガエ ドサナノ ダシテ
やっぱり そんなに 遠い 所などに 出して

ヤッダガラネハゲナ ンデモナ ヤッパリ。

やりたがらないからな でもな やっぱり。

B ンダゲ ホユー (A ンー) トスダエノ シトヨ ナナジューダラ
だから そういう (ん) 年代の 人 さ セ十なら

ナナジューダエノ シト エグド (A 笑) ミンナ ホユナダモノ⁽¹⁶⁾
七十代の 人(が) 行くと () 全員が そういうの(だ)もの

イエーナ ンナエガヤー。 (A 笑) *
いいので ないかな。

A ホンデモ ツブンナガラ ンデモ コレハ ン スヅジューノ
それでも 自分ながら でも これは ン セ十の

ウエナ ナッド アンマリ トッガエ ドサナ ヤッパリー
上などに なると あんまり 遠い 所になど やっぱり

エングダグ ナエミデダモナヤー。 ホンテ ズンブント タエデ⁽¹⁷⁾
行きたく ないみたい(だ)ものな。 本当に 自分と たいして

ツガワネミデナ シト ホリヤー ホッツデ スンダ コッツデ
違(わ)ないみたい(な) 人(が) ほら そっちで 死(し)んだ こっちで

スンダナテバリ ユーハゲテ。 *

死(し)んだなんて(は)かり いう(か)ら。

注

- (1) 旅行（ここでは観光旅行）に行くように。方言のアルクは共通語の歩くよりも、意味範囲が広いようである。
- (2) 観光旅行をするには、もっとも適している ということ。
- (3) 話し手Aの甥で、話し手Bと同じ職場の人。
- (4) 将棋のまち天童市（温泉地）のこと。
- (5) 見るつもりならば。古い言い方。普通は、「ミルキダラ」という。
- (6) 九州一周旅行
- (7) 北海道に行こうかな ということ。
- (8) クタビッデ（くたびれて）を強調した表現。
- (9) ハヤグナ（早くなにか）を強調した表現。
- (10) 若くっていても。「若いくせに」というニュアンスがある。
- (11) 地名。河北町谷地。録音地。
- (12) 地名。河北町谷地の小字名。録音地の西方1.5 Km。
- (13) 思い病み が原形。
- (14) トショツタナ のねじれ。
- (15) 年老いた
- (16) 老人だもの
- (17) 大抵

12 植樹と日照権

話し手

- A 佐直 きえ 女 明治36年生まれ
 B 高梨八太郎 男 大正 3年生まれ
 C 佐直まさゑ 女 明治34年生まれ

A イエアンバエ⁽¹⁾ オッケナダモ ンデモ マツヌギッタテ ホダナハ
 ななり 大きいのももの でも 松の木といつても そんな
 ンダナ コノ⁽²⁾ タガサイエガナ ヅット タツガエナダ ンデモ
 そうだな この 高さよりも ずっと 高いんだ でも
 ンー。(B ア マツヌギガ) ンー マツヌギ ナニマツドガテ
 ンー。(あ 松の木か) ンー 松の木(は) 何とか松とか言って
 チェット ン カワタ マツドガテ ユナダケツ。ンダゲ
 ちょっと ン 変わった 松だとかって 言うんだった。だから
 エダマスエドデ⁽³⁾ オレ ウエデ ケダモナナテ エダケハゲヨ。^{*}
 惜しいと思って 俺(が) 植えて やったものななんて いちけからよ。
 コノ トスエ ナテ ハツジュバリナテ ンー ヨー アダエ
 この 年に なって 八十にもなって ン よ あんなに
 ワツガエ⁽⁴⁾ モノニ ゴシャガッデ ナテ。(笑)(B 笑) オモシヤグ
 若い 者に 叱られて なんて。 シャくに
 ナクテ⁽⁵⁾ カダツケゲヨ。(C クーダモナエヤ) ンー
 さわって (そう) 語ってたからよ。(九 だものなあ) ン

ンダデ クーダ。(Cン) カゾエドス ナナジュークーダモ。
そう 九だ。(ん) 数え年(の) 七十九 だもの。

C ナナジュークーダドレハー。

七十九 だものな

A オラエノ ツンツァ⁽⁷⁾ダド オナエドスダハゲ ホレナ。(Cンー)
俺家の 爺さんなんかと 同い年 だから ほら (ん)

B ホシテ ワレノ ヤスギサ ウェダナダラ ゴシャガレツコドモ
そして 自分の 屋敷に 植えたのなら 叱られることも

ナエケベナヤ。

なかったろうがなあ。

A ンダケベゲントモ アレアド イエダ カエデ⁽⁸⁾ オガッド
そうだろうけど あれだって 枝(を) 払って 成長すると

オラエノ ハダゲサ シカゲ ナルテダド (C笑) ンダゲテ
俺家の 畑 に 日陰に なるってだって (ん) だから

ゴヅエデ⁽⁹⁾ モラワンナネテ ホレ ヤッダテダー。ホダナ ユギノ
根こぎにして 貰わなければならないって ほら 言われたっていうんだ。「そんな 雪の

ウエデ⁽⁹⁾ コンヅエデ⁽⁹⁾ モラワンナネナテ ユタテ エマナ
上だから『根こぎにして 貰わなければならない』って 言たって『今なんか

コンヅガンナエハゲテ (笑) ユギ ナグナテガラダテ オレ
根こぎにできないから 雪(か) なくなってからだ』って 俺(は)

ユタナテ (笑) (C笑) エダケ。(笑) (C笑)
言た」なんて (ん) (言て) いたっけ。

B ホダナンダゴンタラ タゲヤニ⁽¹⁰⁾ ゴシャガレンナヨー。 ワレノ⁽¹¹⁾
そんな(言い分)だったら 竹谷に 叱られる 論法だよ。 「お前の

イエー タッガエハゲ シカンゲ ナッサゲ (笑) ヒックグ
家(か) 高いので 日陰に なるから 低く

シテケロナテ ヤレルヨーナ モンダベチャエナエ。(笑)
してくれ」なんて 言われるような もんだろう やな。

A ンダベナヤ。アソゴ ダエブ シカ ンゲ ナテッダレ ナヤッス。
そうだろうな。あそこ だいぶ 日陰に なってるじゃないかね。

B ダエブ シカゲ ナテルナ ワガンナエ⁽¹²⁾ モンダモナヤ (A ンーダ)
だいぶ 日陰に なってるの(か) わからない もんだもなあ (そうだ)

A フミヨッサエンナ⁽¹³⁾ モモヌギダテ アレ コッツノ ホ シカゲノ
文義さん家の 桃の木だって あれ こっちの 方 日陰の
ホ ナエダガ シェー ワレ (B ワガンナエ⁽¹⁴⁾) ミダエダダレ
方(は)なんだか 勢が 悪い (だめだ) みたいだものね
オカラネクテ。
大きくならなくて。

B オラエンナ デハリノ⁽¹⁵⁾ ハダゲモ ンダシモ (A ンー)
俺家の 村はずれの 畑も そうだもの (んー)
ブンサクサエデ⁽¹⁶⁾ クファ ツーット ウェデ オグハゲナレ。
文作さんの家で 桑(を) ずうっと 植えて 置くからね。
(A ンー) ヤッパリ エッケンドーリ⁽¹⁷⁾ プラエ ナンーダ⁽¹⁸⁾ テ
(んー) やっぱり 一間(1.8m) 巾ぐらい(は) 何を植えてって
ワガンナエナヨ。
だめなのさ。

A ンダベー ヤッパリ アエツ (B ワガンナエ シカゲン ドゴ)
そうだろう やっぱり あれは (だめだ 日陰の 所(は))
シカゲ ナルバリンナグ⁽¹⁹⁾ ツー スウハゲダモナヤ。(B ンダナー)
日陰(に) なるばかりでなく 地力(を) 吸うからだものね (そうだね)
ンー。 オカテガラ ホレ ホリオゴスエ タエヘンダ ンー
んー。 「大きくなってから ほら 堀り起こすのに 大変だ」 んー

ハゲテ ホレ アノ ハヤグ ユテ モラテ
から ほら あの 早く 言って 貰って

イエガッ タヅダゲドヨナテ (B ンー) ツンツァ エダケナ。(笑)*
良かったんだけどよ」なんて (んー) 爺さん(か) (言っていた) けな。

C ホゴ⁽²¹⁾ノ アレノ ミサチャエンデ⁽²²⁾ アノ クファ⁽²³⁾ (A ンー)
そこの あれの 美佐ちゃん家で あの 桑(か) (んー)

オラエノ ハダゲノ ンダナー エッケンハングラエマデ コー
俺家の 畑の そうだな 一間半(2.7m)ぐらいまで こう

エンダ ノビデ クンナダケデー。(A 笑) キッ^{x x}
枝(か) 伸びて くるんだったものね。() 切っ

タオシタモノエハ。

倒したものな

A ンダガハッス。ン ミナ キッタガハッス。(C キッタハ) モドガラ
そうですか。ん みな 切ったんですか。(切っちゃった) (根)本から

(C ン モドガラ) ホーガレ (C ン) ンー。
(ん (根)本から) そうかな (ん) んー

B アノ クファ ヌギガ。(C ンー) ンー。
あの 桑 の木 か。(んー) んー

A ンデ⁽²⁴⁾ イエー
そりゃ 良い

B アソゴ ロソーダケガレ。
あの木は 魯桑だったけ。

C ンダー ロソー。 マエネン オラエデ カッテダンダゲドナヤ。
そう 魯桑だ。毎年 俺の家で 買ってたんだけどなあ。

(A ンー)*
(んー)

注

- (1) いい塩梅にが原義。ここでは、かなりの意。
- (2) 天井をさして
- (3) 痛ましい(心が痛む状態)が原形。
- (4) ワガエ(若い)を強めた表現。老人の北隣に住んでいる工藤某、四十六歳の男をさしている。屋敷の境に近く松を植えて、工藤氏にしりをもちこまれたことをいっている。
- (5) おもしろくなくって
- (6) 年令を言うときに、一位数だけで言う習慣がある。八十歳などの場合は、チョードと言う。
- (7) 夫のこと
- (8) 掻き取って高く伸ばす
- (9) 根ごと引き抜く
- (10) 竹谷氏。工藤某は、竹谷氏の南側に二階建ての大きな家を屋敷ぎりぎりに建てている。そのため竹谷氏の畑は終日日陰になって、迷惑をこうむっている。
- (11) 工藤某をさす
- (12) 自分のことは わからないものだ という気持ち
- (14) ワガンナエ ①分からない ②だめだ ③いけない
- (13) 工藤某の家の日陰になっている桃畑の持主の名
- (15) 出張り。町・村 部落などのはずれ。出張りの対語はスグ(宿)。
- (16) 人名
- (17) 一間通り
- (18) ナンダテ(何でも)を強めた表現。
- (19) 地力。作物を成長させる土地の力。
- (20) 松の木を植えて、しりをもちこまれた老人。
- (21) すぐ南隣りの
- (22) 話し手Cの南隣りの家の人名
- (23) 魯桑。葉は巨大で柔らかく水分が多く養蚕に適する。巨木だった。
- (24) 日陰にならなくなつて よかった ということ。

13 都市計画と移転

話し手

A 佐直 きえ 女 明治36年生まれ

B 高梨八太郎 男 大正 3年生まれ

C 佐直まさる 女 明治34年生まれ

A ナエ ンダガナヤー ドサー キラル モンダガ……
 どうなるのかねえ どこに(道が)切れる のか

B アエツ⁽¹⁾ キラルーテ ユード タデラシェネハゲナエハ。
 あれ (道路が)切れるって いうと 建てらせないからな。

(A ンダベナハ) タデラシェルタテ アリヤ (A キマレバナ)⁽²⁾
 (そうだろうな) 建てらせるとしても あれ (決まればな)

ジョーケンツギダド。(A ンー ンダガー)⁽³⁾ ン。
 条件つきだそうだ (んー そうか) ン

A ホンダゲ アリヤ アノ ショーエツロサエノ⁽³⁾ ター アソゴ⁽³⁾
 だから あれ あの 正一郎さんの家の 田(は) あそこ(を)

ウツタナノ⁽³⁾ ンダゲ アダエー ニスノ ホー リヤー
 売ったのなど だから あんなに 西の 方 あれ

(B ン ミナ ウラタデハ) アゲデ⁽⁴⁾ アレ シタデアレナヤ。(B ン)
 (ん 全部 売れてしまったな) あけて あれ したじゃないか。(ん)

イエー タデダデアレ アソゴ。アレタゲ ミツ ヒログ
 家を 建てたじゃないか あそこ。あの分だけ 道(が) 広く

ナッサゲテ ホレ アゲラヘダンダベ ヤッパリ。

なるから ほら あけさせたんだろう やっぱり。

B ンダ アエツノ ホー ヒガスノ ホー ミナ ウラタナヅァナハ。
そう あれの 方 東の 方は 全部 売れたんだよな。

A ンダベナエハッス ンー。
そうでしょうね んー。

B アラダ⁽⁵⁾メガラ クッ ドゴ ホレ ガッ⁽⁶⁾ゴノ ホーサワ ミナー
改目から 来る 所 ほら 学校の 方へは みな
アソゴ アゲルエ シタンダゲネ。ウ カッタンダッスヨ ミナハ。
あそこ あけるように したんだからね。 ^x 買収したんだしよ 全部。

(A ハー ンダツダ) キョ ネナノ ハル ミナー ウッ^xタ^x
(はー なるほど) 去年の 春に 全部 売った

ウッ^xタツダガ (A ンー) カッタナヅダナナハ。
売ったというか (んー) 買収したんだよな。

A ンダツダナ ナハ。ミナ キマ⁽⁷⁾タンダベハゲナハ。
そうだよな。 全部 決まったんだろうからな。

B キマタンダハゲ。 (A ンー)
決まったんだから。 (んー)

C ナンツエ ナルンダガナエ。
どんなに なるのかね。

B ンデ アイナ イエー タデルッ⁽⁸⁾タテモ ホレー ン ホゴサ
んで ああいうのは 家⁽⁸⁾ 建て⁽⁹⁾て⁽⁹⁾る⁽⁹⁾って⁽⁹⁾い⁽⁹⁾っ⁽⁹⁾て⁽⁹⁾も ほら ン そこに
ドーロ キラルテ ユー⁽⁸⁾ ワガッテ⁽⁹⁾ッド ケーガグシ⁽⁹⁾テ⁽⁹⁾ッド
道路⁽⁸⁾ 切れ⁽⁸⁾る⁽⁸⁾って⁽⁸⁾ いう⁽⁸⁾のが⁽⁸⁾ わか⁽⁸⁾って⁽⁸⁾い⁽⁸⁾る⁽⁸⁾と 計⁽⁸⁾画⁽⁸⁾して⁽⁸⁾い⁽⁸⁾る⁽⁸⁾と
ホーユー バアエ⁽⁹⁾ダ⁽⁹⁾ド イテン⁽⁹⁾ス⁽⁹⁾ル⁽⁹⁾ド⁽⁹⁾ガ イテン⁽⁹⁾ヒ⁽⁹⁾ド⁽⁹⁾ガ⁽⁹⁾テ
そういう 場合⁽⁹⁾だと 移⁽⁹⁾転⁽⁹⁾する⁽⁹⁾とか 移⁽⁹⁾転⁽⁹⁾費⁽⁹⁾とかは

ケネ ゴドエ シテ スンナダ⁽¹⁰⁾ッタデネ。^{*} ンナエド ホダナ
 呉れない ことに して (建築)するんだ そうだよ。 でない と そんな
 ツロエナバリ エルテアデ⁽¹¹⁾。ワラワラ ミヅ キラルテ ユド (笑)
 ずるい人ばかり 居るっていうんだ。 急いで 道^(か) 切れるって いうと
 エラネ モノモ ウエダリ マッタリ⁽¹²⁾ スルテヨ。
 いうない ものも 植えたり 何か するってよ。

A (笑) ホダ ホンダー ホンダモナヤ。
 そう そう そうだものな。

B ンダテ タヅギサー ホショー ツグナダゲナエ。
 だって 立木に^(も) 補償金^(か) つくんだからね。

A ンー ンダツダー。ンダー アソッカラ マッスゲ キラル
 ンー なるほど。 そう あそこから まっ直ぐ 切れる
 キラルテ ハナス アッタンダツナヤ。
 切れるっていう話^(か) あったんだよな。

B キララネモナヤ。^{*}
 切れないものね。

A ンダ アソゴ スロサエ⁽¹³⁾ ンドッカラ マッスゲテ ユード ンデモ
 そう あそこ 四郎さんの家の所から まっ直ぐって いうと でも
 ダエブ イェー タカガンナネナ アンベモアレナ ホンデモー。
 大分 家^(を) 移転^(し)しなければならない家^(か) あるだろうからなあ それでも。

B アソゴ ゴンスケガラ⁽¹⁴⁾ アソゴ マーッスゲ⁽¹⁵⁾ オッキリミツツァ
 あそこ 権助の所から あそこ まっ直ぐに 押切道に
 キラルエ⁽¹⁶⁾ ナンナンナエガ (A ハー ンダガ) ケーカグワ。
 切れるように なるんでないか (はー そうか) 計画は。

(A ンー) ナエ アソゴラサ キランナダガ スンナエナ。
 (んー) ね あのへんに 切れるのかも 知れないな。

- A ンダレバ アソゴダレバ ホレ イエー ナエハゲナヤ (B ンダ)
 そんなら あそこならば ほら 家(か) ないからな。 (そう)
- ターバンダゲ イエー ツダナナヤ。アノ ミヅ ヒログ
 田ばかりだから 良いんだよな。 あの 道(か) 広く
 ナンナダベ ンダラ。
 なるんだろう では。
- B ヒログ ナンナダガ スンナエナ。
 広く なるのかも 知れないな。
- A ン アソゴワ イエー ツダアレナ。ヤッパリ イエー タガ⁽¹⁷⁾グテ
 ん あそこは 良いんだよあれは。やっぱり 家(を) 移転するって
 ユード カネ カガツヅァ ナヤー。
 いうと 金(か) かかるんだよね。
- B ンダ ジェ⁽¹⁸⁾ニー ケルテ ユー モノノ……。 (笑)
 そう 補償金(を) 呉れるって いう ものの……。
- A ンダー ホダナ。ケンナナ サンブンノエツモ ホダナ ケー^{x x}
 そう そんな。呉れるのなど(は) 三分の一も そんな
 ダサネモ⁽¹⁹⁾ノ ホダナ。 (笑) (C 笑)
 出さないもの そんな。
- B ケツキョグ ホゴシテ モテグノ ナンノッタテ イエグ
 結局 (家(を)ほごして 移転するの なんのっていったって 良く(は)
 エカネヅダッスネヤ。
 いかないんだしね。
- A ンダデーハス。 コシェンタテ イエー ドゴナバリ コンド
 そうですもんね。 拵えなくって(も) 良い 所などはばかり こんど
 コシェランナネグ ナテナ。エコガシェバ ホレ。 ンダゲー
 拵えなければならなく なってな。移転すれば ほら。 だから

ヤッパリ イエー タカ⁰グテ ユーナワ カネカガルンダ
やっぱり 家(を) 移転するって いうのは 金(か)かかるんだ

ヤッパリナ。

やっぱりな。

B フルエナ モテッテ タデンナダラ アダラスグ タデダ オ
古い家も もって行って 建てるんなら 新しく 建てた 方(か)
イエーモナエハ。(A ンダナハ) ヘッゲナ ワンツガノ サデナ。
良いもねえ。 (そうだね) そんな わづかの 差でな。

A ンー ンダ。ホダナ カネ カガタ フリアエニ イエーグ
んー そう。そんな 金(か) かった 割に (は) 良く (は)

エカネハゲナヤ ヤッパリ。フルモノ シシヤゲデジャ ヤッパリ。
いかないからな やっぱり。古物(を) 仕上げて は やっぱり

(B ンダデー) ンー。
(そうだよな) んー。

注

- (1) 都市計画の道路予定地には建造物を建てさせないという話題。
- (2) 路線が決定すると
- (3) 人名。
- (4) 道路の予定地を空地にして
- (5) 地名。河北町の小字名。録音地の北方 1 km。
- (6) 谷地中部小学校のこと。改目から谷地中学校。谷地中部小学校のすぐ西側にバイパス道路が出来る予定になっている。
- (7) 買収済みになった
- (8) ユーナ と言うべきところ
- (9) 理由にあたるものを、三回も言い返している。
- (10) サセンナダッタデネ のねじれ。
- (11) ワラワラ は副詞。ワラワラド・ワラワットとも。ウエダリに係る。
- (12) ……したりなんか。……シタリ マッタリ が慣用句
- (13) 人名。
- (14) 人名。
- (15) 地名。録音地の東方 1 km の部落。
- (16) 道路が接続するように。道が通じるように。
- (17) タガグ ①持つ(手掛く) ②携える ③持ち上げる ④持ち運ぶ。
⑤移転する
- (18) ジェニ 銭だけではなくお金の総称。ジニ・ジェネとも。カネは、やや改まった言い方。
- (19) 補償金を支払わないもの。

14 田螺と蝗

話し手

A 佐直 きえ 女 明治36年生まれ

B 高梨八太郎 男 大正 3年生まれ

C 佐直まさゑ 女 明治34年生まれ

C アノ ツンブ⁽¹⁾シェマー リヤ シェック⁽²⁾ クッドギ⁽³⁾ハー
 あの 田螺 捕り ほら 節句(か) 近づくと
 (A ン) アノ アレダケデー。シェ⁽⁴⁾メッダ シト ホッツ
 あの あれだったな。捕っている 人(か) あっち
 コツツエ タンボエ エッケ。⁽⁵⁾ (A ン)
 こっちに 田圃に 居たっけ。 (ん)

B ツンブワ ンマエモナエ。ンデモナエ。
 田螺は 旨いもんね。なんといっても

A アエヅ⁽¹⁾ ンマエヤー。(B ン) オカスケナ ハマグリナー アレナー
 あれ(は) 旨い や (ん) おかしな はまぐりなど あんな
 アサリエ ガナー ンマエモナヤ。(B ン) ン。
 浅蜷 よりも 旨いものな。(ん) ん。

B キョネナ オランダ⁽⁶⁾ ソンデサギーノ ツヅミニ (A ン) アソゴン
 去年(に) 俺達(か) 袖崎の 堤に (ん) あそこの
 ドゴ スゴド シテデ⁽⁷⁾ ア ツンブ エダ⁽⁷⁾ ンデ ツンブ
 所(で) 仕事(を) して「あ 田螺(か) 居る。じゃあ 田螺を

シェメデ アベヤナテ シェメデ キテヨ (A ン) ホシテ ニデ
 捕って 行こうや」なんて 捕って 来てさ () そして 煮て
 クタヅ。(A ジャッ) ⁽⁸⁾ タガジェギンデヨ。
 食ったよ。(まあ) 高 関(の事務所)だよ。

A ターガラガッス ターガラ。
 田 からですか 田 から。

B ンナエ。ツヅミサ (A ジャー オー) エダンダ。タンート
 いや。堤に (まあ おう) 居たんだ。沢山
 エダンダケナ。
 居たんだけな。

A ナエーダ ヨグナヤ ホダエ。
 なんだって よくね そんなに。

B ツンブヅルデモ シテ ケーヤナテ ホシテ (A ン) モテ キテ
 田 螺汁でも 作って 食おうやなんて そして (ン) 持って 来て
 クタケ (A ン) ヤッパリ アンヅ イエーナー。
 食ったっけ(が) ン) やっぱり 味(が) 良いなあ。

A ヤッパリ ツンブ ンマエモナヤ。
 やっぱり 田螺(は) 旨いものな。

B ンマエナー。
 旨いなあ。

A ミソスルナー シテ クード シタ⁽⁹⁾ンヅ⁽⁹⁾ ンマエダレ (B ン)*
 味噌汁など(が) 作って 食うと 汁 (が) 旨いものね (ン)
 ツンブド ナンゴンダラ ホンテー メケランナエナヤッス。
 田螺と いなご なら ほんとに 見付けられないですね。

C ナンゴンダラ ミランナエ。
 いなご なら 見つからない。

B ンダナ オバナザワノ⁽¹⁰⁾ ホーサ エガネド ワガンナエ モナエ。
そう 尾花沢の 方に 行かないと 見られないものな。

(A ンー) アツダテ ショードグ シテンナ ンダベゲントモ
(ん) あっちだって 消毒 (を) してるんだろうけれども

(C ナンシテ ンダハゲヨー)⁽¹¹⁾ エルナエ。
(どうして だからよ) 居るな。

A ミナ ヤマサ ネゲンナダッタ ンナエ ガヅー。⁽¹²⁾ (C ナー)
全部 山に 逃げらっていうんで ないかい。 (な)

B ホダテ ヤマッタテ ホダナ チョード ハナパスナ ンダラダゲント*
だって 山といったって そんな ちょうど 間近かなど ならだけど

カワー アソゴ アッサゲ カワサデモ テーボアダリサデモ
川 (が) あそこ(に) あるから 川 にでも 堤防あたりにでも

ネンゲデ⁽¹³⁾ ネエツド アユニ エギデンナダガ ナエンダガ。
逃げて いると? あんなに 生きているのか なんだか

A ドーユー モンダガナヤー。ンデモ (B ンダテ) アツツノ ホーデ
どういう ものかなあ でも (だって) あっちの 方 (に)

エルジャ ヨー。

居るってのはよ。

B ホダナ⁽¹⁴⁾ カンジョ⁽¹⁵⁾ シタラ サバダ⁽¹⁶⁾ アダリエモ エランナネナツァナ。
そんな 考えでいったら 沢畑 あたりにも いなければならぬんだよね。

ヤマアダリサ (笑)

山のあたりに

A ンーダナー ヤッパリ。

そうだね やっぱり

B ネゲデ ングナ。ハエツ サバダアダリモ エネデー。

逃げて 行くのが。それが 沢畑あたりに 居ないだろう。

A ンダーナヤー。

そうだね。

B アツツ オバナザワノ ホーバリ エンナダモナエ。(A ンー)
あっち 尾花沢の 方(に)ばかり 居るんだものね。(ん)

C アレノ ホエ エネガヤ。アノ スンツダノ⁽¹⁷⁾ ゲンカエスンツノ⁽¹⁸⁾
あれの 方に 居ないかい。あの 志津だの 玄海 志津の

ホーナノ……。

方など(に)

B アツツ アツツノ ヤマテノーエ エネヅ。ン。マザワノ⁽¹⁹⁾ ホー
あっち あっちの 山手の方に(は) 居ないんだ。ん。間沢の 方に(は)
ミランナエユーダツ。^{*}マザワノ ホーエ ナンゴ エダナテ ユー
見られないようだな。 間沢の 方に いなご(が) 居たなんて ウ
ゴド ナエナ。(A ンー C ンー)
こと(は) ないな (ん ん)

A ホノ トツニ アンナツンダガナヤナエー。

その 土地に (根拠が) あるのだろうかなあ。

B ナリゴ⁽²⁰⁾ノ ホーエ エルツタ ンナエガヤ。
鳴子の 方に 居るという じゃないかい。

C フンー ミヤギケンノ ホーダラ エル^(B ンー) ガスシナエナ。
ん 宮城県の 方なら いる (ん) かも知れないな。

A ンダド アガグラノ⁽²¹⁾ ホーナ (C ンー) ン アツツノ ホ……
そうだって 赤倉の 方など (ん) ん あっちの方

B コドス ズエンブン ナガルルマン ホーサ シエメ エッタテ
今年(は) すいぶん 方に 捕り(に) 行ったって
ユナダナ。(C ンー)
いうんだな。(ん)

A オラエノ ホンケノ オッカダ⁽²²⁾モ ニンド エッタナテ
 俺家の 本家の 嫁たちも ニ度 行ったなんて
 キョネナノ アギ。(C ンー) ホーシテーノ ホリャ コッツガラ
 去年の 秋⁽¹²⁾ (ん) そうして ほら こっちから
 エグニ ヤッパリヨー タップリ ニンツカン カガッド
 行くに やっぱりよ たっぷり ニ時間 かかるそうだ
 ヤッパリ。(C ナエー) アガグラサ エグエ。
 やっぱり。(なあ) 赤倉に 行くに。

C クルマンデナー。
 車でだろ

A ンー クルマンデ。 ンダゲテ ヤッパリ アサゲ クラエ ウヅー
 ン 車で だから やっぱり 朝 暗い うち⁽¹²⁾
 (C ン) エッテ ホシテ アッチャ エッテ シェメネデ
 (ん) 出発して そして あっちに 着いて 捕らないでは
 シェメランナエテ ユナダナ。(B ンダベナエ) アタカグ
 捕られないって いうんだな。(そうだろうね) 暖かく
 ナテガラナ シェメランナエチャ ハヤクテ。(C ンー) ブンブド
 なってからなど 捕られない よ 速くって。(ん) ぶんぶんと
 トンデ アラテ。(C ンー) シタレバ ホレ エネカリ シッタ
 跳び 歩いて。(ん) そしたら ほれ 稲刈り⁽¹²⁾ している
 シト エダケテダデ ナエーダ アノ オマエノ ホーデ
 人⁽¹²⁾ 居たけというんだ「なんだって あの お前の 方で
 ナゴナノ クナダガーテ ホレ ユタテ。(C ンー) ホシテ ナンゴ
 いなご など 食うのか」って ほれ 言たって。(ん) そして いなご
 クーナダテ ユタエバ オラホデ カネテダケ ナテ。ホシテアノ
 食うんだ」って 言ったら 「俺方⁽¹²⁾ で 食わない」ってだけなんて。そして

ラエネンモ シェメ ゴザッシャエナテ ツカエモラテ⁽²³⁾ (笑)
「来年も 捕りに いらっしゃい」なんて 招待されて

キタテ ンダデ。(笑) *

来たって言うんだな。

C ヨーグ タ コカレンナ⁽²⁴⁾ マ マダ^x キテケラッシャエナテ
よく 田(畠) 踏みこまれるのに また 来てくだ"さい なんて

ユーチャー。

言うことね。

A ン ホゴラー -----
ん そこ

B アッツノ ホー ンダゲ ホダナ タント ン^x
あっちの 方は だ"から そんな 大勢(は)

ンガネナダベチャエナア。

行かないんだ"ろう よ なあ。

A エカ"ネナダドー。ソー。 エネカリ シッタ シト
行かないんだ"って。ん。 稲刈り している 人が

エダケテダドレ。(C ンー) ホシテ -----。
言"てた"ていうんだ。(ん) そして

B ハエヅ ニヅヨーテ ユード オバナザワアダリナノ オマヅリ
それが 日曜なんて いったら 尾花沢 あたりなど お祭り

ミダエダデナエハ。(C ンー A ンダベー) ミナ クルマデ"
みたいだよな。(ん そうだ"ろう) みんな 車で

エッテホレ。(C ンー A ンー) ンダゲ スゴドモ サンナグ"
行"ってほ"ら。(ん ン) だ"から 仕事も できなく

ナルテダケナ。

なる"てだ"ったな。

C ンダツンダ。
なるほど。

A ンダゴデナ ヤッパリ。 エネ カリヅラグ ナテナ。 (Cン)
そうだろうな やっはり。 稲(が)刈りにくく なってな。 (ん)
ンー。
ん。

注

- (1) 桃の節句。田螺とアサツキの酢味噌あえを供えるのが慣例だった。
- (2) 「来る時は」が原義。
- (3) あとの文の内容をさす。
- (4) シェメッタは 現在進行・継続をあらわす。
シェメダは 過去・完了をあらわす。
- (5) 居たもんだった 昔は というニュアンス。
- (6) 地名。村山市袖崎
- (7) 現在
- (8) 高関は地名
- (9) 下地。煮物などのしる。
- (10) 地名。尾花沢市。
- (11) なぜ 尾花沢の方面にばかり 蝗がいるのか と言っている。
- (12) なるほど そうかい という気持ち。
- (13) 鼻端。間近かの意で、ハナサギ、ハナノトツツァギ も使う。
- (14) 蝗が山に逃げこむという考え。
- (15) 勘定
- (16) 地名 録音地点の西方1.5 KM、山添いの村落。河北町
- (17)(18) 地名 西川町。月山の登り口にあたる
- (19) 地名 西川町。志津・玄海などへの入り口
- (20) 地名 宮城県の鳴子温泉。 蝗は山形県と宮城県の県境一帯に多く住んでいるという。
- (21) 地名 山形県最上町赤倉温泉。宮城県境付近。
- (22) おかあさん(主婦)の普通称。オッカア。
- (23) お使い状(招待状)をもらって が原義か？
- (24) 稲田にふみこむ。漕ぐ。ぬかるみや雪、草木などで歩きにくいところを、踏みわけて歩くこと。川をコグ ともいう。

15 小正月の行事

話し手

- A 佐直 きえ 女 明治36年生まれ
 B 高梨八太郎 男 大正 3年生まれ
 C 佐直まさる 女 明治34年生まれ
 D 矢作 春樹 男 昭和 6年生まれ (研究員)

D ムガシノ コー ネンチューギョーデネ (A ンー) ミーサ
 昔の こう 年中行事でね (ん) 箕に

カナモノ ミナ アゲデナテ ユナァヨ (A ンー) ナガナガ
 金物(を) すべて 上げて なんて いうの(は)よ (ん) なかなか

ハナスシテケル シト エネナヨ。

話してくれる 人(は) いないのよ。

A ンダ ハエーヅワ ドゴデモ ンデモ……。

そう それは どこでも でも

B ンダ ミナ ミナ シタモンダモナエ。

そう すべて やったもんだものね。

A ショーガツワ ミナナヤ。(B ンー) ホダナ モヅー アゲ……
 正月は すべて なあ (ん) そんな 餅(を) 供え

ナリトリモヅ コー シトグミンヅヅ ホレ。(B ン)
 お供え餅(を) こう 一組 ずつ ほれ (ん)

アゲダナヅダナナヤ。

供えたもんだよな。

B カナモノー。⁽¹⁾ (A ンー) フレダバリ ヤスンデ ワガン ナエテ。
金物^(に) (ん) 自分達ばかり 休んで だめだって。

カナモノモ カシェーダ^ンダ^ゲ ヤスマシェランナネーテ
金物^(も) 働いたんだから 休ませなければならぬって (お供え)

シタモンダモ。

したもんだもの。

A ン ネンジュー ホレ ツカウモノヅダナ (C ジェンブナ)
ん 年中 ほれ 使う物を だ^な (全部 な)

ホエジョドガ コガダナドガ ホレ カワムギドガ ホレ
庖丁 とか 小刀 とか ほれ 皮むきとか ほれ

ナニドガテヤナ フラエパントガテ ホレ.....*

なにとかってね フライパンとかって ほれ

B ヤッパリ ツゴグモ ホレ カマノ フタモ ミナ アグナダハゲ。
やっぱ^り 地獄も ほら 釜の ふたも みな 開くのだから。

A ンーダ^ン ジューログニヅワナヤ。
そう 十六日 はなあ。

B ヤスマシェンナダ^テ ユナデ^ン (A ンー) ホユー イミニ
休ませるんだって いうので (ん) そうい^う 意味に

トツタンダベ ムガスナァ。

取ったんだろう 昔はなあ。

A ンーダ^ン ンダ^ゲ ツネニ ツカウ ドーグチャダ^テ ホレ モツ^ン
そう だから 常に 使う 道具に だ^{って} ほら 餅^(を)

カヘランナネーテ ユー ワゲデ^ン (B ンダ^ン) ホレ ミナナヤ。
食わせなければならぬって いう わけで (そう) ほら 全部にね。

C カギサモ⁽²⁾ (A ン ンダ^ン) モツ クツケデ^{ネー} (A ンー) ユツテ。
鉤にも (そう そう) 餅^(を) 結わえつけてね (ん) 結^{って}。

A ュッテナヤ カミサ ツツンデ。

結ってな 紙に 包んで。

B ンダゲ アリヤ サンボングワナ クワナ モテ クランネベ。

だから あれ 三本鋏など 鋏などは 持って 来られないだろう。

ンダゲ コー スカゲデ オグ ドゴサ ミナ (A ホンダ ミナ
だから こう 引掛けて おく ところに みな (そうだ みな

モツ コーナヤ⁽³⁾ ヒスモツニ⁽⁴⁾ シテ リヤ (C ンダ) ミナ ミゴデ
餅を こうね。) 菱餅 (に) して あれ (そう) みな 藁いばで

ユッテ ナレ (A ホダ ュッテナヤ) カミサ クルンデ シテ
結って なあ (そう 結ってなあ) 紙に くるんで そして

(A ホシテ ミナ) カシエデ オグナダケ。
(そうして みな) 食わせて おくのだった。

A ンダゲ アドノ ショーガツジャ モツ シート エッケツンダナ
だから あとの 正月というものは 餅(か) うんと 必要だったんだな

ムガスナヤ。

昔はな。

B ハヤグンナ イエガテナヤ。

早くの(正月) よりも ね。

A ションドーグサ ミナ ホレー アゲランナネモノ。

諸道具に すべて ほら 伏えなければならないもの。

B ジェンブダモノ。

全部だもの。

A ンー エマナノ ホレ オラエノ ジュンイチダ⁽⁵⁾ナー ホレ
ん 今など ほら 俺家の 純一たち など ほら

ゾドシャナノ アゲデル アレ。(C ン) ン。
自動車など(に) 伏えてる あれ。(ン) ン。

C ヅドシャダテ ホレ カジェカシエデ オグナダハゲ
自動車だって ほら 働かせて おくんだから

A ンダー ンダハゲテ
そうだ だから

B アドノ ショーガヅナテ ユタテハ モヅナ ツカネヅハ。(笑)
あとの 正月 なんて 言ったって 餅など つかないな。

オラエデナ ツカネハ。
俺家でなど つかないな。

A ンダー ヤッパリ ンダヅ エマナノ アドノ ショーガヅナテ
そう やっぱり そうだ 今など あとの 正月 なんて

ツカネハー ヤッパリ。(B ンダ) スンノ ショーガヅド キューノ
つかないなあ やっぱり (そう) 新暦の 正月と 旧暦の

ショーガヅ グラエナ モンデヨハ。(B ン) ンー。 ンダゲ
正月 ぐらいの もんでよ。(ん) ン。 だから

キューノ ショーガヅ キューノ ガンヅヅ ホレ ミナー ホノ
旧暦の 正月 旧暦の 元日(に) ほれ みな その

ヅンドシャサデモ ナエデモ アゲダヅダナ (B ン) オラエデナ
自動車にでも 何にでも 供えたよな (俺家でなど

ホレ。(C ン) ミーサ ヤッパリ ホレ ナニモカニモ アヅバデ
ほら (ん) 箕に やっぱり ほら 何もかも 集めて

(7) コヤサ オエデ⁽⁷⁾ ホシテ (笑) モヅシテ……
納屋に おいて そして 餅 そして(3)

B オラエデナ ホダナ スネナハ。(A ンダガ) ヅドシャサバリ
俺家でなど そんなことはしないな。(そうか) 自動車にはかく

アゲデハ。^{*}
供えてさ。

A オラエノ ジュンイチナ ホダナ ゴド シテ バンチャ
 俺家の 純一 など そんな こと(を)して お婆さん(お)
 ヘッゲナサ アゲッゴダ ナエベチャエ ナニモナテ。(笑)
 そんなものに 供えることは ないだろうよ なにも なんて。

B ナンニモ ナラネ ミダエナダゲント ナエ。
 なんにも ならない みたいなんだけど ね。

A ウサ ⁽⁹⁾ネンージュ ホダナ ツカテ エンナダ モノ ショーガツ
 お前 年中 そんな 使って いるんだ もの 正月
 グラエ モツ カヘランナネベツテ ホシテ ホレ ミナー
 ぐらいは 餅(を) 食べなければならぬだろうよって そして ほら みな
 キューノ ショーガツ シタモハ。(Cンー) ンー。(Cンー)
 旧暦の 正月に やったもの。(ん) ん。(ん)

注

- (1) 人間どもばっ かり の意
- (2) 自在かぎのこと。
- (3) 結わえるしぐさをして。
- (4) 切り餅にして
- (5) 話し手 A の孫
- (6) あらゆる農機具・日常具・台所用具を集めて 箕に入れて感謝の意を表わした。これは、五穀豊穡を祈る行事であったと同時に、釜・庖丁・まないた・自在鉤・鍋などを休ませることによって、家族全員の骨休めを徹底させる庶民の知恵であった。この行事は、正月も休めない嫁たちへの最高のおくりものであったろう。
- (7) 雪国であるため、農作業場兼物置が、自作農の家にはあった。
- (8) 卑めた言い方 「そんなくだらないものに」の意
- (9) 第二人称の卑めた言い方 ウサ・ンサ・ソナダなどは同じ。

16 田 楽 焼 き

話し手

A 佐直 きえ 女 明治36年生まれ

B 高梨八太郎 男 大正 3年生まれ

C 佐直まさゑ 女 明治34年生まれ

B ホシテー コンド ヨルサ ナッド ホレ デンガグツヅ⁽¹⁾ナエ。
そして こんどは 夜に になると ほら 田楽だよねえ。

A ンダ デンガグ シテ (B ン) ジューゴニツナヤ。
そう 田楽(を) して (ん) 十五日 なあ。

B モツー ミ ミソ ツケデ (A ホダ) ミソサエ ツケレバ
餅(に) ^x 味噌(を)つけて (そう) 味噌さえ つければ
デンガグダーテ。(笑)
田楽だ って。

A ンダ ユベナ ホンダケツダナ ホレ ジューゴニツノ バンデ。
そう 昨夜(が) そうだったよな それ 十五日の 晩で

B ユベナヨー ハエツ デンガグモナニモ ナエデハ。
昨夜よ それが 田楽もなんにも なくなったものね。

A ンダ ドゴードモ ホレ トーフサ ホレ クルミミソナ
そう どこ(の家)でも ほら 豆腐に ほら 胡桃味噌など

サ^ニショ ミソナー スツテナヤ ホシテ (C 咳) ホレ エロリサ
山椒味噌など 搦ってな そして () ほら いろいろに

シー オエデ アンプテ ホレ クタモンダ エツ……

火(を) おいて あぶって ほら 食ったもんだ

B シェンシェ⁽²⁾ ダモ オベッ ダベ。ンダテー アノ (A ンー) コッコーテ
先生たちも 覚えてるだろう。だって あの (ん) コッコーって

アラグナナエ。(A ンダー) オランダナ アエツ……

歩くのはねえ。(そう) 俺達など あいつ

C ユベナダケッ ダナ アエツナヤ。(A ンダー) コッコー。
昨夜だったけな あれはね。(そう) コッコー。

B シー アラタゲヨー。 フ ウヅワサ アリヤー (A ンダ)
ん 歩いたからよ。 蓑(を) 団扇に ありゃ (そう)

ネンギド フー (A ンダ) シッツゲデナレ (A 笑 C 笑) フーフ⁽³⁾
葱 と 蓑(を) (そう) くっつけてな () 夫婦

アエワスナテ (A ホダー 笑) トモニ スラガノ ハヤルマンデ
相和すなんて (そうだ) とともに 白髪 の 生えるまで

ナテ。(A 笑 ンダー) (笑)
なんて。(そう)

C トスユワエノ シト ンダ アラタッ ダナナエー。(B ンー A ンダー)
年祝いの 人たち(は) 歩いたもんだよね。(ん そう)

B ホレァ シェンリョーバゴナ コシェ デナエ (A ンダー) タラ
ほら 千両箱 など 作ってね (そう) (福)俵(を)

コシェ ダリ。

作ったり

C ドーッサリ マエゴンダナテナ。⁽⁴⁾
どっさり 舞いこんだ なんてな。

A ホンダ ンー ホシテ ヤッパリ ホレ ダンゴイェガ モヅ
そうだ ン そして やっぱり ほら 団子よりも 餅(か)

イエーナテ ミナ (C 笑) アラタ モノヅァ ナヤホレ (B ンダ)
良いなんて みな () 歩いた ものだよなあ。 (そう)

コッコ。 ハエツモ コノポロ コネハ。

コッコ(は)。 それも このごろは 来なくなったな。

C コネナ シトツツモ。(5)
来ないな さっは[○]ク

A シトリーモ アラガネ。
一人も 歩かない。

B ガッコデ アラグナテ ユタナンデモ ナエナダ[〃]ガヤ。
学校で 歩くなって 言ったので ないのかね。

A ンダド ガッコデ ユタンダド (B ン) アラグナテ。
そうだって 学校で 言ったんだって、 ん 歩くなって。

B アユナ ⁽⁶⁾ナグスッ ⁽⁷⁾ドゴ ナエベネヤ。(笑) (A 笑)
ああいうの(を) なくする こと(は) ないだろうにね。

A ムガスノ (笑) ブンカザエ。(笑)
昔の 文化財。

B ブンカ ^{x x x} ブンカザエミダエダ。(笑) (A 笑)
文化財 みたいだ。

A アダナ ⁽⁸⁾ホエドミダエデ モラテナ アラグナ ホダナ ゴド
あんな 乞食 みたいで もらってなど 歩くのなど そんな こと(は)

スンナテ ガッ コノ シエンシェ ユタンダッ タドレナヤ。(C ン)
するなって 学校の 先生(が) 言ったんだったそうだ (ん)

ホレガラ ナグ ナタンダド。
それ以来 なく なったんだそうだ。

B アエツァー タンダ モラテ アラグナテ ^{x x x}コンツ ムガスノ
あれは たた もらって 歩くなって 昔の

(A ンー) モラエモスド⁽⁹⁾ ツガテ シトツノ ナエ (A ンダ ンダヤー)
 (ん) 乞食 と 違って 一つのね (そう そうだねえ)

ギョーヅミダエナ モンダデー。

行事みたいな もんだよなあ。

A イミ アッテ アラグナヅナホレナ。(C ンダナ) ンデモ
 意味(か)あって 歩くのだよな (そうだね) それでも

オラエノ カヅギザワノ⁽¹⁰⁾ アダリジャ アエヅ アラガネヅ
 俺家の 勝木沢の あたりでは あれ 歩かないんだ。

(B ンー) オラ コツチャ⁽¹¹⁾ キテ ハスメデ⁽¹²⁾ アダナ (B ンダガ)
 (ん) 俺(は) こっちに 来て 初めて あんな (そうか)

コッコナテ ユナ ワガタンダチャ。(C.B ンー) オラェンドゴ
 コッコなんて いうの(を) 知ったんだよ (ん) 俺の(実家の)所(では)

アラガネモ。(C ンー) ンー。コッコナテ。
 歩かないもの。(ん) ん。コッコなんて。

C マヅノ ウヅデモナー。
 町の うちでもなあ。

A ンー アラガネ。(C ンー) ホダナ オラ キエダ ゴド
 ん 歩かない。(ん) そんな 俺(は) 聞いた こと(か)

ナエモ。イエー エダ ドギ
 ないもの。実家に 居た ときは。

B オラエン ドゴ ダド アラッケナ。
 俺家の ところ だと 歩いたっけな。

C アラタナエ。(B ドンードド) ゾロゾロド。
 歩いたねえ。(ん どんどんと) ぞろぞろと。

注

- (1) 旧暦の正月15日の晩に、豆腐の田楽焼きを食べる行事があった。そして、この晩は、「コッコー ダンゴイエガ モヅイエー」といって、家庭を訪問する。子どもや年男たちは、それぞれ袋を持って餅や団子（まゆ玉にして終わった団子など）をもらい歩くならわしであった。かけ声からこの風習を「コッコ」と言った。コッコーという音からいうと、鳥おいやかせ鳥や火伏せの系統であろうか。生理的には、餅で腹いっぱいになった体への植物蛋白質の補給であり、運動不足を解消する行為として適切なものであった。
- (2) 研究員（矢作春樹）に向かって言っている。
- (3) お祝いの行事なので「めでたいもの」を手にして訪問する年男が多かった。千両箱とか 福俵、米俵とか
- (4) 「アギノ ホーガラ（吉方から）シェンリョーバゴ ドッサリ マエゴンダ」などと言いながら、千両箱を座敷に 投げこんだりした。
- (5) 「ひとつも」が原義。少しも、ちっとも・さっぱりの意。
- (6) 田楽とかコッコとかの風習・行事
- (7) 原義は「所」であろうが、この地方では「事」との混乱が見える。
- (8) ホエドは内陸地方に分布。庄内地方はヤッコ。
- (9) 「貰い申す」が原義。河北町を中心に2,3町村に分布。
- (10) 地名。河北町の中の小字名。話し手Aの生まれた所。
- (11) 現在の居住地。婚家のあるところ。
- (12) ハジメテ → ハシメテ のように清音化する。ザフトン（座布団）カキソメ（書初め） ホドント（殆ど）などがある。

II. 群馬県^{とね}利根郡^{とね}利根村大字^{おっかい}追貝

収録・文字化担当者 上 野 勇

同 協力者 杉 村 孝 夫

A. 収録地点とその方言について

1. 地点名

群馬県利根郡利根村大字追貝

2. 収録地点の概観

①位置

東経139度45分，北緯36度53分，標高約675m.

②概観

西に片品川溪谷で知られる吹割の滝があり，南に赤城山が眺望出来，周囲には千メートル以上の山がつらなる。山間高冷地帯である。

③交通

国鉄上越線沼田駅下車，国道ノ20号線をバスで約40～50分，車で約30分。

④地勢

片品川・栗原川の合流地点で，川の浸蝕によって出来たと考えられる三段階の丘陵をなす地帯であるが，その丁度二段階の位置である。

⑤行政区画の変動

昭和31年9月30日東村赤城根村二村の合併により現在の利根村が設置される。

⑥戸数・人口

(利根村) 昭和50年12月1日現在 世帯数1,771戸 人口6915人 {男3,411 女3,504}.

⑦主な産業

農林業が主体である。

3. 収録した方言の特色

①方言区画上の位置・隣接諸方言との関係

当方言は、方言区画上、この地を含む群馬県の大部分や埼玉県中部以西などとともに西関東方言にはいる。ただし西関東方言の特徴としてあげられる推量を表わす「ダンペー」(だろう)は、当方言では「ダッペー」となっており、これは千葉県、茨城県や福島県の浜通り南部や中通り南部の推量を表わす形式とも通ずる。ところが、これは②の音韻上の特色の項でとりあげるように、撥音に有声音が続くとき一齊に促音と無声音になるという現象の一つであり、他の文法的特徴、例えば形容詞の活用などでは前記地域とは異なっておりまさしく西関東方言的特徴を有している。

終助詞「ムシ」は昭和五十年度録音の会話にはあらわれていないが、少なくとも話し手達の若い頃まではよく用いられていた。「ムシ」およびその変化形である「ムサ」、「ム」の分布がみられるのは群馬県でも北部山間地域が主であり(南部山間地域及び埼玉県西部にもみられる)、西関東方言域の中でも分布の限られた終助詞である。

②音韻上の特色

(イ) 拍の種類

共通語の拍(例えば服部四郎博士の記述などにみられるもの)の他にツォ [tso]、ツァ [tɕa]、チェ [tɕe]の拍がある。また、三十歳代以下の場合にはデャ [dja]の拍を持つ者もある。

例 ツォ ロッ ソォク (六束)

ツァ サッ ツァ (さんざん)、オッ ツァ レッ (叱られた)、マサイッ ツァン (政一【郎】さん)

チェ チッ チェー (小さい)

デャ トーダッ タデャー (どうだったのだよ)

【補説】若い人の「デャー」の形は、断定を表わす助動詞「ダ」と終助詞「ヤ」の融合したもの。他に、終助詞「カ」と「ヤ」の融合した「キャー」もある。老年層では意志を表わす助動詞「ベー」と終助詞

「マ」の融合した「ビャー」がある。

(ロ) 拍の結合 (音節構造)

CV, CVE, CVN, CVQ CSV, CSV E, CSV N, CSV Q (ア行は /a, i, u, e, o/ で CV 構造とみる。ヤ行とワ行は /ja, ju, jo, wa/ で CSV 構造とみる。C は子音音素, V は母音音素, S は半母音音素, E は長音音素, は撥音音素, Q は促音音素) の他に, N, CVEN, VEQ, CSVNQ および CVNE という構造の音節がある。

- 例 バンデ (それで) の第一音節, シマ (馬) の第一音節
CVEN シラーン カオ (知らん顔) の第二音節, イゲバ イ
ーンニ (行けばいいのに) の第四音節, ヤリテンデ
(やりたいので) の第三音節, ヒクッテ ユーン (引
くと言うの) の第四音節
CVEQ ケーッテ キテ (帰ってきて) の第一音節, マーッテ
フレル (回ってくる) の第一音節, モレーッコ
(黄い子) の第二音節, イーッショケンメ (一生懸命)
の第一音節
CSVNQ イマンッテ ユー (慰安と言う) の第二音節
CVNE ドナーナニ (どんなに) の第一音節

【補説】 この他 CV // Q などの構造もありそうである。ただし、以上
にあげた音節構造は当方言でも体系の周辺的存在である。「ンデ」は
「それで」の弱まり形である。長音音素は連母音の融合長音化したもの
の後半部、または強調のために挿入されたものであり、撥音音素は助詞
「ノ」の弱まり形である。最後から二番目の例は引用を表わす「ッテ」
の前に撥音音素で終わる語が来る場合にだけあらわれる。連母音の融合、
長音音素の挿入、弱まり形の基底には非融合形、長音音素の挿入されな
い形式、明確な形式があり、より基底のレベルではこれらの音節構造も
解消される。そこで、一方ではこれらの構造を避けるために長音音素の
脱落現象などもみられる。

C V E Q ⇒ C V Q ダセネッ テッ テ (出せないと言うので)

C V E N ⇒ C V N オメンチ (おまえの敵), アレダネンカ (あれではないのか)

(ハ) 連母音の融合はさかんである。「アイ」, 「アエ」; 「アウ」; 「オイ」, 「オエ」, 「イエ」は「エー」; 「オー」(ただし動詞のみ); 「エー」のように融合長音化する。また, 「アワ」, 「オワ」のように半母音「W」をはさんで母音が続く場合にも「アー」, 「オー」のように融合する。後者について例をあげる。

例 アワ: アー カーラ (河原), ネバザー (根羽沢【地名】), アーメシ (粟飯)

オワ: オー モノッコーシ (物壊し), ゲンノーナンガー (玄翁・アーなどは), コンダー (今度は)

【補説】 「アエ」, 「ウエ」などは「ハイテ」(生えて), オシロイ ッチュイバ (おしろいと言えは) のように「アイ」, 「ウイ」となることもある。

(ニ) 母音, 子音の共通語との対応で目立つものは次の通り。

イ: エ エバッテタ (威張っていた), メッカッテ (見つかって),
エシタ オシロイ (入れたおしろい)

オ: ウ アスコ (あそこ), ゴマナンズー (胡麻などを), スンナノ
(そんなもの)

エ: シ シト (人), ハシゴッペ シッテ フレ (梯子尻をひいてく
え), シトフユジュー (一冬中)

(ホ) ラ行音

ラ行音は, 撥音化, ラ行子音だけまたはラ行音全体の脱落, 弱まりなど変化が著しい。

ラ: シ マンナクッチャ ナンネー (やらなくてはならない), フン
ネート (降らないと), ツクンネン (作らないの)

レ：ン クルカ シンネー（来るがしれない），ワンネー（くれない）

【補説】ラ行音の撥音化は主に動詞，助動詞，補助動詞の語尾でおこり，後に否定を表わす「ない」，禁止を表わす「な」，終助詞の「なあ」などがくる場合である。

レ：イ ソイダカラ（それだから），ツイテガレタ（連れていかれた）

リ：Ø（子音のみ脱落）ヒッパラエチマッテ（引っばられてしまって），
ダカー（だから），セツダケード（説だけれとも）

レ：Ø（レの拍脱落），ソデ（それで）

（ハ）促音

関東方言が促音を好むことは有名である。当方言においても促音化，
促音挿入は盛んにおこなわれる。促音の挿入は形態素のつなぎ目^(例1)におこ
なわれるほかに，形式の第一拍めと第二拍め^(例2)の間にもおこなわれる。促
音化は，撥音に有聲子音 *o*，*z*，*b* などが後接している場合におこる。
撥音が促音化し，有聲子音は無聲子音 *c*，*p* となる。^(例3)

例 1. ヤマツキ（山着），ワケッチ（分け地），イギツツイテ（行き
ついて（行き着いて）），マルクッテ（丸くて），オレッキ
（俺だけ）

2. ヨッポド（よほど），ヤッパリ（やはり），ブツツケテ（ぶつ
けて），オッソロシカッタ（恐ろしかった），イックラモ（い
くらでも）

3. サツツァ（さんざん），コッター（今度は），タッポ（田圃），
ビッポーグジ（貧乏籤），ソノ タッピニ（その度に）
なお，「ダンペー」も「ダッペー」（だろう）となる。

4. その他 オッキー（大きい），ソツギ（その次），ダセネッ
テッデ（出せないと言うので）

（ト）^(例1) 撥音・長音音素の挿入も盛んである。長音音素は，強調表現の場
合形式の第一拍めと第二拍め^(例2)の間に挿入される。

例 1. アンマリ シナカッタ（あまり為なかった），ミンナ（皆），

オラナンゾ (俺など)

2. デーッケー (大きい), ホーントニ (本当に), テーンデ (てんで), フターリ (二人), チャーント (ちゃんと)

ただし, 次のように第二拍めと第三拍めの間の場合もある。

シラーン カオ (知らん顔), ドナーナニ (どんなに)

【補説】一方, 長音の短呼化 (長音音素の脱落) もみられる。これには常に短呼化され, 固定しているものと, 発話の速度や感情によって長音になったり短呼化されたりしてゆれているものがある。はじめの二例は固定しているもの。第三例はゆれているものである。

ハンタラ (半俵), イッジョケンメ (一生懸命), ヒラガワ (平川

【地名】は)

(4) その他, 母音の無声化や脱落も盛んにおこる。アクセントの山のはじまりの部分でも無声化がおこる。また, i, e のような狭い母音のみならず, e, a, o などの広い母音でさえも, 文末で文勢が弱まった場合や速度の速い発話の場合, 無声子音の後で無声化することがある。

k, t, p は気音を帯びてするどく聞こえる。

が行子音は語中ではおおむね摩擦音の [ɣ] である。

「キーちゃん」 (喜【市】ちゃんは), 「サイキンナ」 (最近は) のように撥音で終わる語に助詞「は」が続くときは連声によって「ナ」となる。

アクセントは東京式であるが, 三拍名詞の第五類に属する語には東京語の頭高型に中高型が対応するものがある。

③文法上の特色

(イ) 「ユッタッケ」 (言っ たっ け) のような形式の過去を想起する言い方のほか「キカシタッタヨ」 (聞か せた もの だ っ た よ), 「アキネーガ デキタッタヨ」 (商店 が でき た もの だ っ た よ) という形式もある。

(ロ) 活用

カ変動詞は「ツイテ キラレタ」 (連れ て こ ら れ た), 「モッテ キサ

シテ」(持ってこさせて)のように共通語の未然形に相当するところに連用形と同じ形があらわれる。

サ変動詞では「クラク シルツチュート」(暗くするというと), 「シルケド」(するけれども), 「シレバ」(すれば)のように終止, 連体, 仮定形が連用形と同じく語幹が「シ」で始まり, 一段化の傾向がみられる。

形容詞「ない」は「ネカッペー」(無かろう), 「ツノデ ネータッテ」(角でなくても)のように未然形, 連用形が終止形と同じ「ネ(ー)」の形になり無活用化の傾向がみられる。

助動詞「だ」の仮定形は「イットーダラ」(一斗なら)のように「ダラ」である。また, 次の例は連体形の「ダ」であるとみられよう。「ケンガ デキル トキダデ」(憲【三】が生まれるときなので)

動詞「落ちる」や「歩く」などが「マ」に続く形は「オッテ」, 「アルッテ」のように促音便となる。

使役の助動詞「セル」の過去形は, 「クワシタ」(食わせた), 「ムカシガタリ シテ キカシタ」(昔語りをして聞かせた)のように「シタ」である。

(ハ) 語の接続

助動詞「ダ」やその連用形「デ」は助詞「ノ」を介さず直接動詞, 助動詞に接続する。

例 くるダカラ (来るのだから), イグダカラ (行くのだから), アクルヒ フタデ (明くる日に降ったので)

共通語の「の」にあたるところにそれが用いられないことによって, 形容詞連体形と主格助詞「ガ」, 様態の助動詞「ヨーダ」の連体形と逆接を表わす助詞「ニ」, 動詞の連体形と目的を表わす助詞「ニ」, 名詞と名詞などが直接接続する。

例 デッケーガ アッタイネー (大きいのがあったよね)
クレーヨーナニ イグダカラ (暗いようなのに行くのだから)
コメー ハカルニ (米を量るのに)

ジューニサン トキ (十二・三歳のとき) , オメー セワン ナ
ル (おまへの世話になる) , ソン メーニ (それの前に)

(二) 助詞の脱落

当方言において脱落する助詞は「ガ」, 「オ」, 「ニ」の三者である。
助詞が脱落するかわりに体言の末尾拍が長呼される。

- 例 ① ガ: Ø キューマサン ナクナッタ (久弥さんがなくなった)
クリーム デタ (クリームが出た)
オ: Ø ナニ トッダ (何をとった)
アタマ オサエチマッタ (頭を押さえてしまった)
ダンボ ツクッテル (田圃をつくっている)
オ: E コメー ハカルニ (米を量るのに)
ハダギー マッタ (肌着をやった)
ヨクー カイテ (飲まがいて)
ニ: Ø ビルマ オーエンニ イグ (ビルマに応援に行く)
シューセン ナッタ (終戦になった)
トコ マッタッペ (どこにやったろう)
ヘータイ デネーカラ (兵隊に出ないから)
ニ: E オラガ ウチー クル (赤の家に来る)
ミー クル (見に来る)
ナシー イッテ (返しに行つて)

(ホ) 共通語の「に」に相当する当方言の助詞は「エ」である。

- 例 ② シタエ ダイブ ミセガ デキテ (下にだいぶ店ができて)
ニグラノ マンナカエ ロップ ハサンドイテ (荷鞍の真中に口
ロープをはさんでおいて)

(ハ) 待遇表現を発達しておらず, 男女でも年齢の差のあるもの同士でもほとんど同じ形式を用いる。ただし, 「ネンカイ」(無いのかね), 「アッタイネー」(有ったよね) にみられるような「イ」, 「ネ」は

「ネンカ」,「アッタナー」というそれらのない形式とくらべるとより待遇品位が高い。また, 外来者に対しては丁寧度の高い共通語の形式を用いることによって待遇品位を高めると同時に疎遠さをも表明している。その他, 老年層によって「歇尔系」の助動詞が「クツケラッサイ」(おつけなさい), 「ウソー イワッ シャルナ」(嘘をお言いなさんな)のように用いられている。

4. その他

①地点選定の理由

純粋な群馬県の方言をよく残している地点であることと調査者の身近な者があり, 方言収録の便が得られ, また協力体制が整えやすいことによる。

②協力者の氏名

C. いる 話し手に同じ。
C. いる 話し手に同じ。

C. いる 話し手に同じ。
C. いる 話し手に同じ。

C. いる 話し手に同じ。
C. いる 話し手に同じ。

C. いる 話し手に同じ。
C. いる 話し手に同じ。

C. いる 話し手に同じ。
C. いる 話し手に同じ。

B. 表記について

文字化は簡略音声表記的カタカナ書きによっておこなった。特に注意すべき、カタカナの表わす具体音声の範囲、その他の符号について説明する。

(イ) パ・タ・カ行の子音は概略形式の頭位では鋭い気音を帯びているが、中・尾位ではそれ程めだたない。〔p^h~p, t^h~t, k^h~k〕

(ロ) ザ行の子音は概略形式の頭位では破擦音の〔dz〕, 〔dʒ〕, 中尾位では摩擦音の〔z〕, 〔ʒ〕。

(ハ) ガ行子音は概略形態素の頭位で破裂音〔g〕, その他の位置では摩擦音の〔ɣ〕である。

(ニ) ラ行子音は概略形式の頭位では破裂を伴い 〔dʁ〕, その他の位置では弾き音 〔ɾ〕である。ただし、この音は無声的な発音では弱まりやすく、古が歯に達しないことも多い。

(ホ) エ段音は「アイ, アエ, オイ, オエ」など連母音の融合長音化したものの前半部を占める場合は半広母音の〔ɛ〕, 母音「オ」, 「ウ」の後では半狭母音の〔e〕, その他の位置では〔ɛ〕よりもやや狭い〔ɛ₁〕である。

(ヘ) 「ー」は長音の後半部〔:]を表わし, 「-」は半長音の後半部〔ː]を表わす。

(ト) カタカナの下に「。」は母音が無声化または消滅していることを表わす。この記号は時に「ささやき声」をも表わす。

(チ) カタカナの上に「ー」はアクセントの山を表わし, その部分が記号のない部分よりも高発話されることを示す。ただし, 文節ごとの分

かち書きであるため、文節と文節の間の横線の切れめは高さの変化を示すものではない。例えば「ミヤノ ショ ガイ ヤッタンサ」(客の裏にやったのさ)では「ミヤノ」と「ショ ガイ」は同じ高さであることを表わしている。また、文字化資料に付された符号は派生アクセント節(二つ以上の基本アクセント節からなるアクセント節。基本アクセント節はほぼ文節や語に相当する。)につけたものである。これは、日常の会話が文単位で発話され、文節ごとにくぎって発話されるわけではないという事実からの当然の帰結である。

(リ) 文末あるいは文節末の「↑」、「↓」は上昇調 下降調を表わす。平板調は特にアクセント記号と区別しなかったが、例えば「へー。」などというのは平板調である。「^」はいったん特に高くなってから後下降することを表わす。

C. 話者・録音環境など

1. 録音年月日

昭和50年8月15日

2. 録音場所

群馬県利根郡利根村大字追貝861番地。小林弥太郎氏宅。

3. 話し手の氏名・性・生年・職歴・居住歴・言語的特徴など

小林弥太郎 (男)

現住所 群馬県利根郡利根村大字追貝

生年 明治40年12月6日

最終学歴 東村尋常高等小学校卒

兵歴 なし

職業 農業, 神主

言語的特徴 方言をよく保有している。

小林与志恵 (女)

現住所 群馬県利根郡利根村大字追貝

生年 明治41年7月19日

最終学歴 東村尋常高等小学校卒

職業 農業

結婚 昭和1年旧東村大字千鳥から旧東村大字追貝に嫁す。

言語的特徴 方言をよく保有している。話し好きで聞いたことについても直接話法を使って臨場感あふれるように話す。

星野 富司 (男)

現住所 群馬県利根郡利根村大字追貝

生年 大正9年1月27日

最終学歴 青年学校本科卒

兵歴 昭和15年12月25日出征 昭和21年6月15日帰還。

職歴 農業（自営）

言語的特徴 方言を比較的よく保有している。説明文では詳しい注釈が
つくためにはさみこみが多い。

小林 喜市

現住所 群馬県利根郡利根村大字追貝

生年 昭和15年11月10日

最終学歴 群馬県立利根農林高等学校卒

職歴 農業

主な役職（公職） 利根村議任職中

言語的特徴 年齢にみあった方言保有度。共通語と方言の使いわけに習
熟している。

4. 録音環境

①同席者

上記話し手の他、調査者上野勇、お茶の接待に小林喜市氏の妻、録音
担当者杉村孝夫が同席。

②話の進行状況

あらかじめ用意しておいた話題（昔の生活、遊戯、旅行、天候など）
を小林喜市氏が進行役を務め、話題の提供をおこなった。しかし、かな
らずしも用意された話題ばかりではなく、関連して出てくる話題につい
ては自由な進行にまかせた。

③場の雰囲気

小林弥太郎氏と小林志忍氏は夫婦、小林喜市氏はその息子。星野富
司氏は近所の人である。星野氏に小林氏宅までご足労を願った。

時計、風鈴、テレビなどはすべてとめた。窓も閉じ、外からの雑音を
遮断しようとしたが、鳥の声、自動車の音などが時々聞こえる。

夏の午後の一時、茶を飲みながらごやかに話が進行した。

④録音機・テープ

ソニー オープンデンスケ，19 cm/秒

1 雨乞と天気祭

A 小林弥太郎 男 明治40年12月6日生

O 小林よ志恵 女 明治40年7月19日生

T 星野 富司 男 大正9年1月27日生

K 小林 喜市 男 昭和15年11月10日生

K イママデニワ アレダネー オトトシガ ヤッパリ コーアッタノ
 今までには あれだね、 - 昨 年 が ヤ は リ この よう な 状 態
 アッタンカイ。⁽¹⁾
 だったのがね。

T アー オトトシワネー トーモロコシガ ヨレタネー。⁽²⁾
 - 昨 年 は ね、 玉 蜀 黍 が 枯 れ ち ょ う に な っ た ね。

K ヨレタイネー。(間) ズーット ムカシモ ソーインガ アッタン
 枯れちよになったね。 ずっと 指 も そ う い う こ と が あ っ た の
 ケア。⁽³⁾
 がい。

A ムカシダッテ アッタヨ。アマゴイ スルッテ テンギマツリ ス
 昔 だ っ て あ っ た よ。 雨 乞 を す る と 言 っ た り、 天 気 祭 を
 ルナンテ ユッタカラ。
 す る な ど と 言 っ た か ら。

0 アマゴイ シタリ テンキマツリ シタリ オーサーギ ヤッタヨ
雨乞を したり 天気 祭を したり 大 馬鹿 ぎを したよ。

ー。

A テンキマツリー ズイブン ヤッタヨ。
天気 祭を 随分 やったよ。

T ムカシノガ シンコクダッタヨードネ。
昔の方が 深刻 だった ようだね。

A シンコクダッタイナー。ハー コノクレー (° ムカシワ) スレバ
深刻 だった よな。 もう このくらいに (昔は) なれば
ハー ホントニ アマゴイ スペーナンテ オーサーギダイナー。
もう 本当に 雨乞を しようなどヒ 大騒ぎ だよな。

0 ムカシワ ムギコムギ ウント (° ソーイエバネー。) ツクッタカラ
昔は 大麦 小麦を たくさん (そういえばね。) 作ったから
サー。(° ソーイエバ コナイダ イッテタヨ トモジューサンガ)⁽⁴⁾
さ。(そういえば このあいだ 言っていたさ 友じいさんが)
ムギコムギガ ハエルクエンテ テンキマツリ シナケリヤ ド
大麦 小麦が 生える っていうので 天気 祭を しなれば
ージョモネッテ テンキノ ビリビリ シテルノニ ミノカサデ⁽⁶⁾
どうしようもないと 天気が ビリビリ しているのに 蓑 笠 で
アノー ヤルンサネー。
やるんさ ね。

T アノー イチバン ヤルンガ ヒラガノ オフドーサマネ。(° シ
ー 巻 やるのが 平川(地名)の お不動様 だね
ー。)(° ソーサー。) オフドーサマー ミズン ナケー イレルト
(そうさ。) お不動様を 氷の 中へ 入れると

アメガ フルツチュー ワケデネー。

雨が 降るという わけでね。

A アメガ フルナンテ。

雨が 降る などと。

K ヨク オバーガ アレダネンカ。オレンチニ アル オフドーサマ

よく おばあが あれではないのガ。俺の家に ある お不動様に

ニ ミズ カケテタ。

水を 掛けていた。

O オラー ヨクヨクダラ ショーガネーガ アノ ハイリックチニ

私は よくよくなら 仕方がない が、 入口に

オフドーサマが⁽⁷⁾ アルバー。アレー ソソノ ホーカラ ダンダン

お不動様が あるだろう。 あれに 裾の 方から だんだん

カケテ シメーニャー アタマツカラ バジャーント⁽⁸⁾ カケルン

【水を】掛けて はいには 頭から バジャンと 掛けるの

サ。ソースト マー ハー サツツァ アキテツカラダカラ フル

さ。そうするに もう さんざん 飽きてからだから 降る

(聞) トキニ ナルダカモ ワカンネーケド フルヨ。

ときに なるんだかも わからないけれども 降るよ。

K ヒラガノ オフドーサマワ ナニ アノ ゴホンゾンオ ツケルン

平川の お不動様は なに ご本尊を 【水に】漬けるの?

(^Oタキー) (^Tタキツボ イレル ワケ。) アノ タキツボ イレ

(滝に) (滝壺に 入れる わけ。) 滝壺に 入れる

ル ワケノ。

わけ?

T シ↓。

うん。

$$0 \quad \frac{\overline{A} \vdash \quad \overline{A} \vdash}{\text{後} \quad \text{後}}.$$

A $\overline{A}B \quad \overline{A}B$ 。
後 後

ト アトカイ。
後かぬ。

A バーサマト ユッ タダモノ ナー。(0 アー ヤッ パリ フラーッテ ユ
ばあさまと 言ったのだものな。(ああ ヤッぱり 降るな と
ッ タン。) ヤッ パリ アメガ フラーチュッテ カジノ アトニ ア
言ったの。) ヤッぱり 雨が 降るなと言、て。火事の 後に 雨
メガ フンネート マタ カジガ アルゾィ チュッ タラ フッ タナ
が 降らないと また 火事が あるぞと言ったら 降ったな
ー ナンテ。 フッ タン。(0 ダ ガラ アノ マエノ ヒニ モノ アレ
などと。 降ったのだよ。(だから あの 前の 日にも) あれが
ガ フッ タ ギリ テ イッ コ フラ ネン ダ。
降った さりぐ 【その後】まったく 降らないのだ。

k アノ マエノ ⁽¹²⁾ ヒ カ カジガ アルト イツモ ⁽¹³⁾ フ アメガ フ
 あ の 前 の は , 又 事 が ある と い つ も 雨 が
 ル ッ チ ュ ノ ワ オラ ハジメテ ⁽¹⁴⁾ キ ー タ ヨ 。
 降 る と い う の は 俺 は 初 め て 聞 い た よ 。

T ムカシカラ ュッテルダ。(A ムカシカラ ュツタダ。) (J カジガ)
 昔 かし 言っているのだ。 (昔 から 言ったのだ。) (火事が)
 カジガ アルト アメガ フル。
 火事が あると 雨が 降る。

0 カジガ[〃] フッ テサ^ー アノ^ー カジガ[〃] アッ テ ミッ カイナイニ
 皇2 火事が[〃] 火事が[〃] あって 三日 以内に

アメガ フンネート (T マタ アル。) (マタ アル。) マター アト
雨が 降らないと (また ある。) (また ある。) また 後を

ー ヒクッテ ユーン。(A ソーイコトー イッタ。) ソーシタラ ア
引くと 言うの。(そういうことを 言った。) そうしたら

クルヒ フッタデ (A フッタン。) コリャー ヨカッタッテ ジーサ
明る日 降ったから (降ったの。) これは 良かったと じいさま

マバーサマデ ハナシタンサ。

ばあさまで 話したのだ。

K アクルヒ フッタカナー。

明る日 降ったかな。

T アー ソカ チョット フッタダネ。

ああ どうか ちょっと 降ったのだね。

A チョット フッタ (T シー シー。) ナカラ フッタンダヨ。
ちょっと 降った (うん うん。) かなり 降ったのだよ。

T ナカラ フッタダ。(A コレダカラ) ニジスギダイネ。
かなり 降ったのだ。(これだから) ニ時過ぎだよね。

A シー。

そうだ。

T チョット フッテ マタ ソン ツギ。

ちょっと 降って また その 次。

A チョット フッテ ヌレックワ クレルナンチュデ オランチガ
濡れ 糸を【蚕に】やるなじし言うのじ 俺の叔が

(15)
オーヨメゴト。

大泣き。

K ソーソーソソソソ (16)

そう そう そうそう そうそう。

- 0 オーヨメゴトサー。(A ~~~~~) キーガ アクルヒー (間) ダカー (18)
大 泣 き。 喜 が 明くる日 , だから
ムイカニ フッタンサー。ナノカニ キーヤンゾガ アスコイ (K
六日に 降ったのさ。 七日に 喜達が あそへ、
ン。) アレダ カイスイヨクニ イグンデ (K ア ソダ ソダ ソ
あれで、 海水浴に 行くので (ああ そうだ そうだ そうだ
ダ ソダ ソダ。) ソイデ ムイカニ アノ オジーガ ハヤク イ
そうだ そうだ。) それで 六日に おじい が 早く
ゲバ イーンニ オソクッテ マー フリタッテカラ イッタカラ (19)
行けば 良いのに 遅くなって まあ 降り始めてから 行ったから
ビショヌレノ クワオ ウーント トッテ キタデ マーズ ア
びしょ濡れの 桑を たくさん 取って きたので まず ああ
(20)
コンラ コマツナー。 ソイデ キーヤンゾガ カイスイヨク
これは 出たな。 それで 喜達が 海水浴に
イッテル ウチニ オジーニ
行っている うちに おじい に
K モットモ ソレマデワ フッテ ナカッタンダイ。
もっとも それまでは 降って いなかったのだね。
T カッパピア イッタンダイ。(21)
カッパピアに 行ったのだね。
0 ソー。 カッパピア ジャネン。(A ニーガタエ) ニーガタエ (T ア
そう。 カッパピア ではないの。(新潟へ) 新潟へ (ああそうか
ニーガタエ。) ン イッタン。 ソノ マエノ ヒニ フッタン。 ダカ
新潟へ(行ったのだったのだね。)うん 行ったの。 その 前の 日に 降ったの。 だから
(22)
ー ムイカニ フッタンダ。
六日に 降ったのだ。

- O ジンジャ イッテ ジンジャ ノ キー アレシテ (K^ン-) ドンド
神社ハ 行ッテ 神社の 木を あれして (うん。) ビンビン
ン モシテサー。
燃やしてさ。
- K タイコナン⁽²⁷⁾ ハタイタジャ ネン。ヤッタジャ ネン。
太鼓 なんかを たいたいのではないの。 やったのではないの。
- O オラガチデ ク^クチョーノ ト^{xxx}シガ ソノ テンキマツリダッ tapp。
私の家で 区長の 年が 天気祭だ、たろう。
- K ハー ダカラ ナンネンマエン ナルンダ。
もう だから 何年前に なるのだ。
- T ンートネー。
ええとねえ。
- A ニジューハチネン。
二十八年だよ。
- K ジョーワ ニジューハチネンカ。
昭和 二十八年か。
- O ニジューハチネンニ ~~xxx~~ ク^クチョー シタン。
二十八年に 区長を したの。
- K ソレカラワ ゼンゼン ネン^ン。
それから は 全然【天気祭は】無いのか。
- A ソレツカラ イッコー ヤンネー。
それから 全然 やらない。
- K ソンナコトワ シナカッタイナー。
そんなことは しなかったよな。
- O ソレカラ テンキマツリッテ シネン。
それから 天気祭というのは しない。

T テンキマツリ シナカタネー。

天気 祭は しなかったね。

O アントキ サケダケ サキー ヤットイテ イガネー ッ チュンデ
あのとき 酒 だけ 先に やっておいで 【区長が】 行かないというので

マー コンダ クチョーガ イッタ トキヤー ハー モ ミス
まあ 今度は 区長が 行った 時は もう

ブロクニ ヨッパラッテ ミンナガ⁽²⁸⁾ ナタデ クチョー キットバ
へべれけに 酔っ払って 皆が。 金で 区長を 切りたおせ

セ オソク キヤガッタカラナンテ オツツアレ⁽²⁹⁾ ル サーギダツタ。
遅く 来やがったから などと しかられる 馬鹿だった。

(↑ヘー) アノ カミノ サトーゲンガ⁽³⁰⁾ (↑シー) ダーラ オレガ
上の 佐藤 源が だから 私が

オコッテ シモノ イチニ⁽³¹⁾ コトワリー イッタコトガ アル。
怒。マ 下の ーに こじわりを 言ったことが ある。

イックラ ヨッパラッタッテ クチョー ナタデ キットバスッテ
いくら 酔っ払っても 区長を 金で 切りたおすという

ユー イーグサガ アルカッテ。イチガ アヤマリー キタダッテ
言い草が あるかと。 ーが 謝りに 来たってよ。

ヨ。

K ダケド ドッチカッ チュエバ イママデ アレカネー テンキマツ
だけれども どちらかといえば 今まで あれがね、 天気 祭で

リ オフドーサマ ツケタナンテノワ アンマリ キカネーヤナー。
お不動様を 【滝に】 漬けた などというのは あまり 聞かないやね。

A ハ ユノゴロワ (↑ドーダローネー) サイキンナ⁽³²⁾ ヤンナク ナッ
もう この頃は (どうだろうね。) 最近 は やらなく

タイナー。

なつたよな。

0 サイキンワ ヤンネー ジャネーカ。

最近 は やらないのではないが。

T キー⁽³³⁾チャ⁽³⁴⁾ンナ ソー オボエワ ネーカナー。オレワ ナンカイカ
喜 ちゃん は それほど 覚えは 無いかな。 俺は 何 回 か
キータヨ。ヒラガーデ オフドーサマー タキツボ イレタカ
聞いたよ。 平川で お不動様を 滝壺へ 入れたから
ラ フルダローッテ。

【雨が】降るだろうと。

k ハー ハー。

そらがね。

0 オレガ 4ドリニ イル ジブンワ ヨク ヤッタンサナー。ダ
私が 千鳥(地名)に いる 時分は よく やったのさな。

ケド コッ^キチャー キテッカラ ハナレテルカラ ヤルカ ヤンネー
だけれども こちら【追貝】に 来てから 離れているから 【千鳥では】やるか やらないか

カ ムラガ 4ガッテルカラ ワカンネーケド。
村が 遠っているから めからないけれど。

A ムカシモノワ ホラ シンコーベー タヨリニ シテタカラ スグ
昔 者は 信 仰 ばかり 頼りに していたから すぐ

モー ハー テンキマツリ スベア アマゴイ スビャーナンテ
もう 天気祭を しよう 雨乞を しよう などと

ヤッタンダイナー。？ 4ョーサマエ モーシコンデ アマゴイ ス
やったのだよな。 区長様へ 申し込んで 雨乞を する、

ル テンキマツリ スルッテ ソノ タッピニ ヤッタンダヨ。
天気祭を すると その 度に やったのだよ。

O イッ コー ソノ カンケーノ ネー シトガサ コレー ジブンノ
 まったく 関係の 無い 人がさ これを、自分の
 ？チー (皆笑) ヤリテンデー (クアー ソーカー) ソレー ア
 ロ【飲過】を やりたいので (ああ そうか) それを
 レサー (クイー キッ カケモ アルカラナ) シー イー キッ カケ
 あれさ (いい きっかけも あるから な。) うん いい きっかけで
 デ ソレー シレバ コレガ ヤレルカラ。サトーゲンナンガ ソ
 それを すれば、これが やれるから。佐藤 源 などは
 レデ モー スブロクニ ヨッ パラッ テ。
 それで もう へべれけに 酔っ払って。

K モットモ ムカシワ ソーユ トキデモ ナキマー ナカナカ イ
 もっとも 昔は そういう 時でも なければ、 なかなか
 マミテーニ バンジャクダトカ ソーユノモ スクナカッタダッペ
 今のようには 晩 酉だヒガ そういうことも 少なかつたろう ^{重1}
 カラネー。
 からね。

T ナカッター スクナカッター。
^{重1} 無かつた、 ^{重2} 少なかつた。

O ソイデ ナター フリアルッター アブナカッタシテ ソイデ ソ
^{重2} それで 金巻を 振りあるいたりして 通なかつたので それで
 ノ トシガ ホラー イマワ シューカイジョデ ショーボー ナ
 その 年が ほら 今は 集会所で 消防の
 ニ シルケド ？チューデ ヤッタッペ。ダカラ ソントキ オレ
 何を するけれど【その当時は】区長で やつたろう。 だから その時 私が
 ガ アノー サケノ ヤドワ ⁽³⁶⁾ スルケド テンキマツリ トキ ミ
 酒の 宿は するけれども 天気祭の 時の

タヨ-ニ ナター フリアルッ ター ソレ ユー コトワ⁽³⁷⁾ ゴメン
ように 鉈を 振りあるいたり そのような ことは 御免

ダカラッ チューデ ブンダンチョーニ オコトワリ シタダッ タイ。
だからというので 分国長に お断りを したのだったよ。

ソシタラ コンド キオツケマス⁽³⁸⁾ ナンテ ユーンダッ チュワ。
そうしたら 今度は 気を付けます なじむ 言うのだそなたよ。

K ダー ヒトツワ ソーユー アレダネ アツイ ジキノ ヤッパ
だから ひとつは そういう あれだね 暑い 時期の やはり
リ ナンカネ セーカツ シテグ ナカデノ コラ ナンチュンダ。
何かね 生活 していく 中での これは 何というのだ。

タノシミ ミテーナンモ フクマレテ (↑ソー ナッタンダネー。) ナ
楽しみのようなことも 名まれて (うん、 なったのだね。)

ッタンダネー。ヤッパリネー。
なったのだね。 やはりね。

O ハヤク イエバ ナンニモ ゴラクガ ネーカラ。(↑ソーダネ
早く 言えば 何も 娯楽が 無いから。(そうだね。)

一。) ゴラクッ チュンダカ イヤンッ テ⁽³⁹⁾ ユンダカネー。ソンナヨー
娯楽 というのはか 慰安と いうのだかね。 そのような。

ナ。

T デモ ムカシワネー。ムカシワータッ テ マー センパイガ イル
でも、 昔はね。 昔はと云っても まあ 先輩が

ンダカラサー (A.O. 笑) オレガ ムカシッ テ コター ネーケドサ
いるのだからさ 俺が 昔という ことは 無いけれどもさ。

一。⁽⁴⁰⁾ オレヨリ ムカシガ ツエンダカラ。⁽⁴¹⁾ ソレデモ コーユ キセ
俺より 昔が 強いのだから。 むふでも こういふ

ツ キセツニネー アノー ハルゴガ⁽⁴²⁾ スンデ コムギカリ スム
季節 季節に ね 春蚕 が すんぞ 小麦 メリ が すむと

ト ヒトキマリ ツイテ チョット イキ ツク マガ アッタイ
ひときまり ついて ちょっと 息を つく 間が あったよね。

ネー。(^Kソー ソー ソー ソー) イマジヤ ノベツマクナシ
(そう そう そう そう。) 今では のべつ まくなしに

ユキノ フルマデネー (皆笑)。

雪の 降るまで ね。

0 イマワサー イロイロ ツクルカラサー。(^Tソーダネー) ムカシヤ
今は さ、 いろいろ 作るから さ。(そうだね。) 昔は

ー シューコ⁽⁴³⁾ カウ シトモ タント ナカッタン。クワガ イタ
秋蚕 を 飼う 人も たくさんは いなかった。桑が 痛む

ムッチュンデ。ハルゴ カッダケダッペ。(^Kシー) ソイデ エ
というので。春蚕 な 飼っただけだろう。(うん。) それで

ダマメツチュナ イッサイ ツクンネーシ トーモロコシモ アレ
枝豆 というのは 一切 作らないし、 玉蜀黍 も

ダッペ ジブンデ クーダケシカ ツクンネン。(^Tンマノ⁽⁴⁴⁾ エサ
あれだろう、 自分で 食うだけしか 作らない。(馬の 飼と)

ト) エダマメジャー ネンダモノネー。(^Tエダマメジャーネーヤ
枝豆 では ないのだからね。(枝豆では ないよね)

ネー。(^Aエダマメワ⁽⁴⁵⁾ ネーダ。) ソダカラ ヨーガ ナカッタンサ。
(枝豆は ないのだ。) そうだから 用が 無かったのさ。

A ダカラ ムギコムギガ カタズイテ マメー キッカケガ オイレ⁽⁴⁶⁾
だから 大麦 小麦 が かたづいて 大豆の 砂寄せが 終われば

バ ソイデ ヒトツキリ ヒマダッタモノ。
それで 一時期 暇だったもの。

T ヒトッ キリ ヒマダッ タイネー。

一時期 日暇 だったよね。

A シー。ソイデ クサトリモノーデ マメン ナカエ クサトリー。

うん。 それで 草取 仕事 で 豆の 中へ 草取り。

O イマー ハー ソレガ ソー ジャ ネンダイ。イロイロ ハルゴ

今は もう それが そうでは ないのだね。 いろいろ , 春蚕 を

カッテ シュー コー カッテ バン⁽⁴⁷⁾ シュー カッテ ソノ アイサ
飼って 秋蚕 を 飼って 晩秋 を 飼って その 間に

ニ エダマメダー トマトダノネー。(「 トーモロコシカラネー。)

枝豆や トマトだね。(玉蜀黍 からね。)

トーモロコシ⁽⁴⁸⁾ダカラ テーンデ。

玉蜀黍 だから とも。

A ダカラ ソノ カン イッ ショ ケンメーニ クサカリバー セッセ

だから その 間 - 生 懸命に 草刈 はかり セッセ

セッセト ヤッテタンサ。

セッセと やっていたのさ。

O ノベツマクナシ。

のべつ まくなし。

T ソーダイナー。

そうだよな。

注

1. 「コーアッタノ アッタンカイ」 「雨が長く降らない状態だったのかね」の意。「コーダッタノ ダッタンカイ」とも聞こえる。無造作な発音。
2. 「ヨレタ」乾燥した。枯れる寸前になった。
3. 「アッタンケャ」 [attanjkeæ] 終助詞「カ」 + 「ヤ」の融合形。
4. 「トモジーサン」 友吉 (人名) + じいさん。
5. 「ムギコムギガ ハエル」刈り取った大麦・小麦が乾燥できないと芽が出てしまう。
6. 「テンキノ ビリビリ シテルノニ ミノカサデ」 天気が良くて日がカンカン照っているのに、雨が降るようにと願って蓑笠姿で雨乞をする。なお、この発話は途中でぬじれており、「ドーショモネッテ」までは天気祭に関して、その後は雨乞に関して述べられている。
7. 「オラー …… ショーガネーガ アノ …… アルベー」 OはKと別の内容の発話をKと重複しておこない始めたが、それを「ショーガネーガ」までで言いさし、Kの発話に応じた内容に切り替えた。
8. 「バシャーント」擬態語で表情音 (母音[a]を無声化させている)。
9. 「ソレカラ」早口で曖昧。
10. 「アメ フッタツケ」早口で曖昧。
11. 「スットキ」曖昧で意味不明。
12. 「マエノ ヒ」早口で不明瞭。
13. 「フ」 [fɯɾɯ]。言いなおしのために通常あらわれない子音の後の休止がみられる。
14. 「キータヨ」 [ki:təjo]、無造作な発音。
15. 「オーヨメゴト」大世迷言。ただし、大いに困ったの意。「ヨメーゴト」は泣き言、千葉県香取郡と『分類方言辞典』にのっている。
16. 「ソーソーソソソソ」徐々に低く、弱く発音されている。
17. 「キーガ」 「キー」は人名、喜市の略。
18. 「ダカー」 [ɖakaɾ] ダカラの弱まり形。
19. 「フリタツテカラ」 [ɾɯ] の音は弱く、「ウイタツテカラ」のよう

にも聞こえる。

20. 「コンラ」「ユラー」の言い誤り。
21. 「カッパピア」遊び場のあるプールの名前。
22. 「ダカー」ダカラの弱まり形。
23. 「ソーダッペー」急押し。
24. 「アレダペ」「aredapコ
25. 「テンキマツッテナ」無造作な発音。「テンキマツリッテノワ」はより丁寧な形式である。
26. 「テンキマツリワー」雨乞の方ではなく、天気祭の方とは強調した発話のために「リ」にふたつめのアクセントの山ができています。
27. 「タイコナン」無造作な発音。「タイコナンカ」はより丁寧な形式。
28. 「ズブロクニ ヨッパラッテ ミンナガ」「皆がへべれけに酔っ払っる」の倒置法。
29. 「オツツァレル」〔O ttsayeru〕とも聞こえる。〔r〕の発音のための舌の持ち上がりは少なく、舌背が軟口蓋に近づいて摩擦をおこなっている。
30. 「サトーゲンガ」「サトーゲン」は人名、佐藤源次の略。
31. 「イチニ」「イチ」は人名、高橋一郎の略。高橋氏は佐藤源次氏の兄。
32. 「サイキンナ」「最近は」の連声形。
33. 「キーチャンナ」「キーちゃんは」の連声形。
34. 「オボエワ ネーカナー」「記憶にないかな」の意。
35. 「コレガ ヤレルカラ」杯を持つしぐさをしながら。「酒が飲めるから」の意。
36. 「サケノ ヤド」人が集まって酒を飲むときに提供する会場。
37. 「ソレ ユー コト」「ソレワ」と言いかけて「ソーユー」と言いなおそうとして「ソー」の部分の先に言いかけた「ソレ」で代用した。
38. 「ソシタラ コンド キオツケマス」。。。の部分はささやき声。
39. 「イマンッテ」「～と言う」の意の「ッテ」は撥音の後にもあらわれる。撥音の後に足音が続く音節構造が存する。例外的。

40. 「オレガ ムカシッテ コター ネーケドサー」この部分はA. D
の笑いと重なっている。
41. 「ムカシガ ツエンダカラ」 「昔のことをよく知っているから」の
意。「酒が強い」と同じ構造の表現。
42. 「ハルゴ」五月上旬掃立の蚕。
43. 「シューコ」七月下旬掃立の蚕。
44. 「ンマノ」[mmano]、撥音が形式の頭位に立っている。
45. 「サ」[sa]文末の弱まり形。
46. 「キッカケ」中耕。砂をすくって豆の木に寄せる作業。
47. 「バンシュー」 「晩秋蚕」のこと。八月下旬掃立の蚕。
48. 「トモロコシダカラ」 「玉蜀黍も作るのだから」の意。

養蚕に関しては『群馬県の養蚕習俗』群馬県教育委員会事務局、昭和
47年3月を参照。

2 壮健芝居

A 小林弥太郎 男 明治40年12月6日生

O 小林よ志ゑ 女 明治40年7月19日生

T 星野 富司 男 大正9年1月27日生

K 小林 喜市 男 昭和15年11月10日生

A ダカラ ソノ ジブン ヒマダカラ シバイマ スビャー シバイ
 だから その 時分 暇だから 芝居屋 しょう , 芝居屋
ヤ カッテ クビャー ナンテ (^Kソーダネー) ワケーシワ ワケ
 買って こう なじと (そうだねえ。) 若衆は
ーシデ ソーケンシバイマ ブツベージャ ネーカナンテ ソイデ
 若衆ぞ 壮健芝居屋 しょうではないかなじと そうして
ヤッ タンダヨ。
 やったのだよ。

K ソーケンシバヤッ テナ
 「ソーケンシバヤ」というのは【何】?

A ソーケン。
 壮健。

K ソーケンチュナ。
 「ソーケン」というのは【何】?

A ソーケンチュナ ニジューゴカラ ウ——⁽⁴⁾ サ_{xxx} サンシジューマデ
 壮健というのは 二十五から ええと 三・四十までの

ノ ワケー テガ。 チューネンノ ソー。
 若い 連中が。 中年の 壮。

K アー ソカ ソカ。
 ああ そうか そうか。

A ソーシノ ソー。 ケンダ。 タテルダ。⁽²⁾ (↑ソー。) ソーケン。 ハー
 壮士の 壮。 「ケン」だ。 建てるだ。 (なるほど。) 壮健。

ドーシテ イセーガ ヨカッタナダ。 オラガ ジーサマナンゾガ
 どうして 威勢が よかったのだ。 俺の じい様などが

イセ イセーノ イー トキワ ドーシテ ソーケンシバヤ スビ_{xxx}⁽³⁾
 威勢の いい 時は どうして 壮健芝居屋 しょう

ーナンテ。 ソイデ ミンナ カク ムラムラテ⁽⁴⁾ ハナー サケー
 などと。 それで 皆 各 村々で 花に 酒を

イットーダナンテ オラーホーエモ イットー アゲ_{xxx} アゲロナン
 ー斗 だなどと 俺の おへも ー斗 あげる などと

テ ドーシテ エラーイ⁽⁵⁾ サーギダッタ。
 どうして えらい 馬騒ぎだった。

K アー ソレー アゲテ ソレ オワッテ ウチアゲテ⁽⁶⁾。
 ああ それを あげて、 それを 飲って 打ち上げて？

A ソーサー。
 そうさ。

O ソイデ ミンナ カク ムラ_{xxx}デ アノー ウチデ ミンナ セキハ
 それで 皆 各 村で、 あの 歌で 皆 赤飯と

ン タイテサー キタ シトニ ミンナー オキヤクニ セッタイ
 炊いてさ、 来た 人に 皆 お客に 接待

シテ ヒラガーカラ キタ トキ ^{xxx}カミ コーゴロ ⁽⁷⁾ (T
 して 平川【地名】から 来た とし 上の 鴻五郎

コッ ⁽⁸⁾チー キテカラダイ。 コーゴローノ アスコニ (A コーゴロー
 (こちら【追分】に 来てからだね。) 鴻五郎の あそこに (鴻次郎の
 ノ トコロデ) ⁽⁹⁾シ コーゴローノ アスコニ アッタ トキデ ⁽¹⁰⁾
 所で) うん、 鴻次郎の あそこに あった ときぞ

*
 ~~~~~

A アレガ サイゴダッタカシンネーナー。オラガホー ジャ ソーケン  
 あれが 最後だったかしれないな。 俺の方では 壮健

シバイヤチュノ。テヌグイマデ ソメヌイテ テヌグイマデ ソー  
 芝居 居 居というのをやったのは。 手拭まで 染め抜いて、 手拭まで 壮健

ケン オッカイソーケンチュ イデタチオ シテ (0 ハナー シタ  
 追 兵 壮健 いう 出で立ちを して (花を した

シトニ ユー <sup>(8)</sup>クバツ) ハナー シタ シトニ ハナゲーシ (0  
 人に こう 配 ) 花を した 人に 花返し。

ハナゲーシ)。  
 (花返し。)

K イツゴロダヨ ソレワ。  
 何時頃だよ それほ。

T ハー。  
 なるほど

A <sup>(9)</sup>ンー。  
 何だって?

K イツゴロ。  
 何時頃?

O サー オレガ (A イツゴロダッ ペナー→) マダ オレガ トーカ ジュ  
 さあ、私が (何時頃だろうな。) まだ 私が 十【歳】か  
ーニサン トキジャ ネーカナー。

十二・三の ときではないかな。

A オラナンドガ コドモノ ジブンダカラ ズイブン、  
 俺などが 子供の 時分だから ずいぶん

O ジューニサングレー ダカシンネー。

十二・三【歳】位 だか しれない。

T ダモノ マダ オボエワ ネーヤネー。(6)

それだもの まだ 覚えは 無いやね。

A オボエワ ネー。

覚えは 無い。

O ウマレネーモノー オメー (11) ジューサン チッ チェンダモノ。

生まれないもの、 おまえ、 十三【年】 小さいだもの。

T オボエワ ネーヤネー。

覚えは 無いやね。

K ソーケンシバイヤナンチューナー コレニモ ノッテネーヤナー。

壮健 芝居屋などというのは

これにも

載っていないやな。

ソ ソンシニモ。

xxx

村 誌にも。

O スンナノ ネカッパー。 ソレツカラ オレガ ジューシゴン ナッ

そのようなものは 無いだろう。 それから 私が 十四五【歳】に

テツカラ (A ハ ドーシテ) チドリデサー。 アノー タメツコワモ

な。それから

( どうして【どうして】 ) チ鳥でさ。

タメツハ、闇物の

(13) ノ ウラデ アノ イマノ ミサガ (14) オヤジノ ゼーアニーガ (15) シ

裏で

今の

美左の

親父の

善あにい が

ンゼカギシバイダイ。(16) (間) ヤッタッタイ。

身代限 芝居 だよ。 ヤったこがある。

K ソラー ナニ イツゴロ ヤルン。

それは 何時頃 やるの？

A イマゴロー ヤルノサ。ハー マメカリ アレガ オエテ<sup>(17)</sup> シュー

今頃 やるのさ。もう 豆刈, あれが、終って 秋蚕が

コガ オエテ (↑ アー マメノ サクキリが<sup>(18)</sup> オワッテ。) マメワ

終って (ああ, 豆の さくきりが 終って。) 豆は

サクキリワ オワッテ (↑ ヒトイギマ ツクトネー。) (K アー)ク<sub>xx</sub>

さくきり は 終って (一息 つくヒね。) (なるほど。)

サ<sub>xx</sub> クサムシリワ オイルシサー (K シー) チョード ヒマナンダ

草取り は 終るしさ (うん。) ちょうど 田段なんだよ

ヨ ドコダッテ。

どこでも。

K スト<sup>(19)</sup> ハチガツノ チュージュンゴロ<sub>→</sub>。

そうすると 八月の 中旬頃がね。

A チュージュンゴロ。

中旬頃。

O シー ハチガツノ チュージュンカラ クガツー マー サブク

ん, 八月の 中旬から 九月 まあ 寒く

ナンネー チョード マー イー ジキダナンチュ。

ならない ちょうど まあ いい 時期だなどという。

A マーダ マメカリワ ネーシ イッコ<sub>xxx</sub>ー イ<sub>xxx</sub> ホレコソ<sup>(20)</sup> ヨーワ

まだ 豆刈は 無いし まるきり それこそ 用は

ネーシだ。

無いのだ。

O ママタアタリカラ テングレンチューノ (↑ヘー。) (Kタノンデ↓)  
 沼田 [地名]あたりから 天狗連中の (へえ。) (頼んでかぬ。)

タノンデ キテ。

頼んで 来る。

K ソデ<sup>(11)</sup> ドコデ ヤッタン バショワ。

それで どこで やったのかね、場所は。

A バショワ ドコッチュワ ネー。ソノ バショニ ヨッテ。

場所は どこということには 無い。 場所に よって。

K ジンジャトカ ソーイ トコジャネン。

神社とか そういう 所ではないのか。

A ジンジャデ<sup>(22)</sup> ヤ

神社で

O カーラデ カーラヨーノ コイガ ブテオ キズイテサー。<sup>(23)</sup>

河原で 河原用の これが 舞台を 築いてさ。

A ソーラ ヨーイジャ ネンダイ ミンナ ホソキー カエツイテ<sup>(25)</sup>

それは 容易では 無いのだよ 皆 細木を 担いで

コーユニ ミンナーシテ ヨシズー ハッテサー ブテツフルン

こういう風に みんなで 葎簾を 張ってさ 舞台を 作るのだ

ダモノ。

もの。

K ヘー。

へえ。

O タニジューノ テガ ミー クルダカラ (Aタニジュー) デーッケー

谷中の 連中が 見に来るのだから (谷中) 大きい

スイデ アスコマデ ニジューマデ ツフルダカラ。コー メグ

それで あそこまで ニ重まで 作るのだから。こう

リジュー コーニ。(<sup>ク</sup>アーソーカ) ソイダカラ ドーシテ <sup>xxx</sup>ダ サ  
回り中 こうに。(ああ そうか。) もれどから どうして『どうして』

ジキ (<sup>ウ</sup>サジキセキ ツクルダ イワユル) ダカラ サジキガ オ  
機敷 (機敷席を 作るのだね、いわゆる。) だから 機敷が

ッ タナンテ ユーダカラ。ミーシミテ サジキガ オチルンサー。

落ちたなびと 言うのだから。大勢のつて 機敷が、落ちるのさ。

サジキガ オッ タナンテ サーギ アッ タッ ペ。ダカラ ソレヨリ  
機敷が 落ちたなびと 馬蚤ぎが あったろう。だから それより

メーガ ハタヤノ カンバテーニ ムカーシ アッ タンネー。オ  
前が 幡谷(地名)の 上幡谷 に 昔 あったね。

ラガ ヤット オボエル <sup>ウ</sup>ジブン。

私が やって 覚える 時分に。

T ヘー。

へえ。

K ジーナンカ ジューサンチューカ タイジョー キューネンゴロテ

じい なびが 十三(歳)というが 大正 九年 頃で

オワリカー。ソイジャー。

終りが。 それでは。

A ソノ ジブンダナー。

その 時分だなあ。

K ソダナー。

そうだなあ。

A シー。

ん。

K ソラ ナニ トシワ

それは 何、 年 齡は?

A ソーケングミツチュナ ハー ワケー イマデ イエバ セーネン  
壮健組といるのは 若い、今ど 言えば 青年

カイノ ワケダイナー。

会の めけだ な。

K ワケーシ セーネンカイノ ワケカ。

若衆、青年会の めけか。

O オッカイワ ソーダカモ <sup>(28)</sup>

追 奥は そうだかも

A セーネンカイヨリヤー ソノカーシ トシガ オッキークド。

青年会よりは そのかわり 年が 大きいけれど。

K デッケー テーマデ ハバガ ヒロカッタン。

大きい テーマで 幅が 広がったの【だね】。

A ソーダカラ ハバガ ヒレーカラ。

それだから、幅が 広いから。

O ヒラガアタリワ モ モヨリノ シトサーネー。

平川 あたりは 最寄の 人さね。

A アー エライ コトダ。

そうそう たいへんな ものだ。

K ソラー アレダ ワ ワケーシ オトコモ オンナモダッ タダッ ペ

それは あれた 若衆、男も すも だっただろう

ソラ。

それは。

A オトコッ キリサ。

男だけさ。

K オトコッ キリダッ タダ。

男だけだったのか。



O オトコ<sup>ニ</sup>ンガ ヤッ<sup>ニ</sup>タンサ。

男衆が やったのさ。

K ジャ オンナシワ イッ<sup>ニ</sup>ショケンメ ジャー セキハン タイタリ  
では 女衆は 一生懸命 では 赤飯を 炊いたり  
アレ シタダ。

あれを したのだね。

O シー<sup>ニ</sup> セキハンダキ。

うん 赤飯炊き。

K ソーイ セッ<sup>ニ</sup>チョーダ。

そういう めんどろなのだね。

A ハー ミンナ ハナー シテ ミンナ ソーケン アレダ (〇ミ  
皆 花を して 皆 壮健, あれだ

ンナ ダカラ テヌグイ アレ シナクッ<sup>ニ</sup>チャー ケーサナクッ<sup>ニ</sup>チャ  
(皆 だから 手拭を あれ しなくては , 返さなくては

ナンネーカラネー。) サケー ミンナ ダシテ カッ<sup>ニ</sup>テ キ<sup>ニ</sup>テ カ  
ならないからね。) 酒を 皆 出して 買って きて

ッ<sup>ニ</sup>テ ダカラ ナシー イッ<sup>ニ</sup>テ コナク<sup>ニ</sup>チャ ナンネーツンデ<sup>ニ</sup> ミン  
買って だから 返しに 行って こなくては ならないというので 皆

ーナ アレサー ハナー スルダッ<sup>ニ</sup>タイネー。

あれさ , 花を するのだったよね。

K シー<sup>ニ</sup>。

なるほど。

A ソノカーシ マタ オーヨーデ ヤレバ<sup>(29)</sup> オーヨーデ ヤレ<sup>ニ</sup>ァ オ  
そのかわり また 大楊(地名)で やれば , 大楊で やれば

ッ<sup>ニ</sup>カイノ テガ ソーケングミテ<sup>ニ</sup> マタ サケ イッ<sup>ニ</sup>トーダラ イ  
追員の 連中が 壮健組で また 酒を 一斗なら

ットー アゲルンサ ホイデ ソノー ソースリャー サケナンゾ  
ー斗 あげるのさ それで その そうすれば 酒 もど

イッ トー アゲリャー モー ダカラ オッカイノ ソーケンセ  
ー斗 あげれば もう だから 追貝の 壮健席

キ スイタ セキ トットイテ ソーシテ ドーシテ ドンチャン  
敷いた 席を 取っておいて そうして どうして【どうして】 ぶんちゃん

サーギダイ。シバイン ナケー サケー モチコンデ。ムラジュー。  
騒ぎだよ。 芝居の 中へ 酒を 持ちこんで。 村中【の人が】

0 <sup>(30)</sup>シーナ <sup>(31)</sup>ムラジュー ネコサーナー (A シー↓ネコダー。) ミシーナ  
皆 村中 めらむろさな (そうそう めらむろだ。) 皆  
ネコー ダシテ スイテ。  
めらむろさ 出して 敷いて。

K マ ソレガ ナツノ ユイーツノ タノシミダッ タダッ ペネー。  
まあ それが 夏の 唯一の 楽しみ だった だろう ね。

T ムカシノ シトノネー。(間) イマミテニ ゴラクガ ナカッタカ  
昔の 人の ね。 今の ように 娯楽が 無かった  
ラネー。  
から ね。

A ゴラク ナカッタ。  
娯楽は 無かった。

0 イマー ハー ガシキー テレビガ アルシネー。アレダカー ソ  
今は もう 座敷に テレビが あるし ね。 あれたから  
ーイ コター アンマリ スタイタケドサー。エーガニモ アンマ  
そういう こゝは あまり 腐れたけれじさ。 映画にも あまり  
リ イガネー イマネー。  
行かない、 今は ね。

T マダ カツドーシャ シンナンテ ユー ジダイジャ ネンカイ。  
まだ 活動写真 なビレ いう 時代 ではないのかね。

K 笑

O ソーソー カツドーシャ シン。  
もうそう , 活動写真 。

T ナッタ トコカイ ゲントーカイカラ。  
なつた ところか ね , 幻 燈会 から 。

O カツドーシャ シンモ ナカッタッペ。  
活動写真 も <sup>重1</sup>無かったろう。

A マダ ナカッタッペ。ゲントーカイガ<sup>(32)</sup>  
<sup>重1</sup>まだ <sup>重2</sup>無かったろう。 幻 燈会 が

T ゲントーカイカイ。  
<sup>重2</sup>幻 燈会 かね。

A ゲントーカイダッタッペ。  
幻 燈会 だったろう。

O ゲントーカイ。  
幻 燈会 。

T ソーダネ オレ コドモノ ジブンニ アノー カイゾージニ<sup>(33)</sup>  
そうだね、俺は 子供の 時分に あのう 海蔵寺に

O カイゾージニ アッタッペー。  
海蔵寺に あったろう。

T シン ゲントーカイ ヱチュンガ アッテ (<sup>0</sup>オラー ヒラガーカラ  
ん、 幻 燈会 というのが あって (私は 平川 から

キタッタモノ。)ミー イッタ コト アッタケド。  
来たことがあるもの。) 見に 行った こきが あったけれど。

K ソラ ナツマツリナンカニワ カンケーナク ヤッ タワケダ。ソラ。  
それは 夏祭 などには 関係なく やったわけだね。それは。

A ソーサー。  
そうさ。

O ソーイニ カンケーネー。  
そういう事に 関係無い。

K ゼンゼン ベツニ。  
全然 別に【やったのか】?

O ゼンゼン カンケーネーサネー。  
全然 関係ないさね。

A ハー スキナ テガ オメー<sup>(34)</sup> イマゴロン ナルト ヒマン ナル  
もう 好きな 連中が、おまえ、 今頃にならと、 暇にならと  
ト シバイヤ カイー イグベヤナンテ。オラガ ジーサマナンゾ  
芝居を 買いに行こうよなと。俺の じい様など、  
オマイ シバイヤ アレダイ シンサンダノ<sup>(35)</sup> アレダノ サトサ  
おまえ、 芝居屋、 おれだよ 新さんや おれや 哲さんや  
<sup>(36)</sup> ンダノ アズコデ<sup>(37)</sup> ヤッテ カンゾーガ<sup>(38)</sup> ムコーデ<sup>(38)</sup> モーテ ヤッ  
あそこで やって、 勘三の 向うで やって  
テ エレー ソン コイタ (皆笑)。  
ひどく 損をした。

O ミンナー シバヤ ヤッテ モーケタ シトワ イッコー ネーヤ  
皆 芝居屋を して 儲けた 人は 全然 ないよね。  
ネー。(K<sup>↑</sup>シー。) ミンナ ソンサネー。ノムダモノ ソンニ キマ  
(なるほど。) 皆 損さね。 飲むのだから 損に きま。  
ッデルヨネー。  
でいるよね。

A ハナー モラエバ ハナゲー シッ チュ ノ ミンナ シナクッ チャナ  
花を もらえば 花返しというのを 皆 しなくてはならない。  
ンネー。

O イマー ヒャ <sup>(39)</sup>クサイイジョーノ テノ ジブンワ ジシバヤダネー。  
今 百歳以上の 連中の 時分は 地芝居屋だね。  
ヒラガワ サカンデ (Aソレガ ジシバヤ <sup>(39)</sup>~~~~) チドリノ オヤ  
平川は 盛んで (それが 地芝居屋) 千島の 親父  
ジナンザー ジシバヤガ スキデ マー マイートシ ヨーク ヒ  
などは 地芝居屋が 好きで まあ 毎年 よく  
マガ アッタト オモーネー。ヨク ヤ <sup>(40)</sup>  
暇が あたと 思うね。 よく や

T アーイ コター ヒマー ツクルンジャネンカイ。  
ああいう こじは 暇を 作るのではないのかね。

A ツクルンサネー。  
作るのさね。

T ダカラ ヒラガノ ジトワ カブキー オレノ オボエテッカラマ  
だから 平川の 人は 歌舞伎を 俺の 覚えてからまで  
<sup>(41)</sup>デ ャッ タイネー。 (Aヤッタヨ。) オフドーサマニ (<sup>O</sup>ヤッター。  
やったよね。 (やったよ。) <sup>重</sup>お不動様に <sup>重</sup>(やった。)

タムケ。  
手向け。

A オフドーサマー ヨク ャッタイ。  
<sup>重</sup>お不動様に よく やったよ。

O イマ オセール ジトガ ハー シンジマッテ ネーカラ ヤンネ  
今は 教える 人が もう 死んでしまって いないから

ーケドネー。オフドーサマニ ヨク ヤッタンサネー。

やらないけれどね。 お不動様に よく やったのさね。

T ヤッタネー。

やったね。

A ヒラガーワ カブキ ヨク ヤッタ。

平川は 歌舞伎を よく やった。

O ダカラ ムカシカラ スキダッタダイネー。

だから 昔から 好きだったのだよね。

T スキダッタダ。

好きだったのだ。

A オックアイワ シバイワ アンマリ シナカッタナー。

追 兎は 芝 屋は あまり しなかったな。

O オラ<sup>(42)</sup>ンゾガ フジンカイデ ヌマタノ テングレン アゲテ イ

私などが 婦人会で 沼田の 天狗連を あげて

ッカイ ヤッタッケ。フジンカイデ。

一回 やったっけ。 婦人会で。

T ヘー。

へえ。

O ソン シタ (〇笑)。(皆笑)

損をした。

K ドーモ ソン シタ ハナシバーダネ。モークッタ ハナシワ ネ

どうも 損をした 誰はかりだね。 儲かった 誰は

ーダネ。

ないのだね。

O モーカンネーサ<sup>↓</sup>。フジンカイデ ヤッタ<sup>↓</sup>ンダ。トシヨリー ヨン

儲からないさ。 婦人会で やったのだ。 年寄と 招待して

デ ヨロコバシタダケダモノ。ケーローカイニ ヤッタン。

喜ばせただけだもの。 敬老会に やったの。

T シー↓。ケーローカイニネー。

なるほど。 敬老会にね。

K モットモ ケーローカイダラ ソレ<sup>(43)</sup>アレダ ヨロコ~~ンデ~~ ヨ  
もっとも 敬老会なら それは あれた、

ロコブ シトガ イレバ イーダカラネー。マー ソレガ アレダ  
喜ぶ 人が いれば いいのだからね。 まあ、 それが あれた

イナー。ナカナカ ズイブン ジダイノ ホーガ カーッテ キタ  
よな。 なかなか ずいぶん 時代の 方が 変わって きた

ンサネー。イロイロ ハッ タツシタカラネー。

のさね。 いろいろ 発達したからね。

T ソーダネー。

そうだね。

A オランゾガ ワケーシニ ナッテ ソーケンシバヤチュナ アズマ  
俺などが 若衆に なって 壮健芝居屋というのは 東

カンデ イッカイ ヤッタカナー。

館で 一回 やったかな。

T アレワ アズマカン ナ~~ン~~ ナンネンゴロ デキテルンダイ。

あれは 東 館は 何年頃に できているのだね。

A イクネン デキテルイ。

幾年に できているね。

T デキタノワ ワカンネーケド ナ~~ン~~ センジチャーニ (間) ダイトー  
できたのは わからないけれど 戦時中に 大東亞で

アデ ツブシタ ワケカイ。

潰した わけがね。

A ソーダイネー。

T アレ ネバザー イッ ツッ タネー。

あれは 根羽沢(地名)に 行ったのだね。

A ソー ソー ソー ソー。モッテッ タンダイナー。

そう そう そう そう。 持っていったのだよな。

T アントキ オレノ ウチニ カイー キタッテ ユーケド ウレバ

あのとき 俺の 家に 買いに 来たヒ 言うけれど 売れば

ヨカッタネー。(T.A笑) アーン ガランノ デッ カイ ウチジャ

よかったね。 みたいな 伽藍の 大きい 衆では

ドーショーモ ネーカラ。

どうしようも ないから。

O アズマカンチュデ オラー 4ドリカラ アノーネー エ <sup>xxx</sup> エーガ

東 館というので 俺は 千鳥から あのう ねえ、 映画を

ミー キタダ。モートーク。<sup>(44)</sup>

見に 来たのだ。

T アー ソー ソー ソ。

ああ そう そう そう。

O イマノ アレカ アスコノ マサルサンノ <sup>(45)</sup> メーニ ナルダヨネー。

今の あれが、 あそこの 優さんの 前に なるのだよね。

T アッタンダ。アノー キチゴローノ <sup>(46)</sup> スグ アトダ。

あったのだ。 あのう、 吉五郎の すぐ 後だ。

O ノーキョーノ ソーコノ。

農 協の 倉庫の

T ソー↓ ノーキョーノ ソーコン トコニ アッ タダ。

うん 農 協の 倉庫の 所に あったのだ。



O アッ<sup>(47)</sup>コ チーッ ト ハーッ タヨーン トコネー。  
あそこ 少し 入った ような 所ね。

T アラー スイブン ミー イッ タッ タヨ。  
あれは すいぶん 見に 行ったものだよ。

O アー スイブン イッ タイネー。チドリカラ ヨク キタモンダト  
ああ すいぶん 行ったよね。 千鳥から よく 来たものだト  
オモナー。イマ カンゲールト<sup>(D)</sup>笑)。ヒッ<sup>(48)</sup>サカリリーナンゾ  
思ふな。 今 考えると。 千草刈に など  
アキー<sup>(48)</sup> イッ テ キテ ソイデ<sup>(48)</sup> クタビレテルッ チュンニ キタモ  
秋に 行ッテ きて それで 疲れているというのに 来たものだ  
ンダ ヨル。  
夜。

T ソレ タノシミダッ タカラネー。  
それが 楽しみだったからね。

A ソーダ。  
そうだ。

O ソレッキリ ネーダカラ。  
それしか 無いのだから。

T ゴラクッテガ ネーカラネー。  
娯楽というのが 無いからね。

## 注

1. 「ウ——」考えていて思わず出た声。
2. 「タテル」壮健の健の字を建と混同している。
3. 「ソーケンシバヤ」「ソーケンシバイヤ」の弱まり形。
4. 「ハナ」祝儀の意。
5. 「エラーイ」[era'i]
6. 「ソレ オワッテ」「芝居が終って」の意。
7. 「コージローノ トコロデ」鴻次郎の家を借りて壮健芝居をやった。
8. 「クバッ」次のAの発語によって途切れたために促音が音節末尾にあられるという例外現象が生じている。
9. 「シー」Kの問いがTの発語と重なったためもあってAは問いの意味が聞きとれず、問い返した。
10. 「オボエワ ネーヤネー」「記憶にないやね」の意。
11. 「オメー」人称代名詞ではなく、間投詞的用法。
12. 「ナッテッカラ」Aの発語と重なったため、自己の発語を印象づけ、続けるために「カ」の部分が高く、強く発音した。
13. 「タメッコワモノ」これは「タメッコマモノ」であり、「タメゾー」という人が小間物屋をやっていたのでその家を「タメッ・コマモノ」と言う、ということであるが、録音では「タメッコワモノ」と聞こえる。
14. 「ミサ」(井上)美左夫の略。
15. 「ゼーアニー」(井上)善次郎の略+アニー。年上の人、目上の人を「アニー」と言う。
16. 「シンゼカギシバイ」身代を片付けるときにおこなう芝居。
17. 「オエテ」[oete]
18. 「サクキリ」土を細長く掘りおこす作業。
19. 「スト」無造作な発語。「スルト」または「ソースルト」が明確な形式。
20. 「イッコー イ ホレコソ」途中で言い換えをおこなった。
21. 「ソデ」無造作な発語。「ソレデ」が明確な形式。

22. 「ジンジャデ ヤ」次のDの発話によって途切られた。
23. 「キズイテサー」[kidzūitesa:] 形式の中位で破擦音があらわれている。ただし、「ズ」は形式の中位では概略摩擦音の[zū]である。
24. 「ネンダイ」[nendaɪ] 「ダイ」の部分は二重母音的。
25. 「カツイデ」[kætsūide], 「カツイデ」の言い間違い。
26. 「サジキ」[saziki], 軽い口蓋化が観察される。以下「サジキ」に関して同。
27. 「ヤット オボエル ジブン」・「ヤット知っている時分」の意。
28. 「ソーダカモ」次のAの発話によって途切られた。
29. 「ヤレア」[jarēa]
30. 「シーナ」[n:na], 無造作な発話。「ミシーナ」が明確な形。
31. 「ネコ」藁で綿んだむしろ。「ネコー カク」(わらむしろを綿む)。
32. 「ゲントーカイガ」次のDの発話によって途切られた。
33. 「カイゾー ジニ」次のDの発話によって途切られた。
34. 「オメー」間投詞的用法。
35. 「シンサン」人名, 新一郎の略+さん。
36. 「サトサン」人名, 哲の略+さん。
37. 「カンゾー」人名, 勘三。
38. 「ムヨーデ」向うの場所で。
39. 「ジシバヤ」近所の人が練習をしてやる芝居。
40. 「ヨク マ」次のDの発話によって途切られた。
41. 「オボエテッ カラマデ」知っている頃まで。
42. 「オラー ンゾ」[ora·nzo]。
43. 「ソレーア」[sorēa]。
44. 「モートーク」曖昧で意味不明。
45. 「マサルサン」人名, 優+さん。
46. 「キチゴロー」人名, 吉五郎。
47. 「アッコ」小さい声で。
48. 「アキー」干草刈は彼岸秋に行く。

### 3 干草刈り

A 小林弥太郎 男 明治40年12月6日生

D 小林志志 女 明治40年7月19日生

T 星野 富司 男 大正9年1月27日生

K 小林 喜市 男 昭和15年11月10日生

K ダラ ソツ チノ ホーマデ ヒクサカリ イグニャー アレダッ  
 だから そちの 方まで 干草刈に 行くには あれだろう  
 ペー ズイブン アサゲ ハヤク オキテ イグダッ ペー。  
 ずいぶん 朝 早く 起きる 行くのださう。

A アサゲ クレンニ オキテグンサ。 ヨガ アケルノ マッテ デ  
 朝 暗いのに 起きこいくのさ。 夜が 明けるのを 待つて  
カケタモノ。

出かけたもの。

O ヤマ イグ トキニワ クレ ~~~~~  
 山に 行く ときには 暗い

K オランカニ ナッテッカラ ゼンゼン ナンネンカ。  
 俺などに なってから 全然 行かないのか。

O ソー オレガ キテ イチネンシカ イガネーモノ。  
 うん、私が 【追貝に】来て 一年しか 行かないもの。

K <sup>(1)</sup>ダラ アス コワ <sup>(2)</sup>ンーマ シター トーッテッ タ ワケ。  
 ねえら あそこは 馬は 下を 通っていった わけかね。

A ミンナ シター トーッテグン。コモリ アガッテ ソレカラ。  
 皆 下を 通っていくの。小森(地名)を 上がって それから。

T ジューニサマが アル ジューニサマ ト トーッテ シタエ オ  
 ナニ 木々が ある ナニ 木々【の所を】<sup>xxx</sup> 通って 下へ  
 リテ コーニ グネグネ マガッタ ミチオ コモリ アガッタダ  
 降りて こう ぐねぐね 曲った 道を 小森に 上がったのだから。  
 カラ。ヨーク ウマ オトシタンダネー。  
 よく 馬を 落したのだね。

A ソーダ。  
 そうだ。

O ソーユ トキ クレーヨーナニ <sup>(3)</sup>イグダカラ マー (A ヤキモチー  
 そういう とき 暗いようなときに 行くのだから まあ (焼餅を  
 マイテノ イッダ コトガ ネー トコイ ツイテガレルデ マー  
 焼いて) 行った こヒガ 無い 所へ 連れていかれるので まあ  
 ヤナ オモイ シタサー。  
 いやな 思いを したさ。

A オランゾワ タイガイ カナヤマイモ イッタイナー。カナヤマノ  
 俺などは 大概 金山(地名)へも 行ったよな。 金山の  
 オクノ トコ イッタ。  
 奥の 所へ 行った。

O チドリニ イル ウチワ オラ ヤナギダヤサー。アスコノ コモ  
 千鳥に いる うちは 私は 柳平(地名)さ。 あそこの 小森の  
 リノ メール トコノ (「ンー」↓) アスコガ ワリチダカラ。  
 見える 所の (ああ、あそこだね。) あそこが 割地だから。

A イチバーン トマックチガ ミサブローサン<sup>(4)</sup> ウチノ テーダカ  
 一番 はいりロガ 巴三郎さんの 家の 割地だから。  
ラ。 ソン ツギー センジサン<sup>(5)</sup> ダンバー。 モリヤマノ テーワ<sup>(6)</sup>  
 その 次が 仙次さんだろう。 森山の【連中の】割地は

T モチバガ アッタンカイ。  
 持場が あったのかね。

A ン。  
 なんだって？

T モチバガ アッタ ワケカイ。  
 持場が あった わけかね。

A モチバガ アルヨ。 タイガイ キメトクモノ マイトシ。 ハー  
 持場が あるよ。 大概 決めておくもの 毎年。 もう  
ソイデイト ジトガ イガネ ウチニ イッテ ハー ヒー モ  
 そろでいて【他の】人が 行かない うちに 行って もう 火を 燃や  
シテ ヨノ アケルノ マッテルン。  
 して 夜の 明けるのを 待っているの。

T ヘ。  
 なほじ。

A オーイッテ ナッテ ミテ イナケリャー ソコエ イッテ (<sup>0</sup>タ  
 「おい」と 呼んで みく【誰も】いなければ そこへ 行って  
マニ ソコ カルンサネー (笑) メーノ ヒニ イッテ イト ホ<sup>(7)</sup>  
 (たまに まを 刈るのさね。) 前の 日に 行って 火を  
 (<sup>0</sup>ナカデモ。  
 (なかでも。)

T ヨク タキビオ トメッタネー。<sup>(8)</sup>  
 よく 焚火を 燃やしたね。

O ベツニ ワケチジャ ネーガネ。

【追見は】ベツに 分け地では ないよ。

A ワケッチジャ ネー。

分け地では ない。

O 千ドリナンガー ミンナ ワケッチサー。

千鳥などは 皆 分け地さ。

T アー ソーカ ワケッチジャ ナクッテ。

ああ そうか 分け地では なくて。

A オラー ホーワ ミンナ ワケッチジャ ネーン。バショ イッテ

俺の 方は 皆 分け地では ないの。 場所へ 行ッテ

ハー (ト~~~~) ソコエ アレー スル。ソイデ カモーコター

もう そこへ おれを する。 それで かまうことは

ネーカラ

ないから

O 千ドリワ 千ドリワ モトワ ワケタジャ ナカッ タケドサー ハ

千鳥は、 千鳥は 忙しい 分けたのでは なかったけれどもさ、 もう

ー ソーユージャーネー コマルデ ミンナ (A ヒラガーワ ミン

そういうことではね 困るので 皆 (平川は 皆)

ナ) 千ドリノ テワ ミンナ (T オソク ナルト カレネー モンネ

千鳥の 者は 皆 (遅く なると 刈れないものね。)

ー) ヤナギ マナギダヤッチュ コトニ キマッ チャッタンサ。キ

柳平という ことに 決ってしまったのさ。

マンネー ウチワ オランゾワ スイギョー ジノ テッペン。コッ

決まらない うちは 私などは 水行きの 天辺。 ござさ

チー ミテ アノ ハチマキガ アルベ。 (T アー) アスコイ

見て あの 鉢巻さがあるだろう。 (あるね。) あそこへ

ッ チャー オー カッタ ダイ。 ニ ネン ヤ アスコ チット コ  
 行っては 私は 刈ったのだよ。 二年 あそこ ちょっ

デーラガ アルダイ。  
 小平が あるのだよ。

T ソコ ワ スイギョー ジノ オテラノ アッタ トコ カイ。  
 ここは 水行寺の お寺の あった 門がね。

O ソー ダッタ。  
 そうだった。

A ソー ダ イ バン ウエ ダ。  
 そうだ 一番 上だ。

O イドノ アト モ アル ヨ。  
 江戸の 跡も あるよ。

K シー。  
 そうがね。

O オー アスコ ニ ネン ツイテ ガレタ モノ。  
 私は あそこ 二年 連れていかれたもの。

T アスコ モ ドー チュー アル ネー。 ヒラ ガー ヒナ タカラ ダラ。  
 あそこも 道中が あるね。 日伺(地名)からなら。

A ヒク サカリ イッ シュー カン ブレ シタ ダ。  
 千草刈を 一週間 ぐらい したのだ。

O マーズ イグン ガ クタビレ ルン ダ イグン ガ。 ケー ッ テ クル  
 まず 行くのが 疲れるのだ 行くのが。 帰って くる

ト キャー クダリ ダカラ トット トット トット クタビレ タッ テ キ  
 ときは 下りだから とっぴとっぴとっぴ 疲れても 【帰って】

ラ レル ケド イグン ガ ミン ナ ノ ボリ ダッ ペー アノ ヤマ マー  
 来られるけれど、 行くのが 全部 登りだろう、 あの 山を



テッ ペンマデ ノ ホルダモノ。

天 辺 まぐ 登るのたもの。

K ヒクサワ クガツダッ ペー。

千草は 九月 だろう。

A ヒガン ( ヒガン ) ヒガンノ アキノ アイタ ヒガ ( アキガ )  
彼岸 ( 彼岸 ) 彼岸の 開の , 開いた 日が ( 開が )

カマアキッテ ユーン。

鎌開と 言うの。

K カマアキダッ ペー。

鎌開 だろう。

O ソ。

そう。

A ソーサー。 ソレ メーニ イッテ カッ チャー ナンネンダ。

そうさ 。 それの 前に 行って 刈っては ならないのだ。

O ヤマガ アレルトカ ナントカ。

山が 荒れるとか なんとか【言って】。

A ソレトー ソレ メーニ カルナラ ウマデ カルダラ イー ン。

それと , それの 前に 刈るなら 馬で 刈るなら 良いの。

( ク ン ) ダンガリダラ ドコー カッ テ <sup>(14)</sup>

( なるほど ) 段 刈 なら どこを 刈って

O ヒッ ツケテ クルダラー ケド。

付けて くる なら 【良い】けれども。

K ダンガリ アー ソーカー イ チダン。

段 刈 ? ああ そうか 一段 。

A イ チダン ロッ ツオクッ ツ ロッ ツオクッ ツ ツケテ クルン。

一段 六束 ずつ 六束 ずつ 付けて くるの。

K ツケテ クルダラ イツ カッテモ イー ヨカッタ ワケダー。  
 付けて くるなら いつ 刈っても 良かった めけだね。

O ムカシマア アサクサカリツチューデ クレー ウチニ オキテネ  
 昔は 朝草刈 というのは 暗い うちに 起きてね、  
 ー ミンナ ウマノ アル シトワ アレダ (「イッ タネー。」) ア  
 皆 馬の ある 人は あれた (行ったね。)

アサハンメーニ ミンナ イチダンツ ハー モ オキマリデ カ  
 朝飯前に 皆 一段ずつ もう お極りで

ッテ キタモンダモンネー。(15) ソイデ コムギ ツクル ジブンナ  
 刈って きたものだものね。 それで 小麦を 作る 時分は

コムギカリダッテ ムギカリダッテネー ミンナ アサハンメーニ  
 小麦刈 でも 小麦刈でもね 皆 朝飯前に

イッ タモンダ。

行ったものだ。

## 注

1. 「ドラ」この部分はAの発話と重複。Aの発話は聞きとれない。
2. 「ンーマ」[m:ma]
3. 「クレーヨーナニ」[kure:jo:napi][k]は閉鎖の後の気音が著しい。
4. 「ミサブローサン」人名,巳三郎+さん。
5. 「センジサン」人名,仙次+さん。
6. 「モリヤマノ　テーワ」次のTの発話によって途切られた。
7. 「イト　ホ」Oと重複しているのので途中で言いさした。
8. 「タキビオ　トメッタネー」「トメッタ」の意味不明。文脈から「燃やした」の意であると判断される。焚火をたいて陣をしいた。
9. 「カモーコターネーカラ」次のOの発話によって途切られた。
10. 「キマッチャッタ」[kimattʃatta][k]は閉鎖の後の気音が著しい。
11. 「ハチマキガ　アルベー」急押し。
12. 「オテラノ　アッタ　トコ」永行寺山という山になっている。
13. 「アノ」指示代名詞であって間投詞ではない。アクセントのふがな  
いのは「文イントネーション」に支配されているため。
14. 「ドコー　カッテ」次のOの発話によって途切られた。
15. 「カッテ　キタモンダ」「き」は[k]の閉鎖の後の摩擦が激しい。  
[ʃi]のようにも聞こえる。

# 4 葉

A 小林弥太郎 男 明治40年12月6日生

O 小林よ志ゑ 女 明治40年7月19日生

T 星野 富司 男 大正9年1月27日生

K 小林 喜市 男 昭和15年11月10日生

0 アキチャンガ ハチガツ ジューニニチニ シンダダッタケドモ。ジュ  
 アキ(人名)ちゃん 八月の 十二日に 死んだのだったけれども。  
 ーイチンチノ ヒダッタッペ。ト<sup>xxx</sup> イマノ トヤマダッケガ アス。  
 十一日の 日だったろう。 今の 石底山(地名)だったろうか  
 コエ ウンマー ヒーテ クサカリ イッタノ<sup>↑</sup> サー ドコ イッ  
 あそこへ 馬を 引いて 草刈りに 行ったのを さま ビコへ 行ったのか  
 タノ ワカンネー。トヤマジュー ナエアルッタ。<sup>(1)</sup> デンポーガ<sup>xxx</sup>  
 めからない。 石底山中 呼び歩いた。 電報が  
 キタデ<sup>(2)</sup> キドクノ デンポーガ キタデ ソイデ ソノ ツヤ<sup>xxxx</sup>  
 来たのと、 危篤の 電報が 来たのと それで その、  
 ツヤオ ショッテカ ホイデ モー アスコエ イマノ イシバタ  
 艶(人名)を おぶってだったが それで もう あそこへ、 今の 石畑さ。  
 (3) ケサー。アスコノ カシラナシノ オカシナ ハタケ カッコーノ  
 あそこの 頭無(地名)の おかしな 火畑、 かこのの

イー ハタケ。アスコエ ソバー マイタデ ソコー ハー コ  
 いい 畑。 あそこへ 蕎麦を 蒔いたのぞ モコを もう  
 ーニ ミンナ キッ カケテ アノー クサー スクヨーニ シトイ  
 こう みな 砂寄をして 草を 敷くように しておいてさ  
 テサー ソイデ クサー カルンデ アスコー キテルカナート  
 それぞ 草を刈るので あそこへ 来ているかなと  
 オモッテ アスコマデ トンデッテ ミタラ キテネーデ ハー  
 思って あそこまで 走っていった みたら 来ていないぞ もう  
 イキセキ キッテ トヤママノ ミチ カサー ハイアガッテサー  
 息せき 切った 石段山の 道を 草を分けて 這いよってさ  
 イーッショ ケンメ ヨバッテ キトクノ デンポーガ キタデ  
 一生懸命 呼んで、 危篤の 電報が 来たのぞ  
 ソイデ ヨドーシ デテッタンサー。(「へー。')ソイデ オタジバ  
 それぞ 夜通し 出ていったのさ。(なるほど。')それぞ おタジバあ  
 ーサマノ トコマデ イギツツイテ ホタラ ハー ビョーニンワ  
 様の 所まで 行き着いて、 そうしたら もう 病人は  
 シッテタチューモンネー。キタツチューガ ワカッタラ イキガ  
 知っていたというものね。 来たというのが めかたら 息が  
 キレタツチュモノ。(「へー。')ダカラサー ドヒノ オバサンガ  
 切れたというもの。(なるほど。')だからさ、 土肥(人名・名字)の おばさんが  
 イッテテ ネーサン、ダレカ コレ イナカカラ クルダデ イ  
 行っていて、 姉さん 誰か これは 田舎から 来るのだよ、  
 ナカカラ クルノ マッテルジメ ネーカッテ ユッタケド オバ  
 田舎から 来るのを 待っているのでは ないかと 言ったけれど おばあは  
 ーワ アレダモンダカラ ナニガ イナカカラ クルッチュ。(8) ソー  
 あれたものだから 何が 田舎から 来るというものが。

ジャー ネー クルジャー ネーカッテ デ ヤッタンサ。ソーシ  
もうどは ない , 来るのでは ないが ヒ ぞうしたら

タラ オジーガ タマゲチャッテ イケーレン オコジチャッテサ  
おじい が 魂 消えしまっテ 胃 瘻 瘻 を おこしてしまっテさな。

ーナー。オジーワ イゲネンサ。クニマツジーサン。(「ア クニマ  
おじいは だめなのさ。 国松 じいさんが。 (ああ 国松

ツオジーカイ。) ヒデー メニ アッタデ。オヤジワ デテグ ソノ  
おじい かね。) ひどい 目に あったよ。 おやじは 出ていく, その

アトデ オジーワ イケーレンデ フタババンモ ミバンモ ネネ  
後で おじいは 胃 瘻 瘻 で ニ 晩も ミ 晩も 寝ないのだ。

ーダ。(「ハ<sup>↑</sup>ー。)クルシガッテ。ソイデ ドーショーモネーデ チ  
(「へえ。) 苦しがる , それで どうしようもないので,

ドリノ ジーサマモ イッショニ イッタンサナー。シューゴサン  
千鳥の じい 様も 一緒に 行ったのさな。 修吾(人名)さんと

ト イッショニ シンダデ アトカラ イッタンサ。ホーイデ チ  
一緒に , 死んだのぞ 後から 行ったのさ。 それで

ドリノ オバーガ ルスイニ キテタケド ミズー クレチャー  
千鳥の おばあが 留守屋に 来たけれど 水を やってほ

ナンネー ゴハン クレチャー ナンネーッテ。アノ イマノ タ  
ならない ご飯を やってほ ならないと。 あの 今の

カシチャノ オヤジガ イシマノ トキデ アノ シトガ (「ア  
敬(人名)ちゃんの おやじが 医者 の ヒキで あの 人が (ああ

コバマシセンセーガ。) ソイデ キテ モラッテ ソシテ クンネ  
小林 先生が。) それで 来て もらって , そして やらないぞ

ーデ クレツタカラ ハイッテ。ホテ イシマガ イグッチュート  
くれと言ったから 「はい」と[言った]。そして 医者が 行くというヒ

<sup>(10)</sup> ヨシー ミズ モッテ <sup>(11)</sup> コイ。イシャガ ユッタダカラ ノマネ  
 よし 水を 持って こい。 医者が 言ったのだから 飲まない  
 - ヨーニッテ。ノマナキヤ <sup>(12)</sup> シンジマウツツンデ オヤワンニ モ  
 ようにと。 飲まなければ 死んでしまう ということで 茶碗に  
 ッテ キサシテ <sup>(13)</sup> ゴクゴクゴク ホースト モー ピタット ブツ  
 持って こさして ゴクゴクゴク もうすると もう ピタッと ぶつかって  
 カッテ ソーレコソ クルシー。アセ カイテ <sup>(14)</sup> クン。ホイデ イ  
 それこそ 苦しい。 汗を かいで くる。 それで  
 シャー トンデッテ イマミタイニ オラ ユーセンガ ネーカラ  
 医者へ 走って行って 今の様に ほら 有線【電話】がないから  
 イシャエ コンダ トンデッテ クルン。ソイデ イシャガ ト  
 医者へ 今度は 走って行って くるの。 それで 医者へ  
 ンデ クルン。ソイデ 千ドリノ オバーガ ミテ ノンダッペ  
 走って くるの。 それで 千鳥の おばあが 見て、 飲んだらう  
 ダメダメダメ <sup>(15)</sup> ダメダメ ウソー イワッシャルナ コンター イ  
 駄目 駄目 駄目 駄目 駄目 嘘を お言いなさるな あなた、  
 マ オヤワンデ ノンダッペー。ソーユダッタヨ。イッコー ユー  
 タ 茶碗で 飲んだらう。 そうしたことだったよ。 全然 言う  
 コト キカネンダモノ ソイデ オバーガ ケーッテ キテ バ  
 こを きかないのだから、 それで おばあが 帰って きて もう  
<sup>(16)</sup> - コンダー アノー カカガー <sup>(17)</sup> ツイーヨ。ゼッタイ クンネー  
 今度は 嬢が 強いよ。 絶対 やらないから、  
 カラ ユー コト ヒトツモ キカネーカラ。ソイデ クンネーデ  
 【おじい】の言うことを ひとつも きかないから。 それで やらないで  
 ナオッタケドサー。オレガ <sup>(18)</sup> ヨメゴノ ユー コト ゼー ンゼン  
 治ったけどさ。 私の、 嫁の 言うことは 全然

キカネーデ (0 笑)。マーズ ソイデ ソントキ アレダッ タナ  
きかないで。 まず それで そのとき あれだったな。

ー。クージューケーホーダナンテ フルカラネー。(「ソーダネー。)  
空襲警報 だなどといって J1 飛行機が来るからぬ。(そうだね。)

ソイデー オラー オーイオ カケテー メグリジュー ムシロナ  
それで 私が 覆いを 掛けて 巡り中 延などというのを

ンツ ツルシテ クラーク シテサー。ホーイダケド オレガ コ  
吊して 暗く してさ。 それだけれび 私が

ー クラーク シルツ チュー ト <sup>(19)</sup> ビョーニンダッテ コーニ エバ  
こう 暗く する ということ 病人だと こうに 威張るの。

ルン。ソイデ ゼンサクサンガ メーニ イテ ゼンサクサンガ  
それで 善作 (人名) さんが 前【の場所】に いて 善作さんが

トンデ キタダヨ。オバヤンガ アノー カンビョーズカレデ ネ  
走って きたのだよ。 おばあさんが あのう 看病 疲れて

ブッテルダト オモッテ キタン。ソージャ ネーサー オメー  
眠っているのだと 思っ 来たの。 そうでは ないさ、 おまえ、

クレー コーユノ カケルト オジーガ コー ヤッテ トッチャ  
黒い こういうものを 掛けると おじい が こう やって 取ってしまうの

ウンダモノ <sup>(20)</sup> ビョーニンガ イルンダッテ クージューケーホーモ  
だもの 病人が いるのだと言って、 空襲警報も

ナニモ <sup>(21)</sup> アルモンカ。(「ン。」) ソイデ ゼンサクサンガ アノ  
なにも あるものか。(うん。) それで 善作さんが あのう

ー マツフジオーサー <sup>(22)</sup> センジダシテ <sup>(23)</sup> ア アノー ユデ ソバガ  
松籐をさ、 煎じ出して あの 湯で 蕎麦掻きと

キー シテ <sup>(24)</sup> クレルト ソノ イケーレンワ ネダエニ ナルツチュ  
して やると そのう 胃腸 撃は 根絶えに なるというので



ンデ ( <sup>K</sup> マツフジ<sup>↑</sup> ) シ<sup>↓</sup>。( <sup>T</sup> ハー ) ソー イッテ ゼンサク  
( 松 藤 ? ) うん。( ハえ。 ) そう 言ッテ 善作さんが

サンガ オセータデ マツフジ<sup>(25)</sup> センジ コノ ツル アレ  
教えたので , 松 藤 を 煎じ , 蔓 を あれさ

サー トッテ キテ クレテ ソイデ ソレオ センジダシテ ソ  
取ッて きて くれと それで それを 煎じ出して

バガキ シテ クワシタ。ソレデ ナオツタンダ。ソレッキリ イ  
蕎麦掻きを して 食べた。それで 治ったのだ。 それヨリ

ケーレン オコサナカッタヨ。( <sup>T</sup> アー ソー カイ。 ) ヤッパリ ( <sup>T</sup> ハ  
胃疼 癰を 起こさなかったよ。( ああ そうかぬ。 ) やはり

ツミミダナー。) キータダイナー。( <sup>T</sup> ン<sup>↑</sup> ) フタクチベー クッ  
( 初耳だ。 ) 交いたのだよな。( そうかぬ。 ) ニロばかり

タラ イラネ<sup>(26)</sup> ッナンテ ツキダシタツタケド。( <sup>T</sup> ン<sup>↑</sup> )  
食ったら いうない などと 突き出したのだけれど。( そうかぬ。 )

K マ マツフジ センジテカ ソノ シルデー ソバカキ シテ。  
<sup>xxx</sup> 松 藤 を 煎じても , その ジュで 蕎麦掻きを して。

O ソー マツフジ ャーノ マツミテ ヨーナ ( <sup>A</sup> ツルガ アルダ )  
そう , 松 藤 というのは 松 の様な ( 蔓 が あるのだ。 )  
ツルガ アルダイネー。  
蔓 が あるのだよね。

T ツルノ ガチガチノ ホイデ <sup>ハ</sup> <sup>xxx</sup> ハダガ ソコカラ<sup>(27)</sup>ノ ハダ。  
蔓 が ガチガチの , そして 樹皮が ガサガサの 樹皮。

O コンナクレー フター  
このくらい 太い

A ハビノ ハダ ( <sup>T</sup> ン<sup>↓</sup> ) ハダミテ ヨーナ アンナヨーナ  
蛇の 肌 ( そうそう。 ) 肌の様な あんな様な

O ソノ ツル<sup>(28)</sup>  
その 蔓

T ソイデネー マツ<sup>(29)</sup>  
それで ね 松

A ~~オ~~ーヨーノ ヤマ イグト イックラモ アル。  
大 楊(地名)の 山に 行くと いくらでも ある。

T チョット ニオイ スルンサネー。  
少し 匂い が するのさね。

O ソレ ゼンサクサンガ ヤマカラ トッテ キタ。  
それを 善 作さんが 山から 取って きた。

T アーユノ ムカシ オフロ イレタネー。  
あいうのは 昔 お風呂に 入れたね。

A フロエ イレルト ヌクトマルナンテナー。  
風呂へ 入れると 温 まるなとね。

O アレ ヌクトマルツチューネー。  
あれは 温 まるというね。

A タダ イレルト マックロノ ミズガ デテナー。  
ただし 入れると まっ黒の 水が 出こな。

T ソーダネー。  
そうだね。

O アレー ホシトイタ ヤツ センジダシテサー ソースト ショー  
あれを、 干しておいた のを 煎じ出してさ、 そうすると 醤油

ユノ ヨーナ イロノ<sup>(30)</sup>  
のよう な 色の

T アレ デルンダイネー。  
あれは 出るのだよね。

A オラー ホーノ ヤマニワ ネーケド オーヨーノ ヤマニワ イ  
俺の 方の 山には 無いけれど 大木の 山には

ックラモ アル。

いくらでも ある。

O ソイデ<sup>(31)</sup> ソレー センジテ アノー ソノー ユ<sup>(32)</sup> ネータタテ ア  
それで それを 煎じて あめう そのう、湯を 煮え立たせて

レサー ソバガキ シテ クワシタダッタイ。

あめさ、蕎麦掻きを して 食べたのだったよ。

T ヘー ソースト イケーレンガ イー ワケダ。  
へえ そうすると 胃瘕<sup>イ</sup>に 良い わけだ。

O イケーレンガ ネダエニ ナルツテ ゼンサクサシガ ユッタダヨ。  
胃瘕<sup>イ</sup>が 根絶えに なると 善作さんが 言ったのだよ。

ソノ セーダガナ マー ドーユーダカ。

その せいだが まあ どういうのだから 治ったよ。

T イヤ イマデモ ソーユー ヤツオ ツカッテルダネー。キノー  
いや 今でも そういう ヤツを 使っているね。 昨日

ケーフンオ モライー キタ オレンチー。

鶏糞を 貰いに きた、俺の家に。

O ヘー。

そうがね。

T ナンテダッタラ ジニ インダソードネー アレー。

どうしたと言ったら 痛に 良いのだ そうだね あれは。

O ヘー↓。

そうなのがね

T アレオ フクロニ イレテサー コーヤッテ ヤルト アノー  
あれを 袋に 入れてさ こうやって やると あめう

O ナゼルン<sub>ッ</sub>。

撫でるのが。

T ナンダソーダヨ ソコエ コーニ イレテ シ<sub>xxxxxx</sub>タス シ<sub>xxxxxx</sub>タスンダト。  
なんだそだよ , そこへ こうに 入れて 浸すのだった。

K ア<sub>→</sub> ナルホド<sub>↓</sub>。  
ああ なるほど。

T ケーフンテ コト バフンテ コター キータケド ケーフンテ  
鶏糞<sub>ニ</sub>ということ, 馬糞<sub>ニ</sub>ということは 聞いたけれど 鶏糞<sub>ニ</sub>という  
コト (A 笑) バフンワ <sub>ズ</sub><sub>xxx</sub> アノ カンブエ ツケルンダソーダヨ。  
こゝ 馬糞<sub>ニ</sub>は あの, 患部へ つける のだそだよ。

O <sub>↑</sub>  
ヘー。  
へえ。

T ダカラ イーッテ コト キータケド ケーフンワ シラナカッ タ  
だから 【馬糞<sub>ニ</sub>】 良いという ことを 聞いたけれど 鶏糞<sub>ニ</sub>は 知らなかったな。  
ナー。

K ネー ケーフ <sub>xxxxxx</sub> バフンワ インカネー<sub>↓</sub>。  
ねえ, 馬糞<sub>ニ</sub>は 良いのかね。

T バフンワ イーラシー。  
馬糞<sub>ニ</sub>は 良いらしい。

K イー マエッカラネー。  
良い , 以前からね。

T バフンノ アノー マダ <sub>xxxxxx</sub> アッ<sub>xxxxxx</sub>タカイ アッ<sub>xxxxxx</sub>タカイ ヤツ (A 笑)  
馬糞<sub>ニ</sub>の あの まだ 暖かい やつ

<sub>xxxxxx</sub> ュゲガ ュゲガ タッテル。  
湯気が 立っている【のを】。

A ボ<sup>33</sup>タ<sup>33</sup>ント シ<sup>33</sup>タ<sup>33</sup>ヨ<sup>33</sup>ー<sup>33</sup>ナ ヤ<sup>33</sup>ツ  
ボタンと した様な ヤツ

O ン<sup>33</sup>→ ボ<sup>33</sup>タ<sup>33</sup>モ<sup>33</sup>チ。 (K<sup>33</sup>ビ<sup>33</sup>笑)  
うん、牡丹餅。

T ン<sup>33</sup>→ ア<sup>33</sup>レ<sup>33</sup>オ ヌ<sup>33</sup>ノ<sup>33</sup>ニ ツ<sup>33</sup>ツ<sup>33</sup>ン<sup>33</sup>デ<sup>33</sup> ガ<sup>33</sup>ー<sup>33</sup>セ<sup>33</sup>ニ<sup>33</sup>  
ん、あれを 布に 包んで、 ガーゼに

K イ<sup>33</sup>マ イ<sup>33</sup>ネ<sup>33</sup>ー<sup>33</sup>カ<sup>33</sup>ラ ダ<sup>33</sup>メ<sup>33</sup>ダ<sup>33</sup>イ。  
今 いないから だめだね。

A ン<sup>33</sup>ー<sup>33</sup>マ<sup>33</sup>ワ<sup>33</sup>ナ<sup>33</sup>ー<sup>33</sup> ソ<sup>33</sup>ー<sup>33</sup>ワ イ<sup>33</sup>ガ<sup>33</sup>ネ<sup>33</sup>ー<sup>33</sup>ヤ<sup>33</sup>ナ<sup>33</sup>ー<sup>33</sup>。  
馬はな、そうは いかないやな。

T ソ<sup>33</sup>ー<sup>33</sup>サ<sup>33</sup>ー<sup>33</sup> ン<sup>33</sup>ー<sup>33</sup>マ<sup>33</sup>ワ ミ<sup>33</sup>エ<sup>33</sup>ネ<sup>33</sup>ー<sup>33</sup>モ<sup>33</sup>ノ<sup>33</sup>ネ<sup>33</sup>ー<sup>33</sup>。  
そうさ、馬は 見えないものね。

A イ<sup>33</sup>ネ<sup>33</sup>ー<sup>33</sup>モ<sup>33</sup>ノ<sup>33</sup>ー<sup>33</sup> ホ<sup>33</sup>ッ<sup>33</sup>カ<sup>33</sup>イ<sup>33</sup>ド<sup>33</sup>ー<sup>33</sup>エ<sup>33</sup>デ<sup>33</sup>モ イ<sup>33</sup>ガ<sup>33</sup>ナ<sup>33</sup>ケ<sup>33</sup>リ<sup>33</sup>ャ<sup>33</sup>ー<sup>33</sup>。  
いないもの、北海道へでも 行かなければ。

O カ<sup>33</sup>ー<sup>33</sup>バ<sup>33</sup>ジ<sup>33</sup>ャ<sup>33</sup>ー<sup>33</sup> コ<sup>33</sup>グ<sup>33</sup>ソ<sup>33</sup>ー<sup>33</sup> ト<sup>33</sup>ッ<sup>33</sup>ト<sup>33</sup>イ<sup>33</sup>テ<sup>33</sup> ア<sup>33</sup>レ<sup>33</sup>ワ ナ<sup>33</sup>ン<sup>33</sup>ノ ク<sup>33</sup>ス<sup>33</sup>リ<sup>33</sup>ダ<sup>33</sup>  
川場(地名)では 蚕糞を 取っ置いて、あれは 何の 糞だ、  
ケ<sup>33</sup>ツ<sup>33</sup>ア<sup>33</sup>ツ<sup>33</sup>ノ<sup>33</sup> (35)  
血圧の

A ケ<sup>33</sup>ツ<sup>33</sup>ア<sup>33</sup>ツ<sup>33</sup>ノ<sup>33</sup> ク<sup>33</sup>ス<sup>33</sup>リ<sup>33</sup>ダ<sup>33</sup>。  
血圧の 糞だ。

O ケ<sup>33</sup>ツ<sup>33</sup>ア<sup>33</sup>ツ<sup>33</sup>ノ<sup>33</sup> ク<sup>33</sup>ス<sup>33</sup>リ<sup>33</sup>ダ<sup>33</sup>ッ<sup>33</sup>テ<sup>33</sup>ネ<sup>33</sup>ー<sup>33</sup>。ア<sup>33</sup>レ<sup>33</sup>ー<sup>33</sup> ホ<sup>33</sup>ッ<sup>33</sup>ト<sup>33</sup>イ<sup>33</sup>テ<sup>33</sup>ネ<sup>33</sup>ー<sup>33</sup>  
血圧の 糞だってね。 あれを 干しておいてね

K ケ<sup>33</sup>ツ<sup>33</sup>ア<sup>33</sup>ツ<sup>33</sup>ノ<sup>33</sup> ク<sup>33</sup>ス<sup>33</sup>リ<sup>33</sup>。ソ<sup>33</sup>ノ<sup>33</sup>カ<sup>33</sup>ー<sup>33</sup>ジ<sup>33</sup> イ<sup>33</sup>チ<sup>33</sup>レ<sup>33</sup>ー<sup>33</sup>ノ<sup>33</sup> カ<sup>33</sup>イ<sup>33</sup>コ<sup>33</sup>ノ<sup>33</sup> コ<sup>33</sup>グ<sup>33</sup>ソ<sup>33</sup>  
血圧の 糞。 そのかわり 一令の 蚕の 蚕糞  
ダ<sup>33</sup>ネ<sup>33</sup>ー<sup>33</sup>。イ<sup>33</sup>チ<sup>33</sup>バ<sup>33</sup>ー<sup>33</sup>ン<sup>33</sup> チ<sup>33</sup>ッ<sup>33</sup>チ<sup>33</sup>ー<sup>33</sup>。  
だね。 一番 小さい。

O アレー ホシトイテネー。

あれを 干しておいてね。

K ヤスミメーノ。

休み前の。

T シー。

そうかね。

O アー ソレコソ コマッケーヤネー、メーネー。

ああ、それこそ 細かいヤね 見えない。

A キレーダヨ ソノカーシ。

きれいだよ そのかわり。

T ソーダネー イチレーダラ。

そうだね ー 令なら。

A ソースト ハダガ ヨクナルナンテ ユワネーカ。

そうすると 肌が よくなるなどと 言わないか。

O ハダモ ヨクナルサーネー。

肌も よく なるさね。

K ハダー ヨクナルサ。アレワ イワユル ヨー (<sup>T</sup> ヨーリョクソダ

肌は よくなるさ。あれは 所謂 (葉緑素だからね。)

カラネ。) ヨーリョクソダカラ。

葉緑素だから。

A トーキョーノ アレワ オバサン トカー ソレ ノンデルダナン

東京の あの人は、おばさんの ところは それを 飲んでいるのだなどヒ

テ。

【言っている】。

往

1. 「ナエアルッタ」明確な形は「ナリアルッタ」。『ナル』は呼ぶの意。
2. 「キドク」明確な形は「キトク」。すぐ後で「キトク」という形式も出てくる。
3. 「イシバタケ」石の多い畑。
4. 「トヤマヤノ」「トヤマノ」と言うところを調子を整えるために「ヤ」の音節を添えた。
5. 「カサー ハイアガッテ」「カサカサと草をかきわけて這い上って」の意。
6. 「オタジバーサマ」「タジ」は人名。
7. 「シッテタ」[ʃit̚t̚ta] [t̚] は音節主音的。
8. 「ナニガ イナカカラ クルツチュ」ささやき声。反撥的表现。
9. 「ホテ」「ソーシテ」から次のように縮約された。ソーシテ>ホーシテ>ホシテ>ホテ
10. 「ヨシー」人名よ志ゑの略称。
11. 「ヨシミズ モッテ コイ」ささやき声。直接語法で。
12. 「ノモナキ シンジマウ」ささやき声。直接語法で。
13. 「ゴクゴクゴク」ささやき声。擬声語。
14. 「クン」「クルン」（くるの）の縮約形。
15. 「ダメダメダメ ダメダメ」ささやき声。低く早口に。
16. 「ハア」[xa:] 摩擦は弱い。
17. 「カカガー」嫁こそはの意。
18. 「オレガ ヨメゴノ ユー コト」「私の言うこと」と言いかけて立場を考慮に入れ、「嫁の言うこと」と言いなおした。
19. 「ビョニンダー」ささやき声。直接語法。
20. 「ビョニंगा イルンダッ」ささやき声。直接語法。
21. 「クーシュ ケーホモ ナモ アルモンカ」ささやき声。直接語法。
22. 「センジダシテ」[seɟɟidaʃite] 無造作な発音。

23. 「アノー」指示代名詞。思い出しながら話しているために尾位の拍が長呼されている。
24. 「ソノ」間投詞的用法。
25. 「センジ」[sẽ̞̞ji] 無造作な発音。
26. 「イラネーッ」強く発音。直接話法で。
27. 「ソコカラノ」不明瞭。「ガサガサノ」という樹皮の形容らしい。
28. 「ソノ ツル」次のTの発話によって途切られた。
29. 「マツ」次のAの発話によって途切られた。
30. 「イロノ」次のTの発話によって途切られた。
31. 「センジテ」[sẽ̞̞jite] 無造作な発音。
32. 「ネータタテ」「ネータタシテ」の言い間違い。
33. 「ヤツ」次のCの発話によって途切られた。
34. 「ガーゼニ」次のKの発話によって途切られた。
35. 「ケツアツノ」次のAの発話によって途切られた。



## 5 昔の商店

A 小林弥太郎 男 明治40年12月6日生

O 小林志恵 女 明治40年7月19日生

T 星野 富司 男 大正9年1月27日生

K 小林 喜市 男 昭和15年11月10日生

O マーズ ムカシマー ホーントニ オッカネー ンダッテネー アキ  
 ます 昔は 本 当 に 恐ろしいのだったね  
 ネーヤガネー ナンゲンモ ナカッ タッ チューカラネー (T ナカッ  
 商店がね 何軒も なかったというからね。 (なかったね。)  
 タネー。) センコー カウニワ ヨロズヤダゲシカ ナカッ タッ チュ  
 線香と 買うには 万屋だけしか なかったといったものね。  
 ッタモノネー。

T ソーカシンネーネー。

そうかしれないね。

O ソーダチッタヨー。

そうだと聞いたよ。

T コドモン トキニワ ソコニ <sup>xx</sup>ア カネコサンチニ (<sup>A</sup>ソーダ。)  
 子供の 時には そこに 金蔵さんの家に (そうだ。)

ツ アノー (A モリガ モリサンガナー。) ッテ ヤッ タネー。  
 xxx あのを ( 森が 森さんがな。 ) xxxx やったね。

A ソーダ。

そうだ。

O ソレ オレナ<sup>(1)</sup>ンゾガ

それは 私なヒが

A オレナ<sup>(2)</sup>ンゾガ オベー タノガ

俺なヒが 覚えたのが

T オレナ<sup>(3)</sup>ンゾガ オベー テッカラダ。

俺なヒが 覚えてからだ。

O ソー オレナ<sup>(4)</sup>ンゾガ (A ソントキニ ナレバ ハー) ガッ コーエ  
 ん, 私なヒが ( そのときに なれば もう ) 学校へ

クル ジブンノ

来る 時分の

T シタエ ダイブ ミセガ テキタ。

下に だいつ 店が できた。

A ダイブ アキネーガ テキタッタ。

だいつ 商店が できたものだ。

K ドンナ モンガ アッタダヨ オジーナ<sup>(5)</sup>ンカノ トキニワ。

どんな ものが あったのだよ, おじいなどの [子供]時代には。

A アブラヤガ イッケント ヨロズヤガ イッケン<sup>(6)</sup>グレーサ。アトワ

油屋が 一軒と 万屋が 一軒ぐらいさ。 あとは

ノ ミヤガ アッタグ<sup>(7)</sup>レー。

xxx

飲屋が あったぐらい

O アキ<sup>(8)</sup> キンペーサンガ アッタヨネー。

ああ 金平さんが あったよね。

T キンペーサン アッタネー。

金平さん あったね。

A ソツツギが キンペーサンダッペー。

その次が 金平さんだろう。

O ソレトー アノー カイツァンノ オヤジガ<sup>(5)</sup> コオサンガ<sup>(5)</sup> アレ  
それと あの 嘉一さんの 親父が、 光さんが あれを  
ー ヤッタダイネー。

やったのだよね。

A ソレツカラ ズット ノチニ ナッテダ。

それから ずっと 後に なってだ。

O ゴフクヤオ ヤッテ。

呉服屋を やって。

T ンー ゴフクヤ ヤッタネー。

うん 呉服屋を やったね。

A ソレ メーニ トーフヤオ サンペードンガ ヤッタダ。

その 前に 豆腐屋を 三平さんが やったのだ。

O サンペードーフツチューデ。

三平豆腐というので。

A トーフヤ ソレガ<sup>(6)</sup>

豆腐屋、それが

T カドヤカラネー アノー ナガイマデ ナガイノ イリグチマデ

賀登屋からね あのう 長井(名実)まで、 長井の 入口まで

ゼンブ タンボダッタダ。

全部 田圃だったのだ。

A タンボダッタダ。

田圃だったのだ。

0 タンボダッ タンサネー ソデ ナガイワ ナガケードーデ<sup>(7)</sup> ズーッ  
 田圃だったのさね、 そで 長井は 長街道で ずっと  
ト エレーモンダッ タンネー (エレーモンダッ タネー。) リョーホ  
 たいしたものだったね、 (たいしたものだったね。) 両方が  
ーガ デッ ケー (イケガ アッ テ) タンボデネー (タイシタモ  
 大きな (池が あって) 田圃でね、 (たいしたもの  
ンダッタネー。) ホナー トニ。  
 だったね。) 本当に、

A タイシタモンダ。

たいしたものだ。

0 ムカシャ ヤタラー アノ アレダッ タモノ ヨベナカッタ チュ  
 昔は 滅多に あの、 あれだったもの、 呼ぶなかったという  
ーモノネー。(ソーラシーネー。) チャーント オトリツギガ ナケ  
 ものね。(そうさいね。) ちゃんと お取り次ぎが  
リャー (シ。) オクノ ヘヤニ イテ トーレナカッタ チューネ  
 なければ、(うん。) 奥の 部屋に いて、 通れなかったというね。

T ソーラシーネー。

そうさいね。

A ン サダヨシドンチュー シトワ アレダカラ。

そうさ、 定義さんという 人は あれだから

0 サダヨシドンチュー シトワネー。

定義さんという 人はね。

T ソノ シトガ ケンカイギイン ヤッタンカイ。

その 人が 県会議員を やったのかね。

A ソノ シトが ケンカイギイン ヤッタンサ。

その 人が 県会議員を やったのさ。

O オマッ ツァン<sup>(B)</sup>ノ アニーカイ。

おマツさんの 兄 かね。

A アニーダ。

兄だ。

T ソーダネー オマッ ツァンノ ニーサン<sup>ダッタネー</sup>。

そうだね おマツさんの 兄さん だったね。

A イゲンガ アッタイ カオニ ヒゲガ ハイテ。ケンドーノ セン

威厳が あったよ 顔に 髭が 生えて 剣道の

セーデ ホーシンリューノ センセーデ。

先生で、 法 神 流の 先生で。

O オトリツギガ ナケリヤ ゼンゼン アエナカタダツチューモノ

お取り次ぎが なければ 全然 覚えなかったのだというものね。

ネー。イマワ ハー オトリツギズラ ネー (D 笑)。

今は もう お取り次ぎどころではない。

T キヤスク イエルヨーダ。

気安く 言えるようだ。

A

O デーッケー ウエキ アッ タッテ ウエキー オイタッテ ナンニ

大きい 植木が あったも、 植木を おいても 何にも

モ ナンネーチューデ ナカチャ<sup>(9)</sup>ンガ ズイコン ズイコン ミー

ならないというので なか(1名)ちゃんが ズイコン ズイコン

ンナ イー マツガ アッ タノニ ミンナ モトカラ ズックリケ

皆 いい 松が あったのに、 皆 もとから 挽いて倒して

ー<sup>(10)</sup>シチャッタ。

しまった。

A モッ テーネー ヨーダッ タイナー。

勿体ないようだったよな。

T アカマツノ イーンガ アッ タネー アス<sup>ス</sup>コニ<sup>ス</sup>ネー。

赤松の いいのが あったね あそこだね。

A アカマツ イーンガ アッ タ。

赤松の いいのが あった。

T イ<sup>イ</sup>バ<sup>バ</sup>タニ<sup>ニ</sup>ネー。

池端にね。

O ソイデー ナカチャ<sup>ン</sup>ガ ズックリ<sup>ケ</sup>ーシ<sup>シ</sup>チャ<sup>ッ</sup>タト。オマ<sup>マ</sup>ッ ツッ

それで なかちゃんか 抱いて倒してしまった。 おまっさんが

ンガ キテ オコ<sup>ッ</sup> タッ チューケド オコ<sup>ッ</sup> タラ クッ ツケラ<sup>ッ</sup> サ

来て 怒ったというけれど、 怒ったら、 おっけなさいと

イッ <sup>(11)</sup>テ ユッ タチド <sup>(12)</sup>ドー ショーモネー。

言ったというけれど どうしようもない。

K ソレモ ジダイノ ナガレ<sup>ダ</sup> ショーガ<sup>ネ</sup>ーダッ ペ ソラ。

それも 時代の 流れだ しかたがないだろう、 それは。

O ソコン<sup>チ</sup>ノ ムス<sup>メ</sup>ガ ズコ<sup>ス</sup> アノ ズイ<sup>ッ</sup> キル<sup>ダ</sup>カラ ドー ショ

そのうちの 女が あの ズイコン 切るのはだろう どうしようも

モネー<sup>ネ</sup>ー。(↑ン↓)オマ<sup>マ</sup>ッ ツッ ン キテ オコ<sup>ッ</sup> タッ チッ タ。

ないね。(うん。) おまっさんが 来て 怒ったと言った。

T へー。

へえ【そうがね】。

## 注

1. 「オレナンゾガ」次のAの発話と重複したので途中で言いさした。
2. 「オレナンゾガ オベータノガ」「俺などの記憶にあるのが」の意。  
次のTの発話によって途切られた。
3. 「オレナンゾガ オベータッカラダ」「俺などの記憶にある頃から  
だ」の意。
4. 「キンペーサン」雑貨屋の名前。田中金三郎という人がやっていた。
5. 「コオサン」少しつまって「コ」と「オ」を独立に発話した。[ko  
ʔosaŋ]。人名、光一の略+さん。
6. 「ソレガ」次のTの発話によって途切られた。
7. 「ナガケードー」長い門内の道。
8. 「オマツツァン」接頭辞「お」+人名、マツ+「さん」。
9. 「ズイコン」擬声語。木を挽く音を表わす。
10. 「ズックリケーシチャッタ」「ズックリケース」は「ズイコン」と  
「ヒックリケース」のコンタミネーション形が。
11. 「クツツケラッサイ」「ら」の部分は[dza ~ ɕa]のように聞こえ  
る。破擦音的弾き音。明確な形は「クツツケラッサイ」であるとい  
う。「シャル」系敬語の命令形である。
12. 「ユッタチド」明確な形は「ユッタッチューケド」。「～という」  
の意の「チュー」は時に直音化して「チ」となる。

## 6 昔の菓子・飴売りのおばあさん

A 小林弥太郎 男 明治40年12月6日生

O 小林よ志恵 女 明治40年7月19日生

T 星野 富司 男 大正9年1月27日生

K 小林 喜市 男 昭和15年11月10日生

K ソノ オジーナンカノ チッ チュー トキワ アレキアー ソノ  
 おじいさんの 小さい ときは あれがよ、  
 アメナンカ ドーユー アメダトカ ソンナ モナー アッタダッ  
 飴など どういう、 飴 だとか そんな ものは あっただうけれどき。  
 ペケドサー。

A アッタサー。

あったさ。

K ソーユー アレワ<sup>(1)</sup>

もういっ あれは

O マックロナ アメダマツチュ ンガネー イチエン カウト トツツ

真黒な 飴玉というのがね 一円 買うと 十粒ぐらい

ブグレ アッタ。

あった。



A イワダマト ネジッタ ヤツト。

岩玉と 換った ヤツと。

T ソイデ オランカノ オランカ オランカッテ コター ネーケド

それで 俺などの、 俺など 俺など という コトは ないけぬどき、

サー アノ ジブン<sub>×××××</sub> ブッ<sub>×××××</sub> カミ<sub>×××××</sub> ブッ カキ アメ ヲ テンガ アッタ。

あの 時分

ぶっ欠き 髪というのが

あった。

O ブッ カキ アメ。

ぶっ欠き 髪。

A ブッ カキ アメ。

ぶっ欠き 髪。

T ヒツヨーニ オージテ アント イッセンテ ユートネー アノー

必要に

応じて

一 銭と

言う とね

イター<sub>×××××</sub> イタニ ノシテ アンダヨ (0ソーダ) (Aソーソー)

板

板に

伸して

あるのだよ。(もうだ。)(もうもう。)

ウドンノ アノー ヤツミテニネー バンノ ウエデ ノシテネ

うどんの

あのう

やつみたいだね

板の

上で

伸してね

ー コノクレー アツク ナッテンダヨ。ソレオ アノ ノミデ

このくらい

厚く

なっているのだよ。

それを

あのう、

盤で

コッソ<sub>ン</sub> コッソ<sub>ン</sub> ゲンノーデ タタイテ (0コン<sup>(2)</sup> コン<sup>(2)</sup> タタイチヤ

コッソ

コッソ

玄 翁で

叩いて

(コン

コン

叩いてはね。)

ーネー。)ソイデ テキトニ ウッタンダイネー。

それで

適当に

売ったのだよね。

O ソーソー。

もうもう。

K ヘー。

へえ。

0 ブッ カキ アメ バー サマッ チュ デ オヨシ バー ガ<sup>(3)</sup>  
 ぶっ 欠き 飴 ばあ 様 というので おヨシは あが

T ン ー ヨシ オ バー ガ ヤッ タン ダ。  
 うん ヨシおはあ が やったのだ。

A ハタ ゴ ヤ エ ナ ン ゾ ト マッ テ テ サ ー (↑ シ ↓ 。) ソ イ テ ホ コ ノ ハ<sup>(4)</sup>  
 旅籠屋 へ な ビ 泊 っ て ま さ ( うん。 ) それで その

シ ラ エ ブ ッ ツ ケ テ コ ワ シ チ ャ ー ノ バ シ チ ャ ー (↑ ノ バ シ テ  
 柱 へ ぶ っ け て 壊 し て は 伸 し て は ( 伸 し て

シ ー シ ー シ ー シ ー ヨ ル (↑ テ ツ バ キ ツ ケ テ ネ ー 。) (0 笑)  
 うん うん うん。 ) うん , 夜 ( 手 唾 を つ け て ね。 )

ン ヨ ル コ セ ー チ ャ ー ソ デ ア ー シ タ ダ テ ツ バ キ ツ ケ チ ャ  
 うん 夜 作 っ て は それで あれ したのだ , 手 唾 を つ け て は。

—

K ノ シ テ ソ イ テ ノ シ テ。  
 伸 し て , それで 伸 し て 「 かね 」。

A ソ イ テ ノ シ チ ャ ー コ ー ニ ~~~~~  
 それで 伸 し て は こうに

0 コ マ ヨ セ ノ シ ン ノ ジ ョ ー ガ ノ オ ヤ ジ ガ ソ レ テ シ タ ダ ノ ギ  
 駒 寄 (地名) の 進 之 丞 の 親 父 が それで したの ,

リ ギ リ ア メ ッ チ ュ ン デ コ ー ニ ギ リ ギ リ ギ リ ギ リ ~~~~~<sup>(5)</sup>  
 ギリギリ 飴 というので こうに ギリ ギリ ギリ ギリ

A ソ レ ワ マ タ ミ ズ ア メ サ ー ソ レ ワ ミ ズ ア メ 。ブ ッ カ キ ア メ ト  
 それは また 氷 飴 さ 。 それは 氷 飴 。 ぶ っ 欠 き 飴 と

ミ ズ ア メ ワ チ ガ ウ ン 。  
 氷 飴 は 違 う の 。

0 ソイデ アスコ キテ ヤッタン。 ソナンガ ミンナ ハジマリ  
 それで あそこに 来て やったの。 そんなのが みんな、 はじまりだよ、  
ダイネ。

A ウドンゴナデ アレ マゼテ ソレデ ブツ カキアメ。 トミチャン  
 うどん粉で あれを 混ぜて それで ぶっつき餛飩。 富ちゃんが  
 が ユーノウ ブツ カキアメ。  
 言うのは ぶっつき餛飩。

T ブツ カキアメ。  
 【もう】 ぶっつき餛飩【だ】。

A ギリギリッ チューナー ハシー カランデ<sup>(6)</sup>  
 ギリギリ【餛飩】というのは 箸を からんで

T ン ハシー カランデ (<sup>0</sup> ソレー ミズアメデネー。) ミズアメ  
 ん 箸を からんで (それが 水餛飩でね。) 水餛飩、  
イマノ アサダアメダ カンニ ハイッテル アサダアメ。  
 今の 浅田餛飩だ 罐に 入っている 浅田餛飩だ。

A アサダアメト オナジダ。  
 浅田餛飩と 同じだ。

0 イッセン ヤッテ イクラッテ コーニ アレ スルシナ  
 一銭 ヤッマ 幾らと こうに あれを するからな。

K ソノ コロ イッセンダ<sup>(7)</sup> ヤッパリ。  
 その 頃 一銭だ やはり？

0 イッセンサ ヨ<sub>xxx</sub> アノ ヨシバーサマガ アノ ブツ カキアメデ  
 一銭さ、 あの、 ヨシはあ様が あの、 ぶっつき餛飩でね。  
ネー (A ブツ カキアメ ソーダ。) ヒー ヘー ヒー ヘー ナンテ  
 (ぶっつき餛飩 そうだ。) ヒー ヘー ヒー ヘー なびね。

ネー アレー アノ カサッ カキカイ。

あれは あの、 かさかきかぬ。

T 4 - ショカッ タネー。

調子よかったね。

A カサッ カキダ カサガ カイタンダ。

かさかきた、 かさがきになったのだ。

O カサッ カキデ ハー コンシヤ ハー (4) イマニモ キレ イ  
かさかきで ハー こんにちわ ハー と今にも  
xxxxx

キガ キレソーネー。

急が 切れそうね。

T ソイデ キ キレナカッタネー。(皆笑)

それで 切れなかったね。

A ソイデ ニクマレバーサマデナー。

それで 憎まればあ様でな。

O ハシゴッパ シッ テ クレナンテ ネー ビー ゴーナンテネー  
梯子屋を ムッて くれなどと ね、 ビー ビー などとね、

ピッピッピナンテ コレワ クサビダナンテ マー(〇笑)。

ピッピッピなどヒ これは 楔だなどヒ まあ。

T デ アノ シトノ ユッタンガ オレ イマン ナッテ ソー オ  
で、 あの 人の 言ったのが 俺 分に なって そう

モッ タケドサー アレ イーズカケートナンダヨ。オレノ オフ

退ったけれどさ あれ 飯塚系統なんだよ。 俺の

クロノ デドコノ ナンダ イーズカ ナンダッタカネー。

御袋の 出所の なんだ、 飯塚 何だったかね。

A スリブ4ノカー。

摺淵のか。

T シ↓。

うん。

O ハー↗。

へえ。

T ホーイデ オレワ アノー シンダラ オメー セワン ナルンダカ  
それで、 私は 死んだら おまへの 世話に なるのだから

ラチュート ヒトツズツ ヨケー クレター オレニ (〇ハ↗。)

と言うと ひとりずつ よけいに くれたよ 俺に (へえ。)

ヒトツカケズツネー。ソースト ホーントニ オレガ ハカモリン  
一欠ずつね。 そうすると 本当に 俺が 墓守に

ナッチャッタ。オレ シトリダヨ。(〇ハ↗。)<sup>(10)</sup> オテノ セドニ

なってしまった。俺 一人だよ。(へえ。) お寺の 裏に

ポツント アノー (〇アルンカイ。)(Aワッダッペー。)アルケドネー。

ポツント (有るのかね。)(そうだろう。) 有るけれどもね。

ボントネー ショーガ<sub>×××××</sub> ショーガツ オガムノ オレッキリダヨ。

盆とね 正月 拝むのは 俺だけだよ。

O アンナ アクダレバーサマー アレダナー ドンナ シニガマ シ

あんな 悪たれはあ様は あれだな どんな 死に様か

ルナンテ ミンナ ワルクウ イッ タケド コロリ シンデネー

するなどと 皆 悪口を 言ったけれど コロリ 死んでね

テーテー イー シニカター シタダ。

たいへん 良い 死にかたを したのだ。

A イー シニカタ シタダ。

良い 死に方を したのだ。

K ヤッパリ ソー ヤッテ ウリアルツタダッペー。

やはり そう やって 売り歩いたのだらう。

O ウリアルッタ (↑ウリアルッタ.) ジョイアルッター.

売り歩いた ( 売り歩いた。 ) 背負い歩いた。

T ジョッテサー ダーラ アノー ゼンソクニ イマ イマニモ イ

背負ってさ だから 喘息に 今にも

キガ キレソーナンダヨ。 オテラノ ダイモン アガッテ クルト

息が 切れそうなんだよ。 お寺の 大門を 上って くと

モ イマニモ イキガ キレソーデ ソイデ ワルクチワ イ

もう 今にも 息が 切れそうで それで 悪口は

ッタンダカラ。

言ったのだから。

A ワルクチベ。

悪口ばかり。

O アー ソレコソ ワルクチノ イーホーデー。

そうだ、それこそ 悪口の 言い放題。

A アノ ジトガ ホム ホメルナンチュ コト ナカッタ。

あの 人が 誉めるなどという こと 無かった。

O アガリハナ キテ イナケリヤ アー コー ヒッパタイテ ホイ

上がり立端へ 来て いなければ もう こう しゃべりたいで それで

デ ハー アメ カウ カウエツチュンテ <sup>(M)</sup> (A カエツチュンテ) ハ

もう、 食を 買えというので ( 買えというので )

ー チドリナンゾ クルツチュート ハー ノケセ ヒッグルケー

もう、 千鳥 などへ 来るというも もう あおむけに しゃべりがえって

ッテ アガリハナエ キテ チドリノ ジトナンゾガ キ ネテル

上がり立端へ 来て、 千鳥の 人などが 寝ているのだ。

ダ カイコドキナンゾ キタッテ イソガジーカラ ソナ カサ

蚕時など 来ても 忙しいから、 そんな

ッ カキノヨーマ コエダカラネー キーネーカラ シ<sub>xxx</sub> キーネーテ  
 かきかきのよな 声だからね 聞こえないから、 聞こえても

モ シラバックレテルンサー。ソー スルトー アクダレ ユッ テフタ  
 しらばくれているのさ。 そうすると 悪たれを きては

<sup>(12)</sup> リ ナッ テルダイ。ソノ ヘンナ コエデ。シラバックレテルンサ  
 大きな声を出しているのだよ。 その 変な 声で。 しらばくれているのさ。

ー。

K ソラ コッ 4デ ツクッ テー。

それは こちうで 作って かね?

T ジブンデ ツクッ テ (A ジブンデ ツクッ テサー) (K ジブンデ  
 自分で 作って、 (自分で 作ってさ) (自分で

ツクッ テ。) ジブンデ ツクッ テ ショ イアルッタン。ダーラ ソノ  
 作ってが。) 自分で 作って 背負い 歩いたの。 だから その

ショ イカゴッテンガ ザマッ カゴー イマー ソーユ スガタ  
 背負い籠 というのは さま 籠を 今は そういう 姿は

ナク ナッ タケドサー アノ カゴノ フチガネー テア<sub>xxxx</sub> テアカ  
 無く なったけれどさ あの 籠の 縁がね 手垢

ツチュンカ テアブラデ (A シ アブラデナー) (D ヒカッ テタ)  
 というのが 手油で (うん 手油でな) (光っていた。)

クロク ヒカッ テタ。 (K ヘー。)ソレ セナカエ アノー アタル  
 黒く 光っていた。 (へえ。)それを 背中へ 当る

トコダケ ヌノ オッ ツケテサー。ソイデ ショ イアルッタンダ  
 所だけ 布を つけてさ。 それで 背負い歩いたのだよ。

ヨ。

K ナルホドネー。

なるほだね。

O ソノ ザマッカゴ イレルー ナングネ イロンナ モノ ブッコ  
その さま 籠入 入れる 何だね いろいろな ものを ぶっ込んで

ンデ ソノ ウエー コー ハコー アゲテネー ソノ ハコノ  
その 上に こう 箱を 上げてね その 箱の

ナカニ ブッカキアメガ アルンサ。

中に ぶっつき餌が 有るのさ。

T アルンダヨ。

有るのだよ。

K イクジュルイモ ドーセ イレテルダッペ、イクツカ  
幾種類も どうせ 入れているだろう。 幾つか

O ソイデ ゴマナズー シメーニャー イレテネー。  
それで 胡麻なびを 熱いには 入れてね。

A ゴマー イレテ ゴマモ ヨク イレタ。  
胡麻を 入れて、 胡麻も よく 入れた。

O イレテ ヤッタンサネー、シトイロ<sup>(15)</sup>ッキリサー。  
入れて やったのさね。 一色だけさ。

A シトイロ<sup>(15)</sup>ッキリサ ナニモ アリャー シネー。  
一色だけさ 何も 【他には】 ありは しない。

O ソレ<sup>(14)</sup>ッキリ モチアルクン、ソイダカラ ヨッポド ヨシットデ  
それだけを 持ち歩くの。 それだから よほど 生きていたのだよな、

ナツノト<sup>(14)</sup> キヨシサンガ クルトキ キマッダッ チッタラ テー  
清 (人名) さんが 来る とき、 決まったと 言ったさ

ラジュ<sup>(15)</sup>ー キテ ワルクチ イッテ アル<sup>(16)</sup>ッタ<sup>(16)</sup>チュデ オキンサ  
平中 来て 悪口を 言って 歩いたし いうのぞ お金さんがね



ンガネー クヤシガッテ (「ンー シー シー ニシ」ーノ) ニシ  
悔しがって うん うん うん 西屋(地名)の。

ーノ オキンサンガ クヤシガッテ マー オヨシバーサマが ソ  
西屋の お金さんが 悔しがって まあ、 おヨシはあ様が

ー イッテ アルッ タッ チュー ケド アノー オラガ ウチワ ケ  
そう 言って 歩いたというけれど、 あのう、 私の 家は

ツカラ ハイリコムヨーダッテ ミンナニ ユッテ アルッ タンサ  
穴から 入り込むよう だに 皆に 言って 歩いたのさね。

ネー。キヨシガ ウチワ アノー ケツカラ ハイリコムヨーナ  
清の 家は あのう 穴から 入り込むような

ウチダッテ ユッテ アルッ タンサー。  
家だって 言っく 歩いたのさね。

A コンチワーッテ、ユエバ セドエ デル ~~~~~ コンチワーッチュ  
こんにちは ヒ 言えは 裏へ 出る こんにちはと 言えは

エバ セドエ デルヨーナ ウチダッテ ユッダ。  
裏へ 出るような 家だって 言った。

O ソー イッテ ユッ タッ チューデ マー。  
そう 言って 言ったというので まあ。

A ヨシバーサマが ~~~~~  
ヨシはあ様が

O ヨシバーサマが ソーニ キテ ユッ タンサ オラガ チーアタリ  
ヨシはあ様が そうに 来て 言ったのさ、 私の 家 あたりにも

モ キテネー (K シ ↓) オレガ ホー イチネン サキー キタン  
来てね (うん。) 私の 方【には】一年 先に 来たのかな

カナー ホーイデ ヨシバーサマ ソー イッ タッ チューデ オ  
それで ヨシはあ様が そう 言ったのだというので

キンサン クヤシガッテ (0 笑)。

お金さんが 悔しがって。

K ドーセ スイブン ソーユヨーナ ウチダッテ アッタダッペナー  
どうせ すいぶん , そういうような 家だって 有っただろうな,  
ムカシダカラネー。

昔だからね。

T ムカシヤー イロイロ キョクタンダッタカラネー。

昔は いろいろ 極端だったからね。

K ネー。キル モンカラ クー モンカラチュエバ イロイロ ゴツ  
ねえ。着る ものから 食う ものから といえは いろいろ 雑  
ダッタペーカラ。

だったろうから。

O ンー↓ ゴツダッタサー。

そうだよ, 雑だったさ。

## 注

1. 「アレワ」次の「リ」の発話によって途切られた。
2. 「コン コン」二度目の方がやや高い。
3. 「オヨシバーガ」次の「丁」の発話と重なったため途中で言いさした。
4. 「ホコノ」[xokono] [xコ]は軟口蓋摩擦音。
5. 「ギリギリギリギリ」歌うような調子で。
6. 「カランデ」次の「丁」の発話によって途切られた。
7. 「イッセンダ」円より下の一銭二銭という単位だったのか。
8. 「ヒー　ヘー　ヒー　ヘー」擬声音。「ヒー」の部分は息を吸って喉を鳴らしている。「ヘー」の部分は息を吐いて喉を鳴らしている。
9. 「ヘー　コンジャ　ヘー」押さえたかすれ声。ものまねをするように。
10. 「ヘー」無声喉頭摩擦音。
11. 「カウエッチュンデ」「カウ」と言いかけて「カエ」と言いなおしたために「ウ」の音が弱く残った。
12. 「ユッテフタリ」話者の説明では「ユッテッチャー」（言っている）と言っている、ということである。
13. 「シトイロ」一種類。
14. 「ヨシットデ　ナツノト」話者の説明では「イキテタダイナー」と言っている、ということである。
15. 「テラジュー」森山（地名）の中の平という組中。
16. 「イッテ　アルッタ」言い廻ったの意。
17. 「コンチワーッチュエバ　セドエ　デルヨーナ　ウチダッテ　ユッタ」この部分笑いながら。

## 7 病気見舞の品物

A 小林弥太郎 男 明治40年12月6日生

O 小林よ志恵 女 明治40年7月19日生

T 星野 富司 男 大正9年1月27日生

K 小林 喜市 男 昭和15年11月10日生

O アーメシナンザ カラーメシデ アワワ コメー イレナクモ ク  
粟飯などは 空飯で 粟は 米を 入れなくても

エルブレードッ チュ オシエタモノ<sup>1)</sup> ジョーダンジ<sup>2)</sup> ネーヨ。イマ  
食えるくらいだという【こども】 教えたもの、 冗談ではないよ。

ナンザ<sup>2)</sup> ハナシ

今などは 話

A アーメシワ コメー イレナクモ クエル。

粟飯は 米を 入れなくても 食える。

O ハナシン ナンネーヤー。

話に ならないや。

A ムギメシン ナケー アズ<sup>xxxx</sup>アズギー イレルトカ アズギー イ  
麦飯の 中へ 小豆を 入れるとか、 小豆を

レテ クエバ テーガ イーヤ。

入れて 食べば 見栄えが いいや。

T オホシサマッ タダカラネー。

お屋様と言ったのだからね。

O シ、オホシサマサー。

うん、お屋様さ。

T ビョーニンノ マクラモト イッテ タケツツニ コメー (〇オコ  
病人の 枕元に 行って 竹筒に 米を

メダ オコメダッ テレバ ビョーニンガ ナオルツツン。) ビョーニ  
(お米だ お米だと言っていれば 病人が 治るといふの。) 病人が

ンガ ナオルツツー マー ソンナ キョクタンナ ハナシダケド  
治るといふ まあ そんな 極端な 話しだけれども

モ ソーダッ タソーダカラ ソノクレー キチョーダッ タラジューヨ。  
そうだったそうだから そのくらい 貴重だったらしいよ。

O ンー キチョーダッ タダネー。

うん 貴重だったのだから。

A ダッテ コノ モリヤマダッ テダッ ペ タンボノ アッタノワ キ  
だつて この 森山(地名)でも だろう 田圃の あったのは

クガ マー イチバン アルッキリデ オテラガ アルシー キヨ  
【郵便】局【の家】が まあ 一番 あるだけで お寺が あるし

シガ トコガ サンメー ウシオザイニ アッタッキリダッ タッ ペ  
清(名)の ところが 三枚 後田に あったきりだったろう。

ー。ダレモ ホカノ シトナンザー タンボノ タノジモ アリヤ  
誰も 他の 人などは 田圃の 田の 字も ありは

ー シネー。

しない。

O ダカラ イマワ ボンモ ショーガツモ ネー ミンナー アレダ  
だから 今は 盆も 正月も ない、 皆 あれた

ケド ムカジャ<sup>XXX</sup> ナ モノビッチエバ ウレシ<sup>カ</sup>ッタンサネー。

けれど 昔は 物日といえは 嬉しかったのさね。

オサンヤサマダトカ<sup>(4)</sup> ジューニサマダトカ<sup>(5)</sup> ソノ タッピニ タイ

お三夜様だとか ナニ様だとか その 度に

シタ モンジャ ネンサー アズキゲートカ マー スイトンダイ

たいした ものでは ないのさ 小豆粥とか まあ、 水団だよね。

ネー。マー ソーメン カッテ クル。シニカカッタ シトガ ソ

まあ 素麺を 買って くる。死にかかった 人が

ーメン クーグレーサネー。

素麺を 食うぐらいさね。

T ソーダネー。(T.A.K笑)

そうだね。

K ノドエ トーンネーカラカー。

喉へ 通らないからか？

O ソーサー。

そうさ。

T タマゴガ モー ビョーニンダケダッ タモノネー。ビョーニント

卵が もう 病人だけだったものね。 病人と

アカンボダッ タカネー。

赤ん坊だったかね。

A シトン ビョーキミメーニ クズガ クズノ コレ コノックレー

人の 病気見舞に 葛が、 葛の これ このくらいの

ノ ヤツニナー マルクッテ コノクレーナ イマノ カンズメグ

やつは な、 めくら このくらいな、 今の 罐詰めぐらいな

レーナ ヤツ。

やつ。

T アー クズコッ テンガ アッ タネー。

ああ 葛粉 というのが あったね。

O クズコッ チュンガ アッ タッ ペー。

葛粉 というのが あったろう。

T チョー ド アノ ボールガミノ チャ ズツダヨー。

しょうど あの ボール 紙の 茶 筒だよ。

O ソー コレニ ヒ キー モッ タグレー ナネー。

そう これに 気を 持った ぐらいな【本さの】ね。

A コレヨリ フテヤー。

これより 太いよ。

O シ。

ん。

A イマノ カンズメダ (〇ソソナ ヤツ ミ ミ) ニホンカー サン

今の 罐詰だ, (そんな ヤツ) ニ本が 三本

ボンダイナー ビョーキミメー。

だよな, 病気見舞【に持っていくのは】。

O サンボン コーニ ビョーキミメー モッテ クルン。

三本 こうに, 病気見舞に 持って くるの。

T ダッテ ニジュー アレガネー ニジュー ニジューゴセンカナー。

でも あれがね 二十五 銭かな。

(〇笑) ヨク カイー ッタヨー オレ アラー。

よく 買いに 行ったよ 俺は, あれは。

A ビョーキダナンテ

病気だなどヒ

O ソレト サトーオネー コー フクロダケワ デーッ ケー フクロ

それと 砂 砂糖をね こう 袋だけは 大きい 袋でね,

デネー (↑ ↓) アーユ ヤツ ミンナ サトーネー クレタダ  
(うん。) ああいう 皆、 少々糖をね くれたのだ

ッ タイネー ビョーキミメーニ ミンナ。  
ったよね、 病気見舞に、 皆。

A ビョーキミメーサ。

病気見舞さ。

O オボエテルヨ。

覚えているよ。

K ソレ ユイツノ ビョーキミメーノ シナモノダ<sup>重1</sup>。  
それが 唯一の 病気見舞の 品物だ？

O ユイツノ ユイツノ ビョーキミメーサ<sup>重2</sup>。  
<sup>重1</sup> 唯一の 病気見舞【の品物さ】。

A ソレ ユイツダカラ。  
<sup>重1</sup> それが <sup>重2</sup> 唯一だから。

O ソイデ<sup>xxx</sup> ヨメゴニ クルト ソノ トシマー モー セッ キニ  
それで 嫁に 来ると その 年は もう 季節の終りと  
ショ<sup>(6)</sup> チューデネー。  
暑中だね。

K ンー<sup>↑</sup>。  
何だって？

O ヨメゴニ クルトサー ソノ トシワ ミンナ アノー シキサー  
嫁に 来るヒさ、 その 年は 皆 ああう 仕着せ、  
(↑ ↓) ハルサキワ ホラ ヤマッ キト モモヒキネー キセテ  
(うん。) 春先は ほら 山着と 股引ね 着せて  
ソイデー ナツワ マー ヒトエモノ イチメー フユワ マー  
それで 夏は まあ 単衣 一枚 冬は まあ



アレダ アワセー キセタモンサーネー。

あれだ、 裕を 着せたものさね。

T ソーダッ タネー。

そうだったね。

O シ ハジメテノ トシダケワ タビ イッ ツォク ゲタ イッ ツォ  
ラム、 初めての 年だけは 足袋 一足 , 下駄 一足。

ク。タビ イッ ツォクグレー カッテ モラッタダケデ オメー  
足袋 一足ぐらい 買って もらっただけで おまえ、

ヒトフユジュー ハケルモンジャーネー。

一冬中 穿けるものではない。

## 注

1. 「オシエタモノ」この部分小声で。
2. 「ハナジ」次のAの発話によって途切られた。
3. 「ソー キチョーダッタネー」発話全体小声で。
4. 「オサンヤサマ」お月様をまつる行事。
5. 「ジューニサマ」山の神様。
6. 「セッキニ ショチュー」註者の説明では「セ<sup>4</sup>ーイショー」と言っている、ということである。その意味は暮に正月の着物を買ってくれること、である。ただし、この後のOの発話を追ってみると、季節の終りと暑中に着るものや身につけるものを買ってくれることの意でも矛盾はない。

## 8 出稼

A 小林弥太郎 男 明治40年12月6日生

O 小林よ志恵 女 明治40年7月19日生

T 星野 富司 男 大正9年1月27日生

K 小林 喜市 男 昭和15年11月10日生

T ソノ ジブン デカセギッ テンガ アッ タダイネー。(Aソー ソ  
その 時分 出稼というのが あったのだよね。(そう そう。)  
ー。) イマデ ユー デカセギガー。  
今で 言う 出稼が。

O ソーサーナー。  
そうさな。

K シン。  
うん。

T アン ジブン イチバン フケーキダッ タネー。(Aフケーキダッ  
あの 時分 一番 不景気だったね。(不景気だったよね。)  
タイナー。) ムラニ シゴトガ ネンダカラ。  
村に 仕事が ないのだから。

A オラガ ホージャ アシオドーガンニ イッ タダ。  
俺の 方では 足尾 金山に 行ったのだ。

T ンー。

そうかね。

A ン。アシオドーザン イッタリ ネバザー イ<sub>xx</sub> ネバザー ジャ  
もうだ。 足尾 銅山に 行ったり 根羽沢(地名)に、 根羽沢では

ネー ナメ<sub>xxxx</sub> ナメザワ。アシオドーザンニワ ナン<sub>xxxx</sub> ナンネンモ  
ない、 奈々沢(地名)【に行ったのだ】。 足尾 銅山には 何年も

イッタイ。イカリヤノ<sup>(1)</sup> ミチサント<sup>(2)</sup> イッタイ。  
行ったよ。 「イカリヤ」の 未知さんと 行ったよ。

T ヘー。

そうかね。

A ン。アスコニ アル アノ ゲンノーナンガー アシオドーザン  
うん あそこに ある あの 玄翁 などは 足尾銅山から

カラ ジーサマ ショッテ キタダ。  
じい様が 背負って きたのだ。

O デッケー ~~~~

大きい

T コノ ヤマ コシタンカイ。

この 山を 越したのかね。

A コノ ヤマ コシテッタンサー。

この 山を 越していったのさ。

T ンー。

そうかね。

A シニッパグレニ アウヨーニ シテ (ンー) ロクリンパンノ<sup>(3)</sup> コ  
死ぬような 思いをして (ふうん。) 六 林 利王を

シテッタンサー。

越していったのさ。

K イマノ リンドーノ アスコノ オクノ (A シー) ロクリンパン  
 今の 林道の あそこの 奥の (もうだ) 六林班を  
コシテカイ。  
 越してかぬ。

A ロクリンパンノ コシテ コーシンザンニ デテ ソイデ ギンザ  
 六林班を 越して 庚申山に 出て めいで 銀山に  
 ンニ デテ。  
 出て【行ったのだ】。

K オモニ アシオトカ ソンナ コーザンガ オーカッタ ワケダ。  
 主に 足尾とか そんな 鉾山が 多かった めけだ。

A コーザンガ オーインサ。  
 鉾山が 多いのさ。

O オラガ デーン ナッテ コンダー コンダ キリュノ ウメダ  
 私の 代に なって 今度は、 今度は 桐生の 梅田へ  
 エ カセギニ<sup>(4)</sup> オジーナンゾ イッタ。  
 穢ぎに おじいなどは 行った。

A オラナンザー ムラダッテ セーカツヒニ<sup>(5)</sup>  
 俺などは 村でも 生活費に

O マイトシ イッテ カンノ<sup>(6)</sup> ショーワ ニ<sub>xxx</sub> ニネン イッテ ソイ  
 毎年 行って 昭和 二年に 行って めいで  
 デ カラダガ マイッ チャッタ。  
 身体が まいってしまった。

T アー ショーワ ニネン。  
 ああ 昭和 二年かね。

O シン オジー イチネン ミズン ナカデ シゴト シトフユジュ  
 シン おじい 一年、 水の 中で 仕事を 一冬中だもの

ーダモノ タマラネーサネー。

たまらぬさね。

I<sup>cu</sup> ウメダワ ナニニ イッタン。

梅田は 何[の仕事]に行ったの？

A ゴガンコー ジダッ タネー ヒサカタマチー。

護岸工事だったね、 久方町に。

K アー カーラノカー。

ああ 河原のか。

I キ キリュー<sup>xxx</sup> ノ<sup>↘</sup> (A<sup>↘</sup>.) キタノネー。

桐生の (うん) 北のね。

A ノ<sup>↘</sup> ソー ソー キタノ。

うん、そう そう 北の。

I ノー。

そうだったの。

O シマ シンガー ショワン イクタレ<sup>(4)</sup>

写真が

A ノコッテルカ シンネーナー。

残っているか しれないな。

O ノコッテルカ シンネーナー。

残っているか しれないな。

I ジャー キリューガワノ ゴガンコー ジ。

では 桐生側の 護岸工事【だね】。

A ソーダッ タイネー。アレガ アレテ トキノ ゴガンコー ジダッタ。

そうだったよね。 あれが 荒れて、 時の 護岸工事だった。

O ソレガ ナキヤー ウジー ヒーテ ドタッ<sup>(19)</sup> ヒキダモノネー。

それが なければ 牛を 引いて ぐたっ引きだものね。

T ソーダネー。

もだね。

O ンー↓。

そうさ。

A ウンソーヒキガ ドタッヒキ。

運送引きが

どたっ引き。

O ウンソーヒキガ ドタッヒキ。

運送引きが

どたっ引き。

T ソノゴー コツチノ サボーコージガ ハジマッタ ラケカネー。

その後

こちらの

砂防工事が

始まった

わけかね?

コノ <sup>(10)</sup>シガキノ シガキ シガキダッ ケ シライワカー。

この

白岩(地名)か?

A シライワ ハー ソー ナッテ クルト ズット アダラシク ナ

白石

もう

そう

なっ

くと

ずっ

と新しく

ッテ クルナー。

なっ くるな。

T アダラシク ナッテ クルダネー ショーワン ナッタカラ。

新しく

なっ

くのだね、

昭和に

なったから。

## 注

1. 「イカリヤ」旅館の屋号。
2. 「ミチサン」人名、未知造の略+さん。
3. 「ロクリンパン」場所名。営林署がある。
4. 「カセギニ」働きにという意味も含まれている。
5. 「セーカツヒニ」次の〇の発話によって途切られた。
6. 「カンノ」意味不明。
7. 「I」調査者、上野勇。
8. 「ショワン イクタレ」意味不明。
9. 「ドタッピキ」材木の頭に鋸のようなものをうちつけて縄で牛に引かせる運送法。「荷の運搬と牛の扱い」の項参照。
10. 「シガキ」話者の説明では平瀧という地名ではないかとのこと。「シガキ」という地名はない。



## 9 荷の運搬と牛の扱い

A 小林弥太郎 男 明治40年12月6日生

O 小林よ志恵 女 明治40年7月19日生

T 屋野 富司 男 大正9年1月27日生

K 小林 喜市 男 昭和15年11月10日生

O アサマドノ ナニ カシラナシカー アスコノ オテラノ ジシヨ  
 浅間戸(地名)の 何だっけ、 頭無(場所名)が、 あそこの お寺の 地所は  
 イマ アレカー ダレガ ツクッテル。イシヤナンゾガ ツクッ  
 今 あれが 誰が 作っている。 石屋などが  
 テルンカ。アノー カジューオケノ<sup>(1)</sup> アノ ワキー キョクノ カ  
 作っているのか。 あの 架皇桶の あの 脇に 【郵便】局の  
 ラマツダッ ケカ デーッケーガ アッタイネー アレー キッテ  
 唐松だっけか 大きいのが あったよね、 あれを 切って  
 ソイデ<sup>xxxx</sup> オジ オヤジガ ダスッ チュッ タケド オレガーニ コー  
 それで 親父が 出すと言ったけれど 私に こう  
 カター アガンネーダイ。コドモガ ネーカラ ヤダ<sup>(A)</sup> オテラ  
 肩に 上がらないのだよ。 子供が ないから いやだ、(お寺の  
 ノ カラマツダッ タッ パー。) ヤダッテ オーダッテ イガナクチャ  
 唐松だったろう。) いやでも おうでも 行かなくては

ナンネー。ソイデ キッチャー オヤジガ ココ アゲテ クレチャー  
ならない。それで 切っては 親父が ここに 上げて くれては

ー デメーデ アトカラ イッチャー モッテッチャー ウンソー  
自分で 後から 行っては 持って行っては 運送に

エ ツケタダイ。(Kシー。) ソンナ オモイ シタ (〇笑)。

付けたのだよ。(そうかぬ。) そんな 思いを した。

K ウンソー ア ウンソーガ デテッカラ ダイブ アレカー。

運送、あ、運送が 出てから だいつ あれか？

A ハー ウンソーガ デテッカラ ダイブ ヨク ナッタ。ソレ メ  
もう 運送が 出てから だいつ 良くなった。その 前は

ーワ ミンナー ジゴロデ <sup>(2)</sup> ヒクトカ ドタッピキサー。

皆 「ジゴロ」ぞ 引くとか じたっ引きさ。

I <sup>(3)</sup> ドタッピキッ テナー。

ドタッピキ というのは【どういうやり方で引くの】？

A ウシノ セナカ ケツイ アノー ドッ <sup>(4)</sup> コイッ チューノ イッ ツケ  
牛の 背中、穴に あのう 「ドッコイ」というのを 縫いつけ

トイテ ソイデ ナワ イレテ アノ カス カスゲー ミテーナノ  
ておいて それで 縄を 入れて あの 金送のようなものを

コーイニ ブッ テネ ソイデ ヒクン。

こいう風に 打ち込んでね、それで 引くの。

I ン。  
なるほど。

A ソイデ ジョート ダッダ <sup>(5)</sup> ジョーズン ナッテ ハナゾリ リッ チュー  
それで 上等だった。上手に なって 端櫓というのを

ノ シテ ソイデ ヒク ヨーニ シタ ダッダ。ホッ カイドー ナンゾ  
して それで 引くように したのだった。北海道など

デ<sup>16)</sup>ワ コナイダマデ ソレ ヤッタ ワケダイネー。コナイダ リョ  
では この間まど それを やった わけだよ。 この間

コーニ イッタ トキ ホッ カイドー ミンナ ソレ ヤルダッ タ  
旅行に 行った 時 北海道は 皆 それを やるのだと高ッ  
ッケー。カザッ テ アッ タッ ケー。カイコン トキノ アレダナン  
たっけ。 飾って あったっけ。 開墾の 時の あれだなど。と。

テ。ハナゾリッ テ キーセー ソリサネー。ソコエ アノ ハナダ  
端 ~~機~~ というのは ふさい ~~機~~ さね。 そこへ あの、 端だけ

ケ アゲトイテ ソイデ アトワ ズルズル ズルズル (クウンマ  
上げておいて それで あとは ズルズル ズルズル (馬が  
が ヒーテグ) ウンマデモ ウシデモ ヒーテ ウンマダイネー  
引いていく【のか】?) 馬でも 牛でも 引いて、 馬だよ

ホッ カイドー ワネー。オラ ホーワ ウシデ ヒータン。ソーデネ  
北海道はね。 俺の 方は 牛で 引いたの。 そうでない

ー トキヤー タダノ ドタッ ピキサー。キマワシ<sup>m</sup> ヲチューノ イ  
時は ただの どたっ引き さ。 キマワシ ヒいうものを

クツモ ツケトイテ ソイデ ナンボンモ。アー ソシ<sup>m</sup>チャー 又  
いくつも 付けておいて それで 何本も【引いた】。 そうしては

ケチャー ウシガ トビダシ<sup>m</sup>テサー (I.A 笑)。  
抜けては 牛が 脱臼出してさ。

K ガイモワ オイテ キチマウヨーダ 又ケデテ。  
材木を 置いて きてしまうようだ 抜け出る。

A オイテ クルヨーダ 又ケチャー オイテ クル (I.K 笑) ソース  
置いて くるようだ 抜けては 置いて くる そうするのだ

ルダー マター ウシー トッ ツカマエ<sup>m</sup>チャー アレダー マター  
また 牛を とっ掴まえては あれだ また

ヒッ パッ テ キチャ ー。

引っぱって きては。

T アノ ウシワ マダ カイリョー シテ ナカッタロ。アノ ジブ  
あの 牛は まだ 改良 して なかったろう。 あの 時分の  
シノ ウシワ ツオカッ タイネー (A ツエー。) ツノノ イー ツノ  
牛は 強かったよね (強い。) 角の、 良い 角を  
ー モッチャッ テネー。  
持っていてね。

O シー ツノ モッ テネー。

うん、 角を 持ってね。

T アノ ウーチャ<sup>(8)</sup> シチノ タメサクサンガ コノ ウエデ ウシニ  
あの、 卵ちゃんの家<sup>(8)</sup>の 為作さんが この 上で 牛に  
アノー カベツト<sup>(9)</sup>ン トコロ オジツケラレチャッ テネー。  
あのう 壁のある場所の 所で 押しつけられてしまってね。

A ソーダ ソーダ。

そうだ そうだ。

T コノ (A チョーセンウシダッ タケドナー。) エー ショー チョーセンウ  
この (朝鮮牛だったけれどな。) え【何とまった】? うん、 朝鮮牛  
シ イー デッ カイ ウシダッ タネー。  
xxxx  
良い、 大きい 牛だったね。

A デッ カイ ウシダッ ター。チカラガ アッタイ。  
大きい 牛だったよ。 カが あったよ。

O イー ヨク ウウシニ ツキトバサレタダヨネー。  
xxxx  
よく 牛に 突き飛ばされたのだよね。

T ツキトバサレタネー。  
突き飛ばされたね。

O マーッ タフ。

まったく。

T デモ ウシッテモ ニンゲンノ セーカ アノー スコーシ アノ  
でも 牛といっても 人間の 所為か あのう 少し あのう  
ー エサー クレルト カゲン スンダカ ツノト ツノノ アイ  
餌を やると 加減を するのだが 角と 角の

ダエ ハサンジャ ンダネー。

間へ 挟んでしまうのだね。

A ン ー ↓。

そうそう。

I シ ↓。

うん。

T ツノワ カケナイスヨ。<sup>(10)</sup>

角は 掛けないですよ。

A ツノワ カケナイ。

角は 掛けない。

I ココロ エテル。

心得ている。

T エ ソレダケ カン カンガエテンダ ムコーモネー。アレ ツノ  
<sup>(11)</sup> ええ、それだけ <sup>xxxx</sup> 考えているのだ むこうもね。 あれ 角で

デ ヤラレタラ イッ パツダネー。

やられたら 一発だね。

A シ ↓ イッ パツダ。

うん、 一発だ。

O アノ デッケー アタマデ オシツケルノ イデーヤネー (<sup>T</sup>イテ  
あの 大きい 頭で 押しつけるのは 痛いやね (痛い。)

一.) ツノデ ネーッ タッ テ . サッ キリ シニ ノブガ<sup>(12)</sup> コーニ ア  
 角で なくとも . さくきりを しに のぶが こうに  
 トカラ イグッ チュー ト リコーダカラネー ナニモ ネー トコ  
 後から 行くというと 利口だからね 何も ない ところでは  
 ジャ シネーケド<sub>xx</sub> コンナ デッ ケー クワノキガ アル ト  
 しないけれど こんな 大きな 桑の木が ある  
 コエ ハ クワノキガ アル トコエ イグナーット オモーッ チュ  
 ところへ、もう 桑の木が ある ところへ 行くなと 思うというヒ  
 ート モー コー ヤッ テ ツノー モッ テ クルダ。アーノ カ  
 もう こう やって 角を 持って くるのだ。 あの  
 ラサワノ ハタケー イグ トキ メーノ ヒー トモガ<sup>(13)</sup> コー  
 唐沢(地名)の 畑に 行く とき 前の 日に 友が こう  
 ヒッ<sub>xxxx</sub> ヒッ パッ テ アルッ タラ オッ カナカッ タダト ダカラ ア  
 引っはって 歩いたら 恐ろしかったのだから、 だから  
 シター シネーッ テ トモガ ナクンデ ソイジャー カーチャン  
 明日は しない ヒ 友が 泣くので それでは 母ちゃんか、  
 ガ ダカラ シューガネー コーニ ニグラノ マンナカエ コー  
 だから しかたがない こうに 荷鞍の 真中に こうに  
 ニ ロッ プ ハサンドイテネー キノ トコエ イギソーン ナル  
 ロープを 挟んでおいてね 木の ところへ 行きそうに なるヒ  
 ト アトカラ オシテグ シトガ ノブガ<sup>(14)</sup> グーッ ト コーニ ヒ  
 後から 押していく 人が、 のぶが グーッヒ こうに  
 クン。ソー シナケリヤー アタマー グーッ ト モッ テ クルン  
 引くの。 そう しないければ【牛が】頭を グーッヒ 持って くるのだ。  
 ダ。マーズ ロクデネー ウシサネー。ソーユ<sub>xxx</sub> ホーガ ツイ  
 まず るくてもない 牛さね。 そういう 方が

ーシ<sup>15</sup>ダイ<sup>16</sup>ネー　ロク<sup>17</sup>デ<sup>18</sup>ネー　(〇笑)ホー<sup>19</sup>ガ<sup>20</sup>。

強いのだよね、　　ろくでもない　　おが。

T　チ<sup>21</sup>カラ　アル<sup>22</sup>ンダヨ。

カが　あるのだよ

A　チ<sup>23</sup>カラワ　アル<sup>24</sup>ンダ。

カは　あるのだ。

K　ヘー<sup>25</sup>　コドモ<sup>26</sup>ガ　バカ<sup>27</sup>ニ　スル<sup>28</sup>ンサー<sup>29</sup>ネー<sup>30</sup>。

なに　子供が　馬鹿に　するのさね。

T　バカ<sup>31</sup>ニ　スラ<sup>32</sup>ー<sup>33</sup>ネー<sup>34</sup>。

馬鹿に　するよね。

A　バカ<sup>35</sup>ニ　スル<sup>36</sup>ン。

馬鹿に　するの。

T　シ<sup>37</sup>トオ<sup>38</sup>　ミ<sup>39</sup>ルヨ。

人を　見るよ。

K　シ<sup>40</sup>。

うん。

## 注

1. 「カジューオケ」屋号。
2. 「ジゴロデ ヒク」木を輪に切って猫車で運ぶ。この前の運搬法は「ジグルマ」で、これは肩に縄をかけて引く方法であった。
3. 「」調査者上野勇。
4. 「ドッコイ」横棒。
5. 「ジョートダッタ」[dʒo:tɔ datta]。「tɔ」の発音は、破裂の後の気音がめだつ。
6. 「デワ」「デ」の発音の子音部では破裂がほとんどなく、舌先と歯茎との間の狭めがあるだけである。
7. 「キマワシ」木に打ち込む管。ハーケンのようなもの。
8. 「ウーチャン」人名卯作の略+ちゃん
9. 「カベツト」壁のある所。「何々の所」を「〜ツト」という。
10. 「カケナイスヨ」外来者であるIに対して話している。丁寧意識から「デス」の縮約形「ス」を使っている。
11. 「エ」応答詞「エ」は共通語的、これもやはりIに対する丁寧意識による。
12. 「ノブ」人名のぶ。
13. 「トモ」人名、友子の略。
14. 「グーット」擬声語。カをこめて発話。
15. 「ホーガ」この部分笑いながら。
16. 「コドモガ バカニ スルンサーネー」子供を牛が馬鹿にするという内容の発話になるべきところ。



# 10 狼

A 小林弥太郎 男 明治40年12月6日生

O 小林よ志恵 女 明治40年7月19日生

T 星野 富司 男 大正9年1月27日生

K 小林 喜市 男 昭和15年11月10日生

O マーズ ムカシー メージ アノ チドリノ オジージンゾガ ホ  
 ます 昔、 明治、 あの 千鳥(地名)の おじいなどが  
 ラ メージ ガンネンダケード アノ オジージンゾガ ワケーシ  
 ほら 明治 元年【の生まれ】だけねど あの おじいなどが 若い  
 ノ ジブンワ オーカミガ ウーント イタダッ チューモノネー。  
 時分は 狼が たくさん いたのだというものね。

A オーカミガ イタ。  
 狼が いた。

K シー。  
 ふうん。

T シー。  
 ふうん。

A ソリヤー ウント イタッ チッ タイナー。  
 それは たくさん いたと言ったよね。

O ウーント イタダッ チッ タヨー。(↑ヘー。)ソイデ イマノ タミ  
 たくあん いたのだといったよ。(へえ。)それで 今の、

ゾーガ ウチノ ヒーオジー  
 民蔵の 家の 會おじい

K オーカミヨカ イノシシガ デタジャ ネン。  
 狼よりか 猪が 出たのでは ないのか?

O ヒーオジーガ(Aオーカミモ イタシ イノシシモ イタサ)アタリ  
 會おじいが (狼も いたし 猪も いたさ。) あたり

ガネ ホラ(Aアスコニ イマ トヤマニ アルノガ ミンナ イ  
 がね ほら (あそこ、 今 深山に あるのが 皆 猪))

ノシシ ~~~~~.)オイガミノ シンジュバヤシッ チュ (K ~~~~~ シシマイッ  
 老神【地名】の 心中 林という (

チュンガ アルネー.)アレガ ソーダッ チュケドサー (Aアレガ  
 というのが あるね。)あれが そうだというけれどさ (あれが

ミンナ ~~~~~シシマイ.)アスコデ シンジュ シタダッ チュケド ソレ  
 皆 ) あそこで 心中 したのだというけれど それを

オ ヒラガーデーヒラガーデーガ ミンナ カツイデ クルダッ タッ  
 ×××××××× 平川の連中 平川の連中が 皆 担いで くるのだった

チューケドネー(↑ンー.)オーカミガ デテ モー ヒドカッ タッ チュ  
 というけれどね (そうかね。)狼が 出て もう いじかったというよ。

ーヨ。オッカナクッテ ミーンナ サキー タツンモ ヤダシ ア  
 こめくて 皆 先に 立つのも いやだし

トエ タッ タツンモ ヤデ ミンナーナ ゴチョ ゴチョ ゴチョ ゴ  
 ××××× 後に 立つ、立つのも いやで 皆 ごちよ ごちよ ごちよ

チョ ゴチョ ゴチョト フターリオ カツイデ クルダッ タッ チー  
 ごちよ ごちよ ごちよと 二人を 担いで くるのだったというけれど

ケド (↑シ↓。) オッ ソロシカッ タッ チュッ タ オッ カナクッ テ。

(うん。) 恐ろしかったといった、 こめて。

A オー カミワ アンマリ イテ ドーショ モネー チュー デ ソイデ

狼は あまり いて どうしようもないというので、 それで

メー ジ ナンネンダッ ケナニ (〇 テー ンデ) ドクー クレタダッ

明治 何年だったに (てんで) 毒を やっただろう。

ペ。ソイデ ミンナ シニ  
xxxxx

それで 皆 死に絶えてしまった。

O オイガミカラ カツイデ キタラ ココノ ハー キョクノ ハカ

差神から 担いで きたら この 【郵便】 局の 墓場の

バノ アスコン トコニ ウォン ウォン ウォント イテ ココ

あそこの ところに ウォン ウォン ウォンヒ いて ここを

ノ ボッ タラ マタ イテ ホイデ イシガミザカ イッ タラ イ

登ったら また いて それで 石神土坂 (坂の名前) に 行ったら

テ アレダッ タモンネー ズーット コザカ イッ タラ イテ イ

いて あれだったものね ずっと、 小坂 (地名) に 行ったら いて

マノ チ チドリノ メーノ アノ オシメサマン トコ アソコ

今の 千鳥の 前の あの お神明様の ところ、 あそこ

マデ イタ ツ ツイテ キタッ チューモノ。(↑オーカミガッ。)

まで いた、 付いて またというもの。 (狼ががね?)

デ トート ロクシ  
xxv xxxx

それで とうとう 本当に 六尺も 掘って 埋めた

ッ チケド トートー ホリダシタッ チューネー。(↑シ↓。) モー イ

ヒいたけぬじ とうとう 掘り出したというね。 (うん。) もう

ッ タン ツカレタラ ドーユーニ シテモ トッ テ クーッ チュー

一度 付かれたら どのように しても 取って 食うというぬ。

ネー。(「ハー オクリオーカミッテ キータネー。 ) マーズ オッ  
( へえ、 送り狼というのを 聞いた【いヒがある】ね。) まず

カナカッ タッ チューヨー ジューゴロクダッ チッ タナー。

こわかったというよ。

十五・六だといったな。

A ソコノ マサルクンノ イドソ ナケー オーカミガ オッテ ソ  
その 優君の 井戸の 中へ 狼が 落ちて  
ンデ モサブローサン<sup>4</sup> シトガ ハシゴ カケテ アゲテ クレ  
それで 茂三郎さんという 人が 梯子を 掛けて 上げて やったら  
タラ ソノ オレーニ シカオ オイテッ タナンテ ソンナ コト  
その おれに 鹿を 置いていったなどという そんな ことを  
イッダッケ。  
食ったっけ。

K ソンナ ハナシガ ソンナ ハナシガ アルダ。  
そんな 話<sup>ワ</sup>が、 そんな 話<sup>ワ</sup>が あるのだ？

A アルヨー アスコニ イマデモ ツリイドガ  
あるよ あそこ<sup>ニ</sup>に 今でも 釣り井戸<sup>ヲ</sup>が

O マサルサンノ ウラニ。  
優さんの 裏に。

T シ ツリイド アル。  
うん、 釣り井戸<sup>ヲ</sup>が ある。

A アレー オーカミ サラゲオ<sup>4</sup>テ (「ハー。 )ソイデ アガレネーデ  
おれに 狼<sup>ガ</sup>が 落ちて ( へえ。 ) それで 上がれないで、  
ニジャー アガレネーゲ<sup>4</sup>ダ<sup>4</sup>チューデ ハシゴ<sup>ヲ</sup> カケテ クレ  
おまえは 上がれないようだ<sup>ヲ</sup>というので 梯子を 掛けて やったよ。  
ター。ソ<sup>4</sup>シテ ソノ オレーニ シカー オイテッ タナンテ。<sup>\*</sup>  
そして その おれに 鹿を 置いていったなど<sup>ヲ</sup>。

T ソー、シカモ イタソーダネー ココワ。  
そうかね。 鹿も いたそうだね ここは。

A シカモ イタヨ。  
鹿も いたよ。

I オボエテッカラ イマシタカ。  
覚えてから いましたか？

A イマダッテ イルバー イックラデモ イルデ。  
今でも いるだろう いくらでも いるよ。

I シカガ。  
鹿が？

A ン ソー。  
うん うん。

T コノゴロ フエタンダネー アレネー。(A コノゴロ) キンリョー  
この頃 増えたのだね あれね。(この頃) 禁獵，  
キンリョー ナッテ。  
禁獵に なって。

I ソー。  
そうかね。

A キンリョー ナッテ フエテ コンド オキノ ホーエ ジョソー  
禁獵に なって 増えて、 今度 沖の オヘ 除草剤を

ガイ マイタッペー。(I ン。) ソイデ ササー カラシチャッタ  
撒いたろう。(うん。) もれて 笹を 枯らしてしまった

モンダカラ ミンナ トマエ デテ キチャッタ。  
ものだから 皆 谷の入口に 出て きてしまった。

## 注

1. 「メー ジ ナンネンダッ ケナニ」 「ナ」は日、年を表わす語につく接尾辞。
2. 「ウォン」擬声語。
3. 「オキ」 奥の意。
4. 「トマ」 出入口の意。

## 11 配給と兵役

A 小林弥太郎 男 明治40年12月6日生

O 小林文志急 女 明治40年7月19日生

T 星野 富司 男 大正9年1月27日生

K 小林 喜市 男 昭和15年11月10日生

O イマ- テーラデ ヤルケド アノ ジブンワ クミガシラダケデ  
 今は 平等に やるけれども あの 時分は 組頭 だけで  
 ヤルカラ ケッ キョク ソノ アレダッペ センキョ シタラ  
 やるから 結局 あれだろう、選挙をしたら  
 ソノ シトツキリニ コー ナッ チャウンサーネー。  
 その 人きりに なってしまうのさね。

A クミガシラデ キメルカラ。  
 組頭で 決めるから。

O クミガシラデ キメチャー シチマッタ。  
 組頭で 決めては してしまった。

K ダカラ マーリノ シトワ ダマッテリヤ ヨカッタカラ スミヨ  
 だから まわりの 人は 黙ってれば よかったから 住み良  
 カッタ ダッペネー。  
 かった、だろうねえ。

↑ ナニカ イエバ アタマ オサエチャッタ。

何か 言えは 頭を 押さえてしまった。

○ ソーゼツタイフクジューダッタヨネー。 コメガ キタッテ ク

うん、絶対服従だったよねえ。 米が 来たって

ミガシラガ ハイキュースルダモノ ネー。

組頭が 面己 船 するのだから ねえ。

↑ ソーダネー。

そうだねえ。

A センソートージワナー。

戦争 当時は なあ。

○ ヒデー コトダッタデ。

ひどい ことだったよ。

K (笑いながら) ヒーデー<sup>(1)</sup> コトダッタ。

ひどい ことだった。

○ ソイデ<sup>T</sup> (ヒデー コトダッタナー。) テーラニ アノー コメ  
<sup>アレダッパ</sup>  
それで あれだろう (ひどい ことだったなあ。) 平うに 米

ー ハカルニ クボッタク カキオトセバ ヨーク ミテテ ヒト  
を 計るのに 低く 揺さ落せば よく 見ていて、ムヒ

ツカミダッテ ホジーダカラネー。 ハイキュー。 ハー ソーナ

掴みだって 欲しいのだから ねえ。 面己 船[米]を。

ニ クニマツツァンガ クボーク ハカッタ ナンテ (皆笑)。イ<sup>xx</sup>

国 松さんが 低く 計った なんて。

マデモ イマデモ イカリノ トモチヤンガ クニマツツァンガ

xx xx xx

今でも いかりや(屋号)の ため(人名)ちゃんが 国 松さんが

ハイキューメーオ<sup>(2)</sup> コ アノ コーニ クボーク ハカッタナンテ<sup>(3)</sup>

xx

面己 船 米を

こうに 低く 計ったなんて。



アノー ク<sup>(4)</sup>ボー<sup>(4)</sup>ク ハカッテ ニ<sup>(4)</sup>ショー ハカリダスノニ ドコ  
低く 計って ニ 升 計り出すのに どう

ヤッ<sup>(4)</sup>タッ<sup>(4)</sup>ペ。

やったろう。

K モットモ ネー ト<sup>x</sup>キ<sup>x</sup>ノ<sup>x</sup> トキダカラネー ヒトッ ツブダッテ ホ  
もっとも、無い 時だから ねえ、 一粒だって 本

ントニ シンケンダッタ。

当に 真 剣だった。

T ソノ クレーニ シネート アノー タンナカッタンダヨ。

その 位に しないヒ 足りなかったのだよ。

A タリネンダヨ。

足りないのだよ。

O ニ<sup>x</sup>ニ<sup>x</sup>ショー ハカリダスノニ ドコ ヤッ<sup>(5)</sup>タッ<sup>(5)</sup>ペッテ ユーカラ  
ニ 升 計り出すのに どう やったろうと 言うから

オラ<sup>(5)</sup>ンダ モロー ケンリワ ネンダカラ タンボ ツクッテ

私などは 貴ラ 権利は 無いのだから 団圓をつくら

ルカラ ジブンデ ト<sup>(6)</sup>リヤーシネー。トコロガ アノー ミヤ<sup>(6)</sup>ショ  
いるから 自分で 取りはしない。 ところが 「密の背死」

ー<sup>(7)</sup>ノ ホラ ショー<sup>(7)</sup>ラガ アスケー キ<sup>(7)</sup>テタノニ ソイツオ キョ  
の 正しが あそこへ 来ていたのに それを、 局

クデ ク<sup>(9)</sup>チョーデ トメ<sup>(10)</sup>サンニヤー ヤンネーデ クレ<sup>(9)</sup>ッチュー  
で 区長で 止さんには やらないで くれという

オコトワリダカラ ウ<sup>(11)</sup>シオザイウチガ ツ<sup>x</sup> アノー アレ シ<sup>(11)</sup>タダ  
お断りだから 後田の家が あれをした

カラ ヤンネーデクレ。コ<sup>(12)</sup>コ キ<sup>(12)</sup>タバーダカラ ヤンナクッ<sup>(12)</sup>チャナ  
から やらないでくれ。 ここへ 来たばかりだから やらなくて は な

ンネー。オラガ シーサマモ ハラニ アツタカラ シカターネー  
らない。 私の じい様も 腹に あったから 仕方がない

テメーノ タナコダカラ トモジーサマニ <sup>(11)</sup> ニジョー ヤンナク  
自分の 店子だから 友じいさまに ニ升 やらなく

ッチャ ナンネーカラ クボ クボッタッテ <sup>(12)</sup> ミンナ ハカルンサ  
ては ならない から 低い 低いと言ったって みんな 計るのさ。

(笑)。ソイデ ハカリダシタノオ ミヤノ ショザイ ヤッタン  
それで 計り出したのを 「寝の 背戸」に やったの

サ。ソシタラ イカリノ <sup>(13)</sup> オバーガ クニマツツァンノ アノ ハ  
さ もしたら いかり【ヤ】の おばあが 国 松さんの あの 計

カリダシタノ ドコ ヤッタッペ (0 笑)。ヤンナッチャフィネー。  
り出したの を どこへ やったろう。 いやになってしまうよねえ。

K マー エライ トキダ <sup>x x x x</sup> トキダッペカラネー。マ チョード キョ  
あ たいはん な 時だろうからねえ。 ま、 ちょうビ 今日

ーガ ソノ <sup>(1)</sup> キネンビダネー。 <sup>(14)</sup> ハイセンキネンビダ。  
が その (記念日だねえ。) 敗戦記念日だ。

I イー ハナシニ ナッテキタジャナイ。  
いい 話に 「なってきた ではない【か】」。

O ソーデ <sup>(15)</sup> コツツァ シューセン ナッテカラ <sup>(16)</sup> コツツァイ イリヨ  
それで こんどは 終戦【に】 なってから こんどは 衣料  
ーガ ハイキューダナー。ソーデ コッター。  
が 配給 だ なあ。 それで こんどは。

T アントキノ カネデ アイデ コヤシカラ ナニカラデ ハチジュ  
あの 時の 金で あれで 肥しから 何からで ハ +  
ーナンエン オレンチワ モラウマエ ミンナ タテカエタラシー  
何円 俺の家は 貰う前に すべて 立て替えたらしい

田 あったよ

大金だ。

大金だよ。あの時分ならね。

そう だ" ねえ、

キダテ オラモ ハダギガ ホシ-ダッ ペ-チュンデ アカッ コノ  
時だから 私も 肌着が 欲しい だろう というので 赤子の

ダッテ ユーカラ モモヒキダッケ ナニカ トッ。アニサンナ  
のだと いうから、股引だっけ 何かを取った。兄さん

ソザ デメーデモ ヨクー カイテ (0 笑) . ダッテ ミンナーノ  
なびは 自分でも 欲を かいて . だって 皆の

ジョーダクノ モトニ トルダカラ シカタガネンサネー .

承 諾 の もとに 取るのだから は方がないのさね .

A ウント オービャクジョーダッテ ダイブ トッ タダモノ .

うんと 大 白 姓 でも 取ったのだから .

O マーズ ヒドカッタサ .

まず ひどかったさ .

K ナニワトモアレ イチバン ワリー トキダッ タダンネー . ソント<sup>(21)</sup>

何は とも あれ 一番 悪い 時 だった だからね . その

キヤーネー .

時は ね .

A ワリー トキダッ タサ .<sup>(22)</sup>

悪い 時 だったさ .

O ソイデ イッコー シャーネーデ オラガッ チワ ヘータイ デネ

それで 全然 知らないで 私の 家は 兵 隊に 出

一カラ ヘータイ デネーカラッテ モリヤマデーガ キタノー

ないから 兵 隊に 出ないからといって 森 山の 連中が 来たのを

ミーンナ ヒトセン ウント ジョッタン . ソジタラ コット タ

ひとがっぎ 多く 背負ったの . そうしたら 今度 反

ソベツニ オイテクル トキニ ナッたら オラガ ウチワ グー

別に 置いてくる 時に なったら 私の 家は ぐっと

ット スクナカッタ . バカッタラシー . ズーイブン オラー ホー

少なかった . 馬鹿馬鹿しい . ずいぶん 私は 奉公

コー シタダソ<sup>(23)</sup> .

したよ .

A トミチャンチダノ<sup>(24)</sup> ヒデー メニ アッタサナー。メンセキガ モ  
富ちゃんの家などは 1100 目に あったさな。面積が  
ッテタカラナー。<sup>(25)</sup>

持っていたからな。

T メンセキガ アッタカラネー。<sup>(26)</sup>  
面積が あったからね。

A トミチャン キョクが ヒデー~~~~~。  
富ちゃん【それに】局が 1100 【目にあった】。

T ツクル<sup>(27)</sup> シトが ネンダカラ。  
作る 人が ないのだから。

A ソーン ツクル シトが ネンダ。  
そうそう 作る 人が ないのだ。

O コンダ タンベツ スュー<sup>(28)</sup> トキニャー コンダ ソー ナッタン  
今度は 反別に する ときには 今度は そう なったの  
サネー。  
さね。

A ソイデ ヤダッ チュデ ヤクバデ ヤッテクレッ チュデ ヤクバデ  
それで いやだというので 役場で やってくれというので 役場で  
ヤッテ ヨコッタラ ナーニ コンダ オラナンド  
やって よこしたら 何というこが 今度は 俺などは

O コンダ オラー ウーント スクナク ナッタ。ンデ コッター  
今度は 私【の家】は 非常に 少なく なった。それで 今度は

キョクデ ダセネッ テッデ オレガ イバッテ キョクチョーガ  
局で 出せないというので 私が いばって 局長が

リョーテオ ツイテ タノメバ オレガ ダスッ チューデ イバッ  
両手を ついて 頼めば 私が 出すというので いばった。

タ。ソシ<sup>(29)</sup>タ キョ<sub>xxx</sub> キュイヨシ<sup>(30)</sup>チャ<sup>(30)</sup>ンダ トシ<sub>xxx</sub>ア トシ<sub>xxx</sub>アキジャネ  
 そうしたら 清ちゃんだ 利明(人名)ではない

ー ミツガ<sup>(31)</sup> キテ マー キョ<sub>xxx</sub> ク<sub>xxx</sub>チョーガ フトン カブッテ コ  
 光が 来て まあ 局長が ふん かぶって

ーサン シテルダカラ カンベンシテ ダシテ クンネーケー。ソ<sup>(32)</sup>  
 降参 しているのだから 甚か<sub>xxx</sub>弁して 出して くないかい。

ージャ<sup>(33)</sup>ー アンマリ ジューク<sub>xxx</sub>ーベ<sub>xxx</sub>ー コクカラ キョ<sub>xxx</sub> ク<sub>xxx</sub>チョーガ  
 そうしたら あまり 文句ばかり 言うから 局長が

リョーテ<sub>xxx</sub>ー ツイテ オネガイシマスッテ イエバ マメー ハ<sub>xxx</sub>  
 面手を ついて お願ひしますと 言えば 米を

ンタラ ミツガ ハンタラ オラガ ハンタラ ダセバ オツツク<sub>xxx</sub>  
 光が 半俵 私が 半俵 出せば おいづく

ワケデ ソレデ オレガ キョ<sub>xxx</sub> ク<sub>xxx</sub>チョーガ コーサン シレバ ダ<sub>xxx</sub>  
 わけで、 それで 私が 局長が 降参 すれば

シテ クレルッテ ユッタン。  
 出して やると 言ったの。

A ヤマカー ハタケー モッテッテ イッコー ツクンネーダカラ。  
 山も 畑も 持っていて 全然 作らないのだから。

O ウーント キダンサ。  
 たくさん 来たのさ。

T ヨーイジャーナカッタネー。<sup>(34)</sup>  
 容易では なかったねえ。

A ソノ<sup>(35)</sup> メー キョクワ ヒ<sub>xxx</sub>デー<sub>xxx</sub> ウマク ヤッタンサナー。  
 その 前に 局は うまく やったのさな。

O イッユー ダサズニ イタンダモノ。  
 ま。たく 出さないで いたのだもの。

A イッコー ホケン ダシモシネーデ ソレデ アレ シタダカラ。  
 まったく 保険を 出しも しないで そんで あれ したのだから。  
 メンセキガ アッテ。ミンナガ ソノカーシ ヒデー メニ アッ  
 面積が あって。 皆が その変わり ひびい 目に あった。  
 タ。コンダ ヤクバデ マーッテ クレル ヨーシ ナッタラ イ  
 今度は 役場で 廻って くれる 様に なったら  
 ッコー セワーネー。テメーノ ブンダケ ダセバ アトワ シラ  
 まったく 世話がない。 自分の 分だけ 出せば あとは 知らん  
 ーン カオシテ ヤミー ウットバシテ。  
 顔して 聲に 売りとはして。

T ソーダッタネー。

そうだったねえ。

A マーズ ヒドカッタサー。ウーント ダセーッテ。

まず ひどかったさ。 たくさん 出せ と。

T オレ ニジューイチネンマデ ソーイコト シラナカッタ。ジュー

俺は ニ十年まで そういうことを 知らなかった。 +

ゴネンカラ ニジューイチネンマデ シラナカッタカラ。

五年から ニ十年まで 知らなかつたから。

I ドコ イッテマシタ。

どこへ 行っていました。

T エー チュー<sub>x x x x</sub> チューシー ハイッテ ジューゴネンマデ チュー

えーと 中 支へ 入って、十五年まで 中

シ ハイッテ チューシカラ タイワン ナンシ フツイン シヤ

支へ 入って 中支から 台湾、南支 仏印 シム

ム (1<sup>36</sup> <sup>36</sup>ン) アノ ビルマノ アノー ヨシエサンノ オトート

ビルマの あのう、 よ志三(人名)さんの 弟の

ノ キューヤサンカー。(<sup>ク</sup>アー)キューヤサン ナクナツタ ジ  
久 弥 さん が。 久 弥 さん が な くな った

ブンニ オレガ フツ アノー タイメンコッ キョー コジテ ビ  
時 分 に 俺 が <sup>メ×メ×</sup> タイ 面 国 境 を 越 して ビ

ルマ オーエンニ イグ ワケダッタンダヨ。

ルマに 応援に 行く わけだったのだよ。

0 イガネーデ スンダンダ。

行かないで 済んだのだね。

ト ソイデ イグ トチューデ アノ オラナンド アノ サキノ レ  
と いて 行く 途中 で 俺 な ぞ 先 の

ンチューガネー ホリョー シューヨースル ニジューゴマングレ  
連中がね 捕虜を 収容する , ニ十五万ぐらい

ー シューヨースル <sup>(37)</sup> シューヨージョ ツクッ タワケダ。ソコエ  
収容する 収容所を 作ったわけだ。そこへ

イッテ シューセン ナツタ。ソノ ユーグンノ ツクッ タ シュ  
行って 終戦に なった。その 友軍の 作った

ーヨージョ エ オレタチ ハイッチャッタ (苦笑)。マインチ ア  
収容所へ 俺達 入ってしまった。 毎日

ノー ヒコーキデネー テークシテキチャー ビラー マクンデ。  
飛 行 機 で ね 低 空 し て き て は ビ ラ を 撒 く の で。

(<sup>ク</sup>シー。) ヨコハマカラ トーキョーマデ モーシトガネー ミ  
横 浜 から 東 京 ま で も う 人 が ね

ンナ ゴロゴロ タオレテテ ミル カゲモ ネーナンテ。  
皆 ゴロゴロ 倒れていて 見る かげも 無い などと。

0 オカナンカ <sup>(38)</sup> アノー アレダッペ。エーセータイダカラ ケンキュ  
岡などは あれだろう。 衛生隊だから 研究



ーザイリョーニ ハツカネズミ トリー トーキョー ケーッテ<sup>(39)</sup>  
材 料 に 二十日 鼠 を 取りに 東京、へ 帰って

きて シューセン ナッタ。

きて 終戦に なった。

Ｔ オラガ ゲンエキダッタカラネー。シナデ ショーカイセキト イ  
俺が 現役 だったからね。 支那で 蔣介石 と 今の  
マノ ショーカイセキ (笑いながら) (40) ショーカイセキ (笑いな  
ショーカイセキ ショーカイセキ

がら)) チョックゲグント ブツツイタンダカラ。ソーシテ アノ  
魚 飛 軍 と ぶつ かったのだから。 そして

ー アトカラ クル ホジューヘーニ。ソノー アスコニネー ホ  
後から 来る 補充兵 に , あそこにはね

タルイシノネー アノー ケーキンゾク ヤクンダトカネー ツク  
蟹 石 の ね , 軽 金 属 を 作る

ルンダトカネー ヒコーキノ ヒコーキオ ツクル ホタルイシッ  
の だ じ か ね 飛行 機 を 作る 蟹 石 というのが

テンガ カリョク アルンダソーダネー。ソレオ モシテ ケーキ  
火 力 が あるの だ ぞう だ ねえ。 それを 火 燃 や して 軽 金 属 を

ンゾク ツクル ヒコーキノ ゲンリョー ツクル ソノ イシオ  
作る , 飛行 機 の 原 料 を 作る , その 石 を ,

ヤマガ ホジクッテ ソレオ ニホンガ センリョースル トキ  
山 が 欲 しく して それを 日 本 が 占 領 する 時 に

ニ オレタチワ マー イッタ ワケダ。ソントキ マモッテタン  
俺 達 は 行 った め け だ。 その 時 守 っ て い た の が

が ショーカイセキノ チョックゲグンナンダイネー。ツオイダッ  
蔣 介 石 の 魚 飛 軍 な ん だ よ ね。 強 い の だ っ た の だ。

タンダ。ソレオ コンダ マカシテ ソ<sub>xxx</sub> センリョーシテ ソイデ  
それを 負かして 占領して それで

ツイー ヤツ マカシタラ ヒトツキ タタネー ウチニ ホー  
強い やつを 負かしたら 一月 たたない うちに

ジューヘー トラレチマッタ。(A 突) ショーカイセキニ。ソレデ  
補充兵 が 取られてしまった。 蔭介石 に 。 それで

ソレ スマシテ コンダ アノ ムコーイ フツイン イッタダ。(問)  
それを すませて 今度は 向うへ、 仏印へ 行ったのだ。

0 ナンダ キヨシサン クヤンガルノワ オラー ナイチニベー イ  
何というか 清さん くやしがるのは 私は 内地にばかり

タモンダカラ イマ イクンチテコター イエネーモンダカラ (A  
居たものだから あと 幾日ということ は 言えないものだから

イッコー モラエネーダ。) イッコー モラエネートカ ナントカナ  
(全然 貰えないのだ。) 全然 貰えないヒガ 何とか なびヒ

ンテ マー ブツクタ ブツクタ。  
まあ ぶつくさ ぶつくさ。

K ソースト トミチャンワ スト<sub>xxx</sub> ショ<sub>xxx</sub><sup>(4)</sup> ジューゴネンカラー。  
そうすると 富ちゃん は すると 十五年からがね。

T ウン ジューゴネンカラ (K シューセンマデー) ニジューイチネン  
うん、十五年から (終戦まで) 二十一年

マデ。(K イタワケカイ) シューセン ナッテ イチネン ホリョ  
まで。(いたわけがね) 終戦になって 一年 捕虜

ン ナッタ。  
になった。

K アーソーカ ソースト マル ロクネン ジャナクッテ シチネ  
ああ そうか そうすると まる 六年、ではなくて 七年

ン。

T マル ロクネンキヤ ナラネンダケドモ (<sup>k</sup> ロクネン ナル ワケ  
まる 六 年 しか ならないのだけれども (六 年 に なる わけ  
ダ。) <sup>(42)</sup> シー。 アジカケ (<sup>(43)</sup> 間) ダラ ナナネングレ ン ナルンカ ナー。  
だ。) うん。 あしかけ なら 七 年 位 に なるのかな。

K チョード イー トキノ ロクネンダカラ ナー。  
ちょうど いい 時の 六 年 だ から ねえ。

T イー トキノ コージュ ゴークナ ンカ ナッタ トキダカラ サー。  
いい 時の , 甲 種 合 格 な じ に な っ た 時 だ から ね。  
(<sup>0</sup> タマラネーダ ナー。) ソー ジタラ ソノ アト コンダ ヒッパ  
( た ま っ ち ね 。 ) そ う し た ら そ の 後 今 度 は 引 っ ぱ り  
ラエチ マッテ。 ロクガツ ニ チョー ヘー ケンサデ サー コージュ ゴ  
ら れ て し ま っ て 。 六 月 に 徴 兵 検 査 で き , 甲 種 合 格 の  
ーカ クノ ハンモ オサレタ ラ ソノ ジュー ニガツ ニ ヒッ パリ  
判 も 押 さ れ た ら そ の 【 年 の 】 + 二 月 に 引 っ ぱ り

ダサレタン。

出されたの。

K アー チョード ソイジャ ー ハタチ ノ ケ ケンサデ。  
ああ , ちょうど それでは 二十 歳の 検 査 で 。

T ソー。 ダカラ ハタチデ ケンサシテ (<sup>k</sup> ソノ トシノ ジュー ニ  
そ う 。 だ から 二十 歳 で 検 査 し て ( そ の 年 の + 二 月 の 。 )  
ガツ。) マー カゾエ ニ ジュー イ チデ。 ( 間 ) デ ソノ トシ ニ  
まあ かぞえ ニー【歳】で。 それで その 年に

ヒッパリダサレタン。

引っぱり出されたの。

K チョード ハタチス カラ ニジューゴカ ロク シチ ハチ。<sup>(99)</sup>  
 ちようど ニ + 歳 から ニ + 五 か 六 , セ , ハ。

T ソイデ チョード アノ ムコーノ ロコーキョーカラ ハジマッ  
 それで ちようど ちようの 蘆 溝 橋 から 始まって

テ ソコ タケナワ ナッタ ジブンデ イッセンデ キョーイク  
 たけなめになつた 時分で 一線で 教育

サレタダ。オラ。テッポーダマノ ジツダンノ クル ナカデ。  
 されたのだ。私は。鉄砲玉の , 実弾の くる なかで。

K ソー。ジャー イマワ ショージノ コロワ ソッチー イッテタ  
 なるほど。それでは 今は , 尚司 (人名) の 頃は そちらに 行っていた  
 ワケダ。

わけだ。

T イッテタ ワケ。  
 行っていた わけ。

K トショーネー。<sup>(99)</sup>  
 そうでしょうねえ。

T ソノ ジブンワ シャンハイアタリ イタ ワケダ。  
 その 時分は 上 海 あたりに いたわけだ。

A ソー。

K イマー ショージナンカ ユ ユーガタ ヤキユーナンカ ヤキユ  
 今は 尚司 などは タカ 野球

ーナンカ ヤッテルケド (ク笑)。  
 など やっているけれど。

T アノ ジブンワ アケテモ クレテモ ピンタダケダッタ。  
 あの 時分は あけても くれても ピンタ だけだった。

O アー ピンタダモノナー。

ああ、ピンタだものな。

K バット カツイデ ノンキ ヤッテルケドモ。

バットを 担いで 春気 に しているけれども。

T アーノ ジブンワネー。(<sup>0</sup> ンーン!) シロイ モノが クレーツツ

【まったく】あの 時分はね。 そうそう。 白い 物が 黒いと

ツツッテ ハイハイツツッテタノガサー。<sup>(46)</sup>

言ったって ハイハイ と言っていたのがき。

O ソーイコトダナー。

そういうことだな。

K テッポート バットジャ エレー チゲーダイネー(笑いながら)。

鉄 砲と バットでは えらい 違いだよな。

T ソーデ ナニカ イエバ スグ ケンペータイガ キテ ケンペー

それで 何か 言えば すぐ <sup>×××××××</sup> <sup>×××</sup> 憲兵

が キテ エバツテタ。

が 来て 威張っていた。

O ソーダガネー。

そうなのだよ。

K ダカラ タイジョーウマレノ シトツテナ イチバン ソーユー

だから 大正 生まれの 人というのは 一番 そういう

ゲンエキデ タイヘンナ トコロー ヤッテジタ<sup>(47)</sup> ワケナンサーネ

現 役で 大変な ところを やってきた わけなのさな。

ー。

T ソーダイ<sup>(48)</sup>ネー。ダカラ イー トキ ナカッタ ワケダ。

そうだよな。だから 良い 時が なった わけだ。

K ソデ アタマー メージノ シトニ アタマーカラ<sup>(47)</sup> オサエラレテ  
 それで 豆類を 明治の 人に 頭から 押えられて

~~~~~。

T ウン オサエラエル。ナオ アノ ジブンワ アレダッ タカラネー。
 うん 押えられる。 まだ あの 時分は あれだ。たからね。

ホーケンジダイダッ タカラ。

封建時代だったから。

K ソーダネー。スト チューカンニ オッ パサマレチマッテ (↑ソー)
 そりだね。 中間に はさまれてしま。て

ケーッテ キタラ コンダ~~~~。

帰って きたら 今度は

T ガーッテルカラネー コンダー。イツモ ワリー トコ デチャッ
 変っているからね 今度は。 いつも 悪い ところへ 出てしまったのさ。

タンサ。

K チョードネー。

ちょうどね。

O オレンチノ オバーガ オカチャンガ イル トキヤー ソレホド
 私の家の おばあが 岡ちゃんが いる 時は それほじ

ジャナカッタケド アブラマノ イワオチャンガ デテ アレダッ タ
 ではなかったけれども 油屋の 殿ちゃん(人名)が 出て あれだ。たろう

ッペ ジギ アノ ホラ シューセン ナッタッペ。イワオチャンガ
 直に 終戦に なったろう。 殿ちゃんが

デタラ オラガ オバーガ ナクナッタイ。コンダー オラガ ト
 出たら 私の おばあが 泣くのだったよ。 今度こそは 私の

コイ クルツッテ (0 笑)。 (A コンダ オラナンゾガ~~~~) コン
こころへ くるといって。 (今度は 俺などが) 今度は

ダー オラガ_{xxxxxx} イマ シトツキ タテバ オラガ ウチー クルッ
もう 一月 たてば 私の 家に 来る

テユッ タラ オーバーガ カミサマ イッ ショ ケンメー タノム ダッ
と言ったら おばあが 神様に 一生懸命 頼むのだった。

テ。オラガ ウチー コネーデ クダサイ。オラガ ウチ~~~~ (笑)。
私の 家に 来ないで 下さい。私の 家

ソシタラ シューセン ナッタダト。(間) イワオチャンニ フレ
そしたら 終戦に なったのだった。 蔵ちゃんに 来れば

バ オラガ ウチ クラーッテユッ テタン。
私の 家に 来るよと言っていたの。

K アレガ イマ イチネン ノビレバ ズイーブン ヒドカッ タデシ
あれが もう 一年 延べれば 随分 ひびかったでしょう
ーネー。(51) モットネー。
ねえ。 もっとねえ。

T ヒドカッタネー。モー アトカタモ ナクナッタダッペ。
ひびかったね。 もう 跡形も なくなったろう。

A アー↓。イマ イチネン ノビタラ ヒドカッタ→。
その通り。 もう 一年 延びたら ひびかったさ。

T デモ オラナンドワ マケイクサッテノ シタ コト ナカッタカ
でも 俺などは 負け戦というのを した こじが なかったから
ラサー。(K [↑]ンーン。)ダカラ ニホンワ マケルト オモワナカッ
さ。 だから 日本は 負けると 思わなかった
タナー。
な。

K ソラ ソーダンベナー。ゼンゼン コツチガ ワカンネンダカラネ
 それは そうだろうな。全然 こちら【の機子】が めがらないのだからね。

一。

T ンデ フツインノ ナーニダイガクツタツケナー。アスコエ ハイ
 それで 仏 印 の 何という 大学といったっけな。 あそこへ 入った

ッタ トキニ ヤツラノ バクゲキノ ウマインニ タマゲテ マ
 ときに やつらの 爆撃の うまいのに 驚いて あ

ー コリャー モー ニホンモ アブネーカナート オモッテ ソ
 これは もう 日本も 危ないかなと 思って

ントキ オモッ⁽⁵²⁾タツタケドネー。(K^ン→)ソントキ ミナライジ
 そのとき 思ったけれどね。 そのとき 見習士官

カンガ キ⁽⁵²⁾タンダヨ。(K^ア→)ソントキ ミナライジカントー
 が 来たのだよ。 そのとき 見習士官と

エー ショー_{xxxx} ショエ_{xxxx} ショー_{xx} ショエ ツイタ トキニ ホシノサン
 小 哨へ 着いた 時に 星野さん

ダメダナ。マー ソノ ジブンワ カイキューワ ベツデモ メ
 だめだな。 その 時分は 階級は 別でも

シノ カズナシタカラ (A^ン→) ミナライジカンデ ガガネ ツケ
 飯の 数なのだから。 見習士官で 座金を 着けて

テサー トー カカエチャー ワルケレドモ ヤセンワ ハジメテ
 さ、 刀を 抱えては 来るけれども 野戦は 始めて

ナンダカラ (K^ン→)コサンヘーノ メシノ カズノ オーイ ヤ
 なのだから 古参兵の 飯の 数の 多い

ツニャー シカタガネーヤ ホシノサン ホシノサンテ カン_{xxx} カ
 やつには 仕方がないや、 星野さん 星野さんと

タッポワ マダ ブンショ - 4 ヨ デ ゴチョ - ダヨ . カシカンニ
片 - 方は まだ 分 哨長 で 伍 長 だよ . 下 士官に

ミナライシカンガ サン ツケタケドサー . (⁰ ン -) ニホン 下
見 習 士官 が 「さん」を つけたけれどさ . 日本は

ーモ アブネー アブネーカシンネーヨ . ンデ マー ヘータイデ
どうも 危ない 危ないか しれないよ . それで まあ 兵 隊で

ナイチ ヨースシテ キーテ キタダカラ . (^{A.O.} ン -) ソレマ
内地の 様子 を 聞いて 来たから . それまで

デ ソンナ アレ ナカッタケド ソントキ ハジメテ バクゲギ
そんな こと 無かったけれど そのとき はじめて 爆 撃

サレタンダヨ . (⁰ ン -) ソンデ ニホンノ ヒコーキヲ サー

されたのだよ . それで 日本の 飛行機は さーと

ット ヒッ コンジマウンド . (^K ン -) テキシューガ テキシュー
引っ込んでしまうのだ . 敵 襲が

ガ アルト . ソントキニ オレ アノ ヨソエ アスビー デテタ
あると . そのときに 俺は 他所へ 遊びに 出ていた

ンダ . (⁰ ン -) ソーシタラ カエッテ キタラ アノ カエロー
のだ . そうしたら 帰って きたら 帰ろうと

ト オモッタラ アノ アノ ナンダ チューガンダイガクッダカ
思ったら 何だ チューガン 大学 といったかな

ナ アノ ダイガクニ オラナンド イタンダケドモ タテモン
あの 大学に 俺達は いたのだけれども 建物を

ゼンブ ツ ア タテモン ツブサズニ ドーロダケ ウマノ イ
全部 建物 は 潰さずに 道路 だけ , 馬の

ル トコダケ コー バタバタ バタバタ ゴジッキロバクダン
いる 所だけ バタバタ バタバタ 五十キロ 爆 弾を

オトシテ (クーンン。) ホトンド ウマガ ゼンメツン ナツタンダ
落として ほとんど 馬が 全滅に なったのだよ。

ヨ。オラナンカノ ブンタイガ サンジュー サンビャクゴジツト
俺達の 分隊が 三十 二百五十頭

ーグレー イタンダモノ。(クーンン) ソノ ヤツガ サンワリ (間)
ぐらい いたのだもの。 そいつが 三割り

グライ マー ノコッタノガ ヒャクハヒチハチ イタダッタネー。
ぐらい、 まあ 残ったのが 百七十八【頭】いたのだったね。

注

1. 「ヒーデー」 [çi' de:]
2. 「コ」 [kɔ]
3. 「クボーク ハカッタ」配給米を計るとき、杓の表面よりもくぼませて計った。
4. 「ニショ－ ハカリダスノニ ドコ ヤッタッペ」少しずつけずって計ってニ升分浮かせるのにどこをどうやったのだろう。
5. 「オランダ」 [ora' nda] オランダドワ>オランダ。
6. 「トリヤーシネー」 [torja:βine:] 「シ」の摩擦の程度は弱い。
7. 「ミヤショ－ノ」 「ミヤショ－」は客の背戸と呼ばれる家のこと。次頁にも「ミヤノ ショガイ」として出てくる。やはり特定の家を指している。
8. 「ショ－ラガ」 「ショ－」は人名。正。
9. 「キョクデ クチョ－デ」 「郵便局を開いている家」を「局」という。郵便局をやっている家の人が区長で。
10. 「トメサンニヤー」 「トメサン」は人名「止吉」+さん。
11. 「トモジーサマニ」 「トモジーサマ」は人名「友吉」+じいさま。
12. 「クボ クボッタッテ」配給米の計り方が正当でないと被配給者が言っても。
13. 「イカリノ」 [ikarino]。[ikaino]とも聞こえる。[r]の音は弱い。
14. 「I」は調査者 上野勇。
15. 「コツツァ」 [kottsa']。コッタ>コツツァ。無造作な発音。
16. 「コツツァイ」 [kottsaï]。コッタ>コツツァイ。無造作な発音。[kottaï]とも聞こえる。
17. 「フキワリジックユークミアイ」 「フキワリ」の[r]の発音は弱い。
18. 「ウシロダオ」 「ウシロダ」の[r]の発音は弱い。地名。
19. 「チーガ」 「チー」は人名。小形千恵子。
20. 「ケンガ」 「ケン」は人名。憲三。
21. 「トキダッタダンネー」 ダカラ>ダーラ。ネーの前でダン。

22. 「サ」 [sa] 文末の弱まり形。
23. 「シタダゾ」 [ʃitadazo] 摩擦音 [zo] は文末の弱まり形。
24. 「トミチャンチダノ」 「トミチャン」は人名 富司+ちゃん。
25. 「メンセキガ モッラタカラナー」 「面積があった」と言おうとして「面積を持っていた」と途中で言いなおしたぬじれ文。
26. 「メンセキガ アッタカラネー」 助詞「ガ」の音は摩擦音の [ʃa]。「メンセキダッタカラ」とも聞こえる。
27. 「ツクル」 [tsũkuru] [r] の発音のための舌の動きはわずが。[tsũku:] と聞こえる。
28. 「スュー」 [ʃũ:] スル>スュー。無造作な発音。
29. 「ソシタ」 ソシタラ>ソシタア>ソシタ。「ラ」の子音が脱落して「ア」母音連続が「ア」長音となり、さらに短呼化されたもの。無造作な発音。
30. 「キューイヨシチャンダ」 [kjuĩjoʃitʃanda] キヨシチャンの言い間違い。
31. 「ミツガ」 「ミツ」は人名 光美。
32. 「クンネーケー」 [kunne:ke:]
33. 「ジュークバー コクカラ」 「文句を言う」の意で「ジュークユー」と言う。
34. 「ヨーイジャーナカタネー」 「大変だったねえ」の意。
35. 「ソノ」 [so.no]。「スノ」に近い音。
36. 「ゾーン」 [n:m]
37. 「シューヨーセル」 「シューヨースル」の言い間違い。または「ス」の音の調音点が前よりかつ低いため「セ」のように聞こえた。
38. 「オカナンカ」 「オカ」は人名。岡司。
39. 「ケーッテ」 [ke:tte]。
40. 「イマノ ショーカイセキ」 先に話題になった「ショーカイセキ」という鳥の名と同じ音であるの意。
41. 「^{xxxx}ジョ」 昭和と書いてかきとめた。
42. 「ナー」 [n:] 年数を考えている。思わず発した声。

43. 「(間)」あしかけて何年になるかを考えているため間ができた。
44. 「ハタチス_{xxx} カラ ニジューゴカ ロク シチ ハチ」「二十歳過ぎ」と言いかけてやめ、「二十歳から」と言いかえた。そのために「カラ」との間に息の休止もあらわれた。六, 七, ハは独言でも言うように年数を数えた。だんだん音量は小さくなっていく。
45. 「トジョーネー」[t̚so:ne:]。無造作な発音。
46. 「サー」[sa:]。
47. 「ヤッテシタ」[jatteɕita] ヤッテキタの弱まり形。
48. 「ソーダイネー」[so:daïne:]。
49. 「アタマーカラ」「頭を」と言うつもりが「頭から」と言いなおした。「アタマー」は「頭を」の意。対象格を語末母音の引きのばれによって表わすことは当方言の特徴のひとつである。
50. 「ナクナッタイ」「ナクダッタイ」の無造作な発音。アクセントの型からも「泣くだった」の意であることがわかる。もし、「なくなつた」であればアクセントは「ナクナッタ」となる。
51. 「デジョーネー」「デジョー」は丁に対する丁寧体。Kは丁よりも年下。
52. 「オモッタッタ」過去回想。

Ⅲ. 長野県^{かみ い な}上伊那郡^{なかがわ}中川村大字^{かづらしま}葛島

収録・文字化担当者 馬 瀬 良 雄

A 収録地点とその方言について

1 地点名 長野県上伊那郡中川村大字葛島

2 収録地点の概観 長野県上伊那郡中川村は伊那谷のほぼ中央，上伊那郡の最南部に位置する。明治22年(1889)に葛島村，大草村，四徳村の3カ村が合併し南向村と称したが，昭和33年(1958)片桐村を合併し中川村となった。天竜村をはさんで左岸に南向，右岸に片桐が位置する。大草がその中心である。人口5552人(昭51.3.1)，世帯数1308(昭51.3.1)，面積77.24 km²。

調査地点葛島は中川村の最南端に位置し，西は天竜川に面し，南は小渋川によって下伊那郡と境を接している。上伊那地方にありながら，文化圏の上からは飯田・下伊那文化圏に属している。主産業はかつては養蚕，現在は果樹・蔬菜の栽培。人口995人(昭51.3.1)，世帯数223(昭51.3.1)。

3 収録した方言の特色

① 方言区画上の位置・隣接諸方言との関係 長野県の方言は，東条操氏の区画に従うならば東部方言の東海東山方言，都竹通年雄氏に従うならば東部方言のナヤシ方言(長野・山梨・静岡方言)に分類される。長野県の方言はさらに奥信濃・北信・中信・南信の各方言に区分される。南信方言は木曽，下伊那及び上伊那の南部の方言がこれに属し，中川村方言はこの中に分類される。南信方言では西部方言的特徴が長野県の他の方言と比較して多い。

② 音韻上の特色 葛島方言のモーラ体系は調査していないので，同じ中川村の片桐方言のものを示す。話者は松下大佐氏(明23年生まれ)。

| | | | | | | | | | | | | |
|----|----|----|----|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 'u | 'o | 'a | 'e | 'i | 'ju | 'jo | 'ja | 'wo | 'wa | 'we | 'wo | 'ja |
| hu | ho | ha | he | hi | hju | hjo | hja | — | — | — | — | — |
| ɲu | ɲo | ɲa | ɲe | ɲi | ɲju | ɲjo | ɲja | — | — | — | — | — |
| gu | go | ga | ge | gi | gju | gjo | gja | — | — | — | — | — |
| ku | ko | ka | ke | ki | kju | kjo | kja | — | — | — | — | — |
| zu | zo | za | ze | zi | zju | zjo | zja | — | — | — | — | — |

| | | | | | | | | | | | | |
|----|----|----|----|----|-----|-----|-----|---|---|---|---|---|
| cu | co | ca | — | ci | cju | cjo | cja | — | — | — | — | — |
| su | so | sa | se | si | sju | sjo | sja | — | — | — | — | — |
| ru | ro | ra | re | ri | rju | rjo | nja | — | — | — | — | — |
| — | do | da | de | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| — | to | ta | te | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| nu | no | na | ne | ni | nju | njo | nja | — | — | — | — | — |
| mu | mo | ma | me | mi | — | mjo | mja | — | — | — | — | — |
| bu | bo | ba | be | bi | bju | bjo | bja | — | — | — | — | — |
| pu | po | pa | pe | pi | pju | pjo | pja | — | — | — | — | — |
| u | o | a | e | i | | | | | | | | |

N

Q

共通語にないモーラについてかんたんに説明しておく。

/’we/ は次のような場合にあらわれる。

/’weeta/ [we:ta] (沸いた) cf. /’eeta/ [e:ta] (焼いた, 明いた)

/ka’wee/ [kawe:] (買いに) cf. /ka’ee/ [kae:] (代えに)

/’wo/ は次のような場合にあらわれる。

/hana’wo/ [hanawo] (鼻を) cf. /hana’o/ [hanao] (鼻緒)

/’wjo/, /’wja/ は次のような場合にあらわれる。

/hu’wjoo/ [Φwjo:] (笛を) cf. /hu’joo/ [Φwjo:] (冬を)

/hu’wjaa/ [Φwja:] (笛は) cf. /hu’jaa/ [Φwja:] (冬は)

/co/, /ca/ は次のような場合にあらわれる。

/’ogooqcoo/ [ogottso:] (お御馳走)

/’joodaocama/ [jo:dattsama] (雷様)

なお、この方言では、たとえば「嗅いだ」は [kaĩda] または [kajĩda] と発音され、木曾の山村 [kaida] とは発音が異なる。また、軽い敬意と親愛の気持ちをあらわす -ナンは、[nan] と発音されることは稀で、普通は [naĩ] あるいは [naĩ̃] のように発音される。そんなところからこの方言では口母音音素に対して鼻母音音素を認めるべきではないかと考えているが、疑問の点もあるので、上のモーラ表にはこの点を加えなかった。

音声上の特色として、まず連母音の特色をあげる。共通語の /a'i/, /a'e/ に対し /ee/ の対応する語が多い。たとえば、/eeso/ (愛想), /ee danara/ (間柄), /teegee/ (大概), /teeko/ (太鼓), /meeba/ (前歯), /'iidee/ (飯田へ) など枚挙にいとまがない。いわゆるサ行イ音便のハナイタ (話した), サイタ (差した) など、この方言では /haneeta/, /seeta/ となる。

共通語の /i'e/ に対しては幾つかの語で /ee/ が対応する。たとえば、/ee/ (家), /keeru/ (消える), /meeru/ (見える) のように。しかし、「ひえ (稗)」、「知恵」などは /hi'e/, /ci'e/ であり、/hee/, /cee/ で対応することはない。

その他、共通語の /o'i/, /o'e/, /u'i/ などは共通語と同じであり、たとえば以上に対し、/ee/ や /ii/ が対応することはない。例をあげれば、/cu'jo'i/ (強い), /hido'i/ (ひどい), /kiko'eru/ (聞こえる), /'obo'eru/ (覚える), /sabu'i/ (寒い) など。

この録音で連母音の融合がそれほど認められないのは、この融合が近年しだいに行なわれなくなっている点のほか、話し手の学歴や彼等の属している階層が関係しているであろう。また、録音ということと話し手が緊張していたこと、さらによそ者である調査者が同席していたことなどもこのことに関係があると思われる。

次に、母音の無声化。調査したのは次の諸語である。

北, 鹿, 下, 菊, 叱る, (頭の) ふけ, 拭く, 拭け, 突く, 突け, 口, 漬け物, つた (蔦), 靴, 月, 土, 鮎; 汽車, 吹く, 着く, 来た; 振った, 吸った; 降った, 食った; 奥, 松, 菓子, 書く。

3回発音してもらった。1回でも無声化の認められたのは次の諸語である。

鹿, 下, 叱る, (頭の) ふけ。

つまり、母音の無声化現象は極めて少ないことが分かる。そしてその認められた語は、すべて CiCV ~ CuCV (Cは無声子音音素) の /V/ が /e/, /a/ のように広い母音の場合であることが注目される。

この方言には「もともと促音のないところに促音を入れる現象」が認

められる。ハナツカミ（鼻紙），カラツカゼ（空風），ガケツプチ（崖縁），ウフッカー（上皮），ウツクシー（美しい），ヤヤッコシー（ややとしい）など。

金田一春彦氏の分類によって，内地方言の音韻を表日本方言，裏日本方言，薩隅式方言の三つに分けるならば，中川村方言は表日本方言に属することになる。また，榎垣実氏に従って表日本方言を東日本方言と西日本方言とに分けるならば，東日本方言的特徴と西日本方言的特徴とをあわせ持つ方言ということができよう。

アクセントについてちょっと触れておく。この方言は東京式アクセントに属し，型及びその種類は東京語と同じであり，型に所属にする語も，東京語と若干の出入はあるものの，それに近い。

③ 文法上の特色

イ) 中川村は文法上東西方言対立の境界地帯に位置する。いま，この方言で東部方言的特徴を示すものを挙げれば，次のとおりである。

ソーダ^(注1)（そうだ），アカナナル（赤くなる），カッタ（買った）
（注1）ソーダはソーナともあらわれる。むしろーナの方が基底方言的かという。

次に西部方言的特徴を示すものを挙げれば次のとおり。

イカシ（行かない），イカナシタ（行かなかった），イカニャー（行かなければ），デヨ（出ろ）。

指標の取り方にもよるが^(注1)，ここに挙げたところでは西部方言的特徴の方がやや多いと言えそうである。

（注1）以上のほかにも，継続態としてフットル（降っている）を使い，フッテルを使わない点，老耳層では（傘などを）サシタをセータと言っている点などは，西部方言的特徴として加えることができよう。また，継続態と結果態とを文法上区別しない点などは東部方言的特徴と見ることができる。

ロ) 敬語的表現がゆたかである。相手に寄ることを勧めるのに，敬意の程度により，次のような種々の言い方がある。

ヨレ — ヨリナ — ヨランカ — オヨリナ — ヨットクンナ —

オヨリナンエ — オヨリテ — オヨリトクンナ — オヨリナンシ
ョ — オヨリトクンナンショ

上の中から特徴的なものにつき少し説明する。

i) -ナンショ 軽い敬意と親愛感をもって使われる。オヤスミナンショ（お休みなさい）、オトリナンショ（お取りください）、ゴメンナンショ（ご免なさい）など。

ii) オ — テ 上のオヨリテは、オヨリルという敬語動詞に助詞 -テが下接したもので、〈オヨリテ オクンナ〉や〈オヨリテ オクンナンショ〉の後半部が省略されたとみることができる。この方言では言い切りがオ — ルであらわされる敬語動詞が頻繁に用いられる。たとえば、アル（ある）、ミル（見る）、ケール（帰る）の動詞を例にとると、それぞれ、オア Ril、オミル、オケールとして用いられる。

以上のほか、敬語的表現として特徴的なものを、1、2 挙げる。

iii) アリマス この方言ではゴザイマス（古来ではゴザイマスル、ゴザリマスルも使われる）のほか、アリマスを使う。たとえば、〈コノ トコロ オサブク アリマスナムシ〉（このところお寒うございますね）のように。アリマスは丁寧さをあらわす補助動詞として、広く男性、女性の区別なく用いられる。

iv) -ナムシ、-ナム、-ナン これらは念を押し、余情を含み、敬意をあらわすのに用いられる。敬意は -ナムシが最も高く、-ナンは最も低い。なお、-ナムシ、-ナムは老年層の一部で使われるにすぎない。-ナムは [nam] と発音される。また、-ナンは [nã] または [nãw] と発音される。しかし、ここでは簡略表記を用い、これらを -ナンで表わした。

4 その他

地点選定の理由としては、第1に馬瀬が中川村の方言について以前調査したことがあり、その方言についてかなりよく知っていることをあげる。第2には中川村が文法上東西両方言の境界地帯にあり、東西方言対立が実際の会話の中でどうあらわれてくるか、興味深かった点をあげる。その他、民話のすぐれた語り手がこの村にいる点も、ここを選ばせる理

由の一つになっている。

録音テープの聞き取りで不明な個所，方言の意味，用法で不審な点は，話し手のひとり，清水悟郎氏にお尋ねした。氏にはこのために長時間何回にもわたりご協力いただいた。また，氏には話し手の選定をはじめとして録音調査のもろもろのことについてご協力いただいた。この録音調査には沖裕子氏（東京女子大学文理学部学生）が同行し，その手伝いをした。氏はさらに録音テープからの資料の文字化，共通語訳で馬瀬を助けた。また，浄書は馬瀬則子が行なった。

B 表記について

簡略音声表記の意味で片かなを用いた。それぞれの片かなの表わす具体音声は次にかんたんに示す。

ウ：[u] 円唇でなく，平唇。

オ：[o] 基本母音の[o]よりも高い。

ア：[a] 基本母音の[a]よりも後寄り。

エ：[e] 基本母音の[e]よりも高い。

イ：[i] 基本母音の[i]よりも多少調音点は低く，かつやや後寄り。上に述べた母音の具体音声の説明は，母音が子音とともに拍を作った場合にもあてはまる。

ユ：[ju]

ヨ：[jo]

ヤ：[ja]

ヲ：[wo] ~ [ʷo]

ワ：[wa]

フ：[ɸu]

ホ：[ho] 母音間では往々[h]は[h̥]となる。ハ，ヘの場合も同じ。

ハ：[ha]

ヘ：[he]

ヒ：[çi]。[çi]の摩擦は共通語のように強くはない。ヒュ，ヒョ，ヒャの場合も同じ。

ヒュ：[çu]

ヒョ：[ço]

ヒャ：[ça]

ク°：[ɣu]

コ°：[ɣo]

カ°：[ɣa]

ケ°：[ɣe]

キ°：[ɣi]

ギョ : [ɲjɯ]

ギョ : [ɲjo]

ギャ : [ɲja]

グ : [gɯ]

ゴ : [go]

ガ : [ga]

ゲ : [ge]

ギ : [gi]

ギョ : [gɲɯ]

ギョ : [gjo]

ギャ : [gja]

ク : [kɯ]

コ : [ko]

カ : [ka]

ケ : [ke]

キ : [ki]

キュ : [kjɯ]

キョ : [kjo]

キャ : [kja]

ズ : [dzɯ, -zɯ]。一般に母音間では摩擦音 [z], 他の位置で破擦音 [dz] があらわれる。他のザ行の拍でも同じ。共通語におけるような母音の中舌化は認められない。ただし, [dzɯ] の摩擦音 [z] が弱い個人がいる。[dʷɯkin] (頭布) のように。

ゾ : [dzo, -zo]

ザ : [dza, -za]

ゼ : [dze, -ze]

ジ : [dzi, -ji] ただし, [dzi] の摩擦音 [ʒ] が弱い個人がいる。
[dʲiki] (時期) のように。ジュ, ジョ, ジャ の場合も同じ。

ジュ : [dʒɯ, -jɯ]

ジョ : [dʒo, -jo]

ジヤ : [dʒa , -ʒa]

ツ : [tʃu] 共通語におけるような中舌化は認められない。ただし、
[tʃu] の摩擦音 [ʃ] の弱い個人がいる。[tʃu tʃu] (筒) のように。

ツォ : [tso]

ツァ : [tʃa]

チ : [tʃi] ただし、[tʃi] の摩擦音 [ʃ] の弱い個人がいる。[tʃi tʃi]
(乳) のように。なお、チュ、チョ、チャの場合も同じ。

チュ : [tʃu]

チョ : [tʃo]

チャ : [tʃa]

ス : [su] 共通語におけるような母音の中舌化は認められない。

ソ : [so]

サ : [sa]

セ : [se]

シ : [ʃi]

シュ : [ʃu]

ショ : [ʃo]

シャ : [ʃa]

ル : [dru , -ru] 一般的に母音間では弾き音 [ɾ] があらわれ、他の
位置では弱い破裂音で始まる。個人によって異なるえ音を用いる。ある
いはこの音の方がこの方言では古いのかもしれない。以上は他のラ行の
かなの場合も同じ。

ロ : [dru , -ru]

ラ : [dra , -ra]

レ : [dre , -re]

リ : [dri , -ri]

リュ : [drju , -rju]

リャ : [drja , -tja]

ド : [do]

ダ : [da]

デ： [de]

ト： [to]

タ： [ta]

テ： [te]

ヌ： [nu]

ノ： [no]

ナ： [na]

ネ： [ne]

ニ： [nī]

ニュ： [nu]

ニョ： [no]

ニャ： [na]

ム： [mu]

モ： [mo]

マ： [ma]

メ： [me]

ミ： [mi]

ミョ： [mjo]

ミャ： [mja]

ブ： [bu] 母音間ではしばしば [β ~ β̥] があらわれる。この点は他のバ行のかなについても同じ。

ボ： [bo]

バ： [ba]

ベ： [be]

ビ： [bi]

ビュ： [byu]

ビョ： [byo]

ビャ： [bya]

ー： 引き音をあらわす。

ン： 語末にあっては [N]。ほかに, [honto] (本と), [hommo]

(本も), [hoj̥na] (本が), [hoũwa] (本は) などの [ŋ] [m] [j̥]
[ũ] などをあらわす。なお, 文末助詞として用いられる [naː̃] [naũ]
の [ĩ] [ũ] も, 前に述べたように「ン」であらわす。

ッ: [iʃso:] (一層), [ip̥pen] (一遍), [it̥to:] (一等), [iʃso:]
(一升), [it̥to:] (一町) などの [ʃ] [p̥] [t̥] [ʃ̥] などをあらわす。

その他必要に応じて本文の注で述べる。

C. 話者・録音環境など

- 1 タイトル 「縞手本の話」
- 2 録音年月日 昭和50年11月15日
- 3 録音場所 長野県上伊那郡中川村大字葛島字渡場 (片桐としゑ氏の自宅)
- 4 話し手 清水悟郎氏 男性 明治37年生まれ。
片桐としゑ氏 女性 明治39年生まれ。

清水悟郎氏は長野県の旧制中学校教諭を経て信州大学教授となり、退官後、郷里に近い飯田女子短期大学の教授となり、現在に至る。就学、就職のため、よそでの生活は約45年。したがって、多少録音には共通語の影響が見られないわけではない。話し好きであり、話しの速度は普通程度。

片桐としゑ氏は同じ中川村であるが、大字片桐の生まれ。とついで22歳の時から現在地に住む。葛島の方言と片桐の方言は厳密に見ると異なる点がないわけではないが、大きく見てほぼ同一と考える。職業は農業。方言の保有度はこの年代の女性の普通程度。話し好きであり、話しの速度は普通程度。

5 録音環境 同席者として調査者がいた。二人の間柄が義理の姉と弟の関係であるので、また、録音場所が片桐氏の自宅であることもあり、話題も昔の思い出話しであるためもあって、話の進行状況はスムーズであった。

-
- 1 タイトル 「幼いころの遊び」
 - 2, 3, 4, 5 は「縞手本の話」に同じ。

-
- 1 タイトル 「昔の嫁入り」
 - 2 録音年月日 昭和50年11月15日
 - 3 録音場所 長野県上伊那郡中川村大字葛島字渡場（小池千勢氏の自宅）
 - 4 話し手 小池千勢氏 女性 明治32年生まれ
清水悟郎氏 男性 明治37年生まれ

小池千勢氏は元地主階級の家生まれ。中川村に近い赤穂（現駒ヶ根市）にとつぎ、その後、夫の転任により松本市に一時住む。夫の死後、再び中川村に戻り、家を継ぎ、現在に至る。よそでの生活は約15年。無職。話し好きであり、かなりのスピードでてきばきと話された。

清水悟郎氏については「縞手本の話」の4を参照。

5 録音環境 同席者として調査者がいた。話しはもっぱら小池千勢氏が話し、清水悟郎氏は聞き役、あるいは話しの引き出し役を勤めた。昔からの知り合い同志であり、録音場所が小池氏の自宅であるため、小池氏はリラックスして、てきばきと話された。

1 縞手本の話

話し手

(略号) (氏名) (性) (生年)

A 清水悟郎 男 明治37年生まれ

B 片桐としゑ 女 明治39年生まれ

A オネーサマー⁽¹⁾ コネータ⁽²⁾ ゴモシン⁽³⁾ シトイタ シマチョー⁽⁴⁾ モッ
お義姉様, この間 お頼み しておいた 縞手本を 持って
テ キテ オクレタ。
来て くださった?

B ハイ。アノー アリマシタモノデナン。⁽⁵⁾ ニサンサツ⁽⁶⁾ ココエ
はい。あのう(搜したら)ありましたものですからね。2, 3 冊 ここへ
ダシテ⁽⁷⁾ オキマシタノ。⁽⁸⁾ (A アリマシタ。)
出して おきましたの。 (ありましたか。)

A ホーカナ。⁽⁹⁾
そうかな。

B ハイ。オゴランテ。⁽¹⁰⁾
はい。御覧になって。

A ワシワ⁽¹¹⁾ アレオ ミルトナー ナクナッタ オカーマノ⁽¹²⁾ コトー
私は あれを 見るとなあ, 亡くなった お母さんの ことを
オモイダシテサ ウーント ウレシーンナ。⁽¹³⁾
思い出してさ, とっても 嬉しいんだ。

B ハイ。⁽¹⁴⁾ ココニ オジサンカ キモノニ シタリ ハカマニ シタ
はい。ここに おじさんが 着物に したり 袴に した

ノカ⁽¹⁵⁾ アリマスラ。

のが あるでしょう。

A アール アル。 コレーガ ハカマダ。 コレガ チューガッコー
あーる ある。 これが 袴だ。 これが 中学校へ

イッタ トキニ ヤツデナ。

行った 時に (はいた) やつてな。

B ハイ。

はい。

A フーン⁽¹⁶⁾。 コレワ ミンナ オカーマカ オッタ ワケジャー ナ
ふうん。 これは みんな お母さんが 織った わけでは

クッテ……。

なくて……。

B ゼーンプ オリマシタノ。 (A ソーカナ。) ソエデ⁽¹⁷⁾ コノ キ
全部 織りましたの。 (そうかな。) それで この

レオ⁽¹⁷⁾ ヨソエ アゲテ。

布を よそへ 上げて。

A フーン。

ふうん。

B コ_{xx} ヨッチノ ホンワ ヨソノー イタダイテ キタトカ ソー ユー
こっちの 縮手本は よそのを 頂いて 来たとか そういう

フーニナン ウチデ オッタノガ (A ハハー ナル……。) コレデ⁽¹⁷⁾
ふうにね, 家で 織ったのが (ははー なる……。) これで,

(A フン) ヨソカラ イタダイタノガ コレツチュヨーニ (ふん)
よそから 頂いたのが これっていうように (

A ナルホド。) アノ キメテ コー ユーノヲ マタ ヨソエ
なるほど) あの 決めて こういうのを また よそへ

ワケテ アゲテ ヨソカラモ コレ イタダイテ キトリマスワケ。
分けて あげて よそからも これを 頂いて 来ておますわけ。

A コレア ソノー ソーモクゾメツテューカ クサキゾメツテューカ
これは そのう 草木染めっていうか くさき染めっていうか
シランケード ソー ユー コトデ ソメタンダナー。
知らんけれど そう いう ことで 染めたんだなあ。

B ハイ ヤリマシタ クルミゾメトカナン (A ア クルミテ)
はい。(他にも)やりました……。くるみ染めとかね。 (あ, くるみで)
ソレカラ ハイ スミ ケシズミヲナン (A ハハニ) アノー
それから はい 炭, 消し炭 をねえ (ははあ。) あのう
イレテ ソレデ スミデ ソメテ。
入れて それで 炭で 染めて。

A コレデ コー チカチカ ヒカットルワー キヌイトズラ。
これで こう チカチカ 光っているのは 絹糸だろう。

B キヌイト。
絹糸。

A コレア ミンナ ジブンノ ウチデ トッタ イトダナー。
これは みんな 自分の 家で とった 糸だなあ。

B エー。 オバーチャンカ アノ イッショケンメー サクリツチュ
ええ。 おばあちゃんが あの 一所懸命 座繰りという
ーノデ トリマシテナン。
ので とりましてねえ。

A ⁽¹⁸⁾
アノー シクタトカ アノー (B ソーソー) ジョーマユワ ウ
あのう シクタとか あのう (そうそう) 上 繭は 売
⁽¹⁹⁾
リニ ダシチマッテ (B ウリニ ダシテ タマトカナ) チューマイモ カイガ
りに 出しちまって, (売りに出して, 玉繭とか) 中 繭も 買いが

キテ、ダ~~~~ タマダトカ モト シクタッテ ユーカナー (B
来て、 玉蔭だとか もと シクタッテ 言うかなあ、

ハイ) アレデ トッタンジャ ⁽²⁰⁾ ナイノ。
はい) あれで とったんじゃ ないの。

B トリマシタノ。 オバーサン ジブンデナン (Aフーン) ザク
とりましたの。 おばあさんが 自分でねえ (ふうん) 座繰

リッチューノデ テデ マワシテ⁽²¹⁾ コー アノー テデ マワシテ
リというので 手で 回して こう あのう 手で 回して

ナン (Aアレデナン) トッテ。
ね。 (あれでねえ) とって。

A ソレジャ アノ トキニ アノー ナン イイトノ コー クチャー ダ
それじゃ あの 時に あのう 何の 糸の こう ロを 出

スノニ (Bミコデ) エミコデ ヤッタシナー アノー……。
すのに、 (みごで) ええ、みごで やったしなあ あのう……。

B ア ウツギ。
あ、うつぎ(9P木)。

A ウツギ。 (Bウツギノ ハッパデ) ウツギノ ハカ チョット
うつぎ。 (うつぎの 葉っぱで) うつぎの 葉が ちょっと

ヒッカカルンナ。
引っ掛かるんだ。

ロ ソーソー。
そうそう。

A ソレデ トッテ キテ クレッチュートナー (Bハイ) トクイ
それで とって きて くれていうなあ (はい) 得意に

ニ ナッテナー トッテ キテ。 アレ ヤルト コー……。
なってなあ とって きて。 これ やると こう……。

B ケッコー トレマシタナン。

結構 とれましたねえ。

A トレテ (B ハイ) ヤリマシタナー。
とれて。(はい) やりましたなあ。

B ソーソー。

そうそう。

A ソーシテ コノー キヌイトヲ ムカシノ シトダツタカラ⁽²²⁾ オケ⁽²³⁾
そして このう 絹糸を 昔の 人だったから お蚕^{××}
ーコ^{×××} オケーコサマカ[×] ハイットルトカ。 ソシテ ウント ソノ
お蚕[×]さまが はいっているとか。そして うんと その
キヌイトバカリダト オケーコゾヅ⁽²⁴⁾キチュツタジャー ナイ。 オ
絹糸ばかりだと オケーコゾヅキ[×]って言った(じゃあない。 オ
ケーコゾヅキノ キモノ。(B 笑)
ケーコゾヅキノ 着物。

B ソーソー。

そうそう。

A ゼンブ オカイコサマノ (B ハイ) イトダツチュー。
全部 お蚕さまの (はい) 糸だっていう(意味で)。

B キヌニ^{×××} キヌオリモノヲナン。
絹織物をねえ。

A オケーコゾヅキチュツタナー。 エー ソックリ オカイコサマ
オケーコゾヅキ[×]って言ったなあ。 ええと、そっくり お蚕さまの
ノ イトガ ハイットルツチューノカナ。
糸が はいっているっていうのかな。

B ソーソー。

そうそう。

A オケーコゾツキノ キモノダテ ジョートータゾツチュツタンナ。
正絹の 着物だから 上等だぞって言ったんだ。

トコロカ コレオ イーダエ キテッテ ハズカシクテナー (B
ところが これを 飯田へ 着て行って 恥ずかしくてなあ

ハイ) イーダノ シューナンカ ミンナ コンカスリジャ ネーカ
はい) 飯田の人達 なんか みんな 紺餅じゃ ないか

ナ。
な。

B ソーソー。 ゴッ コレ キルト ゴ⁽²⁵⁾ ゴツイッ テューカナン ム
そうそう。 ^{x x}ごっ これを 着ると ^{xx}ご ⁽²⁵⁾ごっいって いうかね、
カシノ。
昔の。

A ソー。 ゴツイッテ ユーケドナー。 ソレデナー ワタシ コレ
そう。 ごっいって 言うけれどなあ。 それでなあ 私が これを
キテッタラ ワラワレテナー ミンナニ。(笑) コンナノ ^{xx}キ コンナ
着て行ったら 笑われてなあ みんなに。 こんなの ^{xx}き こんな
ハハオヤノ テオリノ シマノ モノ キトルノワ ^{xx}オ ワシッ
母親の 手織りの 縞の もの 着ているのは わし
キリナ。(Bハイ) アトワ ミンナ コンカスリズラ。
だけなんだ。(はい) あとは みんな 紺餅だろう。

B ソーソー。
そうそう。

A ワラワレテナー。 ハツカシカッタダ⁽²⁶⁾。 ソノ ウチニナー ソッ
笑われてなあ。 恥ずかしかったんだ。 その うちになあ
コラジューノ オカーマカ⁽²⁷⁾ テオリテ⁽²⁷⁾ テオリッ チュー コトバワ
そこら中の 母親が 手織りで、手織りっていう 言葉は

ムカシ アッタカ ドーカ シランケードモ ソレデ コリヤー ト
昔 あったか どうか 知らないけれども, それで これは

ートイ モンダ アリガタイ モンダゾッテ シトカ フラッテモ
尊いものだ, ありがたい ものだ ぞって, 人が 笑っても

ワタシワ (Bハー) キトッテ チューガクヲ ソツキョー シ
私は (はあ) 着ていて, 中学を 卒業 し

タ トキニ ハオリダケ オカーマカ コンカスリヲ ユサエテ
た ときに 羽織だけ お母さんが 紺緋のを こしらえて

クレタ。

くれた。

B コンカスリ カッテ モラッテ。
紺緋を 買って もらって。

A ウン。 ソレデ トーキョーエ イッタ トキモナ コレヲ キテ
うん。 それで 東京へ 行った ときもな, これを 着て
ッタンダカラ。

行ったんだから。

B ジミダッタワナン。
地味だったわねえ。

A ウン ソーナ。 コレヲ キテッテ。
うん, そうだ。 これを 着て行って。

B (笑) ジミナ ムスコデ。
地味な 息子で。

A ウン ソレデ オカーマカ コサエテ クレタモンダデ トートイ
うん, それで お母さんが こしらえて くれたものだから 尊い
ゾツチュー キモチガ⁽²⁸⁾ アッタモンデ (Bハイ) キテッタンダナー。
ぞという 気持ちが あったものだから (はい) 着て行ったんだなあ

B ソーソー。

そうそう。

A コレ ドーダナ オネーサマ コレ。

これ どうだな。お義姉さま これ。

B ワカイ ジブンニワ カナシー ハズカシートカ (A ソ ソー)
若い 時分には 悲しい、恥ずかしいとか そう そう

オモイマスケド チョット オーキク ナッテクリャ…………。

思いますけれど、 ちょっと 大きく なってくれば…………。

A イマ ミリャ ドーダナ コノ イー ガラノ ヨサ。

今 見れば どうだな、この 良い 柄の 良い。

B オヤノ⁽²⁹⁾ コシラエテ モラッタ モノワナン。

親に こしらえて もらった 物はねえ。

A イー ガラジャ ネーカナ。

良い 柄じゃ ないかな。

B イー シマオ イッショ ケンメー カンガエテ。

良い 縞を 一所懸命 考えて。

A ミンナ キノ キータ タイシタ モンダ。

みんな 気の 利いた 大した ものだ。

B ホントニナン。

本当にねえ。

A コレオ ソメタリ キヌイト イレタリ シテ。 タイシタ モンダ

これを 染めたり 絹糸を 入れたり して。大した ものだ

ナー。

なあ。

B オトコバッカ ヨニンヲ ソイデモ ハカマニ ハオリニ (A ソ

男ばかり 4人を、それでも 袴に 羽織に (A ソ

ーナ) キモノト (Bソー) ミンナ オッテ キセタンダデ
だ。 着物と そう みんな 織って 着せたんだから

ムカシノ シトワ エラカッタナン。

昔の 人は 偉かったねえ。

A ウン ソーナ。 ゼーンブ テオリデ (Bハイ) ヨニンノ コ
うん、そうだ。 全部 手織りで はい 4人の 子

ドモニ キ ナンシテ クレテ タビダッテ ミーンナ……。
供に^{xx} 何して くれて 足袋だって みんな……。

B ジブンデ スッテ。
自分で 縫って。

A ウン。 タビモ ジブンデ (Bハイハイ) コサエテ クレタ。
うん。 足袋も 自分で はいはい こしらえて くれた。

ハカマワ シタテヤサン ダシタケレドモ ハカマノ タタミカタ
袴は 仕立屋さんに 出したけれども 袴の 畳み方も

モ オシエテ クレテ (Bハイ) ワシ チューガク イッ
教えて くれて、 はい わしが 中学に 行って、

テ オトコノコノ クセニ チューガク イチネンデ ジューサン
男の子の くせに 中学 1年で、 13か

カ シデ (Bハイ) ハカマ タタンダラ ミンナ ビックリ
4で はい 袴を 畳んだら、 みんなが びっくり

シテナー。

してなあ。

B ショーシシャデ。⁽³⁰⁾
尚志社で。

A ウン キレーニ タタンダニー。
うん、きれいに 畳んだよ。

B ハー。

はあ。

A ハカマノ ヒボノ ムスビカタナンテ ムズカシーモノ。

袴の 紐の 結び方なんて 難しいもの。

B ハイ。ソーソー。(A フシ) アノー ナンダ イシダタミニ ムスン
はい そうそう。(ふん) あのう なんだ、いし畳みに 結ん

デナン。

でねえ。

A ソーナ。(B ハイ) アー ユー コト チャント オボエーテ⁽³¹⁾
そうた はい ああ いう こと ちゃんと 覚えて。

B ソエテ オボエテ オイデル。アノ タビヲ ヒボタビヲナン ⁽³²⁾ (A ウン
それで 覚えて いらっしゃる。あ、足袋を、紐足袋をね、 うん、

ヒモタビ) ヌイテ コシー コー ブラサケテ (A ソーソーソ
紐足袋) 脱いで 腰へ こう ぶらさけて (そうそうそう

ーソー ウン) アルイトッタ ジャーネ。(A エー) アツク ナルト ヌイテ コ
そう、うん) 歩いていたじゃない。(ええ) 暑く なると 脱いで

シエ ブラサケテ。

腰へ ぶらさけて。

A ソレカ ウツトルノワ ダイタイ コハゼデ コハゼ。

それが 売っているのは 大体 ~~xxxxxxx~~ こはぜで、 こはぜ。

B コハゼデ。

こはぜで。

A デ ヒモタビナシ ナイモンテ アレモ (B ナイモンテ)
で 紐足袋なんか 無いものだから、 あれも (ないものだから)

ハズカシカッタ ケードナー (B ソーソー) ソノ ウチニ マー
恥ずかしかったけれどなあ (そうそう) その うちに まあ

オカーマワ⁽³³⁾ コドモト オモツタカ⁽³⁴⁾ コサエテ クレタモンダ⁽³⁵⁾テッチ
お母さんは 子供と 思ったか こしらえて くれたものだからと

ッテ オシマイニワ モー ホコリッテ ユーカネー⁽³⁵⁾ (B ユー
いて、 終わりにには もう 誇りと いうかねえ (B ユー 言う、

ソーダナン ハイ) カンシャッテ ユーカ ソンナ キモチダナ
そうですね はい) 感謝と いうか そんな 気持ちだな、

イマカラ カンカエテ ミルト。 (B ソーソー) ソーンナ キ
今から 考えて みると。 (B そうそう) そんな

モチデ ヤッ^{xxx} ヤットリマシタナー。 ワシャ イマ ミテモ コ
気持ちで やってましたなあ。 わしは 今 見ても

ーンナ ガラ イー ガラダト オモナー。 こんな 柄 良い 柄だと思ふなあ。

B アリマスニ イマモ。 コンヤ モッテ クリャ ヨカツタナー
ありますよ、今も。 今夜 持って くれれば よかったなあ、

アノ クラニ。
あの 蔵に(あるのを)。

A ソーカナ アリヤー……。
そうかな あれは ……。

B ネマキデモ コシラエテ センセー⁽³⁶⁾ンデモ キテ イタダキャ ヨ
寝巻でも こしらえて 先生にでも 着て いただければ よ

カッタト オモッテ。
かったと 思っ。

A ソーカナ。 コリャ ダイジニ シマツキナヨ。 コリャー ト
そうかな。 これは 大事に しまっておきなさいよ。これは
ートイ モンダニー。
尊い ものだよ。

B アノ シマノ ~~~~~
あの 縞の

A ドノ ウチニモ アルラカ コー ユー モナ
どの 家にも あるのだろうか; こう いう ものは。

B サー ミナミ⁽³⁷⁾ノ アタリニワ マダ アノ フトンヲナン (A フー
さあ、 南の あたりには まだ あの ふとんをねえ、
ンフン) ヤッパリ ジオリノ フトンヲ コシラエテ オイデマ
ふんふん) やっぱり 織りの ふとんを こしらえて いらっし
スニ。

やいますよ。

A ハー。 シマツノ イー ウチジャ
はあ。 始末の いい 家では.....

B ソー ソー。
そうそう。

A トットイタワナー。
取って置いたよなあ。

B ハイ。
はい。

A コリャー トー トイ モンター。
これは 尊い ものだ。

注

- (1) BはAの実兄の妻にあたるのでこう呼ぶ。オネーサマよりも少し敬意を低くし、親愛の気持ちとこめた呼び方はオネーマ。
- (2) 語源的には言うまでもなく「ご無心」。
- (3) シマチョーは「縞帳」で「縞手本」のこと。縞織物の切れ端を貼りつけた見本帳。
- (4) オールであられる敬語動詞の過去形。「4収録地点とその方言について」の「3.収録した方言の特色」の中の「③文法上の特色」を参照されたい。
- (5) [hãi]
- (6) [nãĩ]。「A. 4収録地点とその方言について」の「B表記について」の関係部分を参照。
- (7) もっとも年長の者ではデーテ [de:te] が聞かれる。いわゆるサ行イ音便はこの方言では以前はかなり行なわれていた。
- (8) 共通語の文末助詞「の」の用法に近く、断定表現に用いられ、語調をやわらげる。ただし、共通語とは異なり、男性も使い、-ノヨヤーノネとなることはない。
- (9) 同じようにソーシテ、ソレデなどもホーシテ、ホイデなどとなる。-カナは話し手の清水氏によれば目上、目下の区別なく使われるという。
- (10) ゴラン（ご覧）に対して、注（4）で述べたオールの敬語動詞の形式をあてはめたもの。ただし、オゴランテのみで、オゴランルやオゴランタなどの形はない。
- (11) 義姉であるBに対してAはかなり尊敬表現を使っているが、Bがこの部分に-ナンを使って敬意を示すのに対し、Aはほとんどの場合-ナーを使い、-ナンは1・2の例外を除き使っていない。これは、男性と女性との違いか。あるいはこの地方の中心都会飯田市を中心に新たに起こりつつある軽い敬意をあらわす-ナーをとり入れたものか。
- (12) 注(1)参照。「祖父」「祖母」「父」は、それぞれ、オジーマ、オバ

ーマ, オトーマ。

- (13) -ナは断定をあらわす助動詞の言い切り。 -ダも用いられるが, -ナの方が古いという。また, -ダに比べ断定をやわらげ, 詠嘆の気持ちを多少こめ, ていねいさを加えるという。 -ナは形容動詞の言い切りにも次のようにあらわれる。コノ ヘンワ ヨルワ シズカナ (この辺は夜は静かだ)。
- (14) [hə:ë]のように聞こえる。この種の音声もハイで表記した。
- (15) -ラは推量を表わす。この方言では推量を表わすものとして, -ズラも用いられる。 -ラと -ズラの相違は, -ラの方が確実性が高く, -ズラの方が低いという点にある。
- (16) [hũĩĩ]。応答のことばはこのほかにもかなりかな表記の具体音声と離れているものがある。
- (17) [kireo]。助詞の「を」はていねいに発音されるときは, どのような環境にあっても [wo]。しかし, 助詞「を」は清水, 片桐両氏とも会話ではない母音 [e], [a] の次では [o], [o] の次では [hako:] (箱を) の場合のように長母音, 狭い母音 [i], [u] の次では [wo] で現れることが多い。
- (18) 一番品質の悪い繭。
- (19) タマは玉繭。2匹の蚕がいっしょに作った繭。
- (20) -ノを男性が使っている例。注(8)参照。なお, ナイは在来の方言ではネーとなるのが普通。ナイに限らず, この方言では, 共通語の連母音の -アイ, -アエにあたるところには -エーがあらわれるのが一般的だったという。
- (21) もっと年長の者ではマウエーテ [mawe:te] となる。いわゆるサ行イ音便形は今回の録音ではあらわれなかった。注(7) 参照。なお, この点についての指摘は以下省略する。
- (22) 共通語の hi にこの方言の si の対応する例はこの方言では少ない。「人」のほか「一つ」「ひとり」などに認められるにとどまる。
- (23) -カラは共通語的。在来の方言では -デヤ -モンデを使う。会話の中に -カラのあらわれることが時どきある。この点についての指摘は

以下省略する。

- (24) -ゾッキは「ばかり」を意味する接尾語。オケーコゾッキは正絹の意。
- (25) 「ごつごつした」の意。
- (26) 前にはハズカシクテとあるが、ここはハツカシカッタ。清水氏(B)は録音のこの部分を聞いて、後者は使わない言い方だと内省している。
ハツカシカッタダは中川村在来の方言の言い方にはない。ハツカシカ
ッタンナあるいはハツカシカッタ^{ンダ}となるべきところである。
- (27) この文はここで中断され、意味的に次には続かない。
- (28) [kimotʃiã]。
- (29) オヤニの言い間違い。
- (30) 清水氏(B)が通学した旧制飯田中学校の自主祭。飯田市上飯田にあった。
- (31) 言いよどみがあり、このような発音となる。
- (32) 今のこはぜの代わりに紐で結んだ足袋。
- (33) [oka:ma~] あるいは [oka:mayã] のように聞こえるが、話し手の清水氏がオカマワだと聞き取られたため、本文ではそのように扱った。
- (34) よく聞きとれない。話し手である清水氏は本文のようではないかと言われる。
- (35) -ネーは共通語的。清水氏の発話には時折-ネーが混じる。ただし、この点についての指摘は以下では省略する。
- (36) 録音時に同席した馬瀬を指す。
- (37) 家号。「3.昔の嫁入り」の話し手小池氏の家の家号。

2 幼いころの遊び

話し手

(略号) (氏名) (性) (生年)

A 清水悟郎 男 明治37年生れ

B 片桐とし子 女 明治39年生れ

A アリヤ ムカシワ ドーダツツラナー。 アノー オトコノコト
 あれは 昔は どうだっただろうなあ。 あの 男の子と
 オンナノコト イッショニ⁽¹⁾ アソンダ コトモ アッタシ ベツベ
 女の子と 一緒に 遊んだ ことも あったし、 別々に
⁽²⁾ ツニ アソンダ コトモ アツカ ナカニ アノー オトコノコ
 遊んだ ことも あったが、 中に あの 男の子で
 デナー (B 笑 ハイ) ヨク オンナノコンナカエ ハイッテクト
 なあ、 (はい) 良く 女の子の中に はいって行くと
 オ ナンダッタヤー ナントカ イッチョンチョン イッチョンチョン
 何だったなあ、 何とか xxxxxxxx イッチョンチョン
 ントカ ナントカ イッテ フラッタジャンカ⁽³⁾ オトコノ ナカ
 とか 何とか 言って 笑ったではないか。 男の 中
 /.....。
 の.....。

B オートコノ ナーカニ マメイリヨ。⁽⁴⁾ (A イッチョン。 ウン。)
 男の 中に 豆入りよ。 (イッチョン。 うん)
 ナー「オートコノ ナーカノ マメイリ」。 ナントカ ユー。
 なあ「男の 中の 豆入り。」 何とか 言う。

A ナントクデ イッ チョ ン チョ ントカ (B 笑) イッテ カラカ
何とかで イッ チョ ン チョ ンとか 言って からか

ッ タナー。

ったなあ。

B ソーソー。

そうそう。

A ソーストー コンドワ オトコデ⁽¹⁾ オンナノ ナカエ ハイッタ ヤ
そうすると 今度は 男で 女の 中へ はいった や

ツカ⁽²⁾ ハズカシガッテ カエッテ キテ イッショニ ナッテ コ
つが 恥ずかしがって 帰って 来て、一緒に なって

ンドワ オトコワ タカシカ タカシッチュッタナー タケウマノ
今度は 男は タカシか、タカシといったなあ、 竹馬のこと

コト タカ タカシ。 (B タケウマノ コトオナン。 ハイ。)
と xxxx タカシ。 竹馬の ことをねえ。 はい。)

タカアシダナー アリヤー。 タカシニ ノッテー ソイカラ ア
タカアシ(高足)だなあ あれは。 タカシに 乗って それから

リヤ カタアシトビ⁽³⁾ アリヤ シンゴロツチュッタカナ オトコノ
あれは 片足跳び、 あれは シンゴロと言ったかな、 男の子は。

コワ。 シンゴロデ⁽⁴⁾ ドコマデ イケルカ シンゴロノ キョー ン
シンゴロで どこまで 行けるか シンゴロの 競争を

ニ (B ハイ) シルト⁽⁵⁾ カナー。 オンナノコワ ドンナ コト
はい) するとかなあ。 女の子は どんな ことを

シツラ。

したろう。

B オンナノコワナン エー オテダ⁽⁶⁾マトカ オハジキ⁽⁷⁾トカナン。 ヤ
女の子はねえ ええ お手玉とか おはじきとかねえ。

リマシタナ。

やりましたね。

A ウン オハジキ ヤッタナ。

うん、おはじき やったな。

B ソノ オハジキモ イマワ アノ イロイロ ウットリマスケドナ
その おはじきも 今は あの いろいろ 売っていますけれどね、

ン (Bウン) ムカシワ ナイデ ソノー サッキモ イッタヨ
(うん) 昔は、無いから、その さっきも 言った

ーニ コ コシヅノ カワ⁽⁸⁾ キレーナ イシカ アッテ アブラ
xx ように 小沢の 川に きれいな 石が あって、油石

⁽⁹⁾
イシツチューノ ヒロツテ キテ (Aアー ソーソー) アレテ
というのを 拾って 来て (ああ そうそう) あれで

オハジキ ヤリマシタンナ。 ソシテ アノー (A イシー ヒロツテ
おはじきを やりましたの。 そして あの 石を 拾って

キタナー) オマネキツ チュッテナン (Aウン) コノ テノヒラエ
来たなあ) オマネキと言ってねえ、 (うん) この ？のひらへ

ノセテ コー ヤッテ コー スルノー オマネキツチュイマシタ
束せて こう やって こう するのを オマネキ と言いましたよ。

ニ。

A ウー ウーン アッタ アッタ。 (B笑) アノー ソレワ オ
うう ううん、 あった あった。 () あの それは

⁽¹⁰⁾
ハジキデ オイテ タクサン ニギッテ (Bハイ) コヤッテ
おはじきを 置いて たくさん 握って (はい) こうやって

コー ヤルッテ (Bハイ) ソーソーソーソー。ミトツタ。
こう やると、 (はい) そうそう そうそう 見ていた

B オマネキツチュイマシタンナ アレナソ。 (A フンフン) タク
オマネキと言いましたんですよ、 あれね。 ふんふん

サン トッタ シトカ
たくん とった 人が。

A アレオ タクサン タクサン よっえ... (Bハイ) ソレカラ ナ
あれを xxxxxxxx たくん とった...、 はい) それから
ニカ コー ポロポロト コボシテ マタ ナニカ ヤラナンタ。
何か こう ぽろぽろと こぼして また 何か やらなかった。

B コボシテワ ドーダツタカ オボエトリマセンケドナン。
こぼしては どうだったか 覚えていませんけれどねえ。

A アリヤ コー ヤッテ コー ヤッテ, オレ オトコモ ヤッタ
あれは こう やって, こう やって, xxxx おれ, 男も やったな。
ナ。

B ウン。 ソレワ オハジキ。
それは おはじき

A オハジキデ ヤッテ イチバン サイゴワ ニカイ ヤラニヤ イ
おはじきで やって 一番 最後は ニ回 やらなくて
(11)
カナクテ。
いけなくて。

B ソノ アタッタノワ トッテ。
その あたったのは とって。

A ツギワ... (12) . トッテ。 イチバン サイゴ ミンナ ヤル
とって。 一番 最後に みんながやる

トキニワ サイゴワ コー ニカイ コ ヤッテ (Bハイ)
時には, 最後は こう ニ回 こう やって はい)

ニカイ セーコー スレバ トッテー (B トッテ) アレワ オ
ニ回 成功 すれば とって (とって) あれば

トコノコモ ヤッタナ。

男の子も やったな。

B オトコノコモ ヤリマシタ カシラナン ハイ。

男の子も やりましたかしらねえ、(はい)。

A ヤッタンナ。 イッションナッテ。 ソレカラ アノー トキドキ
やったんだ。 一緒になって。 それから あの 時々、

一 キット トーキョーノ キンジョエ イッタ シトカ モッ
きつと 東京の 近所へ 行った 人が 持ッテ

テ キタンダカ アルイワ オイセサマエ イッテ カエリ⁽¹³⁾ニ カ
来たのか、 あるいは お伊勢さまへ 行って 帰りに

ッテ キタンダカ (B ハイ) カイガラデ オハジキ ヤッツラ。
買って 来たのか、 (はい) 貝がらで おはじきを やっただろう。

B アー カイヲナ。 アノ ナンチュイマシタッタ。 キシャゴ^o シ
ああ 貝をね。 あの なんて言いましたか。 キシャゴ 知

ッテ オイデマスカナ。 (A ウン シットル アノ) コー コノ
って いらっしゃるかな。 (うん、知っている。あの) こう この

クライ チーサクテ (A ウン チーサクッテ) コー キリキリ
くらい 小さくて (うん 小さくて) こう キリキリ

キリット (A ウン) アノ (A アレデ) キシャ ゴツチュイ
キリッと, (うん) あの (あれで) キシャゴって 言い

マシタナ。 (A アレデ ヤリマシタナ。) アレヲ ヤリマシタ
ましたね。 (あれで やりましたな。) あれを やりました

ナ。 アレワ チーサクッテ タクサン コー ノサッテナン。

ね。 あれば 小さくて たくさん こう(てのひらに) のってねえ。

A ソーソー。アレヲ ^{xxxx} フッ オミヤゲニ カッテ キタンダナー
そうそう。あれを お土産に 買って 来たんだなあ、
キット コドモノ。
きっと 子供の。

B フクロイ ハイッテナン。
袋へ 入ってねえ。

A ウン。フクロイ ハイッテ オリマシタナー。
うん 袋へ 入って いましたなあ。

B ハイ。イマノヨーニ キレーナ ホカノ オモチャー ナイデ アー ユ
はい。今のように きれいな ほかの おもちゃが" ないから、ああ い
ー モノが オモチャデ オミヤゲダッタナン。
ものが おもちゃで おみやげ"でしたねえ。

A ソーソー。ソーダナ。アリマセンデシタナ。 (Bハイ) ジブ
そうそう そうだな。 ありませんでしたな。 (はい) 自分
ンデ マー クフー シテ ヤッタンダナー。
で まあ エ夫 して やったんだなあ。

B ソーソー。
そうそう。

A ソレカラ オトコノコワ ソレ ケン⁽¹⁴⁾ ケンチュッタケドナ。
それから 男の子は、 それ、 ケン、 ケンと言ったけれど"な。

B アー ソーソー。アレ ナンチュイマシタッタネ。⁽¹⁵⁾ イマノ シ
ああ そうそう。あれを 何と言いましたっけね。 今の
ユーニ イワセルト。
人達に 言わせると。

A イマノ シューワネ ナントカ ユーンダワ。アレオ ヤッチャ
今の 人達はね、 何とか 言うんだわ。 あれを やっては

イカンチュッテ (Bハイ) ソレカラ モー シトツ オトコ
いけないと言って、 (はい) それから もう 一つ 男の子
ノコガナー クキノ ナカイ クキノ ゴスンクキノナンカラナー (

Bハイ) ジエ コー ウチコンデー。
(はい) 地へ こう 打ち込んで。

B アリヤ ナンテユイマシタッタナン。⁽¹⁶⁾
あれは 何と言いましたかねえ。

A アリヤ ナンチューチッタッタカナー。⁽¹⁷⁾
あれは 何と言ったかなあ。

B コドモア ヨク ヤリマシタニ。
子供は よく やりましたよ。

A ソーシテ ソレヲ ジブンデ ウチコンデ アイテノー タオス
そうして それを 自分で 打ち込んで、相手のものを 倒す
ヤツ ヤッテ。 (Bハイ) ソレガ ジブンノ アシー ササ
やつを やって。 (はい) それが 自分の 足に 刺さ
ッタリ スルモンダカラ アブナイカラ (Bハイ) ヨセヨナン
ったり するものだから 「あふないから (はい) よせよ」など
チュッテ⁽¹⁸⁾ センセーニ イワレタノーオー⁽¹⁹⁾ オモイダシマスナー。
と言って 先生に 言われたのを 思い出しますなあ。

(Bハイ) アレワ ナンチュー アソビダッタナー。
(はい) あれは 何という 遊びだったかなあ。

B ナントカ ユッタナン。 ソレカラ アノ ボーカクシトカ ユッ
何とか 言いましたねえ。 それから あの 棒隠しとか 言ッ
テナン (Aソー) アノ イシ ツチベタエ コー ボーデ (

ねえ (そう) あの 地面へ、 こう 棒で (

A カクンズラ) アナオ コシラエテ ソンナカエ ボーオ コ_{xx}
書くんだろう 穴を 作って その中へ 棒を

イレテ (A ウン カクシテ オイテ) ソシテ チョット コー
入れて (うん 隠して おいて) そして ちょっと こう

ナゼテ カクシテ (A ウン) ボーカクシツチューノオ ヤリマシ
なぜで 隠して (うん) 棒隠しというのを やりまし

タンナ。 (A ウン) ドコニ カクレトルカナンテ。
たのよ。 (うん) 「どこに 隠れているかな」など

A ソー。 ソレカラナー ボーカクシニ ニタノデナー アノー ジ_{xx}
そう。 それからなあ 棒隠しに 似たのでねえ あの

ベン ジベ ジベタオ フカーフ ホッテ コンナ (B ハイ)
_{xxxx} _{xxx} 地面を 深く 掘って、 こんな (はい)

マル カイタリ シカク カイタリ シテ (B ハイ) ホーシテ
まるを 書いたり 四角を 書いたり して、 (はい) そして

コー カクシトイテ (B ハイ) ソーシテ ドコニ ナニカ
こう 隠しておいて (はい) そうして どこに 何か

カITE アルカッテ ユーノーネー アテッコー シテー (B
書いて あるかと いうのをねえ、 当てっこを して、

ハイ) ソノ トーリ コー イイクカ ドーカ ソレモ
はい (その 通り こう _{xx} 行くか どうか、 それも

マタ⁽²⁰⁾ アレオ オトコノコワ ヤッタナー。 ソレ……
また あれを 男の子は やったなあ。 それ……

B オンナノコワ ヤラナンダ⁽²¹⁾ナン ソレワ。 ハイ。

女の子は やらなかったね、 それは。 はい。

A エー オトコ ソー オンナノコワ ヤラナ_{xxxx}カ_{xxx} ⁽²¹⁾ナンダ。 ア ソ
ええ そう、 女の子は やら なかった。 あ

レカラ アレワ ナンナ ゴーリヲ (B ウーン) ケ アノ ケ
それから あれは 何だ, そーりを, うん) あの 跡

アゲテ。

上げて。

B ゲータ ゲタ コンボトカ イーマシタワネ。

「けた けた コンボ」とか 言いましたわね。

A アーソーカ。アレワ ナニカナ。ウラカ デルカ オモテカ
ああ そうか。あれは、何かな。裏が 出るか 表が

デルカツチュ アテッコ シタノカナ アリヤー。(B ソーソー)
出るかという 当て合いを (したのかな, あれは。 そうそう)

アレ ヤッタナー。

あれを やったなあ。

B アノー アレ オシ_{x x x} アシタ オテンキニ ナレトカ イッテ。

あの, あれ, あした お天気に なれとか 言って。

A ウーン ソーソー。

うん そうそう。

B オ_{xx} オモテガ デトラ オテンキデ (A ウン) ウラガ デトラ
表が 出たら お天気で, うん) 裏が 出たら

アメフリダヨッテ ソーユー コトモ ヤリマシタんだニ。

雨降りだよって そういう ことも やりましたんですよ。

A ウーン ソーダ ソーダ。(B ハイ) アレ ゴーリバキデ ソー
うん, そうだ, そうだ。(はい) あれは そーりばきで, そーり

リッチャー ミンナ ソレ ムカシア ミンナ コドモ ミンナ
といえは みんな, それ 昔は みんな, 子供は みんな

ゴーリダッタンデナ。(B ハイ) ゴーリバキデ ヤッテ ソレ
そーりだったからな。(はい) そーりばきで やって, それを

ヤリマシタナー。アレ オトコノコモ オンナノコモ ヤリマシタ。
やりましたなあ。あれを 男の子も 女の子も やりました。

B オンナノコモ ヤリマシタ。
女の子も やりました。

A ヤリマシタナー。
やりましたなあ。

B ハイ。ソレデ ソノ オンナノコワ オテダマ (Aウン) オトコノ
はい。それで その 女の子は お手玉, (うん) 男の
シューワ ケ ケンノ コト ナンテ ユッタッタカナ。イマノ
衆は ^{xx} ケンの 事を 何で 言ったっけかなあ。今の
コトバデ ユート アレワ (A エー アレワネー) ナントカ ユッタナー。
言葉で 言うと あれは (ええ, あれはねえ) 何とか 言ったなあ。

A ココラジャ ケンテ ユーケドネー イータノ マワリデワネー
こくらへんでは ケンと 言うけれどねえ, 飯田の 回りではねえ
(B ハイ) ナントカ イッタナー。イマ コドモ ベチャッ
はい) 何とか 言ったなあ。今 子供は ベチャと
チュー トコモ アルナー (B笑) ペチャット コー ウツカラ ペ
言う所も あるなあ) ペチャッと こう 打っから
チャッチュー コドモが アルケードモ。
ペチャッという 子供が いるけれども。

B アレー マタ ハヤッテ オリマシタニ コノゴロ。
あれが また 流行って おりましたよ, この頃。

A ソーカナ。
そうかな

B フユンナルト。
冬になると。

A アレワネー ガッコーデワ シトコロ シテ イケ…ネーナンテ⁽²²⁾
 あれはねえ、学校では ある一時期 しては いけ ないなどと
 センセーカ ユツター。
 先生が 言って。

B アレ カケトイテ トリマステナン。
 あれは、賭けておいてから とりますからねえ。

A ソーソーソーソー。アー トルモンデ トツタリ (B ハイ)
 そうそう そうそう。 あのように とるので、 とったり、 (はい)
 マケタリ カッタリ (B ソーソー ハイ) スルモンデ ウン。
 負けたリ 勝ったリ (そうそう はい) するものだから、うん。

B カケゴトノヨーナ。
 賭けごとのような。

A ソー ソレデ⁽²³⁾ イカンッ チュツタンダナー (B ハイ) ソンナ
 そう それで いけないと言ったんだなあ (はい) そんな
 コト アリマシタナー。
 ことが ありましたなあ。

B ソレデ ソノ オタマノ ウタオナ (A ウン) アノー……
 それで その お手玉の 歌をな、 (うん) あのう……。

A オボエテ オイデル。
 覚えて いらっしゃる。

B シットリマスニ。 ヤッテ ミマスカ。
 知っていますよ。 やって みますか。

A ヤッテ ミナ チョット。
 やって みな、ちょっと。

B アノー コー タクサン ヤッテ カッ カッタ シトカナン (A
 あのう、 こう、 たくさん やって 勝った 人がねえ)

ウン) アレ ヤリマスワケダ。(Aウン) ソレデ 「オシト
うん) あれと やりますわけです。(うん) それで 「オシトツ(あーつ)

ツ オロシテ オロシテ オサライ」 ッテナ (Aウン) ソレカ
オロシテ オロシテ オサライ」 とね, (うん) それから

ラ 「オミーンナ オサライ」 ソレカラ 「オーテバサミ オー
「オミンナ オサライ」 それから 「オテバサミ(お手挟み)

ーテバサミ オーテバサミ オロシテ オッサライ」 デ コンタ
オテバサミ オテバサミ オロシテ オサライ」 それで、今度は

コユビデ コー ハサムノワ オツリンコツチュイマスンナ。(A
小指で こう 挟むのは オツリンコと言うんです。(

フン フーン) 「オツリンコ オツリンコ オツリンコ オロシ
ふん ふうん) 「オツリンコ オツリンコ オツリンコ オロシ

テ オサラ……」 ソレオ ズート ヤッテナン (Aウン) マ
テ オサラ……」 それを ずっと やってねえ (うん) まだ

ダ アノー (Aツズ……) 「オーキナ ハーショ コブレ」
あのう (続……) 「オオキナ(大きな)ハショ(橋を) コブレ(くぐれ)」

トカナン (Aフンフン) ヤリマシテ。
とかねえ (ふんふん) やりました。

A ツズケルダケ ツズケルノ カナー。
続けられるだけ 続けるのかなあ。

B ハイ。 ズーット ツズケテナン (Aフーン) ドコマデ イッ
はい ずっと 続けてねえ, (ふうん) どこまで いっ

タカワ アマリ オボエトリマセンケドナン (Aフン) 「チー
たかは あまり 覚えておりませんけれどねえ, (ふん) 「チイサナ

サナ ハーショ コブレ」 トカ コー ヤットイテ (Aフン)
(小さな) ハショ コブレ」とか, こう やっておいで (ふん)

アタマ アゲテ オテダマ ムコーエ オクットイテ チャット
頭を あげて お手玉を 向こうへ 送っておいで、 すばやく

ウケマスナ コー ヤッテ。 (A フンフンフン) 「オーキナ
受けますのです こう やって。 ふんふんふん」 「オオキナ

ハーショ コク^レ チーサナ ハーショ コク^レ トカ ユッテ
ハショ コク^レ, チイサナ ハショ コク^レ とか 言ッテ

(A フンフン) ソー ユノー ズット ヤリマシタニ。 ハイ。
(ふんふん) そう けうのを ずっと やりましたよ。 はい。

A ハー オトコノコダカラ オボエトラナカッタカ^{xx} ソー キー
はあ、男の子だから 覚えていなかったが そう 聞いた
タヨーナ キカ スルナ。
ような 気が するな。

B コー ミンナ ヨッテ キテ イ^{xx} エンガワナンカデ^ナナン ヤリマスノ。
こう、みんな 寄って 来て、縁側などでねえ、 やりますの。

A フンフン ウーン ウン ハー エンガワノ ヒナタボッコ (B ハ
ふんふん ううん うん、はあ、 縁側の 日向ぼっこを は
イ) ⁽²⁴⁾
い) シナカラ
しなから。

B ソーソー。(A フンフン) ホテ^{xx} フノ キョクトリツチューノモ ヤリ
そうそう。 ふんふん) それで あの キョクトリというのよ

マシタンナ。(A ホーホー) ミッツデ ヤッタリ ヨッツデ^{xx}
やりましたのです。 (ほうほう) 三つで やったり 四つで

ヤッタリ (A フーン) デキン シトワ フターツデ コー ヒ
やったり (ふうん) できない 人は 二つで こう

ヨイヒョイト (A フンフンフン) ヤリマシタケドナン。
ヒョイヒョイト (ふんふんふん) やりましたけれどねえ。

A イマノ ソノー ウタオネー アノー キートツテ ワシナー オ
 今の その 歌をねえ、 あのう 聞いていて わしなあ
 モイダシタノワ アノー コー ユー ウタ オボエテ オル オ
 思い出したのは、 あのう こう いう 歌を 覚えて いる、
 イデルカナ。
 いらっしゃるかな。

B ハイ。
 はい。

A 「ヤマ コシテ カワ コシテ コーヤノ オコンサ ホイ」
 「ヤマ(山)コシテ カワ(川)コシテ コウヤ(紺屋) オコンサ ホイ」

B アーリマス アリマス。(25) ハイ。
 あります、 あります。 はい。

A アレワナー アレワ ナニウタツチューカ シランケド コドモノ
 あれはねえ、 あれは 何歌というか(どうか) 知らないけれど 子供の
 ウタッタ フラベウタダケドナー。(Bエー) アレナー カシ
 歌った 童歌だけれどなあ。(ええ) あれなあ 柏
 ワバラ⁽²⁶⁾ コーヤカ アツツラ。
 原に 紺屋が あったろう。

B ア ハーハーハー。 オコンサンチュー シト アリマシタノ。
 あ、 はあはあはあ おこんさんという 人が いましたの。

A ウン アツタンナ。 コーヤカ アツタン。
 うん、 あったんだ。 紺屋 が あったんだ。

B フーン フン。⁽²⁷⁾ デ アリマシタナン。
 ふうん ふん。

A ソコデナー。
 そ でなあ。

B アレナー 「ヤーマ コシテ カワ コシテ カワラノ オコンサ
あれなあ , 「ヤマ コシテ カワ コシテ カワラ(川原)ノ オコンサ

ホイ アンベ イカーンカナ」ッテ コー イッタナダナ。

ホイ アンベ(遊び)イカンカナ(行かないかね)と こう 言ったんだな。

A フーン。

ふうん。

B アーソビニ イキマショッチュ コトナンダナ アンベ イカーン
遊びに 行きましようという ことなんだね, 「アンベ イカンカナ」

カナッテ (A アンベ フン) ソレカラ ツレテクノ。
と呼んで (アンベ ふん) それから 連れていくの。

A ワシノワナ オモシロイニ。

わ(のは)な おもしろいよ。

B ハイ。

はい。

A 「ヤーマ コシテ カーワ コシテ コーヤノ オコンサ ホイ」
「ヤマ コシテ カワ コシテ ユウヤノ オコンサ ホイ」

ッテエートナー。

というとなあ。

B ハイ。

はい。

A 「マダ」ネテ オルニ」ッチュッテ 「ネボーダナム」ッチュッテ。
「マダ」ネ(寝)て オル(いお)と いって 「ネボウダナム(寝坊だね)」とって。

B アッ ソーソー。

あっ そうそう。

A ソレカラ ソノ ツキ マタ 「ヤマ コシテ カワ コシテ コ
それから その 次は, また 「ヤマ コシテ カワ コシテ

ーヤノ オコンサ ホイ ャ ャ ャ ャ ャ 「イーマ カオ アラット
 コウヤノ オコンサ ホイ」っていうと、「イマ カオ(顔) アラット
 ルニ ャ ャ ャ ャ ャ 「オネボ-ダナム」 ャ ャ ャ ャ ャ 「ヤマ コシ
 ルニ(洗っているよ)」って「オネボウダナム」といって、「ヤマ コシテ
 テ カワ コシテ コーヤノ オコンサ ホイ ャ ャ ャ ャ ャ 「イ
 カワ コシテ コウヤノ オコンサ ホイ」というと「イマ
 マ オマンマ シ ヴトルニ ャ ャ ャ ャ ャ 「オネボ-ダナム」 ャ ャ ャ ャ
 オマンマ(ご飯) ヴトルニ(食べているよ)」って「オネボ-ダナム」といって
 チャッナエ。⁽²⁸⁾ ソーシテ オトノノデモネー (ハイ) アノー
 はねえ。 (うー) 男の子どもねえ、 (はい) あう
 ガッコ イキカケニ ソーシテ ヨンデ アルイタノ。
 学校へ 行きがけに (うー) 呼んじ 歩いたの。

B ハハハ。 アノー ムカシ アソビー テオ ツナイデ イ
 は、は、はあ。 あう 昔は、遊びに 手を つないで
 ャ ャ ャ ナン ヨー オーゼデ 「ヤマ コシテ カワ コシテ カ
 行ってはねえ (うー) 大勢で 「ヤマ コシテ カワ コシテ
 ワラノ オコンサ ホイ。 アンマ イカンナ ャ ャ ャ ャ ャ ドツオ
 カワラノ オコンサ ホイ。 アンマ イカンナ ャ ャ ャ ャ ャ ヤツを
 ヤリマシタンナ ハイ。
 やりましたの、はい。

A アーアー ソッカラ キタンダナー。

ああ、ああ、そこから きたんだなあ。

B ソレデ カワラノ オコンサ ャ ャ ャ ャ ャ ケード コーヤノ オコンサ ャ ャ
 それで 「カワラノ オコンサ」といったけれど 「コーヤノ オコンサ」だった
 タカモ シレマセン。
 かも しれません。

A ソレデ エッ チョード イー コトニネー (B エッ) カシワバラニ
それで xxxx ちょうど 良い ことにねえ, (ええ) 柏原に

コーヤが アッタ ワケ。(B 笑) コンヤ コンヤッチュー ヤツ コ
紺屋が あった わけ。 (コンヤ, コンヤという やつを
ユーヤッチューッタナー。
コーヤと言ったなあ。

B エー コーヤッチューノ アリマシタ。 キッツァッチュー オジ
ええ, ユーヤというの , ありました。 「ぎつつあ」という おじさま
サマデナシ。
い ねえ。

A ソー。 アノー ハイオバサマノ ⁽²⁹⁾ ムコーノ ミチシタノ ウチカ
そう。 あつう はまおばさまの 向こうの 道り下の 家が

コーヤデナー (B エー マエデ ソーソーソーソー ハイ) ソ
紺屋 でなあ (ええ, 前で, そうそう そうそう はい)

エダモンダカラ ソレ オボエテカラナー ソコエ (B ハイ)
それだものだから, それを 知ってからなあ, そこへ (はい)

イッテ オーキナ コエデ⁽³⁰⁾ ユートナー オバーサンニ オコラレ
行って 大きな 声で 言うとなあ おばあさんに 叱られて,

テ (B 笑 オコラレ……) ソンナ コト オモイダス ウン。
叱られ……) そんな ことを 思い出す, うん。

B ヘエー。 ムカシワ ソンナヨーナ アノー ウタオ ウタッテナ
へええ。 昔は そんなような , あつう, 歌を 歌ってねえ。
ン。

A ソー ホシットーノ フラベウタデナー。
そう, 本当の 童歌でなあ。

B ソーダ"ナン。
そうですね。

A エ。 ミンヨート シテノ ワラベウタツチューノカ⁽³²⁾ (B ハイ)
ええ。 民謡としての 童歌というのが (はい)
アッタトモナー。
あつにと思うなあ。

B ソーソー。 ナンカ ナニカ アッタ ヨーナ キカ。 スルケド。
そうそう。 何か, 何か あつにような 気が するけれど。
ナニカ コメノ インマニ トート ソエテ トカ ユーノカ。 プリ
何か 「コメ(米)ノ マンマニ トト(魚) ソエテ」 とかいうのが あり
マシツラ。
よ(に)び(は)。

A ユー ソー ユー モナ ノッタ ウン。
ええ そう いう ものが あつた, うん。

B アッタ。
あつに。

A トト ソエテッテ シロイ マンマニ トト ソエテッテ シロ
「トト ソエテ」って, 「シロイ マンマニ トト ソエテ」って, 白い
イ マンマニ カ ムカシア タベレナカッタ モンデ。
ご飯なんか 昔は 食べられなかったものだから。

B ソエデ ダイジニ シテ クレタツチュ 「トダ"ンダ"ナー ウン。
それで 大層に (て) それに(という) ことなんだなあ, うん。

A ソー ユー コト ソー ユー コト。 トト ソエテ ナンテ
そう いう こと, そう いう こと。「トト ソエテ」なんて
(B エー) トト ナンカ オショーカーツ シカ ツガンジャ ネー
(ええ) お魚, なんか お正月(か) 付かないじゃ ない

カナー。

かなあ。

B ソーダナン。

そうですね。

A ウン。

うん。

B ムカシワ ホント アノー オコメノ ゴハンナンカ タベルッテ
昔は ほんとに あつ、 お米の ご飯なんか 食べるという

エ コト アリマエナンダテ A ソーソ エー ムギメシダト
ことは ありませんで(たから、い、どうぞ) えーノ 麦飯だとか

カ ヒエメシダトカ。

ひえ(稗)飯だとか。

A エー ソーデスネ。 アノ シロイ ゴハン タベタノワ……。

ええ、 そうですね。 あつ 白い ご飯を 食べたのは……。

B オショーガツツ……

お正月と……

A オショーガツツ……。 カゾエル ホドシカ ナカッタナ。

お正月……。 数える ほどしか なかったな。

B エー。

ええ。

A ⁽³³⁾
ダカラ シロイ マンマニ トト ソエテ ナンテ エーバ オー
だから、 白い ご飯に お魚を 添えて なんて 言えば、 大

ゴチソーデ……。 ⁽³⁴⁾
ウスヒキノ バンニ シンマイヲ ハクマイデ
ご馳走で……。 白ひきの 晩に 新米と 白米で

タベタナ。

食べたな。

B ハイ。

はい。

A ソレカラ アト オショーカッ サンカゲツ⁽³⁵⁾ライト アトワ ゼ"
それから あと お正月 3ヶ月ぐらいと、 あとは
ンブ ムキメシダナ。
全部 麦飯だな。

B ソーソー。

そうそう。

A エッ。 アノ ハノマイ ノビマセン。(Bエー) エッ デ" ミンナ
ええ。 ああ は米 食べません。(ええ) ええ。 じ、 みんな
ムキオ ツクッテ オリマシタデ" (Bソー) エッ ムキメシオ
麦を 1作(1) 作り出したのじ、 (そう) ええ、 麦飯を
タビテ プリマシメ。⁽³⁶⁾
食べた やりよした。

B ムキヲ ツクッテ アウヲ ツクッテナン。 エー。
麦を 1作(1) 粟を 作ってねえ、 ええ。

A アウモ タビタシ ノシモチナンテ 「サエテナー。
粟も 食べたし、 粟食料なん(こ) こ(う) ことな(あ)。

B コノコー ホシヤ (Aエー) ナントカ ユーノカ アッタジャ
「コノユ(この子と)ホシヤ(欲しいな)ええ) なんとか 言うのが あったじゃ
ナイカナン。
ないですかね。

A ウン ソレモ アル。 ウーン アノコー ホシヤ コノコー ホ
うん、 それも ある。 ううん、 「アノコヲ ホシヤ コノコヲ ホ
シヤトカ。 ミンナ ウタッタ^ンダナー。
シヤ」とか。 みんな 歌ったんだなあ。

B コレモ アノ ヨク カンガエテ オリヤー オモイダシマスケー
これも あの よく 考えて いれば 思い出しますけれ

ドナン。 (Aソーソー) チョット ニワカニワ (Aソー)
だねえ。 (そうそう) ちょっと 急には (そう)

オモイダセマセンケド ナカナカ ムカシワ イロイロ アリマシ
思い出せませんが、 なかなか 昔は いろいろ ありまし

タニ ソンナヨーナ ウタカ。

たよ、そんなような 歌が。

A アーリマシタ アリマシター。 (Bエー) ソンナ ジブンノ
ありました、 ありました。 (ええ) そんな 時分の

イッショニ アソシタ シトカ ゴロクニン アツマッテ ミン
一緒に 遊んだ 人が 5, 6人 集まって み

ナデ イッショニ⁽³⁷⁾ ウダットル ウチニ ダレカ スューシズツ
んなで 一緒に 遊んでいる うちに 誰かが 少いすっ

オモイダシテ フルツチュ コトカ アバナー。 ウン。

思い出して くるという ことが あればなあ。 うん。

E ソー スルト オモイダシマスガナン。 ウン。

そう すると 思い出しますがね。 うん。

注

- (1) [iʃʃoĩ] .
- (2) [betsubetsuĩ] .
- (3) 話し手の清水氏は [warattazane:ka] と言ったつもりだと言われる。
-ジャンカは若い人たちの間で使われる。
- (4) 話し手はこの辺をなかば歌っている。
- (5) 在来の方言ならばセル。
- (6) 在来の方言はオタマ。
- (7) 在来の方言はオハンジキ。
- (8) 小波川。上伊那郡と下伊那郡との境界を流れる川。録音した集落葛島の南縁を流れる。
- (9) 話し手の清水氏によれば、青黒いつるつる滑る感じのする石だという。
- (10) オハジキヲと言うべきところであろう。
- (11) 在来の方言ならばイカナンド。
- (12) よく聞き取れない。この部分は清水氏の認定に従った。
- (13) [kaeriĩ]
- (14) めんこの方言。
- (15) -タッタは過去の回想をあらわす。-ネは共通語的な言い方。
- (16) いわゆるネッキ（根木）の遊びである。
- (17) ナンチュッタッタカナーとあるべきところであろう。
- (18) -ヨセヨナンテあるいはそれと類似の表現でないと、ヨセヨナンチュッテでは正確には文意が続かない。
- (19) 言いよどみがあってこうなる。
- (20) [mat] と聞こえる。
- (21) ヤラナカタと言いかけて、在来の方言の言い方のヤラナンダに言い変えたもの。
- (22) [ike ne:] と中にポーズを置いて発音している。なお、在来の方言ならばイカン、またはイケン。

- (23) 次のBの発話と重なり聞き取り不能。
- (24) -ナガラは共通語的。在来の方言ならばシシナのように-シナをとる。
- (25) コンテキストからいうと、〈オリマス オリマス〉とあるべきところ。
- (26) 中川村大字葛島の中の集落名。
- (27) Aの発話と重なり文字化不能。
- (28) -ナエはこの地方在来の方言ではない。-ナエは上伊那郡中部以北で行なわれる。
- (29) ハマオバサマのマの子音は^h口を不完全に閉じた鼻音に聞こえる。
- (30) 在来の方言はオーバーサマ。
- (31) [hontto: no]。
- (32) [warabewtattʃu: noã]。
- (33) 共通語的な言い方。在来の方言ならばダモンデとかダデ。
- (34) 臼をいいてもみを落とす作業。せいぜい20俵か30俵程度の量で、5, 6軒のユイでやり、ほとんど1日で終わったという。
- (35) サンガニチ(3ヶ日)の言いそこない。
- (36) 〈ムギメシオ タベテ シゴトオ ヤリマシタ〉ということか、それとも〈ムギメシオ タベテ オリマシタ〉とあるべきところを、こう言い違えたものか。
- (37) [iʃʃoĩ]。

3 昔の嫁入り

話(手)

(略号) (氏名) (性) (生年)

A 小池千勢 女 明治32年生れ

B 清水悟郎 男 明治37年生れ

B ソレデモ ドーダナ チセマ。(1) ムカシト イッコー カワランチ
 それでも どうだな、千勢さん。 昔と いっこうに 変わらな
 ャーヨーナ タトエバ マー コトバノ モンダイデモ ニンジョ
 いうような、 たとえば まあ 言葉の 問題でも 人情の
 ーノ モンダイデモ カンコンソーサイノ モンダイデモ ナニカ
 問題でも 冠婚葬祭の 問題でも 何かは
 ワ ヤッパシ ナニカ ノコットルワ ノコットルナー。
 やっぱり 何か 残っていることは 残っているな。

A ノコットリイヘフカ。
 残っているにすぎないな。

B ダンダン ナフナッチャー イクガナー。
 だんだん なくなっは いくがなあ。

A オソーシキノ ケーシキ^{xxxxxx} ケーシキ^{xxxxxx}ジャナイ ヤリカタ ナンカモ
 お葬式の 形式、 形式じゃない、 やり方 なんかも
 (B ソーソーソーソー) ズイブン チガッテ キマシタシナーン。
 (そう、そう、そう、そう) 随分 違って 来ましたしね。

B エーエー。 ウン。
 ええ、ええ。 うん。

A ソレニ ダイイチ ソ コンレーノ ヤリカタワ モー ゼンゼン チ
それに 第一 その 婚礼の やり方は もう 全然

ガッテ シマイマシタシナン。

違って しまいましたしね。

B フンフン。 フンフン。

ふん、ふん。 ふんふん。

A イマ モー リョーホーデ^① リョーリヤミタイナ トコエ イッテ
今 もう 両方で , 料理屋みたいな ところへ 行って

ヤルツチューノニナン。 (B エー サヨー サヨー サヨー)
やうというのにね。 (ええ, 左様, 左様, 左様)

ムカシワ ソノ ムコイリダ⁽²⁾トカ (B エッ エー サヨー エッ) ナ
昔は その 婿入りだとか (ええ, ええ 左様, ええ) な

ンダ⁽³⁾ ロードーダトカ (B エッ) ソー ユー コトワ モー
んだ 郎党だとか , (ええ) そう いう ことは もう

(B エッ) ゼンッゼン⁽⁴⁾ ヤリマセンシナーン。 (B エッ) ナ
(ええ) 全然 やりませんしね。 (ええ)

ーニカ ノコットル コトガ アルカナ⁽⁵⁾ン。 (笑)
何か 残っている ことが ありますかね。

B ソーデスネー。 アノー ミンナ ウチノ ザシキデ^① ミンナ ヤ
そうですねえ。 ああ、 みんな 家の 座敷で みんな

ツタ ワケゾ。 (B ハイ) ムカシ。
やった わけだ。 (はい) 昔。

A ソーデ アリマスニ。
そうで ありますよ。

B ダレモ ドッカノ リョーリヤエ モチダシテ アルナンテ ドッ
誰も どこかの 料理屋へ 持ち出して やるなんて

カ シンゼンケッコンナンカワ イーケードモ リョーリヤデモ
どこか 神前結婚なんかは いいけれども 料理屋でも

シンゼンケッコンナ⁽⁶⁾ンテ ユー⁽⁶⁾ンダケレドモ (B エー) ドーモ ア
神前結婚なんて 言ったけれども (ええ) どうも あ

レワ キニ イランナ (笑)
れは 気に 入らないな。

A マー ドックニナー チョット マツッテ アルカ ナンダカ シリマセンケドナン
まあ、どこかにな、ちょっと 祀って あるか なんだか 知りませんけどね、

(笑) (B キニ イランナー アレワ) シキノ ホーフ モー (笑) (B サ
気に 入らないなあ、あれば) 式の 方は もう (左

ヨー サヨー カンタンデ。 ムカシトワ ホント⁽⁷⁾ オコンレー
様、左様、簡単で。 昔とは 本当、 お女婚礼

ダケワ ホント⁽⁸⁾ーニ チガッテ シマイマシタナー アー。
だけは 本当に 違って (まいりましたな、 ああ。

B チガイマシタナー。 ソレデモ コチヲワ マー オウチモ フル
違いましたなあ。 それども こちらは まあ おうちも 古い

イシ ナンデ ホーバーノ オギリカ タイヘンデ (A ハイ)
し、それで 方々の お義理が 大変で (はい)

オアリルラ。

ございましょう。

A イヤ アノ ダンダン スクナク ナッテ キマシタシナン。 ソ
いや、あの だんだん 少なく なって 来ましたしね。 そ

レカラ (B エー エー エー) ウチワ ヤッパリ ソー イフ
れから (ええ、 ええ、 ええ) うち は やっぱり そう いう

ーニ フコーナ コトガ アリマシタデ ナンテ イーマスカ ソ
ふうに 不幸な ことが ありましたので、 何と 言いますか、 そ

ノー オチューニンチュー コトー シテ オリマセンノ ワリア
のう お仲間という ことを して ありませんの、 割合

イニ。

に。

B ハー ハイ ハイ ウン。

はあ、 はい、 はい、 うん。

A ⁽⁹⁾
ソレデ アノー オチューニンコッテユー モノカ ナイモンデ"
それで あのう オチュウニンコという ものが ないものだから、

(ハイ ハイ アノ ズット オギリモ スクナフ アリマス。
はい、 はい) あの ズっと お義理も すくのう ございます。

(Bウンウンウン) チチノ ダイモ シトリマセンシナン。(Bウ
うん、うんうん) 父の 代も しておりませんしね。(う

ンウン) ⁽¹⁰⁾
アタシノ トキモ ヤッパリ ワリアイ ハヤフ シュ
んうん) 私の 時も やっぱり 割合 早く 主

ジンカ ナクナリマシタデ ⁽¹¹⁾ (Bエーエー) マツモトニ ⁽¹²⁾ オリマ
人が なくなりましたので (ええ、ええ) 松本に ありま

ス トキ マー ミクミバカ アリマシタケド ソレワ マタ チ
す 時、 まあ 3組ばかり ありましたけれど、 それは また ち

ョット エンポーデ アリマスルシナン (Bエーエー) ソレタ
よっと 遠方で ございますしね。(ええ、ええ) それだ

モンデ ユコホド アノ オツキアイ シマセンシ (Bエーエ
ものだから こゝほど あの お付き合いを しませんし、 (ええ、ええ

ー) ソレデ ワリアイニ スクナインデ アリマスニ (Bフン
それで 割合に 少ないので ございますよ、 (ふん

フン) エー。 アノー イチューニンオ イフツモ シトリマス
ふん) ええ。 あのう お仲間を 幾つも しております

トナーン (Bサヨー サヨー) ソー スト ソノ オチューニ
とねえ, (左様, 左様) そう すると その オチュウニコ
ンコッテ ユーノガ ホーボーニ デキマシテナン。
と いうのが 方々に できてゐてね。

B エー ソーデ アリマス。
ええ, そうです。

A ソー ユーノガ ナカナカ ソノ オツキアイニ タイヘンデ ア
そう いうのが なかなか その お付き合いに 大変で ござ
リマスケドナン。 (B エー エー エー) ワライニ スク
いますけどね。 (ええ, ええ, ええ) 割合に すく
ナク アリマスケドナン。 ソレニ⁽¹³⁾ マー ウチカラ デタ オバ
のう ございますけれどね。 それに まあ うちから 出た おは
タチモ モー タンダン ナクナッテ シマイマシタシナン。 フ
達も もう だんだん 亡くなって (しまいましたしね。 本
ントーニ スクナク ナリマシタケド。 ソレデモ ヤッパリ イ
当に すくなく なりましたけど。 それでも やっはり
ナカワ ナカナカ オギリガ タイヘンデ アリマスナン。 (笑)
田舎は なかなか お義理が 大変で ございますね。

B サヨー サヨー エー。 オギリワ タ^ッ ナンチュッテモ タイヘ
左様, 左様, ええ。 お義理は 何^ッと言っても 大変
ンデ アリマス (Aホント) マチバト チガイマシテナー。
で ございます。 (本当) 町場と 違いましてなあ。

A エー。
ええ。

B エー。
ええ。 *

A ムカシワ アノ マー リョーケデ¹ ハナシカ マト マリマストナ
 昔は あの まあ 両家で 話が まとまりますとね、
 シ モチロシ マー ミアイ^{xxxx} ミアイモ ワタシドモナンカ シナ
 もろろん まあ 見合いも 私どもなんか しな
 (14) イク⁽⁴⁾ライデ^(笑) シャ シンモ ミナイク^oライデ^(笑) アリ
 いくらいで^(笑) 写真も 見ないぐらいで^(笑) ごさ
 マシタケド ウチト ウチトデ マー ハナシヲ キメマスラ。^{*}
 いましたけど うちと うちとで まあ 話を 決めますでしょう。
 リョーケデ¹ アー ソノー イロイロ イマワ コンレーニ ツイテ
 両家で ああ その いろいろ 今は 婚礼に ついて
 ソーダンナンカオ イタシマスナン。 ソレヲ モー ムカシワ
 相談 なんかを 致しますね。 それを もう 昔は
 ゼンゼン ソー ユー コトー シマセンノ。 ナカエ ソノー
 全然 そう いう ことを しませんの。 中へ そのう
 オチューニンサマツテ ユー ナコードカ タツテ コチラエ イッ
 お仲人様と いう なこうど¹が たって、こちらへ 行ッ
 テ ユー ユヨー ソレデ¹ コチラエ イッテ コー ユヨー マ
 て こう いうようです、それで こちらへ 行って こう いうようです、
 タ コー ユヨーダソーデスヨッ チュヨーナ コトー キーテ ソ
 また こう いうようだそうですねというような ことを 聞いて、そ
 ノー リョーケデ¹ アツテ ソノー シタソーダン スルナンテ
 のう 両家で 会って ソノー 下相談を するなんて
 ユー コトワ ゼツタイ ソノ アノ ケッコンノ ヒマデ¹ アリ
 いう ことは 絶対 その あの 結婚の 日まで あり
 マセンノ。 (笑)
 ませんの。

ダーカラ ソイデ" イヨイヨ マー コンレーノ ヒニ ナリマス
だから それで いよいよ まあ 婚礼の 日に なります

ト ムコイリッテ イーマシテナン コー ヨメノ ウチエ ムコ
と 女婿入りと 言いましてね、 こう 女家の うちへ 女婿

サンカ オチューニンサマノ アンナイデ" ソシテ ソノ マイリ
さんが お仲人様の 案内で、 そして その 参リ

マス。 ホイデ" ソコデ マー アノ ソレニワ ソノ ロードー
ます。 それで そこで、 まあ、 あの それには その 「ロウドウ」

ッテ ユーノカ オトモノ イミテ" ロートーッテ ユー イミカ
と いうのが、 お供の 意味で 「ロウトウ(郎等)」という 意味

モ シレマセンケドモ アノ ロードーッテ コノ ヘンデワ イ
かも 知れませんけども、 あの 「ロウドウ」と この 辺では

ーマスケド ソノ マタ シンセキノ マー オジサントカ ソー
言いますけれど、その また 親戚の まあ おじさんとか、そう

ユー ムコサンニ ツッテ⁽¹⁵⁾ チカイ シトカ ゴロクニン オトモ
いう 女婿さんに ついて (血の繋がり)の近い人が 5, 6人 お供に

ニ ツイテ アノ ソノ マー シンプノ イエー キマシテナン。
ついて、 あの、 その、 まあ、 新婦の 家に 来ましてね。

ホイデ" シンプノ イエー キテ コンダ シンプノ シンプワ
それで 新婦の 家に 来て 今度は^{xxxxxxx} 新婦は

シマセンケード シンプノ リョーシン キョーダイト アノー
しませんけれど、 新婦の 両親、 きょうだいと、 あのう

オ オヤコノ サカズキヤ シンセキノ サカズキヲ スル ワケ
親子の 盃や 親戚の 盃を する わけ

デ ゴザイマスナン。

で ございますね。

ソーシテ マー ソコデ マー ゴチソーカ デテ ソエデ コン
そうして まあ、 そこで まあ、 ご馳走が 出て、 それで 今度

ドワ アノー カエリマスナン シンローワ。 ジブンノ ウチノ
は、 あのう 帰りますの、 新郎は。 自分の うらの

ホーエ⁽¹⁶⁾ ホエデ ソノ トキニ オチューニンサマワ コッチニ
方へ。 それで その 時に お仲間様は こっちに

ヨメノ ウチニ ノコッテ オリマシテ (Bウンウン) コンド
嫁の うちに 残って、 おりまして、 うんうん 今度は

ワ ユーカタ オヨメサンオ ツレテ コンドワ シンローノ
夕方 お嫁さんを 連れて、 今度は 新郎の

ウ⁽¹⁷⁾ ソレコソ ホントーノ オヨメイリデスナン。⁽¹⁸⁾ デ ソノ トキ
それこそ 本当の お嫁入りですね。 で、 その 時

ワ ヤッパリ ソノー シンフ⁽¹⁹⁾ノ アノー ロードーカ ツイテ
は やっぱり そのう 新婦の あのう 郎等が ついて

イキマシテ ソレデ オヤワ イキマセンノ ドッチモ ゼンゼン。
行きて、 それで 親は 行きませんの、 どっちも 全然。

ソレデ ムコーエ イッテ コンドワ マー アノ フーフノ サ
それで 向うへ 行って 今度は まあ あの 夫婦の

カズキカラ ミンナ ソノ イマノヨーニ アノー シンセキズキ
盃から みんな その 今のように あのう 親戚つき

⁽²⁰⁾ノ サカズキ ムコーノ ゴリョーシントノ オサカズキヲ マー
の 盃、 向うの ご両親との お盃を まあ

ヤッテ ソレデ マー コンレーノ ゴリョーシントノ オサカズ
やって、 それで まあ 婚礼の、 ご両親との お盃

キヲ マー ヤッテ。 ソレデ マー コンレーノ オシキワ オ
を まあ やって。 それで まあ 婚礼の お式は 終

ワル ワケデ アリマスナン。

わる わけで ありますね。

ソーシテ ソノ サッキノ オハナシノヨーニ ソノー フツカメ
そうして その さっきの お話しの ように、 そのう ニ日め

ワ ダイタイ ムラマワリ マチマワリッテ イーマスカ シンセ
は 大体 村回り、 町回りと 言いますか、 親戚

キマワリッテ イーマスカ アノー オチューニンサマノ オクサ
回りど 言いますか、 あのう お仲人様の 奥さん

ンカ ツレテ アルイテ クダサツタリ シテ マー シンセキオ
が 連れて 歩いて 下さったり して、 まあ 親戚を

マワッテ。 ソイデ ミツカメニ コンドワ アノ サトカエリッ
回って。 それで 三日めに 今度は あの 里帰りと

テ イーマシテナー オヨメサンカ ハジメテ アノ ウマレタ
言いましたなあ、 お嫁さんが 初めて あの 生まれた

ウチエ カエルノニ カエルッテ ユーカ マ カエルノニ コン
うちへ 帰るのに、 帰ると いうか、 まあ、 帰るのに、 今

ドワ ソチラノ ムコサンノ ゴリョーシンカ ツイテ キテ ソ
度は そちらの 女醫さんの ご両親が ついて 来て、

ノ トキ ハジメテ ソノ リョーケノ マー オヤタチカ アウ
その時 初めて その 両家の まあ 親達が 会う

ワケデスネー。⁽²¹⁾ マー チ_{xx} チカケリャ イーケド。 ソレデ ソ
わけですねえ。 まあ、 近ければ いいけれど。 それで そ

ノ トキニ ヤッパリ アノ サトカエリト シュートイリッテ
の 時に やっはり あの 里帰りと しゅうと入りと

イーマスノ。 ソノ トキワ シュートカ ハジメテ コッチー
言いますの。 その 時は しゅうとが 初めて ちっへ

キマスノ。 ソレデ サトガエリト シュートイリ。 ソレデ
来ますの。 それで 里帰りと しゅうと入り。 それで

ソノー マタ アノー コチラデ マー チョット ゴチソー
そのう また あのう こちらで まあ ちょっと ご馳走

シタリ シテ ソシテ ソノ シンローノ シュートタチワ カ
したり して、そして その 新郎の しゅうとたちは

エリマス。 ホイデ シンローワ コチラノ ウチ ヨメノ ジ
帰ります。 それで 新郎は どちらの ^{xxx} 嫁の

ッカニ ノコッテ ソーシテ マタ イツカメニ コンドワ コ
実家に 残って、そして また 五日めに 今度は こ

チラノ ヨメノ ホーノ リョーシンノ シュショ ^{xxxxxx} シュートイリ
ちらの 嫁の 方の 両親の しゅうと入りと

ト イッショニ カネテ マー シンフーフワ ソッチノ ウチエ
一緒に 兼ねて まあ 新夫婦は そっち うちへ

カエッテ ソレデ マー イッサイノ ギョージガ オワルンデス
帰って、それで まあ 一切の 行事が 終わるんです

ノ (笑)。^{*}
の。

イマカラ カンガエテ ミマスト ヨク マート オモッテ。(笑)
今から 考えて みますと、よく まあ(やった)と思つて。

B エー。
ええ。

A イマノ ワカイ カタタチ ミタラ (Bエー) ホント ゼッフ
今の 若い 方たちが 見たら (ええ) 本当に びっく

リ ナサルケード。 イエト イエトノ ハナシデナー。 ソーシ
リ なさるけれど。 家と 家との 話してなあ。 そうし

テ……。

て……。

B ソレカ ネーサマ ネー ムカシワ マユカイニ キタ シトカ
それが 姉さま, ねえ, 昔は 蘭買いに 来た 人が

(A エー) コー ユー ムスメワ ドータ。 (A エー
ええ) こう いう 娘は どうだ。 (ええ,

ソー) ホレカラ……
そう) それから……。

A アノ ウチエ ドータローツチュー コトデナーン。 (B ソーソー
あの うちへ どうだろうという ことだね。 (そう, そう,

ソー。エッエー) ホレデ チョード イー ムスメダカラトカ チ
そう。ええ, ええ) それで 丁度 いい 娘だからとか,

ヨード イー ムスコダカラツチュヨーナ ハナシニ ナリマシテ
丁度 いい 息子だからというような 話しに なりまして

(B エー エー エー エー) ソエデ ヤッパリ マキキアフテ
(ええ, ええ, ええ, ええ) それで やっぱり 両方で 相談し

⁽²²⁾ イテ リョーホーデ マー ソー ユー ナカデ ハナシオ シテ
合って 両方で まあ そう いう 中で 話しを して

クレル シトカ アルト マー オタカイニ シラベル コトワ
くれる 人が あると, まあ お互いに 調べる ことは

シラベル ワケデ アリマス。 アッチノ ウチノ ムスコワ ド
調べる わけで ございます。 あっらの うちの 息子は

⁽²³⁾ ーダ'ロートカ コッチノ ウチノ ムスメワ ドータ'ロ ソー ユ
どうだろうかと, こっちの うちの 娘は どうだろう, そう 言

ッテ フレタケレドッテ ユー ワケデ シラベテ マー イーカ
って くれたけれどと いう わけで, 調べて まあ いい

ラ ソイジャ ヤリマス モライマスツテ ユー コトンナリマシ
ら それでは (嫁に) やります, 貰います と いう ことになりまし

テモ リョーケガ イッション ナツテ ソノ イマノヨーニ エ
ても, 両家が 一緒に ナツテ, その 今のように, ええ

ー コンレンノ⁽²⁴⁾ ヒワ イツ⁽²⁵⁾ キメマショー ドンナ クライナ
婚礼の 日は いつ 決めましょう, どんな くらいな

コトニ シマショーナンチュー コトワ ゼツタイ シマセンデ
ことに しょうなどという ことは 絶対 (ませんで,

モトヨリ ソノー シンローシンアダカ (笑) ソノー コンヤ
もとより そのう 新郎新婦だか, () そのう 婚約

クシャノ デイトナンカ モチロン アリヤ シマセン。 (A 笑)
者の デートなんか もらろん ありは しません。 (B)

*
B ホントダツタラ カオモ シラズニナー。
本当だったら 顔も 知らずになあ。

A ソーデ アリマスナ。 ヨク マート オモイマスニ。
そうで ございますよ。 よく まあと 思いますよ。

B ソレカラ キマルト サケガ ハイルツチュツテ (B ハイ) オ
それから 決まると 酒が はいるといって (はい)

チューニンサマ サケオ モツテ キマシテ (B エー) ワタシ
お仲間様が 酒を 持って 来まして (ええ) 私も

モ ジューイククミ ヤッタ コト⁽²⁶⁾ ダイツタイ ソ
十幾組を やった こと..... 大体 そ

ノ ホーシキデス。
の 方式です。

A アー サヨーデ アリマスラ。 (B エー) ソシテ コンダ ユ
ああ 左様で ございますで(う)。 (ええ) そして 今度は

イノーオ イタダイテナン。

結納を いただいてね。

B サヨー サヨー。

左様, 左様。

A アー。ソレダッテ ミンナ オチューニンサマカ モッテ クル
ああ。それだって みんな お仲人様が 持って 来る

ダケデ アリマスデナン。 (B エー) ソーシテ ソノ トキニ
だけで ございますね。 ええ) そうして その 時に

ハジメテ ヒワ イツニ シマショートカ ユッテ (B エーエー)
初めて 日は いつに (ましようとか 言って, ええ, ええ)

ホレデ ダイタイ ム ムコカタノ ホーワ コノ イコーダカ
それで 大体 婿方の 方は この 意向だか

コチラ ドーデスカッチュー。 コチラー コチラデ マダ コー
こちらは どうですかという。 こちらは こちらで まだ こう

ダトカ ユッテ (B エッエー) ソコデ マー ダイタイ ヒヲ
だとか 言って (ええ, ええ) そこで まあ 大体 日を

キメマスケド ソレダッタッテ オチューニンサマカ ナカニ ハ
決めますけど, それだったって お仲人様が 中へ は

イッテ アーデスカ (B エーッ) コーデスカッチュッテ (B
いって ああですか (ええ) そうですねといッテ (B

エー) キメテ フダサル ワケ。 (笑)
ええ) 決めて 下さる わけ。

B サッキノ ハナシミタイニ オチューニンサマツチューノワ ^{*}ウー
さっきの 話しみたいに お仲人様というのは

ンット ⁽²⁷⁾ダイジニ スル ワケ。

うんと 大事に する わけ。

A ソーデ アリマスノ。 ソレデ マタ ホント ダイセキニンデ アリマス
 そうで ございますの。 それで また 本当 大責任で ございます

モノナー カンガエテ ミレバ。
 ものなあ、 考えて 見れば。

B ウット エー ウーント ダイジニ スル ワケ。
 うんと、 ええ うんと 大事に する わけ。

A リョーホーノ コト イッサイ ヒキウケテ。
 両方の ことを 一切 引き受けて。

B エッー。 ソレデ オチューニンサマ オ⁽²⁸⁾シテ モラッタ トコエ
 ええ。 それで お仲間様を して 貰った ところへ
 イッテ コドモカ デキルト コドモワ ショーガツ オボンニフ
 行って、 子供が できると、 子供は 正月、 お盆には、
 ショーガツフ カナラズ オモチオ ショッテ イク ワケネ。
 正月は 必ず お餅を 背負って 行く わけですね。

エッ。
 ええ。

A オモチヲ ショッテ イキマシテナン。 エー。 (B エ
 お餅を 背負って 行きましたね。 ええ。
 ー)
 え)

B イマデモネー ワタシ イーダ⁽²⁹⁾ノ シトオ⁽³⁰⁾ト サクノ シトオ バ
 今でもねえ、 私、 飯田の 人と 佐えの 人を 媒

イシャク シタノワネー (A エー) イーダ⁽²⁹⁾ノ チクマチノ フ
 酌 したのはねえ、 (ええ) 飯田の 知久町の 古

ルイ ショーカダモンデ (A エー) ウーント カタイ⁽³¹⁾ カタイ
 い 商家なものだから、 (ええ) うんと 堅い

ウチデネー。 (Aヘー) チャーント キマス。
うちでねえ。 (へえ。) ちゃんと 来ます。

A ハー (Bエー) ソーデ" ゴザイマスカ。
はあ、 (ええ) そうで ございますか。

B トコロガ コンドアー アノー イマノ ⁽³²⁾ アネヲ ジツカデ" フタ
ところが 今度は あのう 今の 姉を 実家で ニ人
リ シタケードモ シンルイダモンダカラ (笑)
いたけれども、親類なものだから

A エーエーエー (笑) ココロヤスイデ" ヤッパリナン ホント (
ええ、ええ、ええ) 心安いから やっぱりねえ、本当。
笑) 。

B ソコワ イッコー ソソーニ ソー シトルケードモ マー ソレ
そこは いっこう 疎略に、そう、しているけれども、まあ それ
ワ ソレデ" イート シマシテモネー ソレダケ ダイジニ シマ
は それで いいと しましてもねえ、それだけ 大事に しま
シタナ。
したな。

A ホント ソーデ" アリマスニ。
本当に そうで ございますよ。

B マツモトワ ソノ カネツケオヤオ ⁽³³⁾ ダイジニ スルネー。
松本は、 その、鉄槌親を 大事に するねえ。

A アヘー。
ああ。へー。

B コンレーニ イキマスト シンローシンフノ トナリカ カネツケ
婚礼に 行きますと 新郎新婦の 隣りが 鉄槌親

オヤ。

A へー。
はい。

B ソノ トナリカ バイシャフニソ。 (A へー) コー ナッテ
その 隣りが 媒酌人。 (はい) こう なって
イマスネー ヤマベノ⁽³⁴⁾ キンジョウ (A へー) エー。 ミクミ
いますねえ、山辺の 近所は。 (へえ) ええ。 3組
イー サンカイバカ ヨバレマシタケード ミンナ ソー ナッテ
3回ばかり 招かれましたけれど、 みんな そう なって
マス。 オチューニンサマカ エッ シンローシンフノ トナリデ
います。 お仲人様が、 えっ、 新郎新婦の 隣りで
ナクテネー ソノ リョードナリ カネツケオヤデスワ。
なくてねえ、 その 両隣りが 鉄漿親ですよ。

A へー。コノ ヘンジャ イマ カネツケオヤナンチュー コト イ
へえ。この 辺では 今 鉄漿親なんていう ことを 言
ーマセンナン。
いませんね。

B エッ アンマリ イーマセンナ。
ええ、 あんまり 言いませんな。

A ハイ。
はい。

B ワタシドモン トキニワ マダ⁽³⁵⁾ アノー オクマオーバーナシカ⁽³⁶⁾ カ
私どもの 時には まだ あのう お熊ばあさんなんか
ネツケオ シター。
鉄漿を して。

A エー。
ええ。

B デ ミンナ アノー オハグロ ソメテマシタカラ エッエー。
で、みんな あのう お歯黒を 染めていましたから、 ええ、ええ。

A オハグロー ツケル カワリニナン エー ヤッパリ オハグロノ
お歯黒を つける 代わりにね、 ええ やっぱり お歯黒の
ザイリョーオ (B エー) チョット オクッタリ シマシタケド
材料を (ええ) ちょっと 贈ったり しましたけど
ナン。
ね。

B エー。
ええ。

A ホントーニワ ツケナフテモ。
本当には 付けなくても。

B サヨー サヨー。
左様 左様。

A ケド イマワ モー カネツケオヤナンテ キータ コト アリマ
けれども 今は もう 鉄漿親なんて 聞いた ことが あり
セシナー。
ませんなあ。

B イーマセンネー。
言いませんねえ。

A イーマセンニ コノ ヘンデワ。 カンタンニ ナリマシタンダ。
言いませんよ、 この 辺では。 簡単に なりましたんです。

B アノ ロードーッテ ユーノワ オジ オイ オジチューヨーナ
あの ロウドウと 言うのは おじ、甥
xxxxxxxxxxxxxxxxxxxx

シトか オジツチューヨーナ シトか イッタ ワケダナー。
xxxxx おじというような 人が 行った わけだなあ。

A エー オジデ アリマス。 タイテイ (B エー) マー オンナ
ええ, おじで ございます。 大抵 (ええ) まあ 女

ワ ソー ユー トキ イキマセンモンデナー (B エー) エー
は そう 言う 時 行きませんものですからなあ (ええ) ええ
オジ……。
おじ……。

B ロードーデ ツイテ イッテ マ ゴエ ゴエーデ (笑) (A
ロウドウで ついて 行って ま, 護衛で
エー) ミトドケテ キタンダナ。
ええ) 見届けて 来たんだな。

A ソー ユー コトデ アリマスンダナン。
そう いう ことで ありますんですね。

B ソエデ ヒットーノ ロードーカ ホーコク スルンズラ。
それで 筆頭の ロウドウが 報告 するんだらう。

A ホーコク ソーデ アリマス ンズラ キット (笑)。
報告, そうで ございましょう, きっと。

B ツキシッテ イキマシテ コエデ ケーコーデ ブジ スミマシタ
つき添って 行きて, これで 結構で 無事 済みました
ッテ ホーコク スル。
と 報告する。

A ハイ スミマシタッテ。 コッチー キテ ヤッパリ リョーシン
はい, 済みましたと。 こっちに 来て, やっぱり 両親は

ワ ツイテ イキマセンモンデナン (B イカン……) ヤッパリ
ついて 行きませんものですからね。 (行かない) やっぱり

マ シンパイ シトル ワケデ アリマスデナン。 (笑)
ま 心配 している わけで ご覧いただけますのでね。

B エッ エーエー。
ええ, ええ ええ。

A ダカラ ムカシノ フントニ ゴコンレーッテ モナ タイヘンデ
だから 昔の 本当に ご婚礼というものは 大変で
アリマシタ。 (笑)
ございました。

B ソレデ ゼンブ ジブンノ⁽³⁷⁾ ヤ ヤ ヤ ヤリマシタ。
それで 全部 自分の やりました。

A ソノ ゼンジツニ ニモツヲ マタ ハコブッタッテ イマミタイ
その 前日に 荷物を また 運ぶと言っても 今みたい
ニ トラックが アル ワケジャ アリマセンデナン。 ミンナ
に トラックが ある わけでは ありませんからね。 みんな
コー カツイデ⁽³⁸⁾ イキマシタナ。
こう 担いで 行きましたんです。

B サヨー サヨー。 ソーッ エー ミンナ カツイデ⁽³⁹⁾ イキマシタ
左様, 左様。 そう, ええ, みんな 担いで 行きました。
ニ エー。 ココラ トーリマシタナ。 (A 笑 ホント)
ええ。 こころを 通りましたなあ。 (本当)

タンスカ⁽⁴⁰⁾ イクサオ キタ (A エー) ナカモチカ キタッテッ
簞笥が 幾棹 来た, (ええ) 長持が 来たと言っ
テワネー ココ トーリマシタ ネー
てはねえ, ここを 通りましたねえ。

A イクサオ キタナンテ イーマシテナン エー。 ミンナ カツイ
幾棹 来たなんて 言いましたね, ええ。 みんな 担い

デ キマシタンダ。^{*} ムカシノ オヨメサンノ ニモツッテ イー
で 来ましたんです。 昔の お嫁さんの 荷物と 言い

マストナン マ タンス ナガモチワ モチロン ソシテ マ ヤ
ますとね、 ま、 簞笥、 長持は もちろん、 そして ま、

クトカ ソー ユー モノモ アリマスケレドモ タラ^{xxxx} ダイイチ
夜具とか そう いう 物も ありますけれども、 第一

タライカ^o ジョーケ イリマス ワケ。(B ウン) アノ チョット シモノ
たらいが 上下 要りますわけ。(うん) あの、ちょっと 下の

モノ アラウノト フタツクライワ モッテ イキマスノ。 ソシ
物を 洗うのと ニつぐらいは 持って 行きますの。 そし

テ ハリイタッテ ユーノ ソレモ ヤッパリ ニ^{xx} スフナクモ
て 張り板と いうの、 それも やっぱり すくなくも

ニマイグライワ モッテ タンジャ アリマセンカナ。(B ウン
2枚ぐらいは 持ってったんじゃ ありませんかな。(うん

ウン) エー ソシテ アノー タチモノバンテ イーマスカ オ
うん) ええ、 そして あのう、 裁ち物板と 言いますか、 お

サイホーニ ツカウ (B アー ハイハイ) マ オサイホーノ
裁縫に 使う (ああ はいはい) ま、 お裁縫の

ドーグワ モチロンダケド ソノ (B ウンウン) コー ユー
道具は もちろんだけれど、 その (うんうん) こう いう

オーキナ バンヲ モッテッタンデスネ。 ソー ユー オーキナ
大きな 板を 持って行ったんですね。 そう いう 大きな

モノッテ ユット ソー ユー モノデ アリマシタデナン。
物と 言う、 そう 言う 物で ございましたからね。

B ゲタバコナンカモ モッテ キタノ ミトツタケード……。
下駄箱 なんかも 持って 来たのと 見ていたけれど……。

A エー ゲタバコワ モチロン モッテ マイリマス エー。
ええ、下駄箱は もちろん 持って 参ります、ええ。

B モッテ キタ モッテ キタンダナン。
持って 来た、持って 来たんだね。

A ソレカラ イマノ ヨーナ ハハナノカノ トキワ アノ センメンキ
それから 今の ような、母 なんかの 時は あの 洗面器
ナ.ンテ ユー モノワ イマ アーンナノワ ホント マダ アタ
なんて いう 物は、今 あんなのは 本当に まだ 新
ラシー (B ウン) モノデ チョーズダライッテ イーマシテナ
しい (うん) 物で、チョウスダライ(手水 盥)と 言いましてね。
ン。

B ソーソーソーソーソー。
そうそう そうそう そう。

A ユー ユー フーニ シテ シタニ アシカ アッテ ヨク アノ
こう いう ふうにして 下に 足が あって よく あの
テレビノ エーカナンカデ チョット アリマスナン。
テレビの 映画なんかで ちょっと ありますね。

B アシノ ツイタ ソー フンフンフンフンフン。
足の ついた そう、ふんふんふんふんふん。

A コンナフーン ナッテ。 アシノ ツイタ チョーズダライナンテ
こんなふうになって。 足の ついた 手水盥なんて
ユー モノー モッテ キタ ヨーデ アリマスニ。
いう 物を 持って 来たようで ございますよ。

B フンフンフンフンフンフン。
ふんふんふんふんふんふん。

A ソレデ⁽³⁹⁾ ツリダイナンテ ユーノンナカエ ソー ユー タライノ
 それで 釣台なんて いうのの中へ そう いう 盆のよ
 ヨーナ モノオ イレテ キマシタノカナン。 (B ウンウンウン)
 うな 物を 入れて 来ましたのかね。 (うんうんうん)
 ソーシテ ソノー タンス ナガモチノヨーナ モノニワ ユタン⁽⁴⁰⁾
 そうして そのう 簞笥 長持のような 物には 油単
 ッテ イーマシテナン (B ウン) ジョーモンノ ハイッタ コ
 と 言ひましてね, (うん) 定紋の はいった こう
 ー ユー モノー カケテ (B カケテ ウン) ソーシテ カッ
 いう 物を 掛けて (掛けて, うん) そうして 担い
 イデ (B ウン) リョーホーデ ナカイ ボーデ (B ソーソー
 で (うん) 両方で 長い 棒で, (そうそう
 ソー) ソーシテ カツク シトタチカ ヤッパリ オモイシ マ
 そう) そうして 担ぐ 人達が やっぱり 重いし, ま
 ー ソレモ オイワイダモンダカラ オーゼデ ツイテ キテ カ
 あ, それも お祝いだものだから 大勢で ついて 来て,
 ワッテ カツイデ クル ワケデ アリマスナン。
 代わって 担いで 来る わけで ございますね。

B ウン。 ウン。
 うん。 うん。

A ホーシテ ソノ ナカヤドッテ ユー トコカ アリマシテナン
 そうして その 中宿と いう ところが ありましてね,
 (B ウン) ソエデ⁽⁴¹⁾ ソコエ ヨメノ ホーカラ モッテ キマシ
 (うん。) それで そこへ 嫁の 方から 持って 来ま
 テ ホレカラ コンドア ムコガタカラ ソノ ナカヤドエ ア
 て, それから 今度は 婿方から その 中宿へ あ

アノー キテ ソエデ ソコデ ウケワタシヲ シマスノ ニモツ
あのう 来て、 それで そこで 受け渡しを (しますの、 荷物
ヲ。
を。

B ウン ニモツノ サイリョー⁽⁴²⁾
うん、 荷物の 宰領。

A ウン ソエデ ニザイリョー^ツ ユーノガ ツイテ (B ニザイ
うん、 それで 荷宰領と いうのが ついて 荷宰
リョー ハイ) キマシテナン。 ホエデ ソコデ マタ コンダ
領、 はい) 来ましてね。 それで そこで また 今度は
ムコカタノ ホーエ ワタシテ コンダ ムコカタワ ムコカタデ
婿方の 方へ 渡して、 今度は 婿方は 婿方で
ヤッパリ ソノ ニンフオ ツレテ イッテ コンダ ヒキウケテ
やっぱり その 人夫を 連れて 行って、 今度は 引き受けて
モツテ ヤッパリ ソノ ニザイリョーガ アッタ ワケ。
持つて やっぱり その 荷宰領が あった わけ。

B ウン。
うん。

A ソエデ トチューデ ソー ユフーニ マー ミチモ トーイシ
それで 途中で そう いうふうに、 まあ 道も 遠いし

カツイデ フルノモ タイヘンデ アリマスデナン。 (B ウンウ
担いで 来るのも 大変で ございますのでね。 うんうん

ンウンウンウン) ソエデ ソノ ウケワタシ シタ ワケデ
うんうんうん) それで その 受け渡しを (した わけで

アリマスンダ。 ホエデ ヤッパリ ソコデ エバ⁽⁴³⁾ イッパイ マ
ございますんです。 それで やっぱり そこで(何をするか)言えば、 一はい まあ

モチロン (B サヨー サヨー) ドッカノ ウチヲ キメテ (B ウン) ソコデ
もちろん, (左様, 左様) どこかの うちを 決めて (うん) そこで

イッパイ (B ウン) デタリ シテ ソーシテ コンダ マ
一杯 (うん) 出たり して, そうして 今度は ま

タ アノ ムコカタノ ホーデ カツイデ キタ ワケデ アリマ
た あの 婿方の 方で 担いで 来た わけで ござい

ス。 (B フンフン) ソレデ マー ソノー ニモツヲ モッテ
ます。 (ふんふん) それで まあ そのう 荷物を 持って

フルツタッテ マー タイヘンナ コトデ アリマスナー。
来ると言っても まあ 大変な ことで ございますなあ。

B エー エー エー エー。
ええ, ええ, ええ, ええ。

A マー オーゼーノ シトカ アリマシタデナン ムカシワ。 (B
まあ, 大勢の 人手が ありましたのでね, 昔は。 (

ウン) ソレモ オイワイダモンデ マー オニギヤカニ ヤロー
うん) それも お祝いだものだから, まあ お辰かに やろう

ツチュー コトデ ヤッタ^ンダト オモイマスケドナン。 (B ウン
という ことで やったんだと 思いますけれどね。 (うん

ウンウンウン) イマノヨーニ トラクダノ (笑) ニグルマダノ
うんうんうん) 今のように トラックだの () 荷物だのが

ガ アレバ オイーケレド (笑)* ヤッパリ ソノー カコニ ノ
あれば よろしいけれど。 () やっぱり そのう, 駕籠に 乗

ッテ クルツテューノワ マー ヨホドノ マー イエノ ムスメ
って 来るというのは, まあ よほどの, まあ 家の 娘

デ アリマスナン。 マ ウチノ ハハナンカワ ソノ カコデ
で ございますね。 まあ, うちの 母なんかは, その 駕籠で

キタシ ワタシノ コツカラ デタ オバタチモ カゴデ イッタ
 来たし、私の ここから 出た おば達も 駕籠で 行ッ
 ッテ イーマスケードモ。 アノー フツワ ヤッパリ ウント
 だと 言いますけれども。 あのう 普通は やっぱり うんと
 オームカシワ ウマデ⁽⁴⁴⁾ キタコトモ アッタヨーデ⁽⁴⁵⁾ アリマスナン。
 大昔は 馬で 来たことも あったようで ございますね。

B ハーハー。 ウン。
 はあ、はあ。 うん。

A オークサカラ オークサノ⁽⁴⁴⁾ ナントカ ユー イマワ ワスレタケ
 ×××××××××× 大草の 何とか いう 今は 忘れたけど
 ド ナントカカイトカラ⁽⁴⁵⁾ キタ オバーサンガナン ムカシノ オ
 何とかカイトから 来た おばあさんがね、 昔の
 バーサマデ アリマスカ ソノ シトワ ウマニ ノッテ キテ
 おばあ様で ございますが、 その 人は 馬に 乗って 来て、
 ソノ オバーサマノ ソノ ウマノ ウエニ カケタ フトンダト
 その おばあ様の その 馬の 上に 掛けた 布団だとか
 カ タズナダトカ マダ ウチニ アリマスケードナ。
 手綱だとか まだ うちに ありますけれどな。

B ホホー。
 ほほう。

A オームカシワ マー ソンナフーニ ウマデ⁽⁴⁴⁾ キマシタカ⁽⁴⁵⁾ アトワ
 大昔は、 まあ そんなふうには 馬で 来ましたが、 あとは
 マー ダイタイ ソノー オカゴデ⁽⁴⁴⁾ キマシタノ。 ソエデ モー
 まあ 大体 そのう お駕籠で 来たの。 それで もう
 チョット マー シタノー ウチダッタラ アノー ダイタイワ
 ちよっと、 まあ 下の うちだったら、 あのう 大体は

アルキマシタナン。 イマホド トーク アリマセンシ。
歩きましたね。 今ほど 遠く ありませんし。

B アルイタンダ。 ハイハイハイハイ。
歩いたんだ。 はいはいはいはい。

A ヤッパリ コーツーカー フベンダデ アンマリ トーフエ イキマ
やっぱり 交通が 不便だから あんまり 遠くへ 行きま
センデナン。
せんからね。

B フン フン フン。
ふん ふん ふん。

A ホイデ アノー キ イー キモノモ クット コー マフリアケ
それで あのう 良^{xx}い 着物も きりりと こう まくりあげ
テ シタカラ ナカジュバンカナンカ ダスヨーニ シ トーク
て 下から 長襦袢^{xx}かなんか 出すように し、 遠く
アルキマスンデナ。
歩きますのでな。

B フン フン フン フン。
ふん ふん ふん ふん。

A ソー ヤッテ アルイタリ (B ウン) ソレカラ…… ソレカラ スコシ タ
そう やって 歩いたり (うん) それから……, それから すこし 経
ッテカラワ ジンリキ シャニ (B ウン) アリマシテ⁽⁴⁶⁾ (B ウン) ソ
ってからは 人力車に (うん) なりまして, (うん) そ
エデ ソー ユー トキモ ソノ マー フツーノ ウチダツタラ
れで そう いう 時も, その まあ 普通の うちだったら
ソノー オヨメサンカ シトリ ジンリキシャソ ノルダケデ ア
そのう お嫁さんが 一人 人力車に 乗るだけで ござ

リマス。

います。

B サヨ一 サヨ一。

左様，左様。

A アトノ ソノー ロードーノ レンチューワ ミンナ アルイテ

あとの その 郎等の 連中は， みんな 歩いて

イク ワケデ アリマス。 (B ウンウン) ソレデ シバラク タ
行く わけで ございます。 (うんうん) それで (しばらく た

ッテカラ コンドワ ジドーシャナンカ デキテ アノ タダイマ
ってから， 今度は 自動車などが できて， あの 先程の

ノ トシマカ⁽⁴⁷⁾ コノ ヘンノ ダイイチゴ一ダッテ イーマスネ。

登志恵さんが この へんの 第一号だったと いいますね。

B クルマデ キタノ。

車で 来たの。

A ジドーシャデ オヨメイリ シタノワ。

自動車で お嫁入り したのは。

B ホ一ントカナ。

本当かな。

A エー ソノコロ ワタシワ ハイ ココニ オリマセナンダケード

ええ， その頃 私は もう ここに ありませんでしたけれど

ナン。 (笑)
ね。

B ホホ一。 アレー。

ほほう。 あれ。

A ジドーシャデ オヨメニ キタノワ モー コノ ヘンデノ ダイ

自動車で お嫁に 来たのは もう この へんでの 第

イチコーダッテ イーマス。 (笑) コンド アチラデ オキキ
1号だって 言います。 今度 あらうで お聞き

ナサリマセ。 (笑)
なさいませ。

B ウンウン アレー。 ソリャー タイシタモンダー。 (笑)
うん、うん。 あれ。 それは 大したものだ。

A ソー ユー ハナシ キーテ オリマスケード。
そういう 話しを 聞いて いますけれど。

B フーン。
ふうん。

A ソレデ ワタシノ トキワ モー アノー ジンリキシャデ イキ
それで 私の 時は、 もう あの 人力車で 行き
マシタ エー。
ました、 ええ。

B エー。
ええ。

A アー ソレガ マタ イマ ハナシテモ ホントニ オカシーンデ"
ああ、それが また、 今 話しても 本当に おかしいの
アリマスケード" ワタシワ ジツワ ソノ オトートカ マダ" ア
ですけど、 私は 実は その 弟が まだ
リマシタノデナン。 イッタンワ ヨメニ イッタ ワケデ アリ
(その時は)いたので。 いったんは 女家に いった わけで ござい
マス シュジンノ トコロエ。 ソエデ ヤッパリ ソノ アカホ⁽⁴²⁾
ます、主人の 所へ。 それで やはり その 赤穂
デ イマノ コマカ⁽⁴⁹⁾ネデ アリマスケドナン ソエデ ヤッパリ
で 今の 馬匂ヶ根で ございますけれどね、 それで やはり

アノー ソノ イマデ ユー アノ カミカタギ⁽⁵⁰⁾リマデシカ (B
あの その 今で という あの 上片桐までしか

エー ウン) デンシャが キテ オリマセナンダ ムコーカラ。
ええ、うん) 電車が 来て いませんでした、向こうから。

ソーデ⁽⁵¹⁾ マダ コッチワ デンシャガ ナイン。 ソレデ ウチカ
それで まだ こっちは 電車が ないんです。それで うちが

ラ ソノ ジンリキシャデ イキマシテ ホレデ カミカタギリノ
ら その 人力車で 行きまして、それで 上片桐の

エキカラ コンドア デンシャオ イッシャ カイキリマシテナン。
馬車から、今度は 電車を 一車 買いきりましてね。

ソーシテ ソレニ ノッテ (笑) (B ホー) ミンナデ ソノ
そして それに 乗って、 () (ほう) みんなで その

ロードーカラ ナニカラ イキマシテ。 (笑) (B へー)
郎等から 何から 行きまして。 () (へえ)

ソーシテ アカホノ エキデ オリテカラ マタ アチラカラ
そして 毎穗の 馬車で 下りてから、また あちらから

ムカエノ カゴカ キトリマシテナン。 ソエデ カゴニ ノッテ
迎えの 駕籠が 来てましてね。それで 駕籠に 乗って

イキマシタノ。 (笑) ホントニ ソノ ハナシヲ スルト コ
行きましたの。 () ほんとに その 話しを すると

ドモタチワ ゴーカバンナンテ (B ゴーカバンダ 笑) ワライ
子供達は 豪華版などと (豪華版だ) 笑い

マスケレド。 (笑) デンシャオ イッシャ カイキッテ。 (B
ますけれど。 () 電車を 一車 買い切って。 (

笑)

B へーへー。
へえへえ。

A ノリマシタケドナン。 ソレデ ソノ トキワ マー リンリキシ
乗りましたけれどね。 それで その 時は まあ 人力車も
ヤモ オージマ⁽⁵²⁾ノ アタリニ シゴダイワ アリマシタモンテ。
大島の あたりに 4, 5 台は ありましたものだから。

B フンフンフン。
ふんふんふん。

A ドーヤラ ソノー アノー ロードーマデ マー デンジャデ^{xx}ノ
どうやら その あの 郎等 まで まあ 電車で、 の
トコマデワ ジンリキシデ イキマシタケド (B フンフンフン
ところまでは 人力車で 行きましたけれど) ふん, ふん, ふん,
フン) マー フツノーノ オウチデ マー オヨメサンガ ジン
ふん) まあ 普通の お家では, まあ お嫁さんが 人
リキシヤン ノルダケデ アトワ ソノー ロードーッテバ オ
力車に 乗るだけで あとは その 郎等 と言えは 男
トコデ (B ソーデスネ。エー ウンウン) アリマスシ エライ ト
で (そうですね。ええ うん うん) ご致しますし, 大変 遠
ーク アリマセンモンデナン ダイタイワ ミンナ アルイテ オ
いのでも ご致しますんものですからね, 大体は みんな 歩いて, お
トモノ シトワナン イキマシタダニ。
僕の人ほね, 行きましたんですよ。

B ウンウンウンウン。
うん, うん, うん, うん。

A ヲタシワ マー チョット コマカネデ トークモ アリマスシ
私は まあ ちょっと 馬向々根で, 遠くでも ご致しますし

ソー ユー コトデ アノー カミカタキリマデ" アレデ イッテ
そう いう ことで あの 上片桐まで あれで 行って、
アト ソノ デンシャオ カイキッテ (笑) イキマシタケドネ。
あと その 電車を 買い切って 行きましたけれどね。

B ヘーエー ムカシワ ホントダ" エンクミワ ス アノー ナンダ"
へえええ、昔は 本当だ、縁組は あの 何です
ナー アノー ココラワ ダイタイワ シモイナノ ホートカ オ
なあ、あの、ここの辺は 大体は 下伊那の 方が
ーク オーク アリマシタナー。
多う ございましたね。

A ハイ シモイナカ オーク アリマス。
はい、下伊那(との縁組)が 多う ございます。

B コチラノ ミナミ⁽⁵³⁾ シン ゴシンルイモ ミナミノ ホーカ オ
こちらの、「南」の、御親類も、南の 方が
オーイナー。
多いなあ。

A ハイ ウチデモナーン オバタチワ ミンナ シモイナデ アリマ
はい、うちでもね おばたちは みんな 下伊那で ござい
ス。
ます。

B ソーデ" アリマスナー。
そうで ございますなあ。

A カミイナノ ホーニワ マー ホトンド アリマセン。
上伊那の 方には まあ ほとんど ございません。

B フーン ウン。
ふうん うん。

A アノー タダ マー ハハノ デウチカ カミジマ⁽⁵⁴⁾ チョット コ
あ の ただ まあ 母 の 出たうちが 上島 , ちょっと こ
コヨリ キタデ アリマスケドナン。

こより 北で ございますけれどね。

B フン エー ハイハイ。

ふん ええ はいはい。

A ソレデ ナナクボニ⁽⁵⁵⁾ イモートカ イ^{xx} ハハノ イモートカ イッ
それで セ久保に 妹が 母の 妹が いて

トリマ (Bウ^ンウ^ン) マ ソノ テードデ キタノ ホートワ
おります, うんうん) ま, その 程度で 北の 方とは

ホトンド シンセキガ アリマセンノ デナン。 (Bウ^ンウ^ンウ^ン)
ほとんど 親戚が ありませんのでね。 うんうんうん)

アリマセンケド マー ワタシワ エンガ アッテ ソレコソ (
ありませんけれど まあ 私は 縁が あって それこそ (

Bウ^ン) ソノー アカホノ ホーエ マイルヨーニ ナリマシタ
うん) その 赤穂の 方へ 参るように なりました

ノ デナン。 (Bウ^ン ウ^ン ウ^ン)
のでね。 うん, うん, うん)

A ホントーニ イマカラ オモエバ オカシーヨーデ アリマスガ^{ww}
本当に 今から 思えば おかしいようで ございますが。

カミカタギリマデシカ デンシャワ (Bエー) タツノカラ キ⁽⁵⁶⁾
上片桐までしか, 電車は ええ) 辰野から 来

テ オリマセナンタ。 ムカシノ ムカシノ ハナシ。 (笑)
て ありませんでした。 昔の 昔の 話し。

B ソレワー イマノー ソノ ゴーカバンワ イマ ハジメテ オキ
それは, 今の その 豪華版は, 今 初めて お聞

キ シマシタケード (A 笑) デンシャヲ カリキッタナンテ。
き (ましたけれど, 電車を 借り切ったなど)と。

(笑)

A (笑) デンシャオ イッシャ カイキリデ (笑) ホント (笑)。
(電車を 一車 買い切りで, ほんと。)

注

- (1) -マは軽い敬意をあらわす接尾語。敬意は-サマより低く、-サよりも高い。
- (2) 結婚式の前に、夫たるべき男性が媒酌人とともに始めてその妻の生家を訪れること。
- (3) 結婚式の折、新郎新婦に同行する人達。3, 4人が普通で、多くそのおじが選ばれる。[ro:to:]のようにも聞こえる。
- (4) [dzenddzen]
- (5) 終わりの部分は笑いで完全には聞き取れない。
- (6) [ʃindzenkeŋkõ] のように聞こえる。
- (7) [hon·tto] .
- (8) [hon·tto:] .
- (9) 媒酌をしてまとめた夫婦を、子供とみなしてこういう。
- (10) ちょっと聞くと、[ja^bbari] と聞こえるが、話し手の清水氏の認定によりヤッパリとした。
- (11) ナクナリマシタンデとンのはいるのが、この方言の普通の言い方。
- (12) 長野県松本市。話し手の小池氏は夫の任地の松本にしばらく住んだ。
- (13) よく聞きとれない。
- (14) 共通語的言い方。在来の方言ならばセンとなる。話し手Bの清水氏もそうであるが、Aの小池氏でもときおり、在来の方言-ンに代わって-ナイが用いられることがある。すぐ次のミナイグライデの-ナイも同じ。
- (15) 「付いて」か。ただし、話し手Bの清水氏は「付いて」はツッテとはならないと言う。馬瀬の調査したところでも、「聞く」「引く」「敷く」などは、在来の方言ではキッテ、ヒッテ、シッテとなるが、「付いて」はそうならない。あるいはツイテとソッテ(添って)の偶発的な混淆か。
- (16) [ho:je] .
- (17) <コンドワ シンローノ ウ>の発話はここで中断され、意味の上では次に続かない。「新郎のうち」と言いかけて途中で止めたものだろう。

- (18) -ナンは-ネのようにも聞き取れる。
- (19) [ʃimpunno]のように聞こえるが、清水氏に従いシンプノとした。
- (20) [ʃiũsekizuki no]。シンセキズキアイノと言いかけて途中でやめたのかもしれない。
- (21) 共通語的言い方。
- (22) <マキキアワセテ イテ>で「両方で相談しあって」の意味だろうかと言われ清水氏は言われる。
- (23) 共通語的な言い方。在来の方言ならばドーズラとなる。すぐ次のドーダロも同じ。ほかにもこれと同じ類例がある。
- (24) [konreʔno] と聞こえる。
- (25) 「いつに」の意味でこう言ったものか。
- (26) 聞きとれない。清水氏によればくヤッタ コト アルケード>ではないかという。
- (27) [u:ntto]。
- (28) [otʃu:niũsama o]のように助詞を離して発音。
- (29) 長野県飯田市。
- (30) <イーダノ シトラ バイシャフ シタ>と言いかけて、佐スの人のことを思い出して、シトラトとトを加えたものであろう。
- (31) [kadai] と聞こえるが、話し手の清水氏に従いかタイとした。
- (32) 清水氏の実家の義姉の娘を指す。
- (33) 仲人のほかにいて、仲人よりも責任は重く、式の時には新郎新婦の紹介から一切をとりしきる。そして親子の関係は一生続き、ことに生まれる子とも縁が繋がることになっているという。ただし、松本地方ではハネオヤと呼ぶのが普通のようなのである。
- (34) 長野県松本市大字里山辺、同入山辺一帯を指す。松本市の東部に位置する。
- (35) 在来の方言ならばマンダ。
- (36) オバーは老婦人を親しんで呼ぶ時に用いられる。オバーマよりも敬意のない言い方。
- (37) ジファンノでは意味が続かない。

- (38) 中川村方言では [katswide] と発音する者と [katswĩde] と発音する者がいる。後者の方が古い発音らしい。二人の話し手は [katswide]。しかし、清水氏によれば「兄さん」は [aĩsama] であって、[apisama] ではないという。こんな場合に清水氏でも [ĩ] が聞かれる。
- (39) 物をのせてかっいで行く台。板を台とし、両端をつり上げてふたりでかつぐ。嫁入道具・病人などをのせて運ぶに用いる（『日本国語大辞典』）。
- (40) ひとえの布・紙などに油をひいたもの。唐櫃・長持などの覆い、燈台などの敷物として用い、水気や油などの汚れなどを防ぐ。（『広辞苑』）
- (41) [ˈoẽde]。最初の子音 [s] の摩擦は弱い。
- (42) 荷物を運送する駄馬や人夫をひきつれ、その指揮・監督・警衛にあたること。また、その役。（『日本国語大辞典』）
- (43) 逐語訳すると「そこで言えば」となる。話し手の清水氏は「そこで何をするかと言えば」の意味だろうと言われる。
- (44) 中川村の大字。現在の村の中心はここにある。
- (45) ……ガイトという家名を持つ家。
- (46) ノリマシテの間違いであろう。
- (47) -マについては注(1)参照。
- (48) 長野県駒ヶ根市大字赤穂。旧上伊那郡赤穂町。
- (49) 長野県駒ヶ根市。
- (50) 国鉄飯田線上片桐駅。下伊那郡松川町大字上片桐にある。
- (51) ほとんど聞きとれない。
- (52) 下伊那郡松川町大字大島。国鉄飯田線伊那大島駅がある。
- (53) 話し手小池氏の家の家名。
- (54) 上伊那郡中川村大字片桐の集落名。
- (55) 上伊那郡飯島町大字七ス保。
- (56) 上伊那郡辰野町。国鉄辰野駅がある。

昭和53年 3 月

国 立 国 語 研 究 所

東京都北区西が丘 3 丁目 9 番14号
電 話 東 京 (900) 3111(代表)

国立国語研究所刊行書一覽

国立国語研究所報告

| | | | |
|------|-----------------------------------|---------|---------|
| 1 | 八丈島の言語調査 | 秀英出版刊 | 品切れ |
| 2 | 言語生活の実態
——白河市および付近の農村における—— | 〃 | 〃 |
| 3 | 現代語の助詞・助動詞
——用法と実例—— | 〃 | 700円 |
| 4 | 婦人雑誌の用語
——現代語の語彙調査—— | 〃 | 500円 |
| 5 | 地域社会の言語生活
——鶴岡における実態調査—— | 〃 | 品切れ |
| 6 | 少年と新聞
——小学生・中学生の新聞への接近と理解—— | 〃 | 180円 |
| 7 | 入門期の言語能力 | 〃 | 品切れ |
| 8 | 談話語の実態 | 〃 | 〃 |
| 9 | 読みの実験的研究
——音読にあらわれた読みあやまりの分析—— | 〃 | 〃 |
| 10 | 低学年の読み書き能力 | 〃 | 〃 |
| 11 | 敬語と敬意識 | 〃 | 〃 |
| 12 | 総合雑誌の用語 (前編)
——現代語の語彙調査—— | 〃 | 〃 |
| 13 | 総合雑誌の用語 (後編)
——現代語の語彙調査—— | 〃 | 〃 |
| 14 | 小学校中学年の読み書き能力 | 〃 | 400円 |
| 15 | 明治初期の新聞の用語 | 〃 | 品切れ |
| 16 | 日本方言の記述的研究 | 明治書院刊 | 〃 |
| 17 | 高学年の読み書き能力 | 秀英出版刊 | 〃 |
| 18 | 話しことばの文型 (1)
——対話資料における研究—— | 〃 | 〃 |
| 19 | 総合雑誌の用字 | 〃 | 〃 |
| 20 | 同音語の研究 | 〃 | 〃 |
| 21 | 現代雑誌九十種の用語用字 (1)
——総記および語彙表—— | 〃 | 〃 |
| 22 | 現代雑誌九十種の用語用字 (2)
——漢字表—— | 〃 | 〃 |
| 23 | 話しことばの文型 (2)
——独話資料による研究—— | 〃 | 〃 |
| 24 | 横組の字形に関する研究 | 〃 | 〃 |
| 25 | 現代雑誌九十種の用語用字 (3)
——分析—— | 〃 | 〃 |
| 26 | 小学生の言語能力の発達 | 明治図書刊 | 2,100円 |
| 27 | 共通語化の過程
——北海道における親子三代のことば—— | 秀英出版刊 | 品切れ |
| 28 | 類義語の研究 | 〃 | 〃 |
| 29 | 戦後の国民各層の文字生活 | 〃 | 400円 |
| 30-1 | 日本言語地図 (1) | 大蔵省印刷局刊 | 品切れ |
| 30-2 | 日本言語地図 (2) | 〃 | 〃 |
| 30-3 | 日本言語地図 (3) | 〃 | 〃 |
| 30-4 | 日本言語地図 (4) | 〃 | 〃 |
| 30-5 | 日本言語地図 (5) | 〃 | 〃 |
| 30-6 | 日本言語地図 (6) | 〃 | 10,000円 |

| | | | |
|----|---|-------|--------|
| 31 | 電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究 | 秀英出版刊 | 450円 |
| 32 | 社会構造と言語の関係についての基礎的研究 (1)
——親族語彙と社会構造—— | 〃 | 品切れ |
| 33 | 家庭における子どものコミュニケーション意識 | 〃 | 350円 |
| 34 | 電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究 (Ⅱ)
——新聞の用語用字調査の処理組織—— | 〃 | 品切れ |
| 35 | 社会構造と言語の関係についての基礎的研究 (2)
——マキ・マケと親族呼称—— | 〃 | 450円 |
| 36 | 中 学 生 の 漢 字 習 得 に 関 す る 研 究 | 〃 | 5,000円 |
| 37 | 電 子 計 算 機 に よ る 新 聞 の 語 彙 調 査 | 〃 | 1,300円 |
| 38 | 電 子 計 算 機 に よ る 新 聞 の 語 彙 調 査 (Ⅱ) | 〃 | 2,800円 |
| 39 | 電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究 (Ⅲ) | 〃 | 700円 |
| 40 | 送 り が な 意 識 の 調 査 | 〃 | 1,500円 |
| 41 | 待 遇 表 現 の 実 態
——松江24時間調査から—— | 〃 | 900円 |
| 42 | 電 子 計 算 機 に よ る 新 聞 の 語 彙 調 査 (Ⅲ) | 〃 | 1,200円 |
| 43 | 動 詞 の 意 味 ・ 用 法 の 記 述 的 研 究 | 〃 | 5,000円 |
| 44 | 形 容 詞 の 意 味 ・ 用 法 の 記 述 的 研 究 | 〃 | 3,000円 |
| 45 | 幼 児 の 読 み 書 き 能 力 | 東京書籍刊 | 4,500円 |
| 46 | 電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究 (Ⅳ) | 秀英出版刊 | 700円 |
| 47 | 社会構造と言語の関係についての基礎的研究 (3)
——性向語彙と価値観—— | 〃 | 700円 |
| 48 | 電 子 計 算 機 に よ る 新 聞 の 語 彙 調 査 (Ⅳ) | 〃 | 3,000円 |
| 49 | 電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究 (Ⅴ) | 〃 | 900円 |
| 50 | 幼 児 の 文 構 造 の 発 達
——3歳～6歳児の場合—— | 〃 | 品切れ |
| 51 | 電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究 (Ⅵ) | 〃 | 1,000円 |
| 52 | 地 域 社 会 の 言 語 生 活
——鶴岡における20年前との比較—— | 〃 | 1,800円 |
| 53 | 言 語 使 用 の 変 遷 (1)
——福島県北部地域の面接調査—— | 〃 | 2,500円 |
| 54 | 電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究 (Ⅶ) | 〃 | 1,000円 |
| 55 | 幼 児 語 の 形 態 論 的 な 分 析
——動詞・形容詞・述語名詞—— | 〃 | 1,300円 |
| 56 | 現 代 新 聞 の 漢 字 | 〃 | 3,000円 |
| 57 | 比 喩 表 現 の 理 論 と 分 類 | 〃 | 6,000円 |

国立国語研究所資料集

| | | | |
|----|---------------------------------|---------|--------|
| 1 | 国 語 関 係 刊 行 書 目 (昭和17～24年) | 秀英出版刊 | 45円 |
| 2 | 語 彙 調 査
——現代新聞用語の一例—— | 〃 | 品切れ |
| 3 | 送 り 仮 名 法 資 料 集 | 〃 | 〃 |
| 4 | 明 治 以 降 国 語 学 関 係 刊 行 書 目 | 〃 | 〃 |
| 5 | 沖 縄 語 辞 典 | 大蔵省印刷局刊 | 3,800円 |
| 6 | 分 類 語 彙 表 | 秀英出版刊 | 1,600円 |
| 7 | 動 詞 ・ 形 容 詞 問 題 語 用 例 集 | 〃 | 1,700円 |
| 8 | 現 代 新 聞 の 漢 字 調 査 (中 間 報 告) | 〃 | 500円 |
| 9 | 牛店 雑談 安 愚 楽 鍋 用 語 索 引 | 〃 | 1,500円 |
| 10 | 方 言 談 話 資 料 (1)
——山形・群馬・長野—— | 〃 | 非 売 |

国立国語研究所論集

| | | | |
|---|-------------|-------|-----|
| 1 | こ と ば の 研 究 | 秀英出版刊 | 品切れ |
|---|-------------|-------|-----|

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|-------|-------|--------|
| 2 | こ | と | ば | の | 研 | 究 | 第 2 集 | 秀英出版刊 | 750円 |
| 3 | こ | と | ば | の | 研 | 究 | 第 3 集 | " | 品切れ |
| 4 | こ | と | ば | の | 研 | 究 | 第 4 集 | " | 1,300円 |
| 5 | こ | と | ば | の | 研 | 究 | 第 5 集 | " | 1,300円 |

国立国語研究所年報（秀英出版刊）

| | | | | | |
|----|------------|------|----|------------|------|
| 1 | 昭 和 24 年 度 | 品切れ | 15 | 昭 和 38 年 度 | 250円 |
| 2 | 昭 和 25 年 度 | " | 16 | 昭 和 39 年 度 | 品切れ |
| 3 | 昭 和 26 年 度 | 160円 | 17 | 昭 和 40 年 度 | 250円 |
| 4 | 昭 和 27 年 度 | 160円 | 18 | 昭 和 41 年 度 | 300円 |
| 5 | 昭 和 28 年 度 | 品切れ | 19 | 昭 和 42 年 度 | 300円 |
| 6 | 昭 和 29 年 度 | 200円 | 20 | 昭 和 43 年 度 | 品切れ |
| 7 | 昭 和 30 年 度 | 品切れ | 21 | 昭 和 44 年 度 | " |
| 8 | 昭 和 31 年 度 | " | 22 | 昭 和 45 年 度 | 400円 |
| 9 | 昭 和 32 年 度 | " | 23 | 昭 和 46 年 度 | 450円 |
| 10 | 昭 和 33 年 度 | " | 24 | 昭 和 47 年 度 | 450円 |
| 11 | 昭 和 34 年 度 | " | 25 | 昭 和 48 年 度 | 品切れ |
| 12 | 昭 和 35 年 度 | 350円 | 26 | 昭 和 49 年 度 | 600円 |
| 13 | 昭 和 36 年 度 | 160円 | 27 | 昭 和 50 年 度 | 700円 |
| 14 | 昭 和 37 年 度 | 220円 | 28 | 昭 和 51 年 度 | 非 売 |

国 語 年 鑑（秀英出版刊）

| | | | |
|------------|--------|------------|--------|
| 昭 和 29 年 版 | 品切れ | 昭 和 41 年 版 | 1,100円 |
| 昭 和 30 年 版 | " | 昭 和 42 年 版 | 1,100円 |
| 昭 和 31 年 版 | " | 昭 和 43 年 版 | 品切れ |
| 昭 和 32 年 版 | " | 昭 和 44 年 版 | 1,500円 |
| 昭 和 33 年 版 | " | 昭 和 45 年 版 | 1,500円 |
| 昭 和 34 年 版 | " | 昭 和 46 年 版 | 2,000円 |
| 昭 和 35 年 版 | " | 昭 和 47 年 版 | 2,200円 |
| 昭 和 36 年 版 | 800円 | 昭 和 48 年 版 | 2,700円 |
| 昭 和 37 年 版 | 品切れ | 昭 和 49 年 版 | 3,800円 |
| 昭 和 38 年 版 | " | 昭 和 50 年 版 | 3,800円 |
| 昭 和 39 年 版 | 980円 | 昭 和 51 年 版 | 4,000円 |
| 昭 和 40 年 版 | 1,100円 | 昭 和 52 年 版 | 4,500円 |

| | | | |
|-----------------|----------------------|-------|------|
| 高 校 生 と 新 聞 | 国立国語研究所
日本新聞協会 共編 | 秀英出版刊 | 280円 |
| 青年とマス・コミュニケーション | 日本新聞協会
国立国語研究所 共著 | 金沢書店刊 | 品切れ |

NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE PUBLICATIONS

SOURCE X

TEXTS OF TAPE-RECORDED CONVERSATIONS IN JAPANESE DIALECTS

(Volume 1)

CONTENTS

Foreword

Purpose and Outline

Text

- Part 1 : YAMAGATA PREFECTURE (Hamlet Yati, Township
Kahoku, District Nisimurayama)
- Part 2 : GUNMA PREFECTURE (Hamlet Okkai, Village Tone,
District Tone)
- Part 3 : NAGANO PREFECTURE (Hamlet Kazurasima, Village
Nakagawa, District Ina)

THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE
TOKYO JAPAN

1978